



分岐点②

完結編

Lavendula

登場人物

田中：和琴大学修士1年生。COEの戸川のプロジェクトに所属。

常川：和琴大学博士？年生。COEの戸川のプロジェクトに所属。

焰：和琴大学博士2年生。情報処理学科。

COEの戸川のプロジェクトに所属。

戸川：和琴大学教授。焰の指導教官。

山瀬：和琴大学教授。田中の指導教官。

田中と同じCOEの別のプロジェクト責任者。

小田切：和琴大学助手。山瀬のプロジェクトに所属。

山瀬研究室所属かつOB。

佐々木：和琴大学COE助教。山瀬のプロジェクトに所属。

山瀬研究室OB。

芹沢：山瀬研究室に所属していたが、アカハラ加害者として退学処分。

塔堂：山瀬研究室に所属していたが、失踪。

小田切加奈：小田切の妻。塾講師。

小田切望：小田切の娘。保育園に通っている。

天原：加奈と一緒に塾の受付嬢。

矢越代議士：矢越の父親で、国会議員。

矢越澄真：佐々木の婚約者。矢越代議士の秘書。

田勢：矢越代議士の秘書。

宗：梅乃崎大学教授。朋谷の上司にあたる。

朋谷：梅乃崎大学助教授。山瀬のプロジェクトに所属。

山瀬研究室OB。

有徳：梅乃崎大学修士学生。宗に研究成果を取られ、朋谷に相談。

土岐等：5年前のアカハラ事件の被害者。

当時山瀬研究室で修士課程に在籍していた。

嘉納：アカハラ事件に巻き込まれ退学処分となる。

当時学部2年生。

土岐等浩輔：土岐等の祖父。

菜取：和琴大学を取引先とする会社の営業課に所属。

黒檜の仏壇の前で手を合わせる男の姿に、湯呑みを載せた茶盆を手にした婦人は目を細めた。開け放した窓からそよぐ薫風が、庭の若葉の匂いを運ぶ。線香から立ち上る白檀の香りが、優しくそれに寄り添った。男が目を開けたのを見計らって、婦人は男の傍に座り茶を勧めた。若々しい装いだか、目の下や口もとに刻まれた窪みが婦人の生きてきた年数が決して短くないことを示している。

「最近、あの子の為にお参りに来てくれる人もいなかったから。来て頂いて本当に嬉しいわ」

そう顔を綻ばせる婦人に、男も笑みを返す。

「お伺いしたかったのですが、返ってご迷惑になると思い遠慮しておりました」

婦人の瞳の光がすうと消え、虚ろになる。声のトーンは変わらなかったが、内面の変化は容易に見て取れた。

「……あんな亡くなり方をしましたから、内々で密葬させて頂きました」

事情を知っているのかと尋ねると、男は言いにくそうに「多少耳に入りました」と答えた。

「お辛かったですよね」

「……ええ。その当時は本当に」

そういうと婦人はどこか懐かしむような顔を見せる。

「あれほどご迷惑をかけたと言うのに、研究室の方たちに本当に良くして頂いて。励ましの手紙や香典を頂きました。ありがたいことです」

「……」

男の眉間にかすかに皺が寄る。それは微細な変化で、ハンカチで目頭を押さえる婦人が気付くことはなかった。

泣いてるのを誤魔化すかのように、婦人は言葉を続ける。

「本当に馬鹿な子です。死ぬくらいなら、生きて出来ることがいくらでもあるはず。それくらい少し考えれば分かることなのに」

「……それほど追い込まれていたのでしょうか」

言葉を選んで男は言う。

「そうですね。私たちがもっと早く気づいていれば……」

婦人は感情が込み上げてきたのか、喉の奥が震えるのを懸命に堪えようと、ハンカチで口元を押さえる。唇の端から、小さく振動が吐息で伝わってくる。
「すみません」と謝りながら一頻り泣く婦人を、その感情の波が落ち着くまで、男は静かに待った。

婦人が大分落ち着いたのを見計らって、男は独り言のように尋ねた。答えを期待してと言うより、会話を継ぐために言葉を発してくれていると、婦人は感じた。

「きれいな手鏡ですね」

仏壇の手前の小さな文机に線香立てと一緒に、木彫りの支えに置かれていた。
直径十センチ程の黒塗りの丸い手鏡。
独り言に近いとは言え、男が興味を示したことに気を良くした婦人は、その手鏡を支えから外して、男に裏側も見せてくれた。
黒を背景に蓮の花が描かれた、和風のテイストだ。

「現場に落ちていたそうです。……今はこうして形見として仏壇に供えているのです」

「現場に……ですか」

男は、合点が行かぬという感情を体現したような表情をして見せる。鏡を持ち歩くとすれば、普通はもっとコンパクトなサイズであるか、ほこり取りや化粧とセットになった蓋付きのものではないか。直径10cmの手鏡を鞆に入れて持ち歩くには、布などを自分で誂えて表面を保護する必要がある。第一少々大きすぎる。

「この手鏡に思い入れでもあったのでしょうか？」

「ええ。あの子はおばあちゃん子だったんです。私の母にそれはもう良く懐いていて、亡くなった時に形見分けであの子に与えたのが、この鏡です。大事にいつも自分の机にしまって、偶に取り出しては眺めていました」

「そうだったんですか。気持ちの優しいところが、ある人でしたからね。今頃は天国で、お祖母さんと会っていることでしょう」

「……そうですね。そうだと良いのですが……」

しんみりとした母の言葉に、男は言葉を継がず、静寂が仏間を支配した。遠くで聞こえる鳥の声が、先ほどよりも大きく耳に届く。

その後婦人はひとしきり故人の思い出を語り、男はそれにところどころ相の手を入れながら、聞き役に徹した。

話している間に気が晴れたのか、婦人はすっかり笑顔になり、その頃には男が仏前に座ってから既に2時間が経過していた。

「お引き留めしちゃってごめんなさい。またいつでも寄って下さいな」

人の良い婦人の笑顔を見て、男もまた顔を綻ばせ、家を後にした。

数分後一。

鼻歌を歌いながら夕飯の支度を始める婦人とは対照的に、男の双眸は黒い光を宿していた。

時は皐月。透き通るような青空に響く鳶の声が何とも清々しい。研究室へ向かう自転車を漕ぐ足も、心なしか軽やかに感じる。白いシャツの下にジーパンと言う平均的學生を体現したような装いは、学内の質実剛健の雰囲気、すっかり溶け込んでいる。少なくとも彼女はそう信じている。

田中優奈が和琴大学の大学院に入学して既に一月。

他大学から新たに和琴大学へ進学した外部進学組なので、内部進学組と比べて人脈や研究室の慣行に関する知識の面でどうしても後れを取る。大学院入学前にはいろいろと気を揉んだものだが、いざ入ってしまえば、研究室内の規則や雰囲気に慣れるのに、それほど時間を必要としなかった。

各大学にはカラーがあるものだが、ここ和琴大学の學生は質素かつ自分のスタイルを貫くという特色が学内外の共通認識である。その点、優奈が学部時代を過ごした前の大学の華やかな校風と比べたら、過ごしやすくなった気持ちすらする。

周囲の學生に合わせようと茶色に髪を染め、バイトで貯めたお金で高価な上着を購入し、インナーに安いものを使うなど工夫していた学部時代の苦労から解放された。偶にあの華やかな校風が懐かしくなる時もないではないが、今の研究生活に全く不満はない。

今までに購入した四季に応じた上着は、特別なイベントの時だけに使用し、インナーは普段着としての出番が増えた。髪の色はまだ茶味がかっているが、生えてきた黒髪の方が増えてきている。

小柄で目だけがくりくりしている優奈は、友達からはハムスターに似ていると言われる。鼻や口の形が凡庸な分、目が目立つらしい。全体的に童顔なので、学部の新入生と間違えられてサークルの勧誘チラシをもらうことも未だにある。全体的に以前よりも垢抜けなくなったのと、童顔の相乗効果でますます年齢が低く見られつつある。

その事実すら、むしろこの大学のカラーに染まったようで、誇らしいと優奈は思っている。現に今通りすぎる學生達も、皆機能性を重視した服装ばかりだ。

行きかう學生の群れを縫うように走り抜け、買ったばかりの新しい自転車は大学院棟の前の自転車置き場に辿りつく。ここまで来ると、人波も途切れ、部室を持たない小さなサークルの面々が細々と活動しているだけで静かなものだ。研究棟の周囲では騒音は厳禁とされているので、何かと賑やかなメインキャンパスと比べて落ち着いている。

自転車を止めて呼吸を整えつつ、研究棟を見上げる。赤レンガが歴史の重厚感を際立たせ、その脇の記念碑に生えた苔が過ぎし年月を示している。記念碑は大学の象徴にもなっており、新入生用のパンフレットにも大きく掲載されている。これを見る度に、優奈はこの大学の一員になれたことを実感し悦に入る。

現役受験生時代に受験したが失敗。

どうしても諦めきれずに大学院を受験して、やっと入学したこの大学。学歴が欲しかった訳ではない。その分野の第一人者である教員から、どうしても教えを請いたかったのだ。早くからその道を志していた優奈にとって、山瀬隆文は憧れであり崇拜の対象であった。実際山瀬の門下に入ることは、この分野での出世を約束される。だから優奈の現状は至極満ち足りたものである。

今年の研究室への新入生は優奈一人だが、先輩たちは皆穏やかで親しみやすい。教員陣も穏やかな人が多く、ゼミに臨む時にも緊張は少ない。学業に関しては、院試の準備の際にかなり勉強したので、周囲に比べて遅れを取らない自信もあった。もちろん学ぶことの方が遥かに多いが、十分付いていける内容で、優奈は自分の進路が間違いではなかったと実感している。

「おはようございます」

もうとっくに昼に近い時間だが、夜型が多い学生にとっては十分朝と言える時間帯だ。こんな時間であるが、ほぼ毎回優奈が研究室への一番乗りである。だから声をかけても返事が返ってくることはほとんどない。

まだ新参者ということで、娯楽の場所にも不慣れなので、時間が有り余っているのだ。趣味にしても、学部生の時から活動していたサークルを継続している内部進学生とは異なり、優奈の場合サークルに新入生として一から入らなければならない。初々しい学部生とは異なり、大学生としてはトウのたった優奈には、一から始める勇気はなかった。

そんなの気にしないという外部生もいるのかもしれない。だが優奈には、年下の学生に気を使い、気を使われてまで趣味を作ろうとは思えなかった。それならせっかく入学したこの大学で、研究に邁進した方がずっと自分にとってプラスになる。

新しい生活に慣れてからと、アルバイトもまだ雑誌とネットでの情報収集に留めている。いきなりあれもこれもというのは、慎重な性格の優奈には、正しい選択とは思えない。

この判断には進路の問題も絡んでいる。

研究室への新修士学生は、優奈一人であるが、学科全体では幾人も進学している。彼ら内部進学と同級生たちは塾の講師のバイトに、サークル、それぞれの交友関係で忙しいようだ。先輩たちの場合、それに就職活動も入るので忙しく、修士課程で卒業し民間企業への就職を志す先輩のうちの何人かは、未だに優奈は会ったことがない。基本的に大学院進学組は、大学の教員もしくは研究職を目指しているが、もちろん技術職として民間企業や公務員試験に挑戦する者もいる。

修士学生の就職志望者の就職活動は一年生の秋には始まるので、修士学生も半年後には皆更に忙しくなることを覚悟しなければならない。優奈は研究職志望であり、この研究室ではそれが有利に働くとは聞いていたが、それでも何がどう転ぶか分からない。民間企業にいつでも進路変更できるような備えは大切だと考えている。

いろいろと理由を付けてはいるが、要するに小心者なのだ。それ故に行動力がないと、自省することもある。そこら辺もハムスターに似ているのかもなあと、自分でも偶に思う。それはともあれ、この研究室では朝から夕方まで規則正しく、毎日来ているのは優奈くらいだった。

だが今日は特別だ。

研究室では、毎週第一月曜日にはミーティングがある。
十時からなので、朝が遅い学生達もこの時ばかりは集まる。
議題は共同実験の計画とう役割分担、学会イベントの紹介も兼ねる。
イベントは後からメールリストでも知ることは出来るが、
分担は欠席すれば自分の予定が狂う可能性もあるので、皆欠席することは
ありえない。できるだけ来るようにという緩い義務なのだが、こればかりは
かならず出席する。現金なものだ。

四月の一日が月曜日かつ、入学式だったのでこれが優奈にとって初めての
参加となる。他の研究室との共同会議室があるのだが、そこを使用しての
会議をするのが通例と聞かされた。

他の授業の状態と同じなら、皆直前まで来ないのだろうと、誰もいない
ことを予測して、優奈扉を開ける。

だが今日は見慣れない男が一人一先客がいた。

十畳ほどのそれほど大きくない会議室は、中央にある大きな机でほぼ空間を占拠されている。先客は、ドアを開けてちょうど対角線上の上座に当たる位置に座っている。

その見知らぬ男は、自分の所有物らしきラップトップを前に置き、なにやら懸命に打ち込んでいる。この人も見たことのない先輩の一人なのだろうか、キーを叩く音が止んだ頃合いを見計らって優奈は挨拶を試みる。

既にドアを開けてから数分が経過していてタイミングが悪いかとも思ったが、男は真実優奈の存在に気付かなかったようで、「ああ」と気さくに挨拶を返してきた。

少し緊張しながらも男に近寄り丁寧に挨拶をする。
「初めまして……ですよね。4月から修士課程に入学しました田中です。外部から来たのでまだ分からないことも多いですが、宜しくお願いします」

軽く一礼をすると、男は少し驚いたような顔をした。振り向いた顔には無精ひげがあごにまばらに生えていた。眉毛も濃い目で全く整えられていない。全体的に毛深い。今風の太いフレームに濃い茶色の眼鏡は、ファッションの為というよりも、純粹に視力を補うためにかけていると思われる。

眼鏡の奥の瞳は意外に鋭い。
黒髪も短く刈っただけ。
髭によれよれの黒シャツは、元は上質の品だったようだが今は見る影もない。同じく黒のジーパンも使い込まれていた。
こちらは同じような品を安売り店で見ることがある。
上と下でひどくアンバランスな印象だ。
だが黒で統一しようとしていることから、少しは洒落っ気があるのかもしれない。首には無造作に金のネックレスをかけている。

「まあそう固くならないで。俺は常川聰。博士の学生だ」

そう言うと右手を差し出してきた。慣れない動作に優奈は一瞬戸惑った後、おずおずと右手を差し出した。その手をはっきりと掴むと、常川は上下に振るように力強く握手をする。

二の句を思いつかない優奈は、場を繋ぐ方法を考える。
考えつく質問と言えば、「常川さんは博士何年生なんですか？」というものだった。これは当然の疑問だ。
博士でも留学をしたり、学外のプロジェクトに参加でもしていない限り、雑務や実験で毎日のように実験室に顔を出す必要がある。
しかし優奈は四月の入学以来、一度も常川を見たことがなかった。
余程怠惰な学生なのか、特別な事情があるのか。

「俺？ 何年生になるのかな？」

(いやこちらに聞かれても……)

優奈は心の中で呟く。
自分の学年も分からないなんて、一体どういう人なんだと謎が膨らむ。

「まあ、そんな細かいことどうでもいいだろ。ま、これから宜しく」

不信感が募り、優奈はなんとも味気ない返事しか返せなかった。

「……はあ」

何と返しているのか分からず、かといって良く知らない先輩に突っ込むほど優奈には度胸がなかった。それにしてもおおらかと言えば、聞こえはいいが、どちらかと言うと雑然とした印象が漂う。

なんとなく間が持たなくて、誰か来ないかと助けを求めてしきりに辺りを気にする優奈を尻目に、常川は再びラップトップに注意を向けた。どんな研究をしているのか好奇心が湧いた優奈が、後ろから画面を覗きこむと何やら細かい数字の羅列と、グラフが画面に所狭しと映っている。

「これが常川さんの研究ですか」と話題を見つけてほっとした優奈が聞こうとすると、カチャという金属音が新たな入室者の到来を告げた。三人ほどの研究室の先輩達だ。先輩学生達は土日以外はほぼ毎日研究室に顔を出すので、優奈には見慣れた顔だった。挨拶をしようと声を発する前に、事前に約束でもあったのか彼らは優奈には目もくれず、常川の周囲を取り囲む。

無言の圧力に促され、優奈は鞆から他の授業の資料を取り出し、予習している振りをする。もちろん全身を耳にして、背後の会話に集中する。

「それで引き受けてくれるんですか？」

「引き受けてやってもいい。……ただし条件がある」

常川が挑発するように言い切ると、研究室が一瞬しんと静まりかえった。優奈も読んでいる振りをしているレジユメを手に、全身で常川の動向を探る。

「条件、ですか？」

「当たり前だ。どうせ厄介払いしたかっただけだろ。俺だってしたくてするわけじゃない。どうしてもと言うなら、こっちの好きにさせてもらう」

忌々しいとでも言いたげな周囲の視線をむしろ楽しむかのように、常川は続ける。

「俺が断ったら、他に人間はいないだろ？」

歯噛みしながら、先輩の一人が口を開いた。

「で、条件とは何ですか？」

「田中を俺の補助に付けること。それが条件だ」

いきなり自分の名前が呼ばれて、優奈は思わず振り向いた。
先輩たちの視線が、優奈に向けられている。
皆優奈と同じく、なぜと疑問符を体現したような顔をしている。

常川だけが、自信に満ちたどや顔だ。
会ったばかりの優奈をなぜ指名するのか。
常川の意図がさっぱり読めない。

「でも、あちらは博士課程の学生を一人だけという要請ですから。
勝手に人数を増やすことは出来ません。予算の問題もあるでしょうし。
無理を言わないでください」

「じゃあ、お前らの内の誰かがやれば？この条件を飲まないなら、
俺は絶対にやらない」

「俺たちはもう山瀬先生のプロジェクトの人間なんです！」

「じゃあこの話は断ればいいだろ。誰もやりたくないのなら
仕方がない」

先輩三人は露骨に眉尻を下げて、ひそひそと話し合った後、
一人はどこかに電話をかけ始めた。もう一人は何とか常川を説得しようと
試みるが、常川は聞く耳を持たずパソコンの世界へと既に戻っている。
諦めた先輩たちは、無給で常川の補助になってくれないかと優奈に
懇願し始めた。どうしても断れない事情でもあるのだろうか。

「あの、何か事情があるのなら、私はお金を頂かなくても……」

優奈の言葉に、ほっとする先輩達。

「それは駄目だ！」

バンと乱暴にラップトップの蓋を閉めると、常川はひどく不快そうな
顔で吐き捨てた。

「常川さん……？」

先程までと打って変わった態度に、不思議そうに言葉を発する優奈。
先輩たちはむしろその言葉にあからさまにむっとした。

「元はと言えば、常川さんが変な条件を付けるから、話がこじれている
んですよ」

「そもそも俺が引き受けなければ、話が進まないことが前提になって
いるのがおかしくないか？俺はうちの研究室のプロジェクトに
関わる情報すらもらえなかったんだ。余所の研究室なら
無理やりにも関わらせるってのがもうね。信頼を損ねるよ」

そこまで言われると、二人は悔しそうに俯いたものの、それ以上何も言えなかった。それと対照的にもう一人が、嬉しそうな声を上げる。

「本当ですか？ ありがとうございます！……はい。無理を言って申し訳ありません。……はい。失礼します」

電話を終えると、先輩は言った。

「あちらがもう一人を付けることを検討してくれるそうです。修士学生でも通るように、何とか向こうの先生に打診すると言ってくれました！」

「……随分とあちらさんは人が良いようだな」

捨て台詞を吐きながらも、今度の常川は少し驚いていた。

「これで文句はないですね？」

なぜか自信たっぷりに反撃を開始する先輩たちに、常川は牽制する。

「まだ検討するだけだ。……だが、うん。まああちらさんの事は気にいった。おい田中！」

「は、はい」

いきなり名前を呼ばれて、優奈は動揺する。

「いざとなったら、俺が個人的に雇ってやる。明日からはお前は俺の助手だ」

まだ優奈は自分の意見を言っていないが、そういうことになってしまいそうだ。流されやすい性格なのは損だと、改めて思う。先輩たちも同情と安堵が入り混じった顔をしている。

(何だか良く分からない事に巻き込まれたけれど、こんなに押しの強い人と上手く渡り合っていけるかな？)

プロジェクトの内容すら分かっていないこと以上に、優奈は先行きが不安になった。

ミーティングの後は、皆が集まったのが幸いと山瀬のプロジェクトの研究を進めるのが通例だ。今日もそのご多分にもれず、常川と優奈以外のメンバーは、実験室へ行ってしまった。特殊な機械を必要とする実験なので、通常使用している研究室では、実験を行うことが出来ない。修士二年生も参加しているプロジェクトなので、結局研究室へ戻ったのは、常川と優奈だけになってしまった。

「どうして私を選んだんですか？」

「どうして山瀬先生のプロジェクトから外されているんですか？」

「どうして無給で働くと言ったときに、怒ったのですか？」

いくつも聞きたいことはあったが、パソコンに目を血走らせている常川に、優奈はなんとなく聞きあぐねる。

(そうだ！)

「COEのプロジェクトでは、どんなことをするんですか？」と尋ねてみてはどうか。優奈は当たり障りのない質問で、会話のきっかけを作ることにした。これから先共に同じプロジェクトに関わるのなら、相手のことを少しでも知る必要がある。

「全く知らない」

会話終了。
常川はまたパソコンの中の世界へと戻ってしまった。
これ以上会話を続ける気もないようだ。

仕方なく研究室内でできる実験をとりあえず進めようと、優奈は闇雲に手を動かす。
時刻は既に午後一時。
朝方の陽光が影を潜め、雨音が今にも聞こえてきそうだった。

ルルルルル。

三十分も過ぎた頃だろうか、研究室の共用電話が鳴り響いた。実験のため手袋をしているので、手が空いているはずの常川を見る。だが、常川は音が聞こえていないのか、知っていてあえて無視を決め込んでいるのか動く気配がない。
仕方なく優奈が実験に使用した手袋を脱ぎ、電話に出ることにした。

……。

「御親切にありがとうございました。失礼します」

数度会話をした後、礼を言った優奈は、急いで共用パソコンの前に座り、キーボードを叩き始める。

「で、何だった？」

あれだけ電話を無視していた常川が、内容だけは気になるのか、相変わらずラップトップの画面を見ながら、尋ねてくる。今度は優奈が答えない。

突然キーボード操作を止めた優奈は、今度はスクリーンを前に固まっていた。信じられないモノを見たかのように、一度クリックしてはその内容を確認している。

「常川さん。大変です。とんでもないことになってます……」

「どうした？」

「これ……」

デスクトップの前の席を優奈に譲ってもらおうと、そこには1本の論文が映し出されていた。名前からしてこの研究室の助手、小田切のものだ。

「これが？」

論文検索サーチや大学サイトに登録あれば、論文は誰でも閲覧できる。最近是有料化したり、会員登録を必要とする論文もあるが、ほとんどの論文は無料で公開するサイトに登録されることが多い。

「これまだ書きかけの論文なんです。それなのにネットで公開されています。これだけじゃありません。小田切先生の個人的なファイルらしいものが、ネットに流出しているみたいです！」

カチ、カチとクリックすると、大学の授業関係の名簿、研究室メンバーの住所録、一般公開講座の志願者の質問に答えた個人的なメールの内容までがネットから閲覧できるようになっている。

「ウイルス感染ということか？」

優奈は黙ってうなずいた。もし小田切が感染したパソコンで第三者にコンタクトをしていたら、他の人間にも影響を及ぼす可能性がある。現段階で小田切が管理している、学生や一般公開講座受講生の個人情報漏れているのだ。既に大問題に発展しかけている。

先程の電話の主は、ファイルの内容から小田切の名前と所属を発見して、親切にも忠告してくれたのだと、優奈は説明した。

「わ、私小田切先生を呼んで来ます！」

数分後優奈は、小田切を連れてきた。

画面を見ると、小田切は真っ青になった。

「そんな馬鹿な」とクリックを繰り返すが、自分の個人情報とおぼしきファイルが次から次に検索結果に出てくる現実を、小田切は認めざるを得なかった。

茫然自失する小田切。

それを正気に戻したのは、常川だった。

「落ち込んでる場合じゃない。他の人へ感染している可能性も考えろ」

学生が教員に対する言葉としては乱暴にすぎる。

優奈はぎょっとした。

「まさかメールを誰かに送信したりしてないだろうな？　メーリングリストになんて送ったら大変なことになるぞ」

「昨日送った……。プロジェクトの重要事項だから、それには連絡先として各人のメールアドレスと電話番号が書いてある……」

弱々しく答える小田切。

常川の乱暴な口調は、気にしていないようだ。

「誰に送った？　俺が今からそいつらに絶対にメールも添付ファイルも見ないよう、メールする。田中は電話が捕まるやつだけでも、連絡しろ」

連絡先名簿を取り出すと、すぐに優奈は電話をかけ始める。

小田切は未だ信じられないと言うように、ぼうっとデスクトップを見つめている。

それほど大所帯でない研究室の事、すぐに全員に連絡が取れた。

中には既にファイルを開けてしまった学生も何人かいたが、今のところ彼らの保存した情報の漏洩は確認されなかった。

メーリングリストに送信した時点では、ウイルス感染はしてなかったらしい。

ひとまず学生に被害が出てなかったことに安堵する一同だったが、小田切はさすがにまだ堪えていた。

「いつからウイルスに感染したのか、何が原因なのかを突き止めて、関係各所に謝罪と警告する必要があるな。この事実は公表した方がいいだろう」

「それは困る。絶対に駄目だ。信用問題に関わる」

「二次被害にあう可能性のある者のことを考えろ。もうお前一人の問題ではないんだ」

いやに自信満々で諭す常川に、気弱になった小田切は弱々しく尋ねる。

「常川、お前の会社はIT系だったよな？　だったらこういう問題に強いんじゃないか？」

「うちはセキュリティに関しては専門の会社に一任している。
セキュリティ・スペシャリストは数人しかいないんだ。
システムの管理でいつも手が塞がっている。
セキュリティの専門会社かメーカーに頼んだ方がいいだろう。
多少高くつくが被害を拡大しないためだ」

業者への修理依頼、これからの関係各所への謝罪、
当然山瀬からの叱責もあるだろう。これから訪れるであろうもろもろを
考えると、小田切は今にも倒れそうだ。

反対に、常川はてきぱきと準備を進める。
打ちひしがれている小田切を放置し、小田切の研究室にある
デスクトップ型パソコンを見に行くので、ついてこいと優奈を
連れていく。もちろん小田切の部屋の鍵が無いと開かないので、
小田切も渋々付いてきた。

小田切に部屋の鍵を開けさせると、常川はまずはLANケーブルを抜く。
パソコンを学内のネットワークから切り離すことが、先決だと常川は
ケーブルを無造作にデスクに置きながら説明する。同時に小田切に
メーカーの保証書と取扱説明書を持って来させると、パソコンを学生用
研究室で少し試してから、後の対処を決めようと提案した。
問題解決の為に、インターネット上の情報も不可欠なので、学生
研究室の他のパソコンで情報を参考にしながら、対処方法を決めると
言う。小田切はコンピュータには不慣れなようで、常川の指示に大人しく
従った。

小田切のデスクトップ型パソコンは、スクリーンが大きいタイプで、
その分重量がある。常川の独断で、常川がスクリーンを、優奈が
キーボードを持つことが決定する。荷物持ち要員として、連れてこられた
らしい。

「とりあえずお前が私用で使っているパソコンも持ってこい。
もしかしたらそっちからウイルスが感染した可能性もある。俺たちは
このパソコンを研究室に持って行って業者への連絡をする。急げ」

IT会社での経験があるらしい常川の独断場だ。
小田切はドアを閉めると小走りで出て行った。
研究室に戻った後も、優奈が見守る中、常川はあれこれ試したが、
原因の特定や自力での問題解決には至らなかった。
諦めた常川は、メーカーへ修理依頼する手順と、どこに修理を
依頼するかを、取扱説明書と共用パソコンを使って調べ出した。

当然門外漢の優奈はなす術もなく、邪魔にならぬよう、
ただぼんやりと常川の行動を見守る。
何の助けにもならぬことは分かっているが、奮闘している
常川を無視して自分の作業に取り掛かる訳にもいかず、
優奈は何となく気まずい時間を持て余す。
他の学生達は、自分達にそれほど被害がないことを確認した後、
すぐにプロジェクトに戻っている。
綿密に役割分担が振られているようで、例え心配でもとりあえず
プロジェクトを進行させることを選択したようだ。

その時。

「お手伝いしましょう」

第三者の到来を告げる声でした。

戸がいつのまにか開け放たれ、見知らぬ男が立っている。

ボディービルでもやっているのか、筋肉質な体が服の上からでも分かる。いわゆる細マッチョ体系だ。目立たない程度にダークブラウンに染めた髪を長め伸ばしワックスで毛先を遊ばせている。仕立ての良い黒のシャツとパンツで覆った体軀は、ほど良い筋肉のおかげでシルエットが映える。傍を通ると男性用香水の匂いがふわと香った。常川とは違う意味で、院生らしくない。

「誰だ、お前？」

常川の礼儀の欠片もない挨拶を気にすることなく、男は丁重に接する。

「申し遅れました。情報処理研究科所属、戸山研究室の焰と申します。こちらとの共同プロジェクトの一員ですよ」

朝に揉めたCOEプロジェクトの研究者ということかと、優奈は合点した。

だがどうしてここにと不思議がっていると、男はCOEプロジェクトの共同研究者として必要な書類を持って来たのだと答えた。

「ちょっと失礼します」
と断ると、共用パソコンに近づき、常川にどんな被害が出ているのかを尋ねる。

常川に席を代ってもらおうと、マウスを忙しく動かし、時折キーボードを叩く。パソコン系は最低限の知識しかない優奈は、ただただ見守っている。

「このファイルが感染源となって、皆のパソコンに送られたんですね。これは暴露型ウイルスです。ハードディスクだけでなくコンピューター内の情報を漏らし、情報は半永久的にネットの海を彷徨うことになります」

プライベートまでも曝け出されては、小田切もたまったものではないだろう。動揺する優奈に対して、常川は知識がある分予想の範囲内の答えだったのかさもありませんと頷くだけだった。

実際的な解決方法として、全ての記録媒体をチェックして感染源をチェックする必要があると、焰は忠告した。USBなどの記録媒体が感染源になることもあるのだという。すぐさまその旨を携帯メールで、小田切に送る常川。返事がないところを見ると、小田切はまだ車中の人なのだろう。

「気付かずとはいえ、発生源となった以上、小田切先生には全ての記録媒体を提出して頂く必要があります。僕の所属する研究室では、最新型のウイルスに関する研究をしている戸川先生と、ウイルスセキュリティの専門企業との連携もありますので、現物さえ提出して頂ければ、現段階までの被害に留めることができます」

「大がかりになるが、止むを得ないな。他の者もウイルスが潜伏している可能性があるから、疑わしいファイルはチェックしてもらった方がいいかもしれない」

「そうですね。できればお願いします。では僕は戸川先生に事情を話してきますので、後から小田切先生のパソコンと記録媒体を持ってきて頂けますか？」

丁寧な口調でそう指示すると、そういうと、焔は颯爽と帰って行った。

その後ろ姿を優奈はほうとため息をつきながら見守る。問題解決をさっとする有能さ、清潔感漂う外見、何より常川と比較してだからかもしれないが、人当たりの良さ等、優奈にとって今まで会ったことの無い種類の人間だった。どれか一つでもこれらの美点があれば、それが傲慢さを生みだし、他の一つは欠けていくものだと思い込んでいた。

「ああいう人もいるんですねえ」

うっとりとして優奈が言うと、常川は呆れたように「なんだお前ああいうタイプが好きなのか」とつまらなそうに言う。大して興味がなさそうなのも気に入らない。

何か言い返す言葉を考えていると、どこかで聞いたことのある電子音が鳴った。遠い昔に歌っていた子ども用アニメの主題歌だ。なぜこんな曲がと不思議に思うと、常川が平然と携帯電話を手にしていて、どうやら常川の携帯の着信音だったらしい。選曲の基準、感性など突っ込みどころが多いが、緊急事態なのであえて触れない。

興奮した調子の大声が受話器の外まで響く。相手は小田切のようだ。

「全部か？ だが家に置いてある媒体までいいだろう？ あれは無関係のはずだ」

「全部だ。気になるなら、中身を消してもいい。だが余計なことをすると、関係の無いファイルまで影響があるかもしれない。全部だ。これはもうお前独りの問題ではないんだ」

なぜか渋る小田切に、常川は追い打ちをかける。だが事態がこうも逼迫してしまっただけでは仕方がない。小田切は最終的には首を縦に振らざるをえなかった。

渋る小田切からパソコンと記録媒体一式を受け取ると、常川と優奈は情報処理学科の大学院棟へ向かった。

「どうして田中もついて来るんだ？」

「常川さん一人だけじゃ心配ですから。それに情報処理学科って前から興味あったんです」

パソコンの技術があればいいなあと思ったことはあるので、嘘ではないと優奈は自己肯定した。

情報処理研究科は比較的新しい学科なので、銀色の光沢が照り輝く研究棟は近未来の建物のようだ。シャープな形を組み合わせたモダンな建築は、優奈と常川の所属する大学院の歴史の色濃い建物とは対照的だ。

「良く来てくれました。歓迎しますよ」

そういうと焔は小田切のパソコン一式を自分の研究室に運び入れ鍵をかけると、小奇麗な共同休憩室の隅の台所で湯を沸かして、三人に紅茶を淹れた。

一旦焔と戸川教授がパソコン内を確認して修復を試みてから、それでも駄目なら業者に回すと、紅茶を淹れながら焔が説明する。傍を通るたびに香る匂いを、優奈は嬉しそうに嗅いでいる。声も自然といつもより一オクターブ高い。

皆の分の紅茶を淹れ終わると、焔は優奈が正式に研究員として認められたことを教えてくれた。

「期間は二年。色々スケジュール的に大変なこともあると思いますが、協力して乗り越えましょう」

「あの、私今日いきなり決まったので、何をするかとか全く分からないんです……」

焔がこれだけ書類など準備していることから、このプロジェクトはこの研究室では力が入ったものなのだろう。それなのに自分も常川も全く内容を知らないことに、優奈は申し訳なくて語尾が小さくなる。今は俄然やる気であることを伝えたかった。焔に出会った後に、決めたことだが。

言葉を濁す優奈に、焔は優しく期間内に一定の成果をだせば、問題ないので、スケジュールはそちらに任せ、研究進展を強要することはないと安心させた。義務と言え、定期的に研究の進行状態を報告する位だ。

優奈が言いだしたことではないにしろ、常川の我儘を聞いてくれた上、焔というオプションもある。優奈のモチベーションは否がおうにも高まる。

「へえ。思ったよりも気楽にできそうだな」

どこか他人事の常川に、「すみません」と常川の非礼を代りに優奈が謝る。

「……今日は元々常川さんと田中さんに説明する必要があると思って、そちらの研究室にお邪魔したんですよ。研究室が異なるメンバーはどうしても、情報の共有が難しくなりますからね」

柔らかな笑みを浮かべながら、人懐こそうに話す焔は大人を体現したような人物だ。それに比べて……と常川を見ると、がぶがぶと紅茶をのどに流し込み、クッキーを音を立てて食べている。食べるのに忙しいのか、相槌すら打たない。常川のせいで、自分の好感度まで下がりそうで、優奈は冷や冷やしていた。

一息入れて、焔はCOEプロジェクトにおける常川と優奈の役割の具体的な内容を話しだす。優奈は紅茶の残りを気にしながら、耳を傾けると、察した焔が湯を入れてきてくれた。

焔が言うには、この共同研究は大学内の複数の学科にまたがる学際研究で、山瀬研究室の所属学科を含む4つの学科で構成されている。各学科から選抜された大学院生が、共通のテーマで交流する共同研究プロジェクトで、時折外国からも招聘研究者が招かれることもある。プロジェクトは更に内部で7つにチームが分かれており、各研究科の7人の教員が各プロジェクトの代表を務めている。

代表者がその所属学生をプロジェクトに入れることを承諾すれば、所属できる。そのため元々の研究室の指導教官には制限がない。もちろん自分の研究室の指導教官のプロジェクトに入る方が何かと効率が良いし、普通はそうしている。だが常川はなぜか山瀬の研究プロジェクトには所属していない。それどころか情報すらもらえなかったと言っていた。それが山瀬との確執なのか、単純に常川の研究テーマと関連するものなのかは、優奈には分からない。

研究室に所属している博士学生は、修士学生と違って、基本的に必修なのは山瀬の担当ゼミだけだ。博士学生は自分の研究を完成させるのがメインとなるが、その実験も山瀬の実験の一部を構成することが多い。更に山瀬が代表のCOEプロジェクトに参加しているともなれば、その関係性は一層密になる。

常川以外は、独自研究をしている博士学生も、COEでは山瀬の担当プロジェクトを選択する。山瀬が常川をプロジェクトに入れることを許可しないのか、単に研究室の情報に疎いだけなのかは分からないが、外から見ると指導教官と上手くいっている印象はない。

傍若無人に見える常川の立場は、意外と脆いものなのかもしれない。急に横に居る常川が、小さく見える。先程から常川の口数が異様に少ないのも気がかりだ。心もとない優奈の気持ちを知ってか知らずか、焔はこう締めくくった。

「学際研究は初めての試みですが、楽しみです。これを機会にお互いの研究室同士の交流も深まるといいですね」

「まあ宜しく」とやる気が見当たらない常川を遮るようにして、
優奈は「はい」と元気よく賛同した。

調査の結果、院生を含む学生の名簿と住所録と、一般公開講座の参加希望者と小田切間で交わしたメール本文と、その住所、氏名、電話番号、小田切がハードディスク上に保存していた文書全部、そして自分の名前が所有者と記された画像ファイル - 焔の短時間でのネット上での調査によると、これが現時点での流出情報の全てだった。

院生のメールアドレスから院生の所属も漏れており、研究室のホームページと照らし合わせれば簡単に誰のアドレスか分かる。院生なので、当然自身のメールアドレスを公開している人も多いが、それでも一般に公開はしていない学生もいる。それに加えて、小田切が指導していた、まだ公表していない院生の研究成果も含まれる。企業との共同研究をやっていた学生などは、真っ青になっていた。

そんな学生たち以上に、小田切のショックは計り知れなかった。何しろ常日頃から、自分はパソコンに疎いことを自覚して、セキュリティには細心の注意を払っているつもりだったのだ

だからこそ個人情報の流出が度々話題になる中で、小田切は自分がその当事者になるとは想像もしていなかった。

個人情報の流出と同じくらい、保存していた画像の中に、猥褻画像が混ざっていたのが解せない。私用のパソコンならともかく、大学のパソコンで、勤務時間内にそんな画像を見ていれば、どんな火の粉が降りかかるのか分からない。

ネットワークに疎い小田切は、管理部門にチェックされそうで学内のネットワークには気を遣って、閲覧先にも細心の注意を払っていた。どうして自分名義でこんな画像がと、名誉を汚されたようで、地味に堪えている。勤務時間内に何を見ているのだと、女性たちからの視線は一気に冷たいものとなった。

だがこれはあくまで小田切の私情であり、大学側からしたら最もダメージとなったのは、やはり個人情報の流出である。

一般参加希望者には当然学外の間が含まれていたもので、外部から指摘があったこともあり、大学広報が世間に公表する運びになった。当然小田切には大学本部からの、叱責と信用の低下は免れない。それは順風万般な研究者生活を送って来た小田切にとっては、不名誉他ならず、他者が思う以上に心に突き刺さる。故意によるものではないので、口頭での嚴重訓告だけ。民間企業に比べれば甘すぎる程の処分でも、小田切には大いに不満であった。

どうしても他者による作為を感じる。悪意を。じゃあどうやってと言われれば、コンピュータに疎い小田切に説明が出来ようはずもないのだが。

小田切は握った拳を机に叩きつけた。思い通りにならない状況は初めてで、感情がまとまらない。それでも起こってしまった以上、何とかするしかない。

(大丈夫。今まで通り何とかできるはずだ)

小田切は、幾度も自分に言い聞かせ、平常心を保とうと試みた。

焔がパソコンの中身をチェックした後、外部の業者よりも学内委託している業者に頼む方が割引特典を使えるし、学内の規定にもいろいろ通じていることでメリットがあるとアドバイスを受けてから、常川と優奈はそのままを小田切に伝えたが、小田切は頑なに拒絶した。

小田切は個人情報の詰まったパソコンを、業者に委託するくらいなら新しいパソコンを購入すると粘り、最終的には自費で新しいパソコンを購入することで落ち着いた。あれだけの騒ぎになった為、さすがに公費で購入する神経はなかったようだ。私用パソコンには全くウイルス感染が見られないと焔に太鼓判を押してもらったと伝えられた時には、心底ほっとした顔をしていた。

この頃になると、ウイルス感染事件も収束に向かっていた。小田切は処分や弁明など、いくつかの関門がまだまだあるようだが、少なくとも研究室内では、その話題をあえて口に出す者は、もうほとんどいない。小田切と接する態度も、以前と変わらない。そこら辺は大人なんだと優奈は感心している。今回被害を多少なりとも被った院生がいることを知っているからだ。

各研究プロジェクトも、小田切の不始末への対応に追われ停滞していたものも完全に復旧した。今日も研究室には、優奈と常川だけ。それ以外の院生は全て山瀬の研究プロジェクトに駆り出されている。少し寂しく思いながらも、優奈は実験する手を動かしていた。

三十分程経過した後だろうか -。

コンコンとドアをノックする音がして、続いて常套句を機械的に告げる声が後に続く。常川はソファに横たわったきり、眠りこけており、動く気配がない。仕方なく優奈が実験に使用した手袋を脱ぎ棄て、ドアに向かう。

「今日の分の郵便です」

大学構内の配達人が手紙を数枚渡してきた。研究室宛ての郵便は、おおむね優奈が受け取ることが多い。

受け取ると宛名の書いてあるものは、その人の机に置き、それ以外の広告などは研究室共用の棚の上に置く。基本的に研究備品のカタログや学術雑誌関連の書類であることが多い。一応各研究室ごとに簡単な郵便ボックスが、研究室のドアに付いているのだが、中に人の気配がする時には、こうして直接渡してくれる。

礼を言って優奈が受け取ると、今日は宛名の書いていない封筒が一枚混ざっていた。

「これは……？」

宛名には「山瀬研究室様」としか書いていない。勝手に開けてもいいものだろうか。優奈は躊躇った。白い無地の便箋にをひっくり

返しても、差出人の名前は書いていない。宛名もタイプライターで打ってある割には、広告であることを示す企業名もない。どう見ても私用に届けられた郵便物だ。

優奈が考えている間に、いつのまにか起きていた常川が封筒をひったくると、勝手に開けてしまう。

「常川さん？起きていたんですか？」

突然現れた常川に、優奈が驚きの声を上げる。

「今起きた」

ぼりぼりと頭を乱暴に搔き毟り、あくびを一つする。その乱暴な動作のまま、封筒を逆さに振ると、中からは更に二枚の写真が出てきた。

一枚には、手鏡を後ろ向きにして、後面の様子がしっかりと見えるように映っている。もう一枚は少しカメラを離して、手鏡の全体像が分かるように撮影されている。それぞれ一枚の一つずつ。

「これ、何かの広告でしょうか？」

返事を期待せずに常川に聞く優奈。常川は真剣な顔で写真を見つめている。

「何か紙が入っているぞ」

言われて引っ張り出した小さな便箋の中央には、
「オダギリミツヲ、ササキメイ。5ネンマエノツミガユルサレルト
オモウナ。アカハラサツジンシャ」と赤字で印字されていた。

読みにくい全てがカタカナの文章が、不気味極まりない。優奈は文章を小声で朗読するが、一読では意味が分からなかった。小田切と知らない女性の名。次に「5年前の罪が許されると思うな」という警告。

(アカハラサツジンシャ……?)

「……何でしょう、これ？」

嫌がらせにしては手が込んでいる。常川は文面を見つめ息を飲んだ。何かを飲み込んだかのように、喉が鳴る。

「……誰にも言うな。俺が処分しておく」

常川は写真を元の封筒に納めると、自分の鞆の奥にさっさとしまった。だが内容が内容だ。優奈はせめて小田切やこのもう一人の名前を書かれた女性の耳には入れて上げた方がいいのではないかと提案したが、常川は駄目だと拒絶するだけだった。

「小田切先生には言っておいた方がいいんじゃないですか？
もしかしたら心当たりがあるかも知れません」

逆恨みにせよ、この手紙と写真を送ってきた人物はおそらく
小田切を憎んでいる。
今回この手紙を勝手に処分してしまえば、無視されたと腹を立てて
更に行為がエスカレートするかもしれない。

「……いいから黙っておけ」

何故か常川はそれが最善と考える。
優奈が更に口を開こうとした時に、研究室の扉が開いた。
珍しく早めにやってきた先輩たちの顔が覗く。
だがその内の一人が、常川の顔を見ると「あ……」と言ってひっこんで
しまった。他の先輩たちも共に姿を消す。だが常川が気を悪くした素振り
はなく、全く怯まない。

「ああ、面倒な奴らが来たな。よし田中、昼飯でも食べに行くか」

優奈は既に家で食事を済ませてある。

「いえ、家で食べて来ました」

「じゃあ水でも飲めばいいだろ。行くぞ」

右腕を掴んでそのまま研究室から引っ張られる。先程の先輩たちが
気の毒そうに見つめる中、優奈は常川に引きずられて行った。

既に3構目が始まっている時間だが、学生食堂は未だ賑わっている。構内に学食はいくつもあるが、山瀬研究室の学生たちは、大学院棟と渡り廊下で繋がっている学生食堂を利用することが多い。

この食堂は学部生が演習で使う棟にも近く、比較的遅い時間まで営業していることもあり、自炊をしない学部生も多く利用している。幾度も塗り直して修繕した外観はロッジのようで、大きな窓からは燦々と太陽光が降り注いで、学生の若さ溢れ明るい雰囲気華を添える。

メニューは基本的にカレーや麺類、季節の惣菜を基本とし、それに季節ごとのフェアを行う。優奈も四月には新入生歓迎フェアのメニューを楽しんだ。

常川は水でも飲んでおけと言ったが、いざ食堂に来ると、空腹を感じる。優奈はデザートコーナーで売っているフライドポテトとジュースを頼むと、先に壁側の席について常川が戻ってくるのを待った。常川は大盛りのかつ丼をプレートに乗せて、ほくほくとした顔で戻ってくる。

いざ対面すると、何から話題を始めて良いのか分からない。そもそも他のメンバーと連携の取れてなさそうなこの人と行動を共にすることが、新入生の優奈にとってマイナスになるのではないか。腹黒い計算もしてしまう。

それでも先程の手紙の件は気になる。言葉が生まれぬ時間、優奈はフライドポテトを消化することに専念する。

「俺、修士を2年留年して、博士も2年留年しているんだよね。だから研究室では一番古株になるんだ」

学生というにはトウが経ち過ぎているとは思っていたが、これで謎が解けた。下手をすると、小田切とも同級生なのかもしれない。

そういえば、「お前の会社IT系だろ」と言っていた小田切の言葉を思い出した。

「IT系の会社で、働いていたんですか？」

ポテトを口に含みながら、優奈は会話を続けるためだけに口を開く。それほど関心がある訳でもない。

「そうそう。俺の本業はそっちだからさ。そっちが忙しくて、あんまり研究室には来ていなかったんだ。俺、こう見えても社長やってるの」

「社長さんですか？」

驚いて常川を見直す。その割に服装はなんとも安っぽい。

あの言葉は、ここから来た話だったのだなと、優奈は納得した。

「ああ。結構儲かっている。大学院は会社が軌道に乗るまでの居場所として居させてもらっていたんだ。俺にとって研究は趣味の延長みたいなものでな。メインは金もうけ」

悪びれもせず、そう言い切る常川。これでは研究室の他のメンバーの不興を買うはずだ。奨学金やバイトでかつかつで研究を続けている学生にとっては、不愉快極まりない話だ。下手に返事をしたら言質を取られそうで、優奈は言葉が出てこない。愉快そうに話していたが、ふっと声を潜めて言う。

「だから俺は研究室には染まっていない。中立の立場だ」

「はあ……」

話が急に飛んだ気がする。だが常川にとっては十分話は繋がっているようだ。常川がそれ以上言葉を継ぐことはなかった。優奈は自分から、話題を提供することにする。先程届いた封筒。あれを見て常川の態度は明らかに変わった。それに関して、何か知っていることがあるはずだ。

「さっき書かれていた名前の人……常川さんは小田切先生じゃない方の人も知っているんですか？」

「ああ。今はうちのCOEの助教をしている。研究室のOBで、小田切とは同級生になるな」

食べながら常川は言った。

「もしかしてあの二人……。それで小田切先生の奥さんか、その女の人の旦那さんが怒って。そういうのもありえますよね？」

非日常の予感に不謹慎にも興奮を抑えきれない優奈。その様子を呆れたように眺める常川も、自分の説を披露し始めた。

「そういう関係とは思えんがな。だが差出人にとって、この組み合わせに何がしかの意味があることは確かだろうな」

「便箋に書いてあった言葉に、何かヒントがあるんじゃないですか？」

確かあの文面には、「5年前のことを許されると思うな」とあった。あの手鏡には何の意味があるのか？

「罪が何を示しているのかで、差出人の見当がつくかもしれませんね」

まだ知り合って日が浅い小田切の行動を思い起こし、素人推理を頭の中で巡らす。呆れたように常川が見ている。

まだ入学して一月の優奈であるが、小田切と顔を合わせることは存外に多かった。山瀬に書類仕事の大部分や学生への実験指導を一任している為、顔を合わせる機会は多い。

小田切はポストク氷河期時代に、博士課程を卒業後すぐに助手になれた運の良い人間だ。それも山瀬の後ろ盾あってのことであるのは明白だ。丸っこい鼻と細い目を眼鏡でカバーした容貌は、地味ながら誠実さを出しているように感じる。事務仕事や日常のこまごまとしたことは着実にこなしてくれる。研究者としての力量はそれほど目立っていないが、単位についてもそれほど厳しくないことから、学生受けも可もなく不可もなくという平均的な人間だ。悪く言われることはまずない。事務関係に関してはそつがない分、信頼に足る人間であると言えよう。

とすると何か犯人に関わるトラブルに関わっているということか。

「第一候補が浮気で、後は逆恨みしている山瀬研究室の元関係者ですかね。学部の授業やゼミも含めると容疑者は膨大な数になります。どうやって犯人を絞りましょうか……」

「おい、妙なおせっかいはやめておけよ」

今しがた食べ終わり箸をタンとプレートに置くと、常川は言った。

「……不審な手紙が来るぐらい、そう珍しいことでもないだろう。いちいち警察に行っても相手にしてもらえないぞ。文字は物騒だが、何か脅迫されている訳でも、強要されているわけでもない。被害は今のところ何もないんだ」

「でも、万が一何かあったらどうするんですか。巻き添えで山瀬先生にも、迷惑がかかるかもしれない」

冷たく感じる常川の言葉に興奮した優奈は、両手を机の上に置き身を乗り出す。

振動でコップが揺れ、倒れた。

水が手にかかり、優奈は我に返る。

罰が悪そうに「すみません」と謝る優奈に、呆れたように常川が追い打ちをかける。

「お前さあ、どんな幻想抱いてこの研究室に来たのか分からないけれど、そんなに接触もないおっさんのこと、良くそんなに心配できるよな。恨みを持たれるなら、それなりに理由があるんだろ。だったら殺されようが、知ったことか」

「だったらせめて怨まれている事だけでも教えてあげましょうよ」

馬鹿にされたように感じた優奈は、必死で食い下がる。

「いたずらだ。大事にするな。……それに奴らも、何とも思わないはずだ。言うだけ無駄なんだよ」

常川は最後の言葉を特大大きな声で言った。

「そんなの常川さんにどうして分かるんですか！」

「……分かるさ。良く知っているんだ。あいつらのことはな」

「犯人探しのようなことは、やめておけ。こいつらに心当たりがあるのなら、
普段から自分の身を律すればいいだけのことだ。それが出来ない
人間ならこの手紙の事を知ったところで、何も行動しないだろうよ」

「知らずに人を傷つけている人だっています。言われないと
分からない人もいますよ」

「だとしてもそれを含めて自己責任だ。忘れろ」

常川はそれ以上、この件に関して何も言わなかった。

今度は不思議そうな顔をして、常川が聞き返した。

「お前一体なんだってそんなに山瀬たちのことを心配するんだ？そんな奴うちの研究室でもほとんどいないぞ」

それは常川が非常識なだけで、他の院生だってあの手紙を見れば、きっと心配するはずだ。そう信じている優奈はこの常川の言葉を黙殺した。だが常川は気にせずまた質問する。

「お前そもそもどうしてうちの研究室に来たんだ？周りから止められなかったのか？」

家族は喜んで送り出してくれたし、友人も望みが叶って良かったと共に喜んでくれた。やましいことは何もない。だから優奈は胸を張ってその通りに申告する。すると目を丸くして常川は言った。

「お前、外部からだったな。それじゃあ知るわけがないか」

見込み違いだと言うように、大声を出した。その態度に優奈はますますむっとする。

「外部からではいけませんか？」

外部からというので、疎外感を感じることも稀にある。余所から来たからと言って、いろいろ言われるのは当事者からすれば傷つくものなのだ。

「ああ、ごめん。悪く取らないでくれ。……それなら、そうだな。これは先輩としての俺からのアドバイスだが」

そう前置きすると、おもむろに

「無難に乗り切ることだけを考えろ。妙な正義感は身を滅ぼす。媚びても駄目だ。ただ課程を終えることだけを考えろ」

「だったら、常川さんはなぜそんな研究室に居続けるのですか？辞めればいじゃないですか」

出世コースを外されて妬んでいるのかもしれない。そもそも社長だというのも自己申告に過ぎない。怪しい。

「俺は存在自体が奴らにとって脅威になる」

周囲の晴れ晴れとした景色と比較して、なんとも形容しがたい空気がまとわりつく。

「それだけだ。俺がここの院生を続ける意義はな」

小田切が学内郵便で受け取った封筒は、ごく普通の定型封筒だった。

仕事柄大量の郵便を受け取る小田切は、ルーティンワークとして慣れた手つきで、その封筒の中身の処理にとりかかる。だが中を見て、小田切はその認識を改めた。

中には伝票や領収書をコピーしたものが入っていた。

それは良い。
問題はその表題が「科学研究費不正流用についての証拠」と題されていることだ。

慌てて小田切は、封筒をひっくり返すが何も書かれていない。せめて差出人のヒントに繋がるような物が入っていないかと、封筒を逆さに振る。

あった。

文献一覧をホッチキスで止めた紙束に重なっていた、一枚の便箋がひらひらと落ちる。

『5年前のアカデミック・ハラスメントへの関与と、一人の院生に全ての罪をなすりつけた経緯を、ご自身のSNS上で公開されることを要求します。さもなければ、小田切満夫と佐々木芽生の科学研究費流用について、しかるべき機関に告発します』

(今になってこんな……)

小田切はデスクに拳を叩きつけた。

小田切は気を落ち着かせる為に、電気ポットで湯を沸かし、コーヒーを淹れる。コーヒーの臭いがふわりと部屋を充満すると、少しだけ小田切の気持ちも安らいでいく。

あれは5年も前の話だというのに。
5年前の事件は、小田切の人生を決定的に変えた。
その時の関係者が今になって意趣返しを企んでいるというのか。
どうして今になって -。

あれはもう終わったことで、学内での審理は既についている。
裁判でももう訴えられる期間は終わったはずだ。
今更古い記憶を掘り起こしたところで、何になる。

5年前だって、被害者家族が学校を相手取って行動を起こし、
望み通りではない結果で終わったではないか。
それを今更。また同じことだ。
山瀬が第一線に居る限り、絶対に負けはしない。

(どうせ何もできやしまい)

そう高を括りつつも、不安は残る。
送られてきた証拠書類が、全部正真正銘の本物のコピーだったことが
小田切を絶望的な将来観測へと導く。
相手が本気になって警察なり、国税局なりに告発すれば、
確実に捕まる。
大学当局に告発したって、処分は免れない。

(要求通り5年前の事件を公表してしまえば、告発を免れるという
のなら、容易いことだ。アカハラごときで、刑事罰などめったに
課されない)

自他共に認める慎重派の小田切は、万が一に備えて、名指し
されているもう一人、佐々木芽生と口裏を合わせることにする。
彼女のほうでも異変が起きているかもしれない。
それなら二人で情報交換をすれば、差出人の特定に繋がる可能性も
ある。差出人さえ押さえてしまえば、何も不安に思うことはない。

早速連絡を取る為に、佐々木の携帯番号を呼び出す。
メールでは跡が残りそうで嫌だった。
前回のようなパソコントラブルで、内容が流出したら一大事だと
踏んでのことである。

「はい。佐々木です」

高めの明るい声が応答する。
佐々木の余所行き用の声だ。
番号を確認せず、婚約者と間違えたのかもしれない。

「何？何の用？」

携帯に出て相手が小田切と分かると、佐々木は途端に高慢な態度に変わる。この女はいつもそうだ。山瀬に目をかけられていることを傘に着る。口には出していないが、小田切は佐々木のこんなところが鼻について、苦手だった。あれ以来その態度はますます増長している。だが今は非常時だ。気にしている余裕はない。すぐに本題に入る。

郵便物の内容について話すと、佐々木の余裕に溢れた態度は怒りに代わる。感情が負の方向に揺れる時、佐々木はいつも怒りだす。相変わらず感情の起伏が激しい、と小田切は一層辟易する。

「馬鹿らしい。今更蒸し返して何になるって言うの？」

佐々木は見えない敵に向かって毒づく。

「不正経理の覚えなんてないことだし、堂々と無視していればいい。下手に気弱になったら、その変質者の思うがままだわ！」

それはまさしく正論だが、領くことのできない小田切がいた。言い辛そうに小田切は、切りだす。

「……偶に行われる業者の接待。あれは業者にプールしたお金によるものなんだ。だから君が意図しようがしまいが、君も不正経理の共犯者と言える。調査が入ったら、君も有責だ」

「……何それ。知らない間に、私は不正に加担していたってこと？ どうしてそれが規則違反だって教えてくれなかったの？ 知っていたらそんな危険なことする訳がなかったのに」

佐々木はますます激昂する。
当然だ。

小田切は気を利かせたつもりでも、事が露見すればとんでもないスキャンダルになる。金銭方面で特に苦勞をしていない佐々木にとっては、必要のないリスクを背負ってまですることではない。

「今になって、こんなこと言われても。私だって被害者みたいなものよ。勝手に犯罪の方棒を担がされて」

佐々木に関しては、送られてきた伝票にも数枚しか書かれていない。佐々木は唯小田切の指示に従って、事務手続きをただけだ。ひとしきり怒ると、佐々木は感情が高ぶりすぎて疲れてしまったのか、静かな声で尋ねる。

「それよりも、小田切君。強請られるほどの金額の流用をしていたの？」

「……」

小田切の立場は危ういものだった。
一応山瀬の後継者候補に潜りこめているが、それに業績が追いつかない。

山瀬がネームバリューがある分、並みの業績では許されない。そんな不安が科学研究費を上手く運用することで、評価を上げる戦略を思いつかせた。

山瀬自身の研究費は当然自分で管理している。しかしCOEプロジェクトに必要な研究費は、小田切に任されている。金庫番としての役割を山瀬から授かっているのも、山瀬の検閲など殆どなしで金銭管理を任されてきた。これも信頼あってこそだ。

その信頼を、科研費を業者にプールさせることで節約してきた。プロジェクトに必要な金を引き出すのが上手だという評価は、無くてはならない人物という評価にもつながる。実績で失敗した場合の、生き残りを賭けて行ってきた。今まで外部に露見したこともない。ただ研究費を節約するくらいに考えてきた。

「ちょっと研究費を浮かせるつもりだったんだ。業者もそういう人はいくらでもいるって言うし。外部に露見することもまずないって言うから」

佐々木の問いに答える代わりに、とりなすように話を続ける。

「悠長なことを言っている場合？ もし科研費の件が表に出たら、学内処分だけじゃない済まないかも。刑事罰の可能性もあるのよ」

金額だけが問題ではない。不正経理は厳罰が下されるのが常だ。大学を騙して入手した金なのだから当然だが、それは研究者生命の終焉も告げる。やってしまったことの恐ろしさに、言葉も出ない。

「5年前の事件のこと、もう公表してしまおうか？もう時効だし。この脅迫者が誰か知らないけれど、要求を飲めば……」

「駄目！私は婚約を控えているの。評判が第一な職業の人と。そんなマイナス・イメージが付くことは許さない！」

この言葉は、今まで燻っていた小田切の我慢の導火線に火を付けた。

「冗談じゃない！家族にあの事件と関わりがあると思われるだけでも嫌だ。あれだって、できれば私はやりたくなかった。君たちが暴走して。そもそも初めから知らぬ存ぜぬで済んだ話を、余計にややこしくしたんだろ！」

「私たちのせいだって言うの。だったらどうしてそのときに言わないのよ。……大体今の地位は、その時のおかげでしょ？今更被害者面しないでよ」

正論だ。分かっている。それでも小田切は、己の罪状について言い訳を留めることが出来なかった。

「……ごめん。言い過ぎた」

小田切の態度の変化に、佐々木は渋々態度を軟化させた。

「……とにかく、どちらの要求も飲むことは出来ない。何とか二人で協力して解決に導きましょう。内部情報をもっている人間だから、特定は難しくない筈。いまさら妙に騒ぎ立てられて、今の生活を壊されたくないわ」

「たぶん業者に繋がっている奴がしたことだ。早急に誰かを特定しよう。名前を隠してこそこそ動いている奴だ。特定して口止めすれば、大事にはならない。連絡を取り合おう」

勇ましく計画を発表した後で、小田切は急にトーンを落とす。

「ただ僕は家族には内緒にしておきたい。最近少し関係が微妙なんだ。こんなことが知れたら、完全に家庭がおかしくなってしまう。だからその辺は配慮してくれないか？」

「分かった……。私も今結婚を控えているし、表沙汰にはなって欲しくないわ。お互い気をつけましょう。どうせただの悪戯だとは思いますが。気をつけるにこしたことはないものね」

鍵を閉めた密室での会話。
聞かれるはずのないその会話が、しっかりと録音されていることを二人が気付くことはなかった。

小田切の研究室のコンセントに嵌められた、小型盗聴器。
その内容を別室で耳を凝らして聞いているものの存在など。
その時の二人は知る由もなかった - 。

「郵便物をお届けに参りました。」

その日、午後の便で来た郵便物の中に、差出人の書いていない角2型の封筒が混じっていた。前回の怪文書を思い出して、嫌な予感に襲われながらも優奈は中を確認する為に、注意して鋏で封を切る。

中には数枚の紙をホッチキスで留めたものと、別に小さめの封筒が入っており、そこには小田切の名前が宛名として書いてあった。小田切は教員なので個人でメールボックスがある。そのため学生の研究室に小田切宛の郵便物が送られてくることは、めったにない。小さめの封筒にも、やはり宛名はなかった。

代わりに、前回と同じく手鏡の写真が貼り付けられていた。シール代わりにしては大きすぎるし、なぜ封筒の中に入れないのか理由が分からない。

前回の封筒に入っていた紙切れに書かれていた、呪いにも似た文書を思い出させる。なぜ差出人はあえて学生の研究室に郵送するのか。そこら辺からして、底知れない理由がありそうで、気持ちが悪い。同時に、優奈の好奇心が掻かれたのも事実である。前は常川の邪魔が入ったが、今日はまだ常川は居ない。

封筒はさすがに私文書なので中を検める訳にはいかない。剥き出しの書類の方に、目を通すことにした。こちらには宛名がない以上、研究室宛ての筈だ。

5年前にアカハラで、山瀬研究室の女子院生が被害を受けていたこと。小田切と佐々木がハラスメント加害者であること。それにも関わらず、一人の男子院生だけがその責任をとって退学処分となったこと。

これらの事が、新聞記事のように、淡々と事実だけが書かれていた。

(これは、本当にこの研究室であったことなの?)

同封された文書が真実であるのなら、差出人はアカハラの被害者と考えると筋が通る。それならどうして大学を相手取って、責を問わないのだろうか。上手いやり方とは思えなかった。前回の常川の態度からして、何か事情があるのかもしれない。

常川は前回怪文書が届いたときに、本人に知らせるのをなぜか嫌がった。だがあれからしばらく罪悪感に駆られていた優奈は、今回は常川がいないこともあり、小田切に渡すことにした。今回ばかりは宛名が書いてある以上、勝手に処分する訳にも行かない。

二回の空振りを経て、なんとか優奈は封筒を小田切に渡すのに成功した。

小田切は中を、特に手鏡の写真を見ると、小さく悲鳴を上げた。心配する優奈に、幾度も中身を見たのかと確認する。文書の方は既に全部読んで、実はスキャンして保存していたりするが、

それは内緒だ。「全く見ていないですけど、何の手紙ですか？」と慌けて、部屋を後にした。

二時間ほどして常川がやって来ると、他の学生が掃けるのを待って、待ちかねたように優奈は早速先程来た手紙のことを話した。

「この研究室で本当に、あんなことがあったんですか？」

「ああ。本当だ。俺はその時には休学していたから、詳しいことは言えないが」

学外には漏れていないが、人の口には戸は立てられず、少なくとも学部内ではある程度噂になった。その影響で未だにその噂が残っている代の学生達は、山瀬研究室に来たがらないのだ。さらっと事実を肯定した常川は、そう説明した。

その頃小田切は手鏡の写真を凝視して、放心していた。

(どうしてこれが……？関係者の仕業か？)

手で破った封筒から取り出された便箋には、前と同じく5年前のアカハラとの関連を公表すること。それともう一つ。全ての罪を背負い亡くなった男子学生の名誉の回復を求めるものだった。

不正経理の証拠を握っている以上、やはり解雇されたあの営業マンが一枚かんでいるのは間違いない。そして共犯者は、5年前のアカハラに関係ある者。

(やはり何がなんでもあの営業マンを探して、吐かせるのが一番だ)

アカハラの関係者の人脈を辿るよりも、明らかに関係のある人物を追った方が遥かに効率が良いはずだ。小田切はスケジュール帳を睨み、営業マンを負うべく計画を調整することにした。

姉から弔問客があったことを電話で聞かされた女は、ひどい寂寥感に苛まれていた。あれからもう5年経つ。

白い壁に囲まれた一室で、女は独り一枚の写真を見つめていた。夜の帳がとうに下りているというのに、女はテーブルランプを灯しているだけだった。薄暗がりでも女の面長の顔の輪郭と、濃い緑のサマーセンターの袖が、薄ぼんやりと照らしだされる。

他の人には見られないように、誰にも触れられないように、この写真を眺める。これは日課であり儀式でもある。写真の中の青年は、いつだって柔和な笑顔を女に向けてくれる。

この瞬間だけ女は彼岸にある魂との邂逅を果たす。それは至福であり、同時に残酷な拷問でもあった。

女の魂は既に死んでいた。可愛がっていた甥が五年前に亡くなってから完全に生きる目的を失っていた。ただ惰性で生きている。

姉の一人息子だった和哉は共働きで構ってもらえなかった両親よりも、比較的時間に融通の利く仕事をしていた彼女に懐いていた。もともと子どもにあまり構わなかった両親よりもずっと肉親のような存在だったと女自身自負している。周囲が結婚する中でも寂しくなかったのは、一重に和哉の存在が大きかった。

はにかみ屋で内向的なところもあったが、女の誕生日プレゼントは欠かさなかった。いつも「大好き」と言ってくれたのを折に触れ思い出す。さすがに年頃になるとあけすけには言わなくなったが、それでも信頼関係は昔のままだった。……少なくとも女はそう思っていた。

それが五年前に全てが失われた。

自殺。
運行中のフェリーから投身しての壮絶な死。
それだけでも受け入れがたいのに、後に現場検証と関係者からの事情聴取を終えた警察から、和哉が同級生に暴行と重なるハラスメント行為をしており、それがもとで彼女は -。
それを悔いての自殺であると、遺書から判断された。
既に大学も退学処分を受けていたと。
指導教官や同級生たちの証言から、遺書の内容を裏付ける事ができると警察は言った。

自分も含めて身内の悲嘆は大きかったが、和哉に非があると公に認められている以上、憔悴している様子すら他人に見せるのを躊躇った。親しい人に理由を話すこともできない。
姉夫婦も人目を忍ぶように密葬して甥を見送ることにした。
未だに事情を知らない地元の人間たちには、曖昧に「急死」とだけ答えている姉夫婦。
その苦しみは女が察してあまりある。

だが女の場合、事が起こる前から事情を知っていた。

研究室のほぼ全員があかりに対して無視や暴言を吐いていたことを和哉の口から聞いて知っていた。

和哉は言った。
自分が嫌がらせに関わっていることを肯定した上で。

「仕方ないよ。先生や皆と上手くやれない方が悪いんだ。それにこれくらいのこと社会に出たらいくらでもあるだろ？」

躊躇いもなくそう答えた言葉。それは呪いにも似て、発した本人に帰っていった。嫌がらせの主犯は和哉一人ということになっている。女がもっと真剣に事情を聞いていれば、解決に尽力すれば和哉は死なずに済んだのか。今となってはもう遅いが、悔やんでも悔やみきれない。

和哉の話では、教授含め複数の研究室メンバーが関わってはずだ。傍観しているだけで、何のアクションを起こさなかった者だって、広い意味では加害者だ。それが主犯は和哉だけで、他の人間は全くお咎めなしの無罪放免というのは納得ができなかった。

スケープゴート。
前後関係は明らかにそれを示唆している。

「和哉も悪いけれど、他のメンバーだって同じようなことをしたから同罪だ」という本音は今も燻っている。

やり場のない怒りは、自身を苛むだけだ。
懊悩は続く。

未練を断ち切ろうと、ずっと手元に置いておいた和哉の遺品を姉の元に返したりもした。
女は自分でもこのまま過去に沈んでいるのが、良いとは思っていない。それでも依存する対象が、写真に変わっただけだった。
以前は写真も辛くて見られなかったのだから、少しは成長した。
そう思いたいのが、心境は大して変わっていない。

いつしか女は、ただ目的もなく生き続ける無限地獄に堕ちていた。
出口のない罪悪感と恨みは、永劫の生き地獄を生みだし拡大していく。
出口は一つしかないけれど、その勇気は未だ女にはなかった。

姉の電話からこっち、感傷にふける傾向にあるようだ。
時刻を確認すると、既に午後二時を回っている。
慌てて写真を手帳のポケットに仕舞い、パソコンにログインする。
起動するまでの間を有効利用しようと、午後便での郵便物を手に取った。

広告に混じって封筒が1つ出てくる。
封を切ると、中から手紙が出てきた。

「初めまして。私は山瀬研究室の元院生です。和哉さんが在籍していた当時在籍しておりました。当時の状況も鮮明に記憶にあります。和哉さんは、山瀬隆文一門によるアカデミック・ハラスメントの全責任を押しつけられて自殺しました。確かに彼はハラスメント加害者の一員です。ですが首謀者は彼ではない。あなたもご存じの通り、ハラスメント首謀者は山瀬隆文です。もみ消しの為に和哉さんはスケープゴートにされた。私自身も彼らから嫌がらせを受け精神を病み、研究の道を断念した者です。最近になりようやく病状が回復してきました。あなたさえ覚悟がおありなら協力いたします」

最後には差出人として「協力者」と書いてあり、メールアドレスが記載されている。アドレスの末尾からフリーメールであること以外は、差出人の正体に繋がるものは見当たらなかった。

封筒はごく普通の茶封筒であるし、文面も全て印字されたものだった。それでも俄然女は興味を抱いた。この差出人の正体は知れない。だがあれだけ皆が見捨て、和哉の両親でさえ最終的には諦めたと言うのに。この差出人はまだ和哉のことを覚えていてくれる。

執念深いだの忘れろなど、痛みを知らない人間が散々投げかけ傷つけてきた言葉が思い出される。和哉という名前を口にするだけで、今の女にとっては耳を傾けるに足る人物であった。

だが一方で差出人が、山瀬研究室の関係者の可能性もあった。和哉との血縁関係は知られていないが、調べて判明し口封じにきた可能性もある。女が未だに遺恨を持っているのかどうか調べる為に。もし本当にただ協力しているとしても、この差出人に何の利益があるというのか。和哉の死について何か確信があつてのことなのか。女はひどく動揺した。

(もし本当に復讐ができるのだとしたら。私は -)

それでも女の持つ証拠は、生前の和哉の証言のみ。
その和哉も亡くなり、五年も経過した今ではもう -。
自信がなかった。
和哉が本当に首謀者で、自責の念がない故に他の人間も同様だと言いつけている可能性だって否定できない。

結論を決めるのは、「協力者」と連絡を取ってから考えても良い。
職場を知っている以上、あらかたの女の個人情報には既に入手しているはずだ。今更逃げては仕方がない。
それに女が後に残ることを意識した上でメールをやり取りし、

そのメール履歴を保存しておけばいざという時に証拠にもなる。
普段はヴァーチャルだけの付き合いは信用しないが
今度ばかりはオンライン上の接触を、女は望んだ。

何より当時の和哉のことを聞きだしたかった。
不祥事で退学になった和哉のことを、あれこれ研究室の人間に
尋ねるのは躊躇われ、結局聞けずじまいだったのだ。

一瞬考えたのち、女は「協力者」と同じフリーメール・アカウントを
作り、新アカウントからメールを送信した。

帰宅してメールを確認すると、「協力者」からの返信があった。緊張しながら、女は内容を確認する。

「お返事を頂き嬉しく思います。
いきなりで信用できないのは当然です。
まずは当時の和哉さんの事からお話ししましょう。
彼は確かに加害者グループの一人でしたが、グループ内で立場が弱かったのです。その原因は私には分かりません。
ですから証拠に残りやすい嫌がらせは、彼に手を下させていた。
私の時もそうでした。証拠は近日中にお送りします。その上でご決断ください 協力者」

二日後送られてきたものは、DVDと数枚の紙だった。
そこには一人の学生に嫌がらせをする複数の声が、
和哉に対して無理やり実験結果を奪うよう囁けるものだった。
後から免罪符にするつもりなのかふざけた調子で言っているが、
その声音には明らかに強要する響きがある。
扇動者は明らかに、他の人間だった。
同時に女の身体中の血が沸き立つ。

間を置いて別の日時の話が再生される。
そこでも和哉は従っているだけだ。
その内容は丁寧に紙に、タイプされている。
日時もあるので、訴えれば証拠になるのかもしれない。

(これで甥の無念を晴らせるかもしれない)

名誉回復を裁判所に訴えることはできるはずだ。
更には同罪の人間たちの責任を問うことが出来る。

共に裁判を起こそうと「協力者」に書きこむ。
加害者親族と被害者。
立場の違いはあれど、共通の敵がいる。

だが帰ってきた返事はなんともつれないものだった。

「お返事ありがとうございます。ですがアカデミック・ハラスメントは3年で時効を迎えてしまいます。私やもう一人の被害者が嫌がらせを受けていた時から既に5年が過ぎています。
今からお金をかけて訴えたところで、奴らに処罰を与えることは出来ない。判決の結果により名誉回復は出来るかもしれませんが、強制力はありません。損害賠償すら請求できないのです。
それに裁判の結果と学内人事はまた別。
大学側は結局、何も処罰をせずにおくことでしょう」

「……」

希望が前に示され、女は既に名誉の回復だけでなく、加害者たちの社会的制裁をも望むようになっていた。名誉の回復だって、裁判自体を知らなければ風化されてしまう。

「もしもし、どちら様ですか？」

「……ツー・ツー」

また無言電話だ。
加奈は首を捻ると、受話器を下ろした。

今月に入ってから、毎日のようにかかってくる無言電話。
いつも小田切が居ない時を見計らったかのようなタイミングでかかってくる。
といっても一日に一度。休日で小田切が居る時にはかかってこない。
実害はほぼ無に等しいのだが、気味が悪い。

(この近辺では流行っている悪戯なのかな?)

電話帳に掲載されている電話番号に無作為に電話をかける悪戯
なのかもしれない。最近ではかかってくる度に、その番号を
登録して次回から分かるように設定するが、それでも毎回
違う番号からかかってくる。

(警察に相談するほどのことでもないし……。誰か近所の人に聞いて
みた方がいいのかな。何か対策を教えてくれるかもしれない)

ブーン。ブーン。ブーン。

柱時計が九時を知らせる音で、加奈は我に返る。
そろそろ出勤の時間だ。

まだお絵描きに夢中の望に準備するよう促す。
保育園の服と帽子は既に身に付けているので、後は鞆を取りに行く
だけの状態だ。早め早めに準備する慎重な性格は、小田切の影響だろう。

望を助手席に乗せ自動車を発進させる。
小田切とは別に購入した軽自動車は、軽やかな音を立てて、
住宅街を走り出した。

小田切家は大学から車で三十分程の位置にある、賃貸のファミリー・
マンションにある。
勤務先の大学へは車で三十分程で、近すぎず遠すぎない適度な距離。
買い物や職場へのアクセスに支障がないこと。
その割に自然に恵まれた立地環境。
様々な物件を吟味した結果、二人の意見が一致したのがここだった。

「ママ、今日はお迎え何時頃？」

「七時ぐらい。遅くなってもごめんね」

加奈は塾で英語を教えている。
父親の仕事の関係で、アメリカに数年滞在していた経験に加え、
大学も英文学科に進学した経歴から、英語を使う職に就いたのは

必然と言って良かった。それに加えて、大学時代の伝手で、頼まれて翻訳の仕事をするときもある。小中学生を対象とした授業なので、勤務時間は午後遅くからが多く、一教科だけということもあり、時間には余裕がある。

小田切の両親も同じ市内に住んでいるので、喜んで望の世話を引き受けてくれるのもありがたい。子育てに手を抜くことなく仕事にも専念できる環境にあることに、加奈は本当に感謝している。

それでもあえて望を保育園に預けるのは、一人っ子の望に同年代の子どもとの交流の仕方を教える意味合いが大きい。もちろん義理の両親に頼りっぱなしには、できないという遠慮もあるが。

幸い今年3歳になる望は人見知りすることなく、保育園で友人と遊ぶのを楽しみにしており、子育ても順調。

今日も待ちきれないというように、車から降りた望は加奈が先生に挨拶している間に、もう運動場で遊ぶ友達の方へと駆けだしている。

「もう、先生に挨拶しなきゃ駄目でしょう！」

一声かけると、望は遠くから大声で先生に挨拶する。加奈が困った顔をして見せると、担任のベテランの保育士は慈愛のこもった笑顔で応じてくれる。望に触発されたかのように、他の園児たちもわあっと駆けていく。それぞれの保護者たちとも、一通り挨拶を交わすと加奈は勤務先の塾へ向かった。

平凡だけれど、満ち足りた日々。それがこの日を境に音を立てて崩れていくとは、この時の加奈は想像だにしていなかった。

この発端は加奈が勤めている学習塾にかかってきた一本の電話だった。

いつもはなんだかんだと上手に対応する受付の女の子が、救いを求めるように講師室を見つめていた。入口の傍にあるデスクが受付であり、講師室は受付の横に位置する。ガラス壁に仕切られているので、お互いの動向はすぐに分かる。塾長室は講師室の奥にある個室であるが、塾長自らが教鞭を取っているため、今も講師室で授業で使用するレジュメのコピーをとっている。まだ時間が早いので、今講師室に居るのは塾長と加奈だけだ。

授業の予習に夢中になっていた加奈の方が異変に気付くのが遅かったようで、塾長は既に異変に気づいていたのか、黙って受付嬢の動向を伺っている。堪りかねた受付嬢が手招きで救いを求めると、それを予期していたのかスムーズな動きで塾長が近づく。

こちらからは姿は見えるが、話している内容までは聞き取れない。見えない相手に対して受付嬢が、必死で何事かを話していることだけが分かる。受付嬢が保留ボタンを押したのを確認して、塾長が声をかける。会話中、受付嬢はなぜか加奈の様子をちらりと伺い見た。

「？」

先程塾長と世間話で話題にした、無言電話なのだろうか？
塾長はこの塾には無言電話なんて、めったにかかってこないと言っていたけれど。

(それに何か話をしていたようだったけれど……？)

もし無言電話なら、受付嬢は相手とどんな話をしたというのか。
それとも、馬鹿げた悪戯を止めるよう諭していたのか。

受付嬢から受話器を任された塾長は、動揺することもなく相手に対応すると、電話を終わらせた。横で見るからにはらはらと成り行きを見守っている受付嬢とは対照的だ。
「さすが年の功」と失礼ながら、加奈は思った。

電話が終わると受付嬢はすぐに塾長に糺すが、人目を気にするような内容なのか塾長は彼女を促し、そっと二人は塾長室に消えた。

(なんだったんだろう。一体……)

ぼうっと塾長室を眺めていると、外から児童の騒ぐ声が聞こえてくる。ガラス壁越しに外を見れば、ランドセルを背負った小学生たちがふざけながら下校している。

時計を見れば午後三時半。
あと一時間で児童がやってくる。
加奈は予習に戻った。

塾生の声が聞こえ、授業開始のベルが鳴る頃には、加奈はもうすっかり通常の仕事モードに戻り、終業の頃にはすっかり忘却していた。

受験を控えた児童の質問に答えていると、すっかり外は暗くなっている。望を保育園に迎えに行く時間が迫り、加奈は帰り支度に追われていた。

「小田切先生、ちょっといいかしら……」

他の職員同様、とうに帰宅していたと思いこんでいた塾長が呼びとめる。白髪をきれいに後ろで結わえた塾長は、学校の先生のように常に職員に「先生」と付ける。全体的に所作が上品なところを、加奈は密かに憧れていたりする。塾にも誰よりも早くに出勤し、誰よりも遅くまで仕事している。教育者として尊敬すべき人物で、ユーモアもある。普段であれば呼びとめられることは、喜ばしいことだ。

だが今は少し焦っていた。一分でも望の迎えが遅れると、延滞料金が発生するのだ。

「何でしょうか？」

言いながら塾長室へ入っても、保育園の時間が気になってそわそわしてしまう加奈。その様子に「終業間際に引き留めてごめんなさいね」と先制されてしまえば、それ以上は何も言えなかった。話を促すと、塾長は声を潜める。周囲にはもう誰も残っていないと言うのに。

「個人的な質問ですので、どうしても話したくないのであれば無理強いはしません。ですが今後のうちの経営にも関わることなので、できれば力を貸して頂きたいの」

あくまで「自発的」に答えることを促しながらも、その目は真剣そのもので問題が複雑であることを臭わせていた。

「お話しを聞かなければ、お答えできませんが……。私に答えられることであれば、もちろんお答えしますよ」

応えられないような質問なんて、頭に全く浮かばなかったが、それでもその顔の真剣さから念の為逃げ道を用意しておく。質問できる許可をもらったと受け取ったのか、塾長は一呼吸置いて、尋ねる。

「今日の午後に、受付に電話がかかって来たことを覚えていますか？」

言われて、そう言えば電話の応対をしていた女の子が妙な雰囲気であったことを思い出した。そう告げると、塾長は本題に入る。

「相手の方は名乗らなかったけれど、内容からうちの塾生の保護者の方だと思うわ。その方がこうお尋ねになったの」

『そちらの塾にいらっしゃる小田切先生のこと、良くない噂を耳にしたんです。旦那さんが酷いアカデミック・ハラメントをして

学生さんを一人死なせたと聞いたのですが。本当ですか？もし本当ならそんな人の関係者に、子どもに教育を受けさせたくありません。今すぐクラスを変更させて下さい』

「そうおっしゃって。それで一旦確認することで、納得して頂いたの」

「……」

飽いた口がふさがらない。
知らされた加奈は酷く狼狽した。想像もしたことのなかった問い。
まさか夫の事で自分が窮地に追い込まれるとは予想だにしていなかった。

「もしそうだとすると、それはあなたには責任がないことは分かっています。
ただ……保護者を納得させる為には、こちらとしても誠意を見せなければ
いけません。大事なお子さんをお預かりしているわけですから」

「……そうですよね」

加奈はどこか他人事のように聞いていた。
この想像を凌駕した展開に、気持ちが追いついていない。
その態度を見て、少し躊躇ってから塾長は言い辛そうに続ける。

「実は……今回が初めてではないんですよ」

少し以前から数件同じ内容の問い合わせがあったのという。
今回の受付嬢の挙動不審な態度は、怪しい電話に怯えたのではなく、
幾度も同じ内容の質問を受けて困っていたからだと説明された。

「いずれにしろ、小田切先生自体に落ち度があるわけではありません。
塾としても、これが理由であなたを解雇しようとは思っていませんよ。
ただ経営者として事実確認をする必要があるんです。今後の対応を考え
なければいけませんから」

塾長は保育園の時間を気にしていたのか、要件を告げるとぼんぼんと加奈の肩を叩いて「はい。お疲れ様」と言って帰宅を促した。魔法が解かれたかのように、我に返ると取り繕うように挨拶をして、加奈は塾長室から退出した。

夫にこの件をどう尋ねればいいのか。
こんなのは中傷に決まっている。
でももし本当だったとしたら、自分はどうすればいいのか。
望にまで影響することはないのか。
その学生の御両親にどう顔向けすればいいのか。

突如訪れた疑惑の種に、加奈はなす術がない。

加奈の勤めている学習塾は、地元ではその独自性で有名な学習塾で、通常の進学コース以外にも、不登校の子どもたちへの特別プログラムも用意していることでマスコミにも広く知れ渡っている塾だ。そのためこんな噂は営業に大いに差し支える可能性があった。塾長はあくまで本当だったとしても加奈には責任はないと言ったが、全国区の塾ではなく、地元の特化した塾である以上、その噂がどれほど致命的であるのかが分からない程、加奈は無神経ではなかった。

時計を見るとまだ予定の迎いの時間に間に合う時間。

それでも心の整理をする為には、時間が必要だと直感が告げている。配慮してくれた塾長には申し訳ないが、加奈には今から保育園に到着するまでの短時間で、いつもの自分に戻れる自信はなかった。

迎えに行く時間は事前に告げてあるが、保育園自体は十時まで開園している。理由が理由なので後ろめたい気持ちを持ちながらも、自分の直観に従って、加奈は保育園に一時間の延長を願い出た。

電話を切って、息を大きく吐く。
正面を見ると、誰もいない受付から携帯電話を握っている自分が、塾の入口に置かれている大鏡に映る。その姿が何とも小さく見えて、心もとない。幸い、今まで一度も遅刻や無理なお願いをしてこなかったことも功を奏したのか、延長はあっさり認めてもらえた。

(これで少しは余裕ができる。一時間の中に気持ちを落ち着けないと)

好きな音楽をかけながらドライブでもして気持ちを落ちつけようと、駐車場へ向かう。
それが最善の策とは我ながら思えなかったが、それくらいしか気を紛らわせる方法が見つからない。早足で入口の自動ドアを通ると、背後から声がした。

「あの、ちょっとお時間頂戴してもいいですか？」

そこには昼に電話に対応した受付嬢天原が立っていた。

(そうかこの娘も、電話の内容を知っているんだ……)

もともと挨拶だけの関係で、あまり話をしてこなかった子だ。
何を意図しているのか、理解できなかった。

天原は遠くの県出身で、大学からこちらへ出てきた短大生だ。
まだ新生で若さにあふれている。その分幼いともいえるが。
染めた髪をゆるく巻いた髪型は、朝に相当のセットする時間を
必要としそうだ。服も事務服しか注意して見たことはなかったが、
今着ている私服はフェミニン系で華奢。
いかにも女の子といったかわいらしい子。
いつもどこか舌足らずな話し方が、俗に言う『癒し系』と印象
づけるらしく、この塾でも男子学生に人気がある。

誰とも話したくない気分の加奈は、正直面倒くさいと感じた。
そもそも話すことなどない。
保育園を理由にすることにした。

「娘の保育園の時間……」

「……は、今一時間延長しましたよね」

嫌みではなく、にっこり笑ってそう言われてしまうと反論できず、
結局加奈は天原と少し離れた喫茶店に行くことになった。
あまり人の耳がないところで話そうと言われ、加奈は一気に緊張する。
先程の電話についての話だったら、何度も電話を受けた天原にその内容を
詳しく聞く必要がある。その際、どうせ話をするなら人気がない場所が
好ましいのは、加奈も同意見だ。
加奈は自ら車を出すことを申し出た。

「あの、旦那さんって、どういう人か聞いても良いですか？」

喫茶店で飲み物を注文し、ウェイトレスが遠くへ行ったのを確認して
から、天原は尋ねた。

「どうって……そんなこと、するような人じゃないと思うわ。
子どもの遊び相手だって喜んでするし、家事も率先してやってくれるわ」

塾長が話した内容は、既に知っていることを前提で答える。
少なくとも、現時点で加奈が思っている事を素直に伝える。
願望も籠り、口調が熱を帯びる。

「そうじゃなくて、加奈さんにとって、どういう旦那さんなんですかあ？
子どもにとって良い人でも、奥さんには酷い旦那さんだっているし。
家事だって、単に自分が好きでやってるだけかもしれないですよ？」

身近にいる人を「どういう人」かを説明するのは、存外難しい。
悪いところと同じくらい、良いところも知っているのだ。
一口で説明するのは難しい。
答えあぐねていると、天原は突然低い落ち着いた声で言った。
いつもの声は演技なのかと、加奈は少しとまどう。

「まさかDVとかモラハラとか、受けていないですよね？」

「ええ？ まさかそんな。急に言われたから、考えていただけ。私にも優しく接してくれる。暴力なんて一度も受けたことないわ。心配しないで」

加奈は慌てて否定する。今の天原の声が、迫力を持っていたのでつい気圧されてしまった。するとまたいつものぼやあとした顔に戻った。

「なんだあ、優しい旦那さんなんですね。安心しました。でも、それって他の人にもですかあ？ 人によって態度が違う人って結構いますし。そういう人って、結構恨みとかかいますよ？」

サービス業の人に対する態度などで、そういう片鱗が分かったと、ご丁寧にアドバイスまでくれる。こんな子どもに何が分かったと、加奈は腹が立った。表情に出さないだけの分別が、まだ自分にあったことに感謝する。

「こんなのただの悪戯よ。最近無言電話が多いし」

「ならいいですけど。何か悩みがあったらいつでも言ってくださいね。私、いつでも相談相手になりますんで。じゃあお先です！」

軽やかに、天原は去っていった。彼女の下宿がこの辺りだと聞いてあえて、歩いて数分で帰ることのできる距離の、この喫茶店を選んだのは正解だったようだ。また車で送ったりしたら、その間気まずくなってしまう。

天原が帰って気が抜けたついでに、時計を確認する。そろそろ保育園に迎えに行く時間だ。加奈はぱんと顔を両手で軽く叩いて、車のエンジンをかける。

顔を母親の顔に戻す。うろたえてはならない。常に娘が安心できる、どっしりとした母親でいなくては。

心とは裏腹に、飲み屋街を楽しそうに闊歩する大学生を見ていると、胸の奥が重くなる。あのくらいの年齢の学生を、夫は死に追いやったのかもしれない。もし電話の内容が真実であるのなら、それはどんなに罪深いことだろう。

そのまま夢を見るかのように、機械的に車を保育園方面へ走らせる。習慣の延長で惰性的に車を運転するが、その目は何も捉えてはいない。いつもの道がやけに冷たく感じる。それでもなんとか、加奈は望を指定時間内に引き取ることが出来た。

家への帰り道で、いつものように望の保育園での話を聞く。いつも望が好きのように保育園での話をするのを、加奈が聞きながら相槌を打つ。今日もいつもと変わらない。そのはずだった。だが。

「ママ、お腹いたいの？」

自分では何とか取り繕っていたつもりだが、望は敏感に母親の異変を感じ取っていたようだ。加奈は思わぬ形で、娘の成長を知った。

「ちよっところら辺が痛いだけ。大丈夫」

そういつて胃の辺りを、指差した。
嘘ではない。
事実加奈は、今日の噂で胃が痛くなりそうだ。

「じゃあ晩御飯はお弁当を買って帰ろうよ」

娘のいじらしい提案に、今の生活を絶対壊させないと加奈は決意する。
小田切は学会で出張していたので、その日は望の提案に甘えさせてもらうことにした。

「今日大学時代の友達から聞いたんだけど、あなたの研究室で自殺した学生さんがいたっていうんだけど、本当なの？」

翌日、望が寝静まったのを確認してから、加奈は出張から帰った小田切に意を決して尋ねた。

事実だけをまず確かめることにする。

風呂上がりでリビングで新聞を読み、リラックスしているのを狙って切り出した。
警戒されないよう、加奈自身も雑誌を読んでいる振りをし、あくまで世間話であることを演出する。

「ああ。一人自殺した学生がいた。僕たちと同級生だったから、覚えているよ」

あっさり和小田切は認めた。本題から切り出さなかった効果があった。核心に少しずつ迫っていくことにする。

「その人はどうして自殺したのか、知っている？」

そこまで来て不振に思ったのか、小田切は読んでいた新聞から目を離し、初めてこちらを向いた。

「……いや。どうしてそんなことに興味を持つんだ？」

「……あなたの研究室でのことだったから、ちょっと気になっただけ。まさかいじめが原因で自殺とかじゃないわよね？」

「そんなわけないだろう。……今日は疲れたからもう寝る」

そういうと読みかけの新聞をテーブルに置いて、小田切は寝室へ向かう。さりげなさを装っていたが、そのタイミングが動揺を表しているようにも感じた。先延ばしにしているのは、また電話がかかってくるかもしれない。塾長とも約束した。

「逃げないで」

「うん？」と逼迫した加奈の声に、小田切は訝しそうにこちらを見る。

「ちゃんと答えて。私、職も信頼も失いそうなんだから……」

今の質問と加奈の言葉の関連性が分からず、言われるがまま小田切はソファに戻る。自分もソファに腰掛けると、加奈はテレビを消して、真剣に今日の昼間に塾であったことを話した。

「……どうして初めから本当のことを話さないんだ？」

「……ごめんなさい。あなたが本当のこと話してくれないと思って」

「僕が嘘をつくとも思ったのか？」

「気づかない内に……ってこともあるじゃない。嘘を吐くとまでは思っていないわ」

「まあいい。確かに自殺した学生はいた。確かに大学や研究室でのいじめが原因ではあるが、そいつが被害者だったわけではない。むしろ加害者だった。それで退学処分を受けたのを逆恨みして、自殺したんだ。……ある意味確かにアカハラで死んだとは言える。それは正しい。だが僕たちが奴に嫌がらせをしていた訳ではない。それが誤って誰かに伝わったのだろう」

「自殺した学生がいたことは事実なのね？ それがどうしてあなたが追い詰めてその人が自殺したみたいな言われ方をしたのかしら？」

「……ひどい誤解だな。まあ事実はそういうことだ。そいつが、ある学生に嫌がらせを繰り返していたのを咎められて、退学処分になった。それからしばらくたって、自殺した。警察が来たときに、同じ研究室のメンバーということで、事情聴取も受けたよ。遺書もあってそこには退学処分になったことを逆恨みするようなことが書いてあったらしい。そんな噂を流すとすれば、そいつの自殺を納得できない関係者としか考えられないな」

「でも、五年も前のことでしょうか？ どうして今になってそんな噂が流れるのかしら？」

「さあな。……とにかくその件に関しては、僕は無実だ。これで分かっただろう？ 誤解は解けたんだし、明日塾長にもそう説明しておいてくれ。大丈夫。誤解だと分かれば塾長も上手く対処してくれるさ」

「……本当に誤解なのね？ 信じていいのね？」

「ああ。心配するな」

加奈は、久しぶりにきちんと夫の目を見て話した気がした。誤解でほっとしたのと、張りつめた気が抜けたので、その晩はぐっすりと安眠できた。

その旨を塾長に伝えると、小田切に尋ねたことを労ってくれた上で、たちの悪い誤解を訂正するよう力になると約束してくれた。塾長と天原しか知らないことらしく、他のスタッフは誰もその話題を知らないようだった。塾長たちの配慮のおかげで職場環境に影響なく仕事を続けられることに、加奈は素直に感謝した。

(これで一段落か)

安堵しつつも、加奈は今度は別のことが気になって仕方ない。

相当な怨みを小田切に抱いている誰か。
なんでも無難にこなす小田切は、だからこそ彼に理不尽に扱われた人間の落胆と怒りは激しくなる。自分もそうだから加奈には、分かるのだ。天原が指摘したことにも、心当たりはないこともない。

事実無根の噂を、妻である加奈の職場にあえて伝える。
そのやり口に、底知れぬ悪意を感じる。
このまま、相手が鞘を納めるとは到底思えなかった。

そしてそれは的中する。

加奈の担当クラスから、他の先生のクラスへの移籍を申し出る生徒が相次いだ。全部不登校生へのプログラムに我が子を通わせている保護者からの申し出だ。あの噂も、不登校生プログラムの履修生を中心に広まったものらしい。最終的に、加奈は不登校生プログラムから外されてしまった。

事情を知らない他の講師陣は、不思議に思って首を捻っている。一度広がった悪評を取り消すのには、思いの他かかりそうだった。

その内に塾生たちにまで噂が広がったようだ。
加奈をあからさまに非難する子はいないが、塾生たちに「先生、大丈夫？」と無垢な瞳で尋ねられるとなんともいえない気持ちになる。生徒自身が学校でいじめにあった経験のある子が多いので、加奈が家で夫にいじめられているのではと心配してくれているのだ。

受付嬢の天原もそうだ。
あの一件以来、噂に関する対応など塾長と共に、尽力してくれている彼女には頭が上がらないが、ことあるごとに本当に家で何も被害にあっていないか尋ねてくるのには、困惑した。

確かに小田切は機嫌が悪いと、無口になる傾向がある。
それでも怒鳴りつけるよりはましだと思ふし、誰だってそんな時はある。被害者のように扱われるのは、耐えられなかった。
腫れ物に触るような扱いは、やはり居心地が悪いものだ。

小田切は大事にするのを嫌がったが、それ以後も問い合わせの電話は思い出したようにかかってくるので、加奈にとっては深刻な問題だった。

そうこうするうちに、加奈を取り巻く環境は悪化していった。
今までの平穏な日々が夢のように崩れていく。
悪夢は始まったばかりだった。

やはり気のせいではない。

マンションの住人と顔を合わせても、黙って会釈をするだけで親しげに話しかけてくるものはいない。遠巻きにこちらを見てひそひそ話をする者たちもいる。

塾にかかって来たあの電話の内容が、ついにマンション内にまで広まっているのかと、加奈は暗澹たる気分になる。

保育園にも容赦なく、その魔の手は迫った。ママ友だと思っていた保護者たちも、妙によそよそしい態度に変貌した。こちらから話しかけても当たり障りのない答えをしては、すぐにその場を離れる。そのくせこちらの様子をじっと観察していたりもする。からりとした関係に、カビが生えたかのような湿り気が生じてきた。

夫に怨みの深い人間がしたことなら、怨みの理由を教えて欲しい。誠心誠意謝るのに。夫の代わりに自分の出来ることがあるのなら、何でもする。切に加奈は願う。あの平穏な日々を取り戻す為ならば、何事をも厭わぬ覚悟はとっくにできている。

それでも敵は姿を見せず、当の本人である小田切に現状を訴えても、逆に、加奈の説明の仕方が悪いせいだと怒られるだけだった。噂では小田切が加害者扱いされているのだから、怒りは当然だが、加奈だって自身に関係のないことで生活を危うくされているのだ。望にまで被害が及んだらどうするのかと、心配で夜も眠れない。

粛々と日常の業務をこなしてはいるが、ともすると崩れ落ちそうになる。望がいなければ、とうに心が折れそうだった。

何よりも夫が加奈の心労を労わるどころか、気持ちを告げる度に苛々するのが悲しかった。職場でも何か問題があるのか、このところ小田切の機嫌がすこぶる悪い。以前から怒ると無視を決め込む小田切は、口数が極端に減った。それでも態度が小田切の苛々する内心を露呈していて、いつ暴発するのかと、加奈は内心びくびくしていた。

孤立無援。

実家から離れたこの地で、加奈はその文字を噛みしめる。週に一度実家に電話するいつもの習慣も苦痛に変わった。ともすると感情が零れそうになる。本音を言えば、ここから逃げ出したい。

それでも楽しそうに保育園に通う望を見ていると、別居を切り出すこともできない。今のところ、望にまでは被害が及んでいないらしいことだけが、唯一の救いなのだ。

それに実家に逃げたところで、その犯人は自分を、小田切の妻を許してくれるのか。また同じことが起こるのではないか。

「はあ」

職場であることも忘れ、大きなため息をついてしまった。
慌てて周りを見回すと、今は授業時間なので他の講師は既に
出ていた。いるのは次の授業の予習をしている加奈だけ。
聞かれなかったとほっとすると、後ろから「どうぞ」と声がする。

「小田切さん、元気出してください。お母さんがそんな顔じゃ、
娘さんだって悲しみますよお」

相変わらず能天気な声で、天原は言うど、手にしていたチョコを
「はい」と渡してきた。
それが妙に勘に触る。
自分の気持ちなど、分からないくせに。

「人の噂も75日って言いますし、直ぐにみんな忘れますよ」

「もともと小田切さんが悪い訳じゃないですし」

「旦那さんも誤解だって言ったのなら、冤罪だったわけだから
堂々としていればいいですよお。それに小田切さんの事
支えてくれてるだから、大丈夫ですよお」

天原なりに考えての発言だとは分かっているが、どうしても
腹が立つのが止められなかった。
前提とされている小田切なんて、自分を責めるばかりだと言うのに。

「適当なこと言わないで！」

思わず声を荒げてしまう。

だがここ数日の出来事に、気持ちが溢れ出してしまう。
ここは職場だと言うのに。
自分の境遇を誰かに理解して欲しい。
加奈は堰を切ったように、感情の赴くままここ数日の家での
様子を語る。言葉が止まらない。
どこかで冷静な自分が、こんなこと他人に話したところで
どうにもなるものではないと警告を鳴らす。
それでもやめられない。

噂は止むどころか、どんどん広まっていること。
生徒に動揺を与えて、生徒にも塾長にも申し訳ないと思っていること。
小田切には支えられるどころか、責められていること。
居場所がなくて辛いと言うこと。

呆気にとられていた天原の顔を見て、「ああ、終わったな」と
加奈は理解した。
最近ではこの職場だけが、一番気が置けない場所だったのに。

妙な噂が来たのは確かにここから。
でも塾長も天原も、事情を知った上で、励ましてくれる。
特別扱いをしないで、普通に接してくれる。
でもこんな場面を見せてしまったら -。
それも変わってしまうのではないか。

「それでいいんですよ」

天原が低く落ち着いた声で言った。

「その気持ちを旦那さんに、ぶつければ」

「……」

「小田切さん、旦那さんの前だと遠慮しているんじゃないですか？
一方だけが我慢する関係は、長くは続きませんよ。時には自分の
気持ちを理解してもらおう努力をしなくては。言わないと分からない
ことって、結構ありますよ」

分かった風な口を。
そう思いつつも、振り返れば加奈はいつも折れていた。
年上の小田切が言うことは正しいのだと最後には謝っていた。

「今だからこそ、必要なことです」

そう微笑む天原は、得体の知れない修羅場をくぐったような
強さがあって説得力があった。

翌日の晩一小田切は客を連れてきた。
スーツをぴしっと着こみ、薄いがきっちりメイクした女性だ。
大学院時代の同級生で、佐々木と名乗った。
ということは、結婚式にも会ったのだろう。あまり覚えていなかったが、出席していたらしい。

二人が来る二時間前に訪問を告げられたので、急いで用意したものの、急ごしらえになってしまい、贅を凝らしたものにはならなかった。もっと早めに教えてくれればいいのにと、喉まで出かかったが客の手前黙らざるをえない。

残り物をフル活用して、何とか体裁だけは整えた。
佐々木は幾つかのおかずを食べられないと言ってまるまる残し、感想は一切言わなかった。

「婚約者に電話したいから携帯貸してくれませんか？ バッテリーが切れちゃって」

当然のように携帯を借りようとする佐々木の態度が、料理を残したことと合わさって何とも非常識に思えた。そもそも今日こそ小田切に本音をぶつけようと思っていたのに、台無しにされたのだ。

「どうして私の携帯を？」

努めて冷静を装ったが、声に怒りが滲み出る。

「僕の携帯や、家の電話だと、妙な誤解を受けるかも知れないじゃないか」

「……」

「ああごめん、気が効かなくて。はい」

小田切が勝手に加奈の携帯電話を貸すと、女は鼻からふっと息を吐き、「じゃあ借りますね」と遠慮なく持って行った。それが嘲笑に聞こえて加奈はやりきれない思いになった。

追い打ちをかけるように、内密の話だからと、小田切は加奈を二階に追いやった。二階で望と遊び相手をしながらも、一階の動向を気にしていると、二人は小田切の書斎に入ったまま出てこない。加奈は惨めな気分になった。

望が遊び疲れて眠った三十分後くらいに、佐々木は帰って行った。呼ぶまで下りてくるなど小田切に言われていたので、待っていたが呼ばれないまま佐々木は帰って行ってしまった。そのドアが閉じられて五分ぐらい経過した後に、ようやく小田切は加奈を呼んだ。その瞳はいつになく冷たい光を宿している。

「今日は恥をかいたよ。本当に気が効かないな。佐々木さんも、きっと呆れていたぞ。俺の評価に関わるんだ」

「あの人が非常識だわ。人の家に来て料理にけちつけて、電話も借りて、礼もしない。挨拶すらしないで帰ったのよ。どうしてそんな人の御機嫌を取らなきゃいけないの！」

「自分の非礼を棚に上げて、随分と偉い身分になったものだな。お前に社会常識がないのを教えてやっているのに」

「常識がないのは、あの人でしょ？ 今何時か分かっているの？」

「大事な話をしていたんだ」

「だったら飲み屋さんですればいいでしょう。直前に連絡もらって準備するこちらの身にもなってよ。迷惑だわ」

「ここは俺の家だぞ。ほとんど俺の給料でやりくりしているくせに偉そうなことを言うな」

「……」

この人はこんなことを言う人だったか。
最近はずいぶん上手くなってはいたけれど、それでも普段は温厚だったのに。
この言葉は想像以上に加奈の心を打ち砕いた。
同時にフラッシュバックのように、過去にひっかかった小田切の行動が思い出される。

今はナーバスになっているだけ。
きっかけは些細なことで、しかも良くあること。
気にするまでもない。
売り言葉に買い言葉。
それ以上でも、それ以下でもない。

暴れ出しそうな心を、懸命に諭す。
そんな加奈の努力を知ってか知らずか、小田切は朝が早いと言って、さっさと寝室に引き上げて行った。

結局その日は、自分の本音を打ち明けるところではなかった。
小田切との関係を根本から見直す必要を、加奈は感じていた。

翌日に塾へ行っても、加奈の気分は晴れなかった。
夫が悪い方へ変わって言っている気がして、環境の変化とあいまって先行きが不安で仕方なかった。

「小田切さん、ちょっとお話があるのですが宜しいですか？」

望を迎えに行くと、年少組を担当している担任の先生が小声で言った。まだ教室で遊んでいる望を気にすると、担任は副担任の若い先生に、しばらく加奈と話をするから遊んでいてと指示した。

雰囲気は職場に不審電話が来た時と似ている。
緊張して、手に変な汗をかく。

(まさか保育園にまで。でも今までの経過からみると、あり得ないことではない)

不安げな顔をいち早く察した担任は、面談室の引き戸を開けると、穏やかな声で椅子を勧める。望の組の担任は、経験豊富な四十代の女性で、頼りになると父兄の間でも評判だった。

「あの、望が何か……？」

「望ちゃんのことではないんです。まずこれをご覧ください」

差し出されたのは一通の封筒。
表の宛名は保育園の名前が書かれ、裏に差出人の名前はなかった。
封筒は、ごく普通の白い無地の封筒だった。

確認するように担任の顔を見ると、静かに促した。

「どうぞ」

封は既に切られているので、簡単に中の紙を引き出せる。
タイプで印字された紙は、これまたコンビニでも売られているよくあるA4用紙だった。

『小田切望ちゃんのお父さんは、浮気をしています。それも仕方ないことです。子育ても家事も、全部お父さんがやっているんですから。私は奥様に態度を改めてもらいたいのです。できないなら、私が望ちゃんを育てます。今後私が園に望ちゃんを送り迎えすることがあるかもしれません。その時は宜しくお願い致します』

「何なのですか、これ？」

一方的に加奈を批判している。
しかも身に覚えのないことばかりだ。
子育ても家事もほとんど全部自分がやっている。
小田切も手伝ってくれるが、気が向いたときにきまぐれにやるだけだ。
先程までの不安から一転、怒りが込み上げてきた。

「こんなの嘘です。私はきちんと家事も子育てもこなしています」

「ええ。それは私どももよく知っています。保育園への送迎もお母さんがきちんとなされていますし、遅刻だって一度もありません」

穏やかに同意をしてもらい、加奈は少しだけ冷静を取り戻す。

「問題は誰がこんなものを送りつけてきたのかということなのです。お尋ねしにくいのですが、……心当たりはありますか？」

誹謗中傷を送りつけてくるような心当たり - 。
そんなの一人しかいない。
小田切の噂を流した人物。
でもその人物の矛先は小田切ではなかったのか。
この書き方では、ただの小田切の浮気相手としか思えない。

「……ないこともないです。ですが、確信はできません」

「お察しします……」

担任は加奈が、混乱した頭を整理する時間をじっくりと待ってくれた。
不安。怒り。言いたいこと。言い辛いこと。
収集が付かない。

しばらく間を置いて、ようやく加奈は口を開いた。

「これはいつ……？」

「つい先程。午後の便で届きました」

「それで、望は大丈夫なんでしょうか？
まるでいつか望を連れ去るみたいなことを書いていますよね。
不審な人が保育園に来たりすることは、今までありませんでしたか？」

急に不安がこみ上げて来て、衝動のままに加奈は矢継ぎ早に担任に質問する。だがそこはベテラン。動じることなく、用意してあった今までの業務日誌や付近の不審者情報を見せて、加奈が心配するようなことは今までなかったことを証明した。

「ただ望ちゃんの安全の為には、しばらく園を休まれた方が良くかと」

「それは同感です。しばらく休ませて頂きます。……申し訳ありませんでした。園にご迷惑をかけて……」

「迷惑だなんてとんでもない。詮索は致しませんが、小田切さんこそお辛い思いをしていらっしゃるのでしょう」

思わず全部話してしまいそうになり、ぐっと堪える。
それ以上に涙が込み上げてきた。
真っ赤になっているだろう鼻を隠すように、ハンカチで押さえると、
「望が待っていますので」と席を立った。

そこへ申し訳なさそうに、この手紙を警察に見せても良いかと聞かれた。
他の園児たちの安全を確保する為に、見回りをお願いしたいのだとか。
「内容が事実無根であることは、ちゃんと言いますから」と強調してくれた
が、そんなことを言わなくても、加奈は同意するつもりだ。
コピーをもらうのを条件に、加奈は承諾した。

「望ちゃんが元気で登園できる日を楽しみに待っています」

望に聞こえないように、小さく担任は言ってくれた。
望は当然明日も登園するつもりで、元気で先生に挨拶している。

帰りの車で、望が無邪気に保育園であったことを聞くのが
辛くて、加奈は涙声にならないよう耐えるのが精一杯だった。

疑い出すときりがない。
昨日までは思いもつかなかったことが、わずか一日でこうも変わるものなのか。

いけないことと知りつつも、欲求に抗えず加奈は小田切の私物をチェックする。するとおかしなことに気付いた。
携帯に、パソコン、机の引き出しに至るまで嚴重に鍵がかけられている。最低限のルールだと遠慮していたので、今まで知らなかった。

(どうということ?)

隠し事をしているのか。
それとも加奈が単純に信用されていないのか?
単に小田切が用心深いだけ?

尽きない疑問を胸に、加奈は昼食の支度をする。
あんな手紙が来た昨日の今日なので、望は当然保育園には行かず、大人しく家で遊んでいる。幸運にも今日は仕事が無い日なので、加奈はゆったりとした時間を、望と過ごしている。

二人で焼きそばを食べていると、突然玄関扉が開き、
小田切が駆けこんできた。

「どうしたの。あなた？」

時ならぬ帰宅に、加奈は驚きを隠せなかった。
いつもなら一旦大学へ出勤した小田切は、八時以降まで帰らないのが常であるのに。

言いたいことが多すぎて、加奈は小田切の突然の行動にどう反応して良いのか分からない。

「お前たち、大丈夫か？何か妙なことが起こったりしてないよな？」

「何？急にどうしたの？別に何も無いわよ。それくらいのことなら、電話でいいのに」

そういいながらも、加奈は久しぶりに小田切が感情を露わにして自分達を心配してくれたことが素直に嬉しかった。だが夫はそのまま娘の方に走り寄り、思い切り抱きしめると、こちらを全く見ようとはしなかった。

「パパ。痛いよ。ふふふふふ」

抱きしめられたまま頬ずりされた望が、擦ったように身を振る。

(そうか……この人が心配なのは望だけなんだ)

加奈の胸がちくりと痛む。小田切の言葉の一つ一つが、どうにも憎らしくてならない。その原因が自分でも分からなくて、苛々する。

「……それで、何かあったの？」

さっきまでの喜びも、みるみる萎み、棘のある聞き方になってしまった。それでも小田切はまったく怯まない。

「ああ、いや別にいいんだ。ちょっと大学で妙なことが続いているな。少し気になっただけだ」

「ふうん……。大学で妙なこと……。ね」

職場の出来事が家庭にまで影響を及ぼすなんて、加奈には例の噂しか考えられない。その背景を、小田切の真意を問い詰めたい。薄々頭をよぎるのは、あの手紙の背後に潜む女の陰。でも直接は聞けなかった。

「家庭にまで影響が出るようなことって何？ まさか前のアカハラ事件の件で、狙われているの？ それで家族まで？」

「大したことじゃない。あの事件を知った奴が、便乗して何かと悪戯を仕掛けているようにね。大学でも妙な嫌がらせが続いているね。家族にまで被害が出ていないか、確認しに戻ったところだ」

(もう被害が出ていると何度も言ったでしょう)

怒りを抑えながら加奈は、心の中で冷静に反論する。

「……本当は、別の理由じゃないの？」

「別の理由？ 他に何があると言うんだ？」

「……」

それ以上は続けられなかった。自分の口からは言えない。全て証拠を握ってから、一気に攻め落としたかった。配偶者の浮気を咎めるには、気取られぬよう証拠を固めて現場を押さえるのが常道だ。

「……別に。ただ他にも理由があるんじゃないかと思っただけ」

「私、こういうの苦手なんですけれど」

「でも悩んでいる女性の助けになるのは、男として当然だろ」

常川が今日このレストランに優奈を誘ったのは、訳がある。小田切の奥さんが夫の浮気に悩んでいるから、相談に乗ってあげる為だ。小田切の奥さんというのが、常川が運営していたサークルのメンバーの一人だったとか。

まめな常川は男女問わず人の相談に乗っているらしく、常にメールの受信を告げる携帯の着信音が鳴り響く。こちらでまだ友人が少ない優奈は少し羨ましくもある。

当然優奈はは、奥さんとの面識がない。加えて苦手な分野の相談ごとだ。有益なアドバイスが出来るとは思えない。一度は断った。しかし常川は引き下がらない。

「人妻と二人きりで会ったら、変な誤解をされるかもしれないだろう？俺はいいけれど、奥さんが可哀そうだ。それともお前は悩める女性を放っておけども言うのか？ 鬼だなお前。そんな子に育てた覚えはないぞ。考え直せ！今ならタダ飯も食える！」

今後の小田切との関係を思うと、心労で気が重い。あくまで居るだけという条件で、優奈は渋々了承する。承諾した以上、常川から絞り取ってやらないと気が進まない。

場所は郊外のこじやれたイタリア料理店で、自転車しかもっていない優奈は、こんな機会でもなければ訪れることのない場所だ。奢らせることを確約させ、優奈はどんな高い料理を注文しようかと知恵を絞る。

常川は妙なところでフェミニストなのだ。研究室でも女子学生に恭しいとも言えるほど柔らかい態度だし、それがまた男子学生の勘に触っているようだ。ただしなぜか優奈は例外なのは言うまでもない。決して青年実業家という外見ではない、どちらかと言えば野性味あふれるといった形容が正しいような常川がそれなりに女子学生からの支持があるのは、この態度が根底にある。それも一種の処世術なのかもしれない。

「でも意外です。常川さん、基本男子学生や先生方に嫌われているのに。小田切先生の奥さんと知り合いだったんですね。小田切先生、嫌がりませんか？」

正直に優奈は言ってみた。あからさまに避けられている常川がいくら鈍感だって、それくらいは気付いているだろう。

「あいつらツンデレなんだよ。基本俺の事大好きだから。ああやって俺の気を引きたがるんだよ」

「はい」

あえて冷たく優奈が言う。

「加奈ちゃん、あ、小田切の奥さんね。……が俺と連絡とっていること
あいつは知らないよ。連絡を取り始めたのだから最近だし」

小田切の奥さんの加奈さんは、常川の後輩に当たるのだがサークルではそれほど話さなかったらしい。結婚式の会場で初めて常川が旦那の関係者と知ったと言っていた。ここに来て最近旦那の帰りが遅くて、素行がおかしい。心配になり、思わず同じ研究室の常川と連絡を取ったというのが、常川の説明だった。

手がけている研究の進行具合によっては、実験で帰りが遅くなることは、十分にありうる。そうでなくても自宅に仕事を持ち帰らない方針であれば、自分の研究室で遅くまで仕事をすることもあるだろう。
しかしここに来て不信に思うのなら、今まではそうではなかったと推測出来る。

研究室内での付き合いも限定されたものだ。
飲み会などは定期的にあるが、毎日のようにあるものではない。
小田切自身の付き合いも考慮するべきだが、それこそ研究室内よりもっと少ないはずだ。あるとしても大きなイベントの時くらいだろう。

「常川さんこそ、普段の素行が怪しいんですから気を付けた方がいいですよ。それこそ加奈さんとの浮気を疑われる可能性大です」

常川と小田切。どちらが浮気しそうかと言えば確実に常川だろう。
小田切はリスクを冒すようなことはしなそうだ。

「ああいう奴ほど浮気をすると、のめり込むんだよ。……おっ。来た来た」

「お待たせしてすみません」

清楚な雰囲気女性がやってきた。
制服を着ておらず、服もラフだがおしゃれに心配りをしたものだ。

「ああ、来たね。久しぶり！好きな物を頼んで。俺のおごりだから」

「あ、いえ、私が呼んだんだから私が払います。えっと……」

「こいつは田中。ぴかぴかの修士1年生」

少し眉尻を下げて訝しそうな顔をする女性。だが自分達が浮気だと勘違いされないようにする為だの、こいつは人脈がないから漏れる心配はないだの、研究室の事を探るにはもう一人いた方が良くなどと説得されて、諦めて自己紹介を始めた。

「私、小田切加奈と申します。小田切がいつもお世話になっております」

加奈は奥さんというよりも、女子大生に見える。ライトブラウンに染め上げた髪をセミロングに切りそろえたのが、細面の顔に良く似合う。耳元に小さく光るピアスも若々しさを演出している。平べったい鼻と少し上向きの唇は、ごくごく平凡な顔立ちだが、きっちりとメイクすることで、清潔感溢れる印象に纏められている。

コーヒーを頼むと、常川が優奈を指して「もっと頼んで良いよ、こいつなんて全く遠慮しない」と言っても、食欲がないと言ってゆるく笑って断った。

一息つくつと、常川は本題に入る。

「……で、どうして小田切が浮気していると思ったの？」

「娘の通っている保育園に、こんな手紙が届いたんです」

差し出された手紙を常川は、何のためらいもなく読む。優奈は遠慮しようとしたが、「お前も読め」と押しつけられたので正直好奇心がないわけでもなかったのもので、渋々従うふりをして読んだ。

「確かに、いかれた愛人の仕業って感じだな」

先に読み終えた常川が、感想を漏らす。それは同感だが、優奈には疑問がいくつかあった。

「でもどうして自宅じゃなくて、保育園に送ったんでしょうかね？普通こういうのって自宅に送るものじゃないですか？……その正妻への牽制という意味で」

「まあ確かにな。保育園経由で、小田切が不倫しているという噂を広めるのが目的か？不特定多数に中傷ビラを巻くよりは効果的だろうからな。で、他に小田切が浮気をしている兆候らしきものはあるのかい？」

「携帯やパソコンにロックをかけるようになりました。それに最近帰りが遅い日が続いているんです。本人はCOEプロジェクトが忙しいと理由を付けているんですが、……本当にそうなんですか？」

「答えてあげたいけれど、俺達小田切とは違うグループに追放された身の上だからなあ」

悪びれもせず常川が答えるので、優奈は慌てて訂正する。

「ちょっと私まで巻き込まないで下さいよ。私は常川さんに言われて仕方なくです。追放されたのは常川さんだけ……ああそうだ！ちょっと待って下さい」

優奈はスマートフォンを慣れた手つきで操作する。
研究室のウェブ画面を呼び出して見せる。山瀬研究室のCOE
プロジェクトと研究室独自のプロジェクトの詳細な日程が示されている。
これは研究室のメンバーに配られたパスワード無くしては、
入れないウェブページだ。
加奈はハンドバックからメモを取り出して、すぐに熱心にメモをとる。

「研究室のプロジェクトには私も参加しているので、思い出したんです」

「早速役に立ったな！やっぱり連れてきて良かった！」

親指を立てて良い笑顔をして見せる常川。
それにうなずいて同意する加奈。
少しだけ優奈は満更でもない気がした。

「小田切先生、確かに遅くまで仕事があるみたいですね」

明るいニュースを口に出したと言うのに、加奈のペンを握る
手は止まり俯いた。常川はその理由を察した。

「固定メンバーが多いな。特に佐々木。ほとんど毎回小田切と
組んでいるな」

常川の言葉に、加奈が敏感に反応する。

「佐々木さんを御存じなんですか？」

「え？ああ。一応あいつもOBだからな。ああ田中、佐々木って
言うのはうちの研究室のOBで、今はCOEの助教やっている
奴だ」

事情に疎い優奈にも、すかさずフォローを入れてくれる。
きめ細かい配慮はありがたいが、何だか話題がきな臭くなってきた。
場をやり過ごす為に、優奈は食事に専念することにした。

「佐々木さんって……どういう人なんですか？」

「気が強い、見栄っ張り女。以上」

失礼な人物紹介を披露すると、常川は加奈の質問の意図に気付いた。
おかげで優奈は、常川の非礼を嗜める機会を失った。

「もしかして、佐々木のこと浮気相手だと思っているの？」

「確信があるわけではないんですけど……はい。疑っています」

「じゃあいいニュース。それはないよ。あいつ今婚約しているもの」

「それは知ってます。婚約者に電話をかける為に、携帯貸したこと

ありますから。でも……」

加奈は何か思い当たる節でもあるらしく、言葉を濁した。

「女の勘、ですか？」

「というか、私が彼女に良くない感情をもっているだけかもしれない……。ただ佐々木さん以外で、思いつく人がいなくて。私が知らないだけかもしれないが」

そう言って、加奈は先日の佐々木の来訪時の態度について、話した。非礼な佐々木を庇うがごとく、加奈を責めた小田切。それに違和感を感じたと。

「うーん、小田切と佐々木かあ。考えにくいと思うけれど。深い関係があるから庇ったわけじゃなくて、学会関係の立場を慮っただけだろう。あいつ態度がでかいせいか、謎の影響力をもっているんだよな。まあ注意しておくよ」

優奈は佐々木と面識がないので、何ともコメントのしようがない。エビグラタンを黙って口に運ぶ。

「佐々木に限らず、もし小田切が誰かと浮気をしていたとしたら、加奈ちゃんはどうするつもりなの？」

「それはまだ……。というか実を言うと、浮気をしているかどうか問題ではないんです。浮気相手が誰かが問題なんです - 」

加奈はここ一連の奇妙な出来事を話した。そして誹謗中傷のネタをばら撒いているのが、小田切の浮気相手ではないかと推測していること。だから今はその犯人探しをしたいということ。

優奈は、研究室に届いた怪文書を思い出した。あれにも佐々木の名前が書いてあった。同一人物の仕業で、それが佐々木のことだとしたら、どうして自分の名前を書く必要がある？

非日常としか思えないそれらの出来事に、不謹慎ながらまたもや高揚していた。我ながら懲りない性格だ。

「小田切本人には、相談してみたの？」

「ええ。もちろんです。でも、事実無根の中傷なんて気にするなどとか。心当たりも全くないと言い張っています」

「じゃあ、奥さんなんだから加奈ちゃんは、それを信じてあげなくちゃ。ここで俺が噂が正しいと言っても、加奈ちゃんは旦那の方を信じるだろ？」

「……」

「……それだけじゃないでしょ？ 加奈ちゃんは人の噂ぐらいで、そこまで考えるほど思慮が浅くない筈だ。何か今までもあったんじゃない？」

「……」

加奈は押し黙ってしまった。ここまで聞いたらプライバシーの侵害だ。優奈は慌てて止めさせようとする。人の家のことなど首を突っ込んでも、火の粉を浴びるだけだ。

「もういいじゃないですか。人様の家のことをあれこれ詮索するのは良くないですよ」

「ありうるかもしれない。そう思っています……」

重苦しい雰囲気のまま加奈は言った。優奈は目を見張った。常川はまだしも、初対面の人間である自分まで家の内情を聞いてしまって良いものなのだろうか。

「込み入った話なら、私はこれで」と優奈が席を外そうとすると、「おい、逃げるな」と常川が袖を掴んで行かせまいとする。気を使っているのか使っていないのか分かったものではない。様子を見て加奈も引きとめる。

「……この際、第三者の方に判断してもらった方が、客観的な物の見方が出来るかもしれません。田中さん聞いては頂けないでしょうか？ 夫の人間性を責めているのではないんです。ただもしそれが本当なら、私のせいなのではないかと……」

当人がそこまで言うのに拒絶はできなかった。つくづく意気地がないと、優奈は不甲斐なく思う。いやそれよりも加奈の様子が気になったのだ。夫が嫌がらせをするかも知れないと考えてしまうような、結婚生活を送っているのかと。

「私たち夫婦は学生結婚なんです」

加奈の回想が始まった。

小田切夫妻は大学在学中に結婚した。小田切が修士2年生、加奈が大学三年生の時だ。

「妊娠していることが分かったので、それをきっかけに結婚したんです。交際期間は1年経つかどうかで、正直戸惑いました。小田切もすぐには返事をしませんでした。最終的には結婚するという結論に達しました。奨学金でなんとか生活している小田切と結婚するのは心配でしたが、幸い私も在宅で翻訳の仕事を見つけることができ、それなりに幸せな毎日を送っていました」

1年ほど実家に帰って里帰り出産した後には、小田切は学会から学術団体の研究員として博士課程に在籍したまま給料をもらえるようになり、加奈も翻訳の仕事に就いた。

「結婚した時点で妊娠3カ月目に入っていたので、こちらにいたのは2カ月あるかないかでした。それで実家で出産して半年ほど実家にいてから、こちらに戻ってきたんです。初めは良かったんです。でもあの子が2歳になったときに……」

突然死んでしまったのだと言う。何の前兆もなく、昼寝をしていて起きないと思ったら、もう息がなかったのだと。

「すぐに医者に見せました。でももう手遅れだと」

ここで加奈が紙ナプキンで鼻をかんだ。知らせを受けた小田切はまず加奈を責めた。ちゃんと見ていたのかと。気が動転していたのなら、無理もない。加奈自身も受け入れられないくらいだ。傍にいなかった小田切はなおさらだと。

だが何日過ぎても小田切は加奈のことを責めた。仕事をしているからだと言った。仕事を辞めさせようとした。

「……お前らのせいでこれまで苦労して来たのに、これでは意味がないじゃないか」

小田切は言うてはいけない禁句を言ってしまった。それは小さな絞り出すような声だったけれど、加奈の耳に届いてしまった。その時目が覚めたという。

「あの人は義務で私たちと家族になったのだと。思い返せば思い当たることはいくつもあったのです」

加奈は続ける。

義実家に行ったときに、子どもがグラスを誤って割ってしまった時。小田切は子どもの怪我よりも、グラスが割ったことで叱責していた。子どもが熱を出した時にも、病院に連れて行ってやれと言うだけで、

自分は仕事があると別の部屋に閉じこもってしまった。
余裕があるときだけ、思い出したように子どもの相手をしてくれる。
それが普通だと思っていた。

でも……。

加奈は自分とすら仕方なく結婚したのではと思うことが、
少なからずあった。それがその時の言葉で思い知らされた。

「……そう。私たちはあなたにとってお荷物だったわけね。
仕方なく結婚したと思っているなら、いつだって離婚してあげるわよ。
今日だって私はちゃんと見ていたんだから。あなたはどうか？
偶にきまぐれに遊び相手をしていただけじゃない。あなたに
そんなこと言う資格なんてないわ」

一気に感情が爆発した。加奈は今まで負い目があったのだ。
仕方なく結婚したのではないかと。
結婚するまでは、それほど真剣にお互いのことを話したことは
なかった。

結婚しても、怖くて本心が聞き出せなかった。
今更実はやむをえずと言われるのが怖くて、その話題を避けてきた。
表立って意見することもなかった。

だからこそ加奈が自分に不満をぶつけるとは想像だにしていなかったの
だろう小田切は、相当驚いた顔をしていた。
その怒りを小田切は、とんでもない方向に解釈した。

「……お前、まさか虐待なんてこと……」

あくまで加奈に責任を負わせようとする。
小田切の本性をみた気がした。
加奈は小田切に平手打ちをすると、その場で号泣した。
娘の急死を悼む気持ちと、小田切の人間性への情けなさで
頭がおかしくなりそうだった。

「出て行って」と喚く加奈に立ち竦む小田切。医師から虐待の
可能性は全くないことを告げられ、ようやく小田切は加奈の剣幕に
押される形で、病室から出ていった。その後も加奈を宥めはしたが、
謝罪の言葉はついぞその口から出ることはなかった。

だから加奈も、その日以来謝罪に類する言葉を発したことはない。
これでやっと小田切と対等の立場に立てた気がした。
力関係で決して負けないことに、力を注いだ。
愛情などはそれ以前の問題で、もはや全く期待していなかった。

当然離婚も考えたが、両実家の両親の説得と、小田切が離婚を
拒否したことで諦めた。離婚調停になると夫の許せない二言だけでは
離婚事由には当たらない。それに経済的にはいつでも離婚できると思い、
先延ばしにしているうちに第二子も生まれ、腐れ縁のようにずるずると
結婚生活を続けている。

派手な喧嘩もなく、表面的には穏やかで幸せな普通の夫婦に見える

らしいと、自嘲気味に加奈は言った。

多かれ少なかれその程度の話は、どこの夫婦にもあるだろうと思ったが、優奈が口を出すことはなかった。相談ごとは傾聴することが大事だ。

「そういう経緯があったから、加奈ちゃんは小田切が嫌がらせとかもやりそうだと思うているんだ」

「嫌がらせをやるというよりは……『他人が嫌がることを自分がしたことを受け入れられないのです。自分の考えと違う人を理解できない。それは自分への自信に根ざしている考えだと思います。自分に自信があること自体は良いことなのですが、例え指摘されても間違っていることが理解できない。理解できないのは自分と考えの違うその人間が悪いと、そう考えてしまう。だから本人が意図していなくても、誰かを追い詰めてしまうことはありうる……そう思います」

優奈は小田切のあの人の良さそうな、丸っこい顔を思い浮かべて、加奈も多少は被害妄想の気があるのではと感じた。小田切との付き合いはごく短いし、夫婦間のことは分からない。それでも加奈がそこまで人格を疑うほどの、性悪な人間には到底思えなかった。

それを差っぴいても本当であれば、語るも涙のエピソードを淡々と感情を交えず、あくまで客観的に評する加奈の話は、真実味がある。

グラタンを完食した優奈は、しっかりと聞く体制になる。常川はもともと早食いなので、じっくり聞きながらも箸を持つ手は休めず、こちらもほぼ完食。紅茶しか頼んでいない加奈だけが、そっと湯を自分のカップに継ぎ足す。

ここで一旦紅茶で喉を潤すと、加奈は回想を続ける。

感想は全て話し終えてからと、決めているようなので、優奈と常川はそれに従い、余計な口は挟まない。

次の話は、小田切の性格を表すエピソードだった。

「綾子。久しぶりだな」

そういつて小田切に声を掛けられた女性は茫然としていた。

加奈を隣に、親しく声をかける小田切が言葉を並べるのを途中で遮ると、女は冷たい目でこう言った。

「良く声がかけられたものね。あんたのせいで、どれだけ私が傷ついたのか分かっているの？ それで今度は嫁自慢？最悪。全然変わってないよ」

加奈は絶句した。そう言った女性は小ざっぱりとした身なりの、しっかりとした印象の女性で、その話し方から出鱈目を言っているとは思えなかった。

話の流れからして、昔付き合っていた女性だと加奈は推測した。そうだとしたら、結婚したばかりの妻に紹介するのは少し無神経ではないか。

さらに啞然としたことは、小田切の返した言葉だ。

「そんな昔のこといつまでもしつこく気にするなよ。だからお前ふられるんだよ」

そういつてへらっと笑った。

だがその眼光は明らかに、目の前の女性を下に見る侮蔑に満ちた光を帯びていた。

「あんたが私にしたことを、奥さんの前で全部言ってもいいのね？」

小田切の許可を待つつもりなど初めからなかったのか、女はつらつらと小田切にされた仕打ちを語り始める。

途端に形勢不利と見たのか、小田切は何一つ言い返しもせず、加奈の手を引いて彼女から逃げ出した。女が追ってくることはなかったが、逃げ出す時に言った言葉を今でも加奈は覚えている。

「あんたもそのうち分かるわよ」

その声に狂気はなく、押し殺した気持ちが込められていた。人通りの多い商店街まで来て小田切はまだ辺りを気にしていた。女が自分の罪状を読みあげている時にも、傍に知り合いがいないかばかりを気にしていた。

加奈はまだショックが大きかった。自分の夫が一人の人にあれほど怨まれるようなことをした。あの女がいつも監視している気がして怖くなった。

「あの人、どうしてあんなにあなたのこと怨んでいるの？」

そう聞くと、真剣な声で小田切は言った。

「被害妄想じゃないか。いちいち覚えていないよ」

第一子が亡くなった時、一瞬この女の呪いではないかと思った程だ。

それぐらいインパクトがあった。小田切の過去よりも、自分を怨んでいる人を知ってもなお正面から向き合わず、馬鹿にして素知らぬふりをするその態度に恐怖を覚えた。

小田切が過去に撒き散らした怨嗟の種に、いつ自分が巻き込まれるのかと、しばらくは戦々恐々と暮らしていた。それでも二人きりの時には相応に御機嫌をとり、暴言や無視をするということにはなかった。外から見れば、ごく普通の夫婦生活。

だがこの事件と第一子を失った時点で、溝は確実に広がっていった。

「あの一人目の子どもが亡くなってから小田切は、子どもへの接し方は変えてくれました。最近は本当に二人目の子どもに愛情を注いでいます。だから子どもも懐いている。子どもが望むのなら結婚を続けようと思っはいるのですが……。正直一緒にやっていく自信がなくなってきました。

今になっても、これほど誰かに怨まれてもしらをきり通して済ませようとしているのであれば。そして、誰かと一緒になって嫌がらせをして自殺にまで追い込んだという噂が中傷でなく本当のことで、それでも本気で自分の愚行を自覚していないというのであれば、価値観が違いすぎます。子どもに悪影響なので、即刻離婚します。だから真実が知りたいのです」

加奈の回想が終わった。

夫婦で築き上げていく生活には、時には風雨も入れば、地鳴りもある。屋台骨さえしっかりしていれば乗り越えられるものだ。真っ直ぐな柱だけで建てられた生活こそ、面白味がない。それでも小田切家は、柱の内部から侵食されてきている。優奈はそんな印象を持った。

ここまで話し終えて、加奈が化粧室に行く為に席を立ったので、優奈は例の怪文書について、加奈に教えるべきではないかと常川に打診してみる。

何かヒントになるような有益な情報と言えば、それくらいしかない。手紙の差出人と、保育園に手紙を送った人物、ひいては加奈の職場へ噂を流したのが同一人物の可能性は大いにある。

「……ここまで来てしまったら仕方がないだろうな。だが……」

いつになく歯切れが悪い。

「学校だけでなく、自宅や奥さんの職場にまで迷惑をかけるなんて、普通じゃないですよ。私、あの怪文書の事言ってもいいですよ？」

「……そうだな」

はっきりしない常川に発破をかけていると、加奈が戻って来た。

これ以上悲しませるのも辛かったが、加奈は真実を知りたがっている。優奈はなるべく加奈を傷つけないように配慮しながら、小田切と佐々木を名指しする怪文書が届いたことを話した。常川は黙ったままだ。

加奈は目を丸くしてから、ため息を吐いた。大学で嫌なことがあったと小田切から聞いていたけれど、理由が分かってほっとしたと、疲れた顔で言った。

「それで、本当に自殺した人と小田切には何の関係もなかったんですか？」

「……それは小田切の口から聞かないと意味がない。少なくとも死人は出た。それも一人じゃない。それが小田切と関係があるのかは、本人に聞かないとな」

5年前のアカハラ事件については、優奈も断片的にしか知らない。怪文書として届いたアカハラ事件の概要も、ちらりと読んだだけ。常川も進んで話そうとはしないから、今日の加奈の話で、初めて大枠の内容が分かったくらいだ。

小田切を憎んでいる人物の主張が事実とすると、

小田切と佐々木を含む院生たちが5年前に、一人の女子院生に嫌がらせの限りをした挙句、一人の院生の仕業に仕立て退学処分にした。その学生はそれを苦に自殺したことになる。

にわかには信じられない内容だ。
今の穏やかな研究室に、そんな時代があったなんて、未だに想像できない。
しかも一人ではないのであれば……。

「もっと死者がいるということですか？」

裏返った声で驚く優奈に、しっと口止めする
常川。周囲の客が一瞬会話を辞めて、こちらをみる。

「……これ以上は俺も言えない」

「知っているのなら、もったいぶらないで教えて下さいよ」

「その時、俺は休学していたからな。ほとんど事情を知らんのよ」

そう言えばこの人は限界まで休学しまくっていた。
いなかったほうが多いのだ。

「つかえない人ですね。間が悪すぎます」

デザートのパフェを運びながら、優奈が罵る。
途端に、常川がパフェのグラスを自分の方に引き寄せようとして、
取り合いになる。
それが目に入っていないのか、加奈はため息交じりで話を続ける。

「小田切は5年前の事件には、自殺した学生が一人でしたことで、
自分はそれを諫めただけだと繰り返すだけなんです。もう亡くなった
方から事情を聞く訳にもいきませんし。」

少し考えてから、小田切は慎重に言葉を選んで言った。

「5年前に自殺した人間の他に、もう一人死者がいるはずだと
旦那に聞いてみて。もしかしたら思い出すかもな」

加奈は真剣な顔でそれをメモをする。

「でもなあ。知らない方が良いつてこともある……」

「覚悟は出来てます」

「まあ、無理はしないように。何か不審なことがあったら、
俺にも電話して。これでも顔は広いんだ」

「あ、えっと私も協力します。できることなら……」

優奈の言葉はいかにも付け足したようで格好悪いが、嬉しそうに加奈は微笑んでくれた。

一段落すると加奈は、すっきりした顔で、手帳をハンドバックに詰め込むと娘を保育園に迎えに行く時間なので、今日はこの辺でと言った。

「それじゃあ、話を聞いてくれてありがとうございました！」

そう締めくくると、加奈は来た時よりも明るい顔で帰って行った。多少は役に立てたようだと、優奈は胸をなでおろす。こちらが示した情報は、「5年前に自殺した学生が一人、何らかの理由で亡くなった学生が一人いたこと」、「小田切と佐々木を名指しする怪文書が研究室宛てに届いたこと」と「小田切の帰りが遅いのはプロジェクトの仕事の為だが、なぜか佐々木がいつも組んでいること」だけ。

後は加奈が夫に聞きだす手腕にかかっている。男女関係に疎い優奈は、不思議に思った。

「小田切先生も、初めから奥さんと腹を割って、話合えば良かったことかも知れませんね」

誤魔化そうとするから、後から檻褸が出て、新たな疑惑を呼ぶ。悪循環だ。

「信頼してほしい相手だからこそ、言えないこともある。お前にはまだ早いかな。彼氏いなそうだな」

優奈は反論しようとしたが、事実なので言葉に詰まった。学部時代から付き合っている人がいると言おうとしたが、今更嘘をつくのもあまりに自分が悲しいので「常川さんだけには言われたくない」と言い返すに止めておいた。

「望の発作が起きて、薬を飲んでも中々良くならないの」

常川達と話し終えた後、車で義両親の元へ向かった加奈は、真っ青になった。

夫の愛人らしき人物からの怪文書が保育園に届いて以降、望は保育園を休んでいた。小田切は毎日出勤するので、用事がある時には、義両親に預けさせてもらうことにした。

理由をまだ小田切には打ち明けていないので、義両親へは今日は保育園が無い日だが、用事があるので預かってくれないかと頼んだら二つ返事で引き受けてくれた。

おかげで常川達に相談もでき、情報とアドバイスをもらえた。しかしその引き換えがこれでは……。

一旦駐車したコンビニの駐車場で、加奈は行きつけの病院の名前と場所を告げてそこに望を連れていくよう頼んだ後、急いで病院に直行した。

病院へ着いた時には、既に望の処置は終わったところだった。駐車場で義両親の車へ向かう望が見える。義父と手を繋いで、きちんと自分の足で歩いている。

「望……！」

駆けよって抱きしめようとする、その間を小田切が遮った。

「何をやってたんだ！」

義両親から連絡を受けた小田切の方が、先に病院に着いていた。すぐに加奈から、望を引き離すと、怒りに満ちた眼で睨んだ。

「用事ってなんだ？」

常川達と小田切の浮気や過去の事件について、相談していたとは義両親の手前言えず、加奈は黙り込んでしまう。それを疾しいことがあるから答えられないと捉えた小田切は、感情が高ぶる。

「子どもを放っておいて、遊びに行っていたのか？」

「違う！大事な用事があったの！子どもを連れていけるような場所じゃなかったし」

「どこだ？職場じゃないよな？職場には今連絡して、今日は勤務日

ではないことを確認したよ。だったらどこだ？なぜ保育園に預けていないんだ？」

一方的に批判されるのに腹が立って、加奈もさすがに反論する。

「……あなたの浮気相談よ。毎日佐々木さんと遅くまで実験している時間はあるのに、私が悩んでいることには耳も貸さないで！保育園なんか当分行けないわよ！あなたの愛人らしい人が出した、妙な手紙のせいでね！お義父さんとお義母さんの手前だから黙っていたけれど、もうたくさん！あなたが私と望の人生を滅茶苦茶にしているの。いい加減気付いてよ！」

言うだけ言うと、加奈は保育園に届いた手紙を、義両親に渡した。小田切も「愛人」の言葉に気がかりの事があるのか、一緒に文面を見ている。

「満夫これは……？」

義両親にはさすがに動揺が走ったが、小田切はそれをくしゃくしゃに丸めた。

「また嫌がらせとでも言うのか？」

「何よ。……何なのよ、その目は」

「言い訳はいい！いくら最近物騒だからと言って、誰でも彼でも疑うのはどうかと思うぞ。望まで人間不信になったらどうするんだ！」

「私はただ望が心配で……。それ以上に『望まで』って何？私が人間不信で望に悪影響だって言うの？」

「最近のお前は異常だよ。昔のことをしつこく穿り返して」

「……」

言葉が全く伝わらない。意味をなしているはずなのに、加奈と小田切との間には決定的な断層がある。

そのまま小田切は自分の車に望を乗せると、義両親の家に帰って行った。独り家に帰り、加奈は心細さと怒りと、無力感の混じった気持ちを持って余す。気分の高揚が収まらず、ソファに突っ伏した。

(私がおかしいのだろうか？)

もう自分を含めて誰を信じていいのか、加奈には分からなかった。

「本当なんですか？」

加奈は受話器を取り落としそうになった。
時刻は午後八時。
その時加奈は一人で夕食をとって、塾で生徒から返された答案を採点していた。

望が義実家で発作を起こして既に一週間が立っていたが、未だ小田切は加奈を許す気持ちが収まることはなく、小田切が遅い時は義母の家に預けられていた。

心配している割には、小田切の帰りが遅い日が続いた。
帰宅時に受けた電話と話している時に、漏れ聞こえた声から、相手が佐々木であることがすぐに分かった。

尋ねてもはぐらかすので、悪いとは思いながらも携帯電話の画面を盗み見した。だがやはりロックがかかっている、中身を見ることはできない。悶々としたまま、惰性で日々を送っていた。

その電話が鳴ったのはそんなときだった。
この頃は無言電話も、なぜかあまり鳴らなくなっていたのと、連日の出来事に気を取られていて、特に躊躇しないで電話に出た。

「あなたの旦那さんは、人殺しです」

相手の第一声がそれだった。
相手の声は確かに女の声だったが、複数の女の声を切り貼りしたような統一感の欠けたものだった。
驚いたものの、すぐにあの噂と結びついた。
冷静に対処して、可能なら噂を消さなくては。

「失礼ですが、どちらさまでしょうか？ おかけ間違いでは……」

加奈の声に被せるように、電話の相手は言った。

「あなたも殺されますよ」

ガチャ。ツーツー。

もう限界だった。
加奈は小田切に電話した。
仕事を邪魔してはいけないといつもは遠慮しているが、気にしてなどいられなかった。

「あなた、私。今変な電話があつて……」

「今大事な話をしているところなんだ。いつもの無言電話か？」

周囲に人がいるのか、あくまで表面上は愛想良く答えるが、不機嫌な気持ちが滲み出ている。いつもは完璧なまでに良い人を演じている小田切にしては珍しい。

「違うの。あなたのこと、『人殺し』だって……」

それを聞いた途端、小田切の声が荒いものになった。

「そんなわけないだろう」

「……それは分かっている。でも変な電話が自宅まで来るなんて、私怖くて」

恐怖を訴えるが、受話器の向こうからはざわざわと周囲の音が妙に聞こえる。小田切が受話器を耳から話しているのか。小さな声も聞こえる。

「もしもし、ちゃんと聞いている？ 私もう怖くて……」

「君の仕事はつまらない噂を消すことだろう。ちゃんと毅然とした態度で噂を否定したんだろうな？」

「それは……」

「君は一児の母親だぞ。しっかりしてくれないと困る」

あやすような声を出す。
明らかに周囲に会話を聞かれていることを意識している。

(ごめん、遅れちゃって)

冷静な声が受話器越しに聞こえる。
あの女の声だ。

(やっぱり一緒に居るんだ)

この瞬間、加奈の心の中で小田切の存在が劇的に変わった。

思い出は浪費した時間。
浮気は取引材料へと。

その日小田切が帰宅すると、応接間ではしゃいでアニメのビデオを見ている望の傍で、全く内容が目に入っていないかのように放心している加奈が座っていた。リビングを照らす明るい光とは対照的に、加奈の座るテーブルには、豆電球しか付いていない。

「何をしているんだ。電気も付けずに」

「これ……何？」

応接間の机の上に置かれた封筒は、今朝大学に送られてきたものと全く同じだ。まさかと中を検めると、やはり同じものが入っていた。差出人不明の封筒は、あれから不定期に郵送されてきており、なぜか学生の研究室宛てに封筒が届くので、同封されている文書が学生に見られているのではないかと、毎回冷や汗をかく。文書の内容は送って来る度に、内容がより細かく、小田切の罪を暴いていく。今加奈が手にしているのは、最新の文書と全く同じ内容。その内容は5年前の小田切の罪を詳述してあった。

「こんなもの嫌がらせだ。気にするなと言っただろ」

声を荒げる父親に、娘の望が怯え出した。

「どうしたの？ 喧嘩はだめええ」

「ああ、ごめん、ごめん。パパが悪かったね。ごめんね」

最近はずっかり娘に甘くなった小田切は、すぐに態度を変えた。だが今日は加奈の、勘に触るだけだった。

「これは本当なのかどうかだけでも、答えて頂戴」

内容は土岐等あかりに対するアカデミック・ハラスメントについて。その後の大学側との交渉の経緯と、その結果一人の院生が罪を全て被ったことが淡々と事務的に書かれていた。どこかの機関へ提出する為に、経緯を纏めたものようだ。極力主観は排してあるが、その分静かな怒りが感じられる。

これが塾で問い合わせが合った内容かと、加奈は隅から隅まで読んだ。読み進めるにつれて、保護者の気持ちが共感できる。この内容が広まっていたのだとしたら、加奈を恐れる気持ちが分かった。

「違う。前にも言っただろうこいつはひどい暴力事件を起こして退学したのを、逆恨みして自殺しただけだ。私たちはただこいつの行動を諷めただけだ」

「それじゃあ、どうしてこの人はあなたたちの名前を書いているの？ やったことだって細かく書いてあるわ。あなたが女子学生にした

ことは、無視、暴言、実験結果の横どり、集団での吊るし上げと書いてあるけれど。まさか本当のことなの？ この女子学生はどうなったの？ この人まで亡くなったんじゃないでしょうね？」

「落ち着いてくれよ。たちの悪いはずだと言っているだろう。嫌がらせの為にはいくらだってエネルギーをつぎ込む暇人だっているんだ。ほら、望だって心配しているじゃないか……」

こんなときにまで、娘をダシに使うところも卑劣だと加奈の怒りは増すばかりだ。

「まま、喧嘩だめ」

裾を引っ張る望。愛らしさと不憫さで泣けてくる。だが今は落ち込んでいる場合ではない。

「望、今大切な話をしているの。ちょっと待ってね」

望の為に、新しいアニメをつけると、それを見るように言った。

「ごまかさないで。……この女の人はどうなったの？」

「知らない。入院している場所へ一度見舞いに行っただけだ」

「入院……。入院させるようなことをしたの？」

「その人はもともと体が弱かったんだ。だから私たちのせいではない」

「それじゃあ、体の弱い人に嫌がらせをしていたの？」

絶句する。

「そもそも嫌がらせなどしていない。見舞いに行ったのがその証拠だ」

「そんなの何の証拠にもならない！ 今すぐこの人たちに謝りに行きましょう。死んだ人は無理でも御遺族の人たちの前へ引きずってでもあなたを連れて行く。土下座して謝罪してもらおうわ」

「僕は悪いことなど何もしていない。こんなはずらを真に受けて行く必要などない。家族よりもこんな怪文書の方をお前は信じるのか。それにどうして僕がこんな逆恨みを受けていると思うんだ。お前たちを食わせていかなければならないから、嫌なことでも我慢して引き受けてきたからじゃないか。僕の苦勞がお前に分かるか」

「……あなたそれ本気で言っているの？ 私たちがいたから人を殺すようなことを平気でやったって。……もう無理。あなたはそうやって一生自分の罪から目をそむければいい。でも私たちまで巻き込まないで」

加奈は望を連れて、家を小田切家を出ることを今度こそ決意した。

加奈はともかく、望には愛情があった小田切は、親権だけは頑として譲ろうとはしなかった。幼子の場合、余程の過失がない限り、子どもは母親が親権を持つことになる。小田切は加奈が虐待をしている可能性があると言い張り、無理やりにでも連れて行こうとした。

「お前は虐待している可能性があるからな。望の将来の為にも、俺は絶対に親権をもらう」

「濡れ衣も大概にして。あなたみたいな卑怯で陰険な人の下に、望を預けることなんてできない。殺されてしまう」

いつもは脅したり賺したりして、なんとか加奈を丸めこむ小田切だが、ここまで不満と疑惑が入り混じった加奈を、誤魔化すことはできない。結局「親権は絶対に譲れない」と言い残して、その日は家を後にした。実家にでも寄るのだろう。

息子に甘い義両親からの干渉が、予測されたが、それもどうでも良いことだ。訳が分からずぼかんとしている望を抱きしめて、加奈は心が軽くなったのを感じた。

(小田切から離れれば、普通の生活に戻れる)

それこそが加奈の願いだった。

別居して一週間。小田切がいなくても、平凡な毎日が続いていた。いたずら電話も治まった。塾への告げ口電話もない。保育園にもあれ以降、異変は起こっていないようだ。それでも警戒して、望を保育園に行かせていない。

小田切の言い分を鵜呑みにしている義両親は、頻繁に電話をかけて望と会わせて欲しいと懇願する。以前と比べて何かと気を遣うようになった義母だが、息子の言い訳を鵜呑みにして、様々な理由を並べ立てては、復縁を迫る。これにはうんざりしたが、望が会いたがるので止めるわけにもいかない。

小田切が加奈と顔を合わせるのを避けているので、望を義両親に預けて仕事に向かう状態が続いている。父親不在で不安になっている望をこれ以上傷つけたくなかった。小田切が加奈と顔を合わせないのは徹底していて、自分の私物も、加奈がいなくて、こっそり取りにきているようだ。そんな子どもっぽい態度にも、愛想が尽きてくる。

ただ来るべきものが来ただけ。加奈はむしろ気が楽になった。これからは普通に返れる。

その矢先のことだった。

一望が姿を消した。

「そろそろ奥さんも怒りだすころじゃないの？」

珍しく佐々木が、人の家庭に気を回す。

「気にしないでくれ。それよりも、早くあの男を見つけないと……」

その日も小田切は、佐々木と共に元営業マンを探して、唯一の手がかりであるスーパーの駐車場で張り込みをしていた。小田切は手にしている名刺を眺めるが、そこには会社の所在地と電話番号、そして「菜取晴人」と名前が書いてあるだけ。やはり手掛かりが少なすぎる。

大学との取引を生業とする業者の営業マンであった彼は、その融通の利かなさから、小田切のクレームによって解雇されてしまった。小田切を怨むには十分な理由を持つ男である。同時に、不正取引の内情を知る人間でもある。

不審な手紙を受け取ったのが二週間前。

5年前の事件をSNSに晒すなど、到底受け入れられない小田切は、相手がゆすりのネタとしている、不正経理の証拠を握りつぶそうと画策している。

気弱だった営業マンは、杓子定規が故に、上手く小田切に便宜を図ることができなかった。彼が首を切られる可能性があることを承知の上で引導を渡したのは、確かに小田切だ。便宜の図り方が要領悪くて、本社の方にクレームを入れた。

前任者と違って、こちらの意をくむのが下手な男だった。要領が悪い割に妙な正義感があるのも、こちらの痛む胸を見透かしているようで、腹ただしさが増した。

不正経理が露見すれば、業者にも税金の関係上、何らかの制裁が下されるはず。証拠の隠滅はたやすいと思っていた。

だが一度大学側に申告したものを取り消すことは出来ない上に、業者側が言うには手元にある書類の改ざんは可能だが、もし元社員がコピーやスキャンしていたら、それはもう手の施しようが無いと言われた。例えば追求されてもあくまで担当者が独断でやったことと、しらをきるつもりなのが透けて見えた。

顧客に向かってその態度は何かと言うと、新たな担当者は言った。最近是不正経理に対する目も厳しくなってきた。リスクを負ってまでも大学側に恭順を示すか、不正は絶対に手を貸さないという方針の、どちらに組するかを明確にするべきだと議題にあがった。業者としても不正経理に加担していたと言う評判はマイナスになりうるのだ。世の中、金に貪欲な者ばかりではない。リスクよりも安定を求める人間の方がはるかに多いのだ。

新たな社の方針は、きっぱりと不正経理から手を引く路線。会社のイメージダウンをさせるわけにはいかない。新たな担当者は、過去の経緯を全て知った上で、今後は以前のような便宜は図れないと低姿勢ながらも、はっきりと宣告した。

その目が自分を蔑んでいるようで、気に入らない。
前任者は不服を言いながらも便宜を図ろうと努力はした分、
可愛げがある。
そこで思い出したのが、前任者の言っていた、最後の言葉。

「先生のうちの近くのスーパー、僕の実家の近くにあるんですよ。
よく利用しています」

それはしっかり覚えている。

だからこそ小田切は毎日のように、特段用事もないのに、
そのスーパーに立ち寄っている。郊外型の大きなスーパーで、
駐車場にも何百台も車を駐車することが出来る。
車内で入口を監視するのが、最近の日課となって来た。

以前送られてきた不正経理の証拠。
明らかに原本をコピーしたものだった。
業者が自身で自分の不正を暴露することはありません。
やはりその業者が持っていると考えるのが、自然だ。

佐々木も名を上げられ、故意でなかったせよ、いつ捕まるのか
分からない状態で、何とか前任者に告発だけはやめさせてもらうため、
付き添っている。弁明したいことが一杯あるのだろう。

5年前のハラスメント事件にも二人とも関わっているのです、最終的には
それを暴露されてもいいのではと相談したりもしている。
もちろん佐々木は常にその暴露だけは反対している。
今でも自分が悪いとはみじんも考えていないと、明言している。

ともあれ2つの用事が交錯して、二人はここ最近ほぼ毎日のように、
共に行動していた。

プロジェクトの実験を形だけ進めては、小田切は佐々木と毎日不正経理
の証拠を持って逃げた元営業社員を探しまわった。もう退職したので、
会社に行っても、会うことは叶わない。
人事に行っても、プライバシーを理由に、実家の住所までは
教えてもらえない。
今二人に残された証拠は、最後の言葉。
実家住まいで、最寄りのスーパーが同じであること。
それに全てを賭けるしかない。
何がなんでも元営業マンを見つけて説得する必要がある。

大学での仕事は遅くとも6時には終わる。

その後の時間を搜索に当てた。小田切宅の近所であるし、帰宅には
それほど困らない。稀に近所の顔見知りの人に会い、好奇の眼差しを
向けられたりもしたが、気にしている場合ではない。

不正経理の容疑が成立してしまえば、刑事罰を受けてしまう。
二人とも必死だった。

だからこそ終業後の為、共に外食をしたり、スーパー近くで
近隣の住民に目撃されるというような外聞の悪いことにも、
耐えているのだ。
全ては逮捕を免れ、平穏な家内安全を実現する為。

それなのに一。

小田切の意志に逆らうかのように、妻は小田切の過去の罪を責めるような
言動ばかりする。加えて、娘の望への態度も気にかかる。
一人目の子どもの時の疑惑が再度持ち上がる。
そんな自身の行動を省みず、最近では佐々木との浮気までをも示唆
してくる妻には愛情が冷えつつある。
こちらの意志も分からずに、ただ自分の意思を押しつける様子に

小田切自身も限界だった。

こうなる要因は前から燻っていたと、妻は言う。
小田切は全く理解できない。
一人目の子どもが亡くなったのも。
最近の怪異も。
自分はいつだって被害者だったのに。
別居が決まってなお、小田切は分からない。
妻が変わってしまった理由が。

その日、加奈は塾に勤務している間、望を義両親の実家に預けていた。保育園からは不審なことは何も起きていないと聞かされているが、それでも油断はできない。小田切と別居する直前まで、変事は続いたのだ。

小田切が加奈を疑うように、加奈も小田切の人間性を疑っている。望を会わせるときは、必ず義両親も同席している時間にしか会わせて来なかった。

小田切は自分を否定する加奈に、会おうとはしない。だから義両親宅で、小田切が加奈と会う為には、加奈は席を外さないといけない。会いたいなら、本来小田切が折れるべきなのだが、そこら辺は望の気持ちを尊重した。

授業が終わり、講師室で一息つく。コーヒーを飲んでしていると、携帯のバイブが鳴り、PCメールを受信する。加奈はPCメールも携帯に転送する設定にしているので、セールスメールも合わせて、頻繁に鳴り響く。またセールスカとうんざりしながらチェックすると、小田切からだった。

『望はこのまま引き取る』

こんなのは小田切らしくない。少し調べれば、例え親権者でも別居中の相手の元に居る子どもを無断で連れ去れば犯罪になることくらい分かるはずだ。それほどまでに追い詰めてしまったのか。

すぐに小田切の携帯に、電話をかける。

「どういうこと？ 望をあなたが引き取るって？」

「……今まで望と十分一緒に居ただろう。母親だからと言って、勝手に望を連れて行ったが、虐待される可能性を考えてこちらで預かることにした」

「そんな！勝手にそんなことをしないで！これからのことは話しあいでも決めることにしたでしょう！」

「とにかくこちらで預かる。居場所は分かっているのだから、面会くらいは許可してやる。それじゃあ」

一方的に話し終えると、小田切は電話を切ってしまった。

義実家に預けるときに、その不安が皆無だった訳ではない。万が一に備えてネットで調べもした。

強引な子どもとの同居は、裁判の心証が悪くなる。それでも年数が経過すれば、養育実績となり、親権を争う時に不利になる可能性が無きにしも非ず。

確かそう書いてあったはず。
だとすると……。

(みすみす見逃すと、絶対に後悔することになる！)

頭よりも体が動いた。

加奈は荷物を持って、ヒールの踵が痛むのも構わず
車に向かって走りだした。

その日小田切は少し緊張していた。
望を加奈から、引き離す。
その為には多少強引な手も必要だった、

加奈は二人きりでは会わせてもらえないが、両親と同席なら許可してくれる。そこについて、望を連れだし、そのままこちらに引き戻す計画だ。養育実績を創り出す為なら、多少の強引な手段も辞さない構えだ。大事な娘が虐待されるかもしれない。そう考えればこれは緊急避難的措置とも言える。

居場所を伝えれば、大事にはならないはず。

おそらく怒った加奈から、電話がかかってくるだろう。
煩わしいが、ここできちんと話をつけないと誘拐罪に問われかねない。
緊張感を漂わせながら仕事をするが、なかなか捗らない。

ルルルルルル。

予想通り電話がかかってくる。
出てみると、案の定加奈からだった。
あらかじめ考えておいた科白を伝えると、すぐに電話を切る。
通話を終えると、今までの寂しかった気持ちが少しだけ晴れた気がした。

そろそろ両親が、望をこちら側に引き取ったことを知らせてくれる頃。
望を長女の二の舞にはさせない。

ルルルルルル。

携帯の着信音が鳴り響き、小田切は待ってましたと画面を確認する。
相手はやはり両親からだった。
望を車に乗せて、ひとまず小田切の祖母の住む家へ連れて行く計画だったから、その報告だろう。
望を祖母宅まで移動させたら、連絡をもらう約束だった。
まずは第一段階はクリアしたなど、ほっとしながら受話ボタンを押す。

「大変なの。ごめんなさい。私が買い物しようとしたばかりに……」

慌てふためく母の声。
状況が分からない。
受話器の向こうから、父が「俺が代わりに話すよ」と母に話す声がする。

「一体どうしたんだよ？」

「落ち着いて聞いてくれ。望がいなくなったんだ。ちょっと目を話した隙に……」

父は望がいつ、どこでいなくなったのか説明していたが、もう小田切の耳には入らない。

望がいなくなった -。

「しっかりしろ。ショックを受けている場合じゃない」

はっと気が付き、小田切は焦る頭をフル回転させて、父親の説明を聞いた。

車で移動している途中、スーパーで買い物をしている間に望を車内に残しておいたら、帰ってきたらいなくなっていたと。母親が泣きながら言った。駐車場には防犯カメラが設置されていなかったのだから、犯人は分からない。

「加奈には望をこちらで預かるって連絡したのか？」

「いや。おふくろの家についてからという約束だったからな」

「じゃあ、加奈じゃないな。こんなことをしても意味がない」

「警察に通報する。望に万一のことがあったらいけない」

「……」

だが本当にそれでいいのか。警察で詳しく事情を聞くことになったら、当然加奈が出てくる。そうしたら望を強引に引き取ろうとしたことが、ばれてしまう。それに今までの経緯から考えて、こんなことをする犯人には大方目星がついている。

(こんなことをするのは、あいつしかいない……)

小田切は、心当たりがあるからと、父親に決して警察には通報しないように念を押すと、研究室を飛び出した。

父親からの電話の後、小田切は心当たりの場所を必死で車で回った。これがあの脅迫者のやったことなら、望は何をされるのか分かったものではない。

(やっぱり加奈に手伝ってもらおうか……)

携帯電話を持ち、加奈の番号を呼び出す。いざ通話ボタンを押そうとすると、最後に加奈が自分を罵倒した科白が再現される。

「駄目だ。自分で解決しないと、本当に望は……」

携帯の蓋を閉じる。電話をかけるために停車したコンビニの駐車上で、ハンドルに頭を預け、最善の策を考える。今まで要領良く世を渡って来た頭脳は、こんな時全く役に立たない。苛々してダッシュボードを拳で叩く。

ルルルルル。

小田切の脳内を見透かしたかのように、加奈からの電話だった。電話に出る小田切。だが相手は聞いたことのない声の、男……だと思った。

(どういうことだ?)

ボイスチェンジャーを使用しているのか、機械的な声だ。相手の生の声は分からない。だが加奈の携帯電話を使用しているのなら、加奈と関係の深い人物なのだろうか。小田切の困惑を余所に、相手は話を続ける。

「あなたが警告を無視するからですよ。娘さんを預かりました。返して欲しければ、要求を飲みなさい」

ボイスチェンジャーで声を変えているが、話し方の特徴で何かヒントになることはないか。小田切は必死で、相手の正体を掴もうと試みる。その間にも男は、淡々と要求内容を告げる。

「こちらの質問に全て、嘘偽りなく答えること」

要求自体はシンプルな内容だ。それでも相手の正体分からないのに要求を飲むことで、どんな不利益が降りかかるのか知れたものではない。小田切は返事を渋った。

「拒否すれば大事な娘を失う。娘の命はそちらの回答次第。要求を飲まななら、あなたが殺したのと同じこと。後悔することになりますよ」

相手は尚も強要する。
口調は落ち着いたものだが、今まで何のリアクションも起こしてこなかった小田切に苛立っているのだろう。

「……」

言ってしまったらこれから続く自分の人生はどうなる？
今罪を認めてしまえば、男が今後どんな攻撃材料に仕立ててくるか分かったものではない。
ここまで来ても小田切には迷いがあった。

「子どもを見殺しにするんですね。可哀そうに親に見殺しにされるとは。あなたは今までそうやって他人を見殺しにしてきたから、今更何とも思わないのでしょうか」

男は待ちきれないのか、苛々とした感情を隠そうともしない。

「せいぜい後悔するがいい」

男は埒が明かないと判断したのか、会話を切り上げることにしたようだ。

「待ってくれ！」

ここまで来て、やっと小田切は決心がついた。
このままでは本当に望は殺されてしまう。
実感して、目が覚めた。

「頼む。望は関係ない。そちらの要求を聞こう。だから望だけは」

小田切が要求を飲む意思表示をすると、男は自分の質問に嘘偽りなく全て答えるよう再確認する。相手はかなり慎重に物事を進めるようだ。

小田切が承諾すると、何かボタンを押す音がした。
録音しているのだろう。
何に使われるのか、用途が分からない不安が再び湧きあがるも、
小田切はともかく必死だった。

「5年前に土岐等あかりという大学院生が、山瀬研究室で嫌がらせに
あっていたのは本当か？」

「……はい」

「どんな嫌がらせをしていた？」

「研究室の仕事を押し付けたり、変わった所がある人だったのでそれ
からかうこともしていました。今では悪いことをしたと反省して……」

「言い訳はいい」

不機嫌丸出しの男の声に、ヒッと小田切は息を詰める。
例え回答したとしても、男が機嫌を損ねて望に危害を加えてしまったら
本末転倒だ。小田切は回答するだけでなく、答え方にも気を付ける
必要があることを理解した。

「嫌がらせの一つとして、土岐等さんに研究室内業務を過剰に押しつけ
たということですね？」

次の質問では、すぐに前の淡々とした口調に戻る。
小田切は少しほっとした。

「はい……」

「それでは研究成果を承諾もなしに奪ったことは、ありましたか？」

「そんなことは……！」

「ありましたか？」

小田切は以前研究室に送られてきた、当時のハラスメントに関する
資料を思い出した。あれを送りつけてきたのが、この男だとすると
つまらない嘘は危険な状況を招くだけだ。
相手は全て知っていて確認をしているだけだ。
小田切は、相手の威圧的な口調に、素直に答える。

「はい」

「誰に命じられたのですか？」

「……僕の独断でやりました」

この会話がどう使われるのか分からない以上、勝手に人を巻き込む訳にはいかない。常に小田切は将来を考えて行動するのだ。

「……嘘は吐くなと言ったはず。もう一度だけ聞く。土岐等さんの実験資料を取り上げるよう指示した人がいるのではないですか？」

「いいえ。僕が。僕だけがやりました」

求めていたのとは異なる回答で、男は苛立っていたようだが、小田切が自分の罪を認めたことで、良しとしてくれたようだ。

「……まあいいでしょう。では土岐等さんをからかったと言いましたが、具体的にどうからかったんですか？ 嫌がるようなことを故意に言っていたのですか？ それとも無視をしていたのですか？」

「僕は……言っていません。ただ知っていて見て見ぬふりをしていました」

「土岐等さんから話しかけられた時は、どうしていたのですか？」

「……聞こえないふりをしました」

「つまり助けを求められても無視していた傍観者と言う訳ですね？ それ以外にしたことは、ありますか？」

「ない。ありません」

「これらの事項はアカデミック・ハラスメントに該当します。事実土岐等さんは生前何度もハラスメント相談室に訴えています。それについて自分達のしたことについてどう思いますか？」

「……土岐等さんがそこまで追い詰められていたとは知りませんでした。少し悪ふざけをしただけのつもりだったんです」

「今更それで済むと思っているのか？」

突然生の男の声が聞こえて、小田切の身が竦む。

「人が一人殺されているんだ。お前らにな」

恐怖で口を噤んでいると、男は前の口調に戻った。

「佐々木芽生は、何をしたんですか？」

「仕事を押し付けたりするのは、私と同じです。土岐等さんとは同級生でしたが、サバサバした人なので直接注意することもありました。捉え方によっては、きつく聞こえたのかもしれませんが」

「注意と言うと、土岐等さんに非があったかのように聞こえますね。そうではないでしょう。どんな場面でどんな注意をしたのか、具体例を出してください」

「土岐等さんが病気を理由に欠席した時に、『怠けるなら大学を辞めろ』と言っていたのは聞いたことがあります。彼女なりに発破を賭けていたのですが、人によってはきつく聞こえます」

「土岐等さんが心臓発作の持病を持っていたのは、皆知っていたはずですよ。それなのにどうしてそんな酷なことをあえて言うんですか？」

「それは……病気を理由に甘えないようにと言う配慮でしょう。あまりに欠席が続くと、皆にも迷惑で悪印象を持たれますから」

「ですが私の記録によりますと、土岐等さんが休んだことは一学期に二回程です。多いとは言えませんね。それにそんなことを言いながらもあなたたちは仕事も押し付けている。試しにこの佐々木さんと土岐等さんの仕事量の違いを比べてみました。完全に佐々木さんの方が休みが多いですよ。言う資格はないと思いますが……」

「それは僕には……何とも」

「少なくとも土岐等さんは入学時に、自分の病気の事を公表しています。しかもそれを利用して特別扱いを申し出たことは一度もないはず。他にも病気を理由にして、嫌がらせをしていたのですか？」

「特には……ないはずですよ」

「薬を隠したりとかは？」

「そんなことは絶対にしません！」

ここで相手はしばらく思案しているような間が入った。数分の間に続いて、質問を続ける。

「それでは土岐等さんが学内で、薬がないが為に緊急状態に陥ったのは、他の人が薬を盗んだと言うことで宜しいですね？ 状況からして明らかに研究室内の者の仕業としか思えないのですが」

「それは土岐等さんが偶々持っていなかったのではないですか？」

「それはありえません。証拠もあります。研究室に行く直前まで持っていた物が、気絶する直前になくなっている。おかしいですよね？」

「本当に知りません……」

「本当ですね？あとから知っているというのは、許さない」

許さないの一言に力が籠り、小田切は見が竦む。
時折私情が入るのか、くずれる敬語が妙に凄みを感じる。

「本当に知らないんです」

「それがどうして芹沢さん一人の責任になったんでしょう？自分から名乗りを上げるべきですよね？自分と同じ研究室の仲間が一人だけ責任を押し付けられて何とも思わなかったんですか？」

「悪いとは思いましたが、自分から名乗りを上げる勇気がありませんでした。芹沢君も退学処分になると言う噂を聞いて尚更無理でした」

「彼はそれを苦に自殺したわけですが、それに関してはなんとも思わなかったのですか？」

「怖かったです。反省もしてます。でも自分も処分されるのではと怖くて出来ませんでした」

「芹沢さんが自殺したのは、退学処分を受けて3か月後。ご家族はすっかり芹沢さんが一方的に大学に迷惑をかけていたと信じ込んでいたわけですが、どうやってあなたたちは自殺の事実を知ったのですか？」

「警察の方から自殺の原因に関する聞きこみがあったので。
……それで僕らも罪悪感もあって、お焼香に」

「それでは自殺現場は見てなかったということですか？」

「それは当然……」

「ではどうしてあなたは手鏡の存在を知っていたんですか？」

「……」

「手鏡の写真を見た時に、慌てて佐々木さんに電話をかけましたよね？自殺現場にいなければ分からないことだ。
あの手鏡は、芹沢さんの自殺現場にあったのだから。
ここから大分離れた海を運航するフェリーに、あなたたちの内の誰かが、偶然乗り合わせたとでも言いますか？それとも警察が到着する前に、芹沢さん宅へ行って見たことがあるとでも言うのですか？」

「知らない」

「苦しいわけだな。それならその続きは警察で聞こうか？」

「じゃあどうして警察に今娘が誘拐されたことを通報しない？
昔のことがばれるからじゃないのか？」

「違う」

「山瀬は関わっていないのか？指導教官がまったくこの事件を
知らないということはありえない。芹沢さんは山瀬を庇って
自分だけ切り捨てられたのではないか？」

「……」

「答えなさい。さもないと娘が」

「……僕と、芹沢君、佐々木さんがしたことだ。先生も、それ以外の
人間も関係ない」

小田切はこの電話すら録音されている危険性を考えた。
もし小田切が予想している人間が犯人だとするなら、とうに
答えは知っているはずだ。それでもあえて答えを導こうとしている。
それなら目的は証拠集めだ。

(その手にはのるか……！)

「いない。僕と佐々木君二人だけだ」

ここで一旦カチッと音がして、男が言った。

「いいだろう。娘は旧劇薬物保管庫だ」

そこで電話は切れた。
問いに答えるので精一杯で、結局相手が誰なのかは分からなかった。

このまま彼は望を返してくれるのか。
不安が募るが小田切には信じるしか道はない。
小田切は大学へ向けて、車を飛ばした。

「……ちょっと常川さん。いいですか？」

息切れした優奈が研究室のドアの取っ手を回すのももどかしい様相で、部屋に飛び込んできた。常川からすれば、会社のクライアントとの打ち合わせの日程を調節するためのスケジュール調整をしていたところなので、邪魔された形になる。

「なんだよ？」

例にもれずこのところ毎日学校に来ている常川は、大学でも研究よりも仕事に追われていた。研究は待ってくれるが、ビジネスは時間が命だ。これはあくまで比較対象であって、もう最終学年にもなろうかという常川は今年中に論文を出さなければ、課程博士の学位を授与できる権利を失うと優奈は聞いている。

優奈も実験動物の飼育や実験の担当がある時は、遅い時間まで残っている。今日も優奈は任された実験を粛々とこなしている。

「……今備品室に行ったら、変な音がするんです」

「学部生でも騒いでいるだけじゃないか？」

「そうじゃなくて……。誰かが泣いているような……。不気味な声なんです。しかもその声、備品室の隣の締め切りになった部屋から聞こえてくるんですよ」

「怖い話でも読んだのか？ 今はまだ8時だぞ」

世間的にはまだ遅い夕食を取っている人がいてもおかしくない時間帯だ。飲み屋街など大いに賑わっていることだろう。院生の大半が夜型だが、用事がない場合は皆それぞれの所用の為帰っていく。

「怖いから付いてきて下さい」

上目づかいで見つめる優奈。女性誌によると、男性に頼みごとをする時には効果的……のはずだったが、常川には全く効果はなかった。

「怖いならもう行かなければいいだろう。明日になれば誰か来る」

「駄目なんです。今日中にやらないと、計画に支障がでてしまうんです。COEのプロジェクトだから、常川さんだって関係あるんですよ。私のせいで皆に迷惑なんてかけられませんよ」

「じゃあ般若心経でも唱えながら行けばいいだろう」

前から思っていたのだが、常川は優奈と他の女子学生との扱いの差がひどい。不公平だ。

「意地悪しないで付いてきて下さいよ。それに空き部屋から物音なんて泥棒かもしれないですよ」

「盗られる物なんか何もないだろ。否むしろ、学生同士が何か秘密のことをしているのかもな。見つかるか見つからないかと言うのが、スリルがあっていいんだよ」

赤面する優奈。にやける常川。

「仮にそうだとして、あそこの鍵をどうして普通の学生が持っているんですか？何がある部屋かは知りませんが、使われていない倉庫か何かなんですよ？」

「まさか備品室の隣の、廊下の突き当たりの部屋か？」

「はい……廊下の角を曲がった奥の部屋です。角が備品室になっている。廊下では聞こえないんですが、備品室の中だと横から聞こえるんです。でも、あの部屋は普段は入れないですよ？確か管理室から鍵でも持ってこないと……」

「すぐに行くぞ」

部屋を特定すると先程までのお茶らけた雰囲気はなりを潜め、常川は率先して備品室にむかった。

足音を忍ばせて入る。
耳を澄ませると鼻をすするような音がする気もするが、壁が厚いのかはっきりとは聞こえない。壁に耳を宛てていると、男子学生が三人部屋に入ってきた。
優奈も名前は知らないが顔だけは見知っている、同じ学科の他の研究室の院生だ。
備品室と実験施設を共有しているので、顔を合わせることも幾度かあるのだ。他の研究室の学生はさすがに常川の顔を見て不満げな表情をすることはなかった。

「隣から変な声が聞こえてくると聞いたんだが」

常川が尋ねると、学生の内の一人在答えた。

「はい。さっき僕が備品室で実験の準備をしていたら、妙な物音がして……」

「たぶん私が聞いたのと同じです！」

なんとなく心霊現象っぽいことは言いたくなかった。
ここは理系の研究施設だ。
非科学的にならないよう、優奈は気を付ける。

三人が優奈よりも前に入った時にも、誰かが泣いているような声が聞こえたという。それで警備員に事情を話して、戻って来たところだと言った。

少し話していると、初老の警備員がやってきて、件の部屋のドアを開けるべく鍵を差し込む。
皆一旦備品室から廊下に出て、警備員の動向を見守った。
この部屋は既に役割を果たしていないとばかりに、ガムテープが統一性なく、乱雑に貼られている。

カチ。

確かに手応えはあるが、開かない。
警備員は幾度も鍵についたタグを確認するが、間違いはない。
もう一度挑戦してみるが、開かない。
動揺する一同。

鍵も合わず、ドアも開かないとなると、最終的にはドアを破壊するしかないわけだが、それも叶わない程に頑丈そうなドアなのだ。地下なので、窓を壊して侵入する訳にもいかない。

「……鍵が間違っているんじゃないですか？ それか鍵を新しく変えたということはないですか？」

優奈の言葉に、警備員は直も鍵をガチャガチャと弄りながら、それはないと返答する。

「ここは随分前から使用されていないんだ。数年前に閉鎖されたままの状態、物置としてすら機能していない。鍵を変える程の価値のある物も、中にはないんだ」

バリッ。

常川がガムテープを次々に、剥がし始める。

「ちょっと、何しているんですか？常川さん！」

常川の行動は相変わらず予測がつかない。
皆の奇異の目を、優奈が代弁する。

「鍵はちゃんと合っている。だから考えられるとしたら……あった！ここだ！」

常川が剥がしたばかりのガムテープの下から、ドアの色とは異なる平べったい長方形の板が出てきた。

「誰かが鍵を増やしたんだ」

常川が言うには、これはドアの内側に本体がある電子錠で、解錠するには専用のリモコンが必要なのだと言う。
最近似た鍵を社内に取り付けたので、見覚えがあると常川は言った。
他の院生も、バイト先で使われているのを思い出していたので、

その業界では有名なものなのだろう。

「ぐすっ。……コホン。コホン」

想定外の事態に一瞬静まり返ると、中から子どもの泣く声と続いて咳をするような音が聞こえる。

「君、大丈夫か？」

警備員さんがドアを叩きながら、中へ呼びかける。

その時。

階段から、誰かが駆けてくる足音が響いた。

足がもつれかねない程の駆け足で、その人はこちらへやって来る。

「小田切先生！」

突然現れた小田切は、必死の形相で周囲の全員に問いかける。

「望は、この中か？」

「小田切先生のお子さんだったんですか？ どうして……」

小田切が急かすように聞いたその場の者たちの話によると、中から子どもの泣く声や咳をする声が聞こえると言う。

望は喘息の気がある。

薬もなしに、中に閉じ込められていたら、どうなるか知れない。

（ここに来たら、すぐに助け出せると思っていたのに……！）

すぐに小田切は脅迫者が使用していた電話 - つまり加奈の携帯に電話するが、幾度かけても同じアナウンスが流れるだけで繋がらない。

小田切の懊悩は増すばかりだ。

「皆に迷惑をかけてすまない」

その場に居た者には、都合の悪い部分は伏せて、娘がここに迷い込んだかもしれないとだけ伝えた。ここに来た理由は、子どもの声を聞いた人から、連絡があったということにした。

「小さな子どもの鍵トラブルは、良くあることですよ」

皆をなだめるように、警備員がフォローしてくれる。
警備員も音の正体らしきものが分かって、少しほっとしたらしい。

「電子錠は異常事態になると止まってしまうことがあるんです。
その時に娘さんが入ってしまったのなら、自分で中から開けられなくなる可能性も考えられます」

もちろん電子錠があらかじめ開いていたことが前提だ。

電子錠は普段は閉まらないようにセットしておいて、外出するときだけに施錠するように設定を変えることが出来るものがあると言う。

警備員の説明によると、何者かによって新たに電子錠が設置されていた可能性があると言う。この警備員の説明なら、脅迫者の存在を告げずに、話を進めることができる。

「開いていた電子錠付きのドアを望が開けて入り、自分で

締めてから出られなくなった」と筋書きを作ることが出来る。

そうだとしても、誰が何の為に、使われていない部屋にわざわざ電子錠を取り付けたのかは、謎のままだ。「学生が悪戯でやったことだろう」説に落ち着きそうなのがせめてもの救いだ。

これで言い訳は成り立つ。
今は望の救出が最優先だ。
ハッと気が付き、小田切は知恵を募る。

「電子錠なら、電気を消したら解錠されるかもしれません」

思いついた若い警備員が電気制御盤のブレーカーを落とす。
真っ暗の廊下で、勢い込んで院生たちでドアを押したり引いたり
してみるが、びくともしない。

期待した分、皆落胆してしまった。
「すみません……」項垂れる若い警備員を、先輩警備員が慰める。

年長の警備員が言うには、電子錠には停電時に施錠されるタイプと、
解錠されるタイプに分かれる。このタイプは、偶々施錠されるタイプ
だっただけのこと。だから考えの筋としては良いと、フォローする。

先輩警備員は後輩をフォローすると同時に、中の子どもをいち早く
助ける緊急性を理解し、救急に連絡をとってドアを壊してもらって
救出することを提案した。
しかし小田切はその申し出を渋る。

口止めはされていないが、脅迫者を刺激しない為には、
あくまで事件性がないように振る舞う必要がある。
機嫌を損ねて、せっかく居場所が分かったのに、望を危険な
目に晒すことはしたくなかった。

「子どものしたことだ。大げさにしてもらっては困る」

不審に思われただけの上手い言い訳が思いつかず、小田切は
拗ねるような理由を付ける。
そう言われても他に出来ることは、鍵屋を呼ぶか、工務店に連絡する
くらいだ。工務店は終わっている時間なので、警備員が仕方なく
鍵屋を調べに詰所へ向かおうとする。

その時だった。

「ぎいああああああああ」

と、急に部屋から断末魔のような悲鳴が聞こえた。
その高い声からおそらく子どものもの。
一瞬にして場の緊張感が高まった。

「救急なら応急措置もしてくれる。早く119番しろ」

只ならぬ悲鳴の後だ。
一刻も争う余地が無い。

「駄目だ。できない」

これ程取り乱しているのに、頑なに救急を拒否する小田切に対処しかねて、警備員は携帯電話で詰め所に居る同僚を呼び、相談する。

こうして迷っている間にも、望は衰弱しているかもしれない。
小田切は警備員の申し出を自分で断っておいて、望が心配でならない。
しかし理由を周囲に伝える訳にも行かず、ひどく狼狽していた。

人命がかかっているので警備員たちも必死で小田切を説得するが、
小田切は苦々しい表情を見せつつも、どうしても首を縦には振らない。

いつまでも決断しない小田切に見切りをつけたのか、ちっと
舌打ちすると常川はどこかへ走って行く。
優奈はそれに気付いたが、警備員と一緒に小田切の説得をするのに
忙しくてそれどころではなかった。
他の院生3人は、中の子どもに向けて、懸命に呼び掛けている。

「チェーンソー持って来たぞ！」

常川が誇らしげに、チェーンソーを掲げて見せる。
後ろには高校生くらいの男の子が、居心地が悪そうに付いてきている。
常川に無理強いされたことが、簡単に見て取れた。

地下では窓もなく、外から工事用機械で壊すことも出来ない。
そして厚いドア板。
確かにチェーンソーで少しずつ削るしか、手はなかった。

「これで文句はないだろう！」

「それは駄目です！絶対に許可することはできません！」

警備員は真っ青な顔で反対する。
素人がチェーンソーでドアを開けて、中の人間に怪我を負わせる
リスクを考えれば、とてもゴーサインを出すことはできない。

「あんた、人の親だろう！何か事情があるみたいだけれど、子どもの
命よりも大事なものがあるのか？」

初老の警備員が、いつまで経っても最善の手段を取ろうとしない
小田切にしびれを切らして、怒鳴りつけた。

救急に頼もうとしない小田切に、疑問を含んだ視線が寄せられる。
小田切はひたすら視線の意味に気付かない振りをする。
小田切から脅迫者に発信をすることはできないのだから、ただ守りに
徹するしかない。

小田切の行動は、全てを把握した上で口を噤むことに決めたのだ。
当然望のことは心配だ。
喘息の発作で病院に運ばれたのはついこの間の事だ。
薬も吸入器もなしで、カビ臭い部屋に閉じ込められたらどうなるか
知れない。

それでも何も言わない小田切に、もはや呆れかえった警備員は「鍵屋を呼ぶしかないでしょう。すぐにでも電話しましょう」と次善の策を提案する。そこまで来てやっと小田切は口を開いた。

「救急をお願いします……」

蚊の泣くように小さな声だったが、警備員は「良く決断してくれました」と小田切の勇気を労い、すぐに119番して事情を説明した。

救急の行動はその道のプロだけあって、迅速だった。すぐに駆けつけた救急救命士4人は、ドアが開けないことを事前に知らせてあったため、特殊な機材を搬入していた。エンジンカッターと言われるその大型の機材は電子音を唸らせ、厚いドアを少しずつ破壊していく。

集中する救命士の傍で、皆は中にいる子どもに向けて声をかける。

「開いたぞ！」

勇んで駆けこむように中に入った小田切と救命士。中に居たのは - ヒトではなかった。

開いた中には……パソコンが一台点滅しているだけだった。

それ以外は、ごく僅かの機材を残して、全ての設備が撤去されている。その端には、ぽつんと置かれたパソコンが一台。それが泣き声の正体だったらしい。

院生たちは呆気にとられ、救命士たちはタチの悪いいたずらだと激昂する。小田切は床に座り込んでしまった。ここに望はいなかった - 。では犯人はどうやって望を返してくれるというのか - 。

小田切はすっかり放心状態に陥っていた。望が帰ってこないまま、自分の弱みを晒しあげてしまった。これからは佐々木も味方にはなってくれないだろう。どうすればいいのか。

「小田切先生、魂が抜けたみたいですね。無理もないけれど」

「さっさと消防か警察に言えば良かったんだ。どうせ通報したら殺すって脅すのは唯の威嚇なんだから。自分の体裁ばかりを考えたあげくこうなっても自業自得だ」

相変わらず小田切に冷たい常川だが、娘の事はこれでも心配しているようだ。

悪戯と分かった後は、当然のように小田切に警察に通報するよう、またもや一同で説得する。

小田切によると、娘を大学に連れて来てから行方が分からなくなったと言う。それなら事件ではなくても、どこかで不慮の事故にあって動けなくなっているかもしれない。それに喘息もちだったら、どこかで倒れている可能性もある。

だがいくら説得しても一層頑なに通報することを拒む。事情はおろか、いつどこで娘がいなくなったのかさえ、口を噤んでいる。何か訳ありなのだろうとは推測出来るが、公共機関の助けを一切借りないと言い張られては助けようもない。

かといって放っておくわけにも行かず、警備員は館内を巡回しながら子どもを探す。気が変わったら詰め所に連絡してくれと言った。あくまで警察に頼むことが一番だと警備員は何度も、小田切に囁んで含めるように伝えた。院生たちも大学院棟内を調べに行く。

今日のメンツはどうやら面倒見の良い人間が集まったようだ。

当然常川も優奈も探すことにする。
放心し何も話そうとしない小田切を見限って、警備員や他の院生が調べていない場所を、考える。

小田切自身は学校で望とはぐれたかのように、説明したが、実際は大学から離れた駐車場でいなくなったことを知っている。だから小田切は本気で大学構内で望が見つかると思っていた訳ではない。一人取り残された小田切は、脳をフル回転させて考えた。

それならどこを探したらいいのか？

相手が車に望を載せてどこかへ移動したとするなら、もうどこだか分からない。

ピピピピ。
悲嘆にくれた小田切の耳に響く場違いな電子音が。
小田切の携帯にメールが入ったことを告げる音。

小田切は吉と出るか、凶と出るか恐る恐る画面をチェックする。
送信者は加奈。

(さっきまで電話しても着信拒否していたのに……)

そこには携帯メールで、『研究室のメールボックス』とだけ書かれていた。
見るや否や小田切は自分の研究室へ向かって、走り出した。
その様子に優奈と常川も、後を追う。

普段では考えられない早さで猛ダッシュをした小田切に、
ようやく追いついたのは、小田切の研究室前だった。
小田切はメールボックスから、長方形の物体の入った小さな封筒を
手にしている。

「おい、何だよそれ？」

常川の問いを無視して小田切が封を開けると、そこには携帯電話が
入っていた。

「これは加奈の携帯……！」

ずっと着信拒否にされていた加奈の携帯電話だった。
あの脅迫電話も、この電話からかかって来たことになる。

驚いていることから、常川と優奈は、封筒の中身を事前に
小田切は知らなかったことが、見て取れた。

(ということは今の加奈は、新しい携帯電話を持っているのか)

加奈は持病を持っている望と自分の体調管理に、毎日携帯電話の
アプリを利用している。加奈にとって、携帯電話は日常生活の
マストアイテムなのだ。ということは。

ゆっくりと宝物を扱うように、唯一残された手掛かりを扱う。
わざわざ送って来たということは、何か意味があるはずだ。
細心の注意を払って、携帯電話を調べる。
アドレス帳を確認すると、『新しい携帯電話』と書かれた欄がある。

(これだ！)

小田切はその電話番号に、かけてみた。

小田切が祈るような気持ちで思い切って電話をかけてみると、「もしもし」と呑気な声をした加奈が出た。

相手が小田切だと分かると、烈火のごとく怒り出す。

「どうして私の携帯電話を持っているの？ あなたが盗み出したのね？ 警察にも盗難届を出したのに。あなたって言う人は、望を実家からどこかへ連れ去ろうとしただけではなく、私にまで嫌がらせをしようっていうの？全部犯罪になるのよ。全部警察で話してくる！」

堰を切ったように怒りをぶつける加奈に、小田切は啞然としながらも不思議な事に気付いた。

(なぜ加奈は自分が望を連れ去ろうとしたことを知っているのか？)

小田切は望を預かるとは言ったが、預かり先は自分の実家と思わせるニュアンスで言った。実際は祖母の家にしばらく匿う予定だったが、それについて一言も言っていないし、両親にも口止めをした。

(おかしい)

その時電話の向こうで、ずっと焦がれていた声がした。

「ママ、パパとお話ししてるの？変わって！」

随分あっさりと探し人が見つかり、安堵のため息が出る。一時は最悪の事態も想定していたのだ。

「望がそこにいるのか？どういうことだ？」

「ずっと私が預かっているわ。当てが外れて残念ね」

「お前が望を誘拐したのか？ いや初めから犯人グループとグルだったんだな？」

「何言っているの。誘拐犯はあなたたちでしょ！そもそも誘拐されたと思っていたなら、どうして私に連絡しようとしなかったの？どうせ親権を争う時に不利になるとでも考えていたんでしょ？ 今度のことで完全に愛想が尽きた！離婚します。あなたが同意しないなら裁判をしても。それじゃあ離婚届はあなたの実家に送るわね。それじゃ」

捲し立てるように話す加奈に、すっかり圧倒される。ともあれ望が無事だったことで、小田切は気が抜けてその場にへたり込んでしまった。

「何だ、無事だったのか……。良かった……」

喜び勇んで、小田切は警備員と他の研究室の院生たちに、娘が無事だったことを、自ら伝えに行く。幸いにして、皆が望が見つかったことを喜んでくれ、妻に娘を預けていたのをすっかり忘れていた人騒がせな男の事を快く許してくれた。結果的には事件性もなく、警察を呼ぶまでもなかったのも、不信がられることもなかった。

約一名を除いては - 常川だけが不審な目つきで、詰問する。

「どうして旧劇薬保管庫に娘がいると思った？ 誰から聞いた？」

しつこく聞いてきたので、小田切は疲れていることを理由に黙殺した。実際、疲れがピークに達している。緊張の糸が切れ、安心感で一気に眠気が襲ってきた。望を案じて、右往左往している間にもう深夜の時間だ。

最後の気力を振り絞って、小田切は両親に連絡をとり望の無事を知らせると、そのまま迎えに来てもらうことにした。家に帰ると、スーツのままベッドに倒れ込み、死んだように眠る。

ほぼ一日中眠っただろうか。すっかり気分良く起きると、先日までの騒動はまるで悪夢のようだ。全く現実感が無い。

また今日から仕事が始まる。望を奪還することは叶わなかったが、チャンスはいくらでもある。また機をみつければ良い。

十分に睡眠欲を満たした小田切は、すっきりとした頭で大学へ出勤した。未だ望は加奈の保護下にあり、件の営業マンの行方も知れない。順調とは言えない現状。それでも望が無事ならば、仕切り直しが出来るはず。脅迫者の要求は飲んだのだから、もう不正経理については気にしなくて良いはずだ。

(それにしても、あの電話の主は誰なんだ?)

不正経理の証拠さえ押さえれば、現状で不利になることはないはず。だからこそ不正経理の証拠をもみ消す為に、元営業マンの行方を追っていたのだ。5年前のアカハラのことどこからか聞いた噂話を恐喝のネタにしようとしただけだと。だとしても、相手はハラスメント事件に執着している。取引材料以上の価値を置いていると感じる。

(誰か協力者がいるはずだ。5年前の事件の関係者か？それともその家族か……?)

先に正体を知った方がこちらに有利な戦略を立てられる。要求を飲む、飲まないではなく、そろそろ敵の正体を知る段階に来ている。

(今日から正体に繋がるものを探すことにするか。もうやられっぱなしではない)

攻めに転じると決めると、心がいきり立つ。
勢いのまま、小田切は新たな気持ちで、自分の研究室のドアを開ける。
修理して以来怖くてあまり触っていないパソコンは避けて、
自分のスマートフォンで興信所を探し始めた。

コンコン。

ノックがしたので、慌ててネット接続を解除しようとしていると、
優奈が珍しく返事を待たずに部屋に入って来た。
慌てて妙なキーを押してしまい、
常になく慌てている小田切を見て「先生、大丈夫ですか？」と尋ねる。

遅れて常川も入って来る。
こちらはノックなどはなからしない。
用件だけを述べる。

「お前、……大変なことになっているぞ」

意味が分からない小田切に、常川はデスクトップのスイッチを
入れるよう促す。ネットに接続すると、常川は勝手にマウスを操作
して、あるホームページに辿りついた。

「何だこれ？」

『5年前の大学アカデミック・ハラスメント事件を許さない！』
と題されたこのページ。そこには5年前の土岐等あかりに対して
行われた行為を、事こまかに綴ってある。さすがに実名は書いて
ないが、イニシアルと大学の所在地情報から、関係者が見れば
自分であることは丸分かりだ。

そこのあるボタンを常川がクリックした。

「やったのは……君と、僕と、……君だ」

肝心の人名はさすがに音声処理が施されているものの、これはあの時
犯人とおぼしき人物と小田切が交わした会話だ。犯人の声は録音時
以上に機械的なものに置き換えられている。

「音声朗読ソフトを使ったんだな。これでは相手の声は分からない」

他人事のように常川が解説する。
小田切の顔はまさに蒼白だった。
やっと目覚めたのに、またもや悪夢に引き戻されたように、
血の気が無い。
相手はまだ小田切を許していない。
いやこれが当初の目的だったのか。

それでもこの時点では、小田切はなんとかなると踏んでいた。
数多くの人間がブログやらSNSを乱立するこの時代に、興味のない
人間にとって退屈極まりない告発ホームページをわざわざ探し出して読む

者がそれほど居るとは思えない。
すぐにこの音源とホームページを管理者に言って削除させれば、
それほど問題はないはずだ。

「このサイト、ブログのランキングで上位に入っているんです。
それにアカハラと関係ありそうなコミュニティに宣伝を貼りつけ
まくっているから、少しずつ知られているみたいで。わずか数日なのに、
かなりアクセス数を稼いでいます」

「俺もブログやっているから、何人かに聞かれた。この内容は
本当かってこととか、お前の普段の態度のこと聞かせろって」

「……まだ研究室の他の皆さんは気付いていません。でも時間が経てば
知られることです。ご自分で説明された方がいいのでは？……ここに
書かれているのは当然嘘なんですよ。だったら堂々と言えば大丈夫
ですよ。まずは山瀬先生に……」

優奈は誰かに誤解を受けて中傷されていると、未だに信じていた。
今まで届いた怪文書が何度も小田切の罪を告発しているが、
優奈はこの1ヶ月間で実際に見た小田切の人となりを信じた。
つきあいは短いけれど、音源に入っているようなことはするはずが
ないと。山瀬の名前を出されて、小田切は心底困った顔をする。

「考えさせて欲しい……」

「過去の代償か。高くついたな」

常川は慰めているとも、諫めているとも分からない声音で言った。

「これは名誉毀損だ！このページを書いた奴を訴えてやる！」

ショックを怒りで昇華しようと、息巻いて感情を吐き出す小田切に、常川は勝手にしろとばかり、出て行ってしまった。優奈は小田切の様子を伺いながらも、特に役立つことはない判断したのか、気まずそうに常川の後を追う。

相変わらずパソコンには疎い小田切。当然のごとく、ページを書いた人間にどうやって抗議するかなんて、やったことも、やろうとしたこともない。なんだかんだで、常川が手伝ってくれるものと思っていた。

(知らせたのなら、責任として教えるくらいしてくれてもいいのに)

恨めしく思いながらも、ネットサーフィンをしながら、有益そうな情報を探す。探してみればそれほど難しいことではないことが分かり、小田切は早速サイト管理者にメールで連絡を取ることにした。

メール画面を開いて、文面を推敲していると、研究室の電話が鳴る。自分を告発するホームページを発見した直後だ。緊張しながら、電話に出る。もし脅迫者だったら、約束が違うと、恫喝してやる。それくらいの気概を持って、小田切は電話に出た。

恐怖に反して、電話の相手は、かわいらしい声の女性だった。

「小田切先生ですか？時間が空き次第、すぐに大学本部までお越しください」

どんな用件かと言っても、女性は理由は後からと繰り返すばかりで、要領を得ないまま会話を終えることになった。午後一番に授業がある身の上なので、今すぐにでも本部へ向かうことを告げる。

昨夜騒がしてしまったことが原因かもしれないと、少し気弱にある。

(余計なことを……！)

昨夜あれほど親身になって望を探してくれたというのに、今になって評価が変わる。我ながら現金なものだ。

面倒事はさっさと処理するに限る。小田切はすぐに本部に向かった。普段は小規模な会議などに使用される部屋に通されると、年配の男性二人が遅れて入室する。二人は小田切と対面するように、隣り合って座ると、いきなり本題を切り出した。

「小田切先生、あなたに不正経理の疑いがかかっています。今から事情を伺った後に、そのまま研究室へ向かってそこで証拠探しも行います。既に調査委員会も設置されて、今日のこの事情聴取も研究室の調査も、委員会での決定事項です」

小田切は昨夜と同じく、その場にへたり込んだ。

(そんな馬鹿な……。昨晚言われた通りに話をしたのに……)

調査委員会の委員らしき男たちは、小田切の不正経理については既に数週間前から発覚しており、調査委員会も発覚から一週間後に作られた。その後は告発者の証言を取入れて、少しずつ内偵を進め、告発者がゴーストを出したので、今日の事情聴取に応じたのだと。

(そんな前から、手を打たれていたのか……)

脅迫者は初めから、約束を守る気などなかった。それなのに奴の行動に一喜一憂していた自分。本当に馬鹿みたいだ、と小田切は泣き笑いのような声を出す。

「それでは、告発者は誰なんです？」

「それは言えません。あなたは聞かれたことだけに、お答えください」

丁寧だが、あくまで引く気はない口調。

小田切は自分が、『被疑者』として扱われていることを痛感する。

文句をいいたくとも、脅迫者が昨夜使用していた旧携帯電話は、今や小田切の手の中にある。どう連絡をつけていいのかわからない。一方的な関係にすぎない。

元営業マンの消息すら掴めなかった小田切には、反駁するだけの材料はない。大学当局の調査に素直に応じるしか、道はなかった。

「小田切先生に、私は架空の伝票を切って金をプールするように頼まれました。断ると、本社に報告すると脅されました」

あれほど探していた営業マンとようやく会えた時、彼は告発者として小田切の前に現れた。昔のおどおどと顔色を伺っていた様子は一掃され、目は憎しみで燃えていた。

細かく計上された今までの小田切の経費の流用。被疑者の小田切に許される発言は、全て己の弁護の為に用いるのが精一杯で、時間をかけて用意された証拠を握りつぶすことなど到底できなかった。

同時期に、小田切がアカハラを5年前にしたというネット情報は、関係者の間であっという間に広まった。学部内では公然の秘密だったその裁判についての、噂が再燃する。これは学部にとっては黒歴史そのもの。火消しにかかったが、一度ネット上に出回ったものを回収することは不可能だ。

不正経費と同時に、これらの問題も取り上げざるを得なかった。この頃になると、学内の運動家たちも、教員に相応しくないのではと大学当局を付き上げて来るようになってきた。

不正経理に対して厳しくなってきたこの時勢に、アカハラという爆弾も抱えている小田切は、あからさまに学部にとって不要な存在であることが浮き彫りになった。特に山瀬にとっては、小田切の問題の監督責任を追求され付き上げられることが増え、口には出さぬがその機嫌は日ごとに悪くなっていく。小田切は見捨てられまいと必死になった。

後日、小田切は再び事情聴取を求められた。

「まずはこれを聞いてもらいます」

用意されたパソコンから、あの日の小田切と脅迫者との会話が流れ出す。ネットで流れたのとは異なり、実名に処理が施されていない。

「これは小田切先生の声ですね？」

「はい……」

まぎれもない自分の声に、小田切は否定することはできなかった。

「これはどういう経緯で録音されたものですか？」

「脅されたんです。娘の命を危険にさらすと。それで言わされただけです。本当のことではない」

不正経理のことも露見した今、犯人を庇う意味などない。告発した元営業マンへのせめてもの意趣返しとばかりに、小田切は堂々と真実を告げた。あの怪文書の送り主は、この告発者と繋がりがあるはず。それなら娘の狂言誘拐にも一役かっているはずだ。

「それは変ですね。奥さまの証言だと、小田切先生が奥さまの下から娘さんを攫ったと聞きました」

(加奈にまで調査の手が伸びているのか！)

加奈にまで捜査の手が伸びていることに、小田切は驚きを隠せない。最後の電話のテンションだったら、小田切の事をどう評したのか想像がつく。

「それは……親権の為に焦って。でも、その後に娘が攫われたと脅されたのは事実です！」

「……ここに警備員から提出してもらった記録があります」

そこには、もちろん小田切は被害者として書かれたが、当時の挙動に不審な点があったことが指摘されていた。

「小田切先生が娘さんを攫われたと思い込んでいた為に、不自然な対応になったことは分かりました。それでは脅している相手とは誰なんですか？」

「僕を告発した奴です！」

「それはありません」

既に予期されていた答えだったのか、その日の元営業マンの行動は、全て男が自ら報告し、裏も取れていると告げられた。

「それ以外では？」

「……分かりません。でも5年前の事件の関係者はどうです？土岐等さんと芹沢の家族は？今になって逆恨みしている可能性があるのでは……？」

小田切は主犯が元営業マンで、彼の誘いで5年前の事件の関係者が乗せられたと推理していた。二人で協力すれば、あの誘拐事件の時間関係者が主犯に代わって例の電話をかけることもできる。だが誰かまでは特定できていない。

いや頭に一人の人物が思い浮かぶのだが、それはありえないはずだ。

「何か証拠はあるのですか？」

「……いえ」

ここで一旦調査委員は、警備員による続報を知らせた。警備は今回のような悪質な悪戯を防ぐために、犯人を探そうとしたことを告げた。警備員が後日パソコンの型番号から所有者を探すが、その所有者はとうにそのパソコンを廃棄しており、リサイクルショップに売り払ったと報告した。ネット契約をするわけでもなく、レジに顧客情報を入力する機械もない簡素な店だった為、客の足取りはつかめない。ドアに付けられたリモコン錠も、メーカーで作成されたものだったが、それもネットオークションで手に入れたものなのか、記録されていた所有者には怪しい点がなかった。

「これほど周到に準備するような相手に、本当に心当たりがない
のですか？」

力なく「はい」と肯定する小田切に、調査委員は呆れたように、
後日処分を決めるとだけ告げた。
誰が脅迫しようとして、不正経理の事実は変わらない。
ここまで事態が進んでは、今更元営業マンに詰め寄った所で
益はない。

例の件は昨日全て義務は果たしたと言うのに……。
騙されたと独りごちる小田切に目もくれず、調査委員会の委員たちは
事情聴取が終わるや否や、すぐに小田切の研究室へと移動する。
彼らは実に精力的に職務をこなしていく。
研究室の前では、異変に気付いた教員たちが、その様子を遠巻きに
眺めていた。

調査委員が出て行ってからも、小田切はソファに座りこんだまま
動くことができなかつた。目は正常に機能しているはずなのに、
周囲の景色を映さない。眼下に浮かぶのは、唯在りし日に小田切が
犯した過ちのみ。

今更嘆いたところでどうにもならないが、あの日の自分を殴り飛ばしたい。
どうしてもっと上手くやらない？
どうして後の禍になることを考えない？

現実を引き戻したのは、一本の電話だった。

「お前の罪、償う時が来た」

公衆電話からの着信だ。それでも声は相変わらずの人工的な物。
ざまあみろと言いたいらしい。唯それだけの為に電話をかけたのか。
それだけで済みますかと、周囲に聞こえない程の音量で小田切は叫ぶ。

「約束は守ったはずだ。どうして裏切った！ちゃんとお前の疑問に答えた
はずだ。どうして研究費のことを！」

「それはSNSに自分の罪を告白した場合だ。お前はそれを無視した。
その報いを受けたのだ。疑問に答えたから、娘は無事でいたんだろ」

「どのみち娘は、加奈のもとにいたから、無事だった。騙したな！」

ツー。ツー。ツー。

そのとき、唐突に気付いてしまった。

(常川が黒幕ではないか?)

そう考えれば説明がつく。
5年前の事件を良く知っていること。
不正資金を調査できる立場に合って、なおかつ自分に被害が及ばない人物。
妻と顔なじみで、携帯も入手が可能な人物。
この研究科等に入出入りして、細工してもおかしくない人物。
全ての手掛かりが此の男を指している。

すぐに学生研究室にいる常川の元へ急ぐ。

「これで意趣返しのもりか？とんでもないことをしてくれたな……。

お前が仕組んだんだろう？そう考えればつじつまが合う。妻とも面識があるし、ずっと傍で俺のことをほくそ笑んでいたんだろう。最近になって大学に来るようになったのも小細工する為だったんだな」

「……お前らがCOEを押しつけたんだろうが。それに俺は今年最終学年だぞ。なりゆきとはいえ、学位くらいは取っておきたいからな」

痲癩を起した子どもを宥めるように、落ち着いた返事をする常川。その余裕ある態度がさらに火を付けたのか、小田切は尚も続ける。

「こんなことをしたところで、今更何も変わらない。ハラスメントに関しては、誰も罰せないし、反省もさせられない。死んだ人間は戻ってこないし、失った時も帰ってこない。お前のしたことは全くの無駄だ」

「何を勘違いしているのか大体分かるが、俺じゃない」

「お前は他に逃げる場所があるから、そう言えるんだ。逃げ場のない人間はそこにしがみつくしかない。……お前みたいなきれいごとだけではやっていけないんだよ」

黙って聞いていた常川は、珍しい生き物を見るかのように小田切が話すのを見ていた。あらかたの主張を聞き終わると、ただ一言ぼつりと言った。

「お前、可哀そうな奴だな」

翌日は、優奈は常川に連れられて、加奈に会いに行った。

望を連れた加奈は、以前よりどこか吹っ切れたように見える。髪型が短くなってきりっとしたせいかもしれない。

「久しぶり。どう、調子は？」

「はい。おかげさまで、小田切とも思い切って別居してからは、何だかすっきりしました」

「望ちゃんがいなくなったって、小田切大騒ぎだったんだぞ」

加奈の膝の上で、絵本を読んでいる望の頭を撫でながら常川は言う。

「大騒ぎって……良く言いますよ。私から望を連れ去ろうとしていたくせに。そのくせ、望がいなくなったと分かってても電話もしようとしなかったんですもの。自分勝手な人だと言うことが良く分かりました」

加奈は小田切が、望を連れて別居した加奈から、何とか親権を奪い取る為に望を連れ去ろうとしたことを話した。

「それで、望ちゃんは一体どこにいたんだい？」

「親切な方が連れて来てくださったんです」

加奈はその日の事を話してくれた。

塾で授業が終わってのんびりしていると、小田切から「望をこちらで預かる」というメールが届いた。確認の為にすぐに電話をかけると、望を義実家で預かると一方的に通告して、切られてしまった。

慌てた加奈が車へ向かうと、天原から電話が入り、塾に小さな女の子を連れた人が加奈を探していると告げられて、急いで引き返したそう。戻ると、スーツを着た若い男が望の手を引いて、事情を話してくれたという。

「この娘さんが、駐車場の車内に一人でいたんです。どうも様子がおかしいので、ドアをあけるとキーが掛かっていなかったのか、すぐに開きました。それで『ママに会いたい』と何度も言っていたので、誘拐の可能性もあると思ひ、差し出がましいかもしれませんが、すぐにそのまま自分の車に乗せて、望ちゃんの持っていたバッグからあなたの場所を探し出したというわけです」

その男は爽やかに笑う。恰好は夜の男だが、良い人そうだ。その車の特徴を聞くと、どうやら義両親の車に乗せられていたようだ。先程の電話での対応といい、小田切が勝手に連れ去ろうとしていたのを了解した上で、協力したのだろう。小田切からいつか望をとられてしまうのではないかと不安で苦しくて、望を抱きしめながら泣いてしまった。つい先頃まで愛人らしき女からの、電話も止むことがなかったのだ。

驚いた男性は、ハンカチを差し出してくれた。清潔感のある男性のハンカチが、小田切と比べて新鮮だったのを覚えて

いる。

望は疲れてしまったのか、さっきまではしゃいでいたのがすっかり眠りこけている。仕方なく移動させる。礼がしたかったので、ささやかではあるが食事に招待した。仕事終わりの天原も一緒だし、誤解されることもないだろう。

「宜しかったら、どうぞ。一週間程気分転換されてはいかがですか？」

そう言われて出されたのが、ホテルの宿泊券だった。大人二人分だ。

「3歳以下の御子さんなら無料で同伴できますし、設備もあるはずですよ。もしお時間があるというのなら、そちらのお嬢さんと一緒に行かれてもよろしいです。相手が急にいけなくなってしまったので、払い戻しをしようと思っていたんです。せっかくなので使ってみてはいかがですか？」

「うわあ、ここ高いホテルじゃないですか？行かないなら私がもらいますよ！」

このまま家にいたら、居場所が知られている以上、またいつ望を連れ去られるのか分からない。もうあの家の人間は信用できない。愛人らしき女にも狙われている今、保育園にも預けられない。仕事もあるし、と心配する。場所は街から程良く離れた海辺で、来るまで一時間ほどの場所。通勤する分にはそれほど大変ではない。ホテルのパンフレットを見ると、子どもを預ける場所もある。

「子どもを預かる場所もありますし、どうでしょう？」

まさに渡りに船。
躊躇しないわけでもない。
タイミングが良すぎはする。
でも断る理由はなかった。

「できすぎているな」

話を聞き終えた常川の感想だ。
優奈もなんだか腑に落ちない。
ちょうど義両親の車に居合わせた。
ちょうど大人二人分のホテル券を持っていた。
うさんくさい。
意図的なものを感じる

「どんなやつなんだ？その男は？」

「すっごく素敵な人。明るくて気さくで。見た目もちろん良いんだけど、まあそれにも増してトークがたつの。話していて全く飽きないわ」

「あと数日で君の処分が決まる。先に大学に知れただけ儲けものだ。今ならやり方次第でダメージを減らすことができる。小田切君、退くのも勇気だよ」

山瀬の忠実なる部下の田淵がアドバイスをしかけてきた。田淵に一斉送信以外のメールをもらったのは、何年前だろうか？山瀬の覚えがめでたい頃には、小田切の事を褒めちぎっていたくせに、現金なものだ。いやもしかしたら山瀬が言わせているのかもしれない。

あの件以来目に見えて機嫌の悪い山瀬に、小田切自身迷惑をかけている負い目で遠慮していることもある。メールも電話でも相談して見たものの、全く返事はない。完全に切り捨てられたと言うことか。

脅迫者に脅されても山瀬の関与を否定したと言うのに、この仕打ち。こんなことなら一蓮托生にするべきだった。小田切は自分の忠誠を悔やむ。

(今辞職してダメージを最小限にするか？それでも刑事罰は免れまい。それに今まで僕がやって来たことは、この職にしがみつ়くことではなかったのか。懲戒解雇処分が出ない限り、粘っていれば、また日の目を見ることもあるはずだ)

小田切に処分が下ったのはそれから数日後のことだった。

停職2ヶ月。
山瀬は管理責任を取って、同じく訓告処分を受けた。
なぜか佐々木の責任は不問。

今回の不正経理事件は、全て小田切一人の責任となり、幕引きとなった。

やはり民間企業と比べると、少ない位だが、小田切にはそれなりに利いた。履歴書から消えない汚点。出世の為には、大きな障害になるだろう。

それでも。
それでも、これで全部終わった。
処分が出て、むしろ小田切はほっとした。

長い休みと捉え、この時間に加奈との関係をはっきりさせる。終わってしまったことは、取り返しがつかない。だが夫婦関係のひび割れはまだ修復できる。前回の騒動で、夫婦関係の歪みで他人を巻き込んだ人間だと思われている醜聞だけでも消すのだ。

家族関係を盤石にしていないから、今回の失態を起こしたとも言える。

修復できれば最上、できなくても望はもらう。
決意して自宅に帰る。

電気は暗く誰もいなかった。
一度だけ通じた携帯電話にかけているが、あれ以降全く出てくれない。
加奈の本気の怒りを感じる。

(もう取り戻すことは出来ないのか……。こういうときこそ助け合うのが夫婦というものだろう。都合が悪いからと言って、捨てるなんて。所詮その程度の人間だったのか)

家の中は荒らされていた。
自宅に届けられた不審な手紙や、保育園に届けられた怪文書まで、机の上に出されている。家探しでもしたかのような、荒れようだ。

(これは、加奈がやったのか?)

心がすさんで望に危害でも加えていたら一大事だ。
慌ててどこかに加奈か望がないかと、探しまわる。

「ようやく会えたな」

振り向く前に小田切の視界は暗転し、その場に崩れ落ちる。

翌日以降、小田切の姿を見た者はいなかった。

「これからどうするんですか？」

ホテルのラウンジで待ち合わせた男と、加奈はお茶を飲んでいて、望もプリンを食べてご満悦な顔をしている。

「しばらく実家に帰ります」

「確か遠方だったとか……」

「ええ。でも小田切の元にはもういられません。望のこともそうですが、一度家に戻った時に、家の中がしっちゃかめっちゃかになっていたんです。例の事件の事に関する書類だけが机の上に乗っていて、それ以外は本当に家探しでもしたかのように。あんな状態のところへ戻るなんて、怖くてできません」

望の事で怒り心頭だった加奈だったが、さすがに不祥事がぼろぼろと出てきた小田切を哀れに思い、一旦家に帰って小田切に一時休戦を申し込もうとしたらしい。しばらく留守にしていたので、掃除をして好物でも作ってやろうと部屋に入ると、そこはカオスであったと。

合いカギはいつも所定の位置に隠してあるので、小田切はいつでも入ることが出来る。家に帰った小田切が気持ちに任せて一人暴れていたとしたら、その矛先は加奈たちにもいずれ向かうかもしれない。

そう考えると、一気に哀れみも、引っ込んだ。それ以降も小田切からは、助けを請いたいのか、よりを戻したいのか何度も着信があるが、気味が悪くて出られない。感情をぶつける相手が欲しいだけなのではと、恐ろしくなると加奈は言った。

「そういうときこそ佐々木さんを頼ればいいのに」

吐き捨てるように、加奈は言う。

小田切と佐々木がしばしば近所で目撃され、近隣で噂の的になっていた。近隣や保育園での保護者の様子がおかしかった原因は、それだったのかと知ったばかりなので、無理もない。周囲の様子がおかしかったのは、余所様の家庭に口を出すのを遠慮していただけだった。別居したのを見て、既に浮気的事实を突き止めたことと判断した隣人たちが打ち明けてくれた。

(あの噂のせいではなかったんだ……)

ほっとすると同時に加奈は激怒した。

当時は塾への妙な電話のせいで疑心暗鬼になって、周囲が敵だとばかり思っていたけれど、敵は小田切一人だったのだ。例の噂だって小田切の行為あってこそ。

思い出して腹が立って来たのか、眉間を寄せて加奈は唇を噛みしめる。

男は静かに相槌を打ちながら、その話を聞いている。

そうしている間にも、加奈の携帯が鳴る。

うんざりした顔で、さっさと電源ボタンを二度押しする。

「自分がピンチの時だけ、助けを求めるなんて、都合が良すぎるのよ」

「失礼します。学内新聞なんですけれど、取材お願いしてもいいですかあ？」

学部生らしい女子が二人程、研究室にやってきた。
皆何事だと彼女たちの説明を聞いてみると、現在学内新聞で夏の心霊
特集の記事集めをしていて、例の開かずの部屋のことが話題になったという。

あの場にいた大学院生が口を滑らせたのだろうか。それとも既に学内では
話題になっていたことなのか。いずれにしろ迷惑なことだ。

「それで、つい最近も小田切先生が開かずの部屋に入って、
行方が分からなくなったと聞いたので、本当か聞きに来ました！」

皆顔を見合わせる。

小田切が失踪して既に一週間が過ぎた。
小田切の両親からの問い合わせで、失踪が分かったが経緯が経緯なので
自分の意思で失踪したと思われていた。
不正経理の件では国税局も動き出している。

これ以上の不祥事は困ると、大学としては失踪の件を外部に
漏らさないようにお達しがでているのだ。
失踪したところで調査を免れる訳ではないが、それを苦に
身柄の拘束を恐れて逃亡したとは考えられる。
いずれにしろ外聞の悪いことであり、既に周囲には知られてしまっ
ているが、勧んで広めて良い話ではない。

「……今現在失踪している人がいるんです。無遠慮に尋ねてもいい
話題ではありませんよ」

ややきつすぎると思ったが、それでもこれ以上詮索されたら面倒なこと
になる。この言葉に、彼女たちは黄色い悲鳴を出して、むしろ喜んだ。

「じゃあ、本当だったんですね。うわあこれ、記事になりますよ。
大スクープです！」

「いや、説明はできないって」

「いなくなったことが本当なら、まずはOKです。それで、こっちが本題
なんですけれど、何年か前にこの研究室で、居なくなった人いましたよね？
あそこの開かずの部屋に入ってから。あれってここの研究室の院生だって
聞きましたけど。本当ですかあ？」

「院生なんて、すぐに居なくなる生き物だからな。誰の事言ってんだ？」

常川が代わりに答える。
答えられないのか、面倒なのかスポークスマンの役割をさっさと任せて
他の院生は自分の持ち場に戻ってしまった。
横に居た別の女の子が、メモを見ながら答える。

「何年か前に、肝試しをしてから、様子がおかしくなって、その後あの
部屋に入って出てこなくなったとか」

「ああ、塔堂のことか。良く調べたなあ。確かにそいつなら、俺が休学から戻ったら、居なくなっていたな。その時誰かがそんなこと言っていた。確かにその頃にそいつの両親からも電話かかってきたから覚えてるよ」

「随分長く、大学いるんですねえ。詳しく教えてもらってもいいですかあ？」

「長く」と言う言葉に若干反応した常川だったが、まあ昔のことだとして話し出した。

その学生は数年前に山瀬研究室の大学院生だった。
お調子者で周りの反応を読むのが上手い学生。
そいつがある日話題作りの為に、一人で殺人現場に肝試しに行ったんだ。

当時この辺りでは連続殺人事件が起こっていてな。
そのうちの 하나가、ある別荘での集団殺人だった。
期間はそれほど近くない。
手口もバラバラ。ただ殺される理由が見当たらない人間ばかりが殺されている点で、共通していた。

殺される前に何か異変が生じていた訳でもなく。
人間関係のしがらみも、周囲の証言では見当たらない。
人生で不遇な状況下にあったわけでもない。

だから警察もそれぞれが通り魔的な単独犯の場合と、模倣犯を含めた複数による犯行とで区別して捜査していた。

で、そいつがそこから帰って来てから、様子がおかしくてなった。
異常に怯えているんだよ。誰かに見られている気がする。
そんなことをいつも言うようになった。
でもそいつがお調子者っていうのは皆知っていたから、雰囲気を出して、怖い話っぽくしたがただけなんだろうと。
だからあまり皆気にしなかったらしい。
気が引きたいだけなんだと、そう思っていたという。

そしてあの部屋に入った -。

「本当にそれ以降、姿が見られないんですか？」

「それは本当だ。アパートにも帰っていないようだと言われ、両親から大学に問い合わせがあったからな」

「それでその人は……」

「退学になったかな？ 休学届を期間全部使うまで待っていたんだが、結局帰ってこなかった。ご両親もいないのに授業料を払っても仕方ないからと、退学したよ」

「その人は未だに見つかっていないんですか？」

「さあな休学してから退学したからな。そこまでは知らん」

これだけの情報でも彼女たちにとっては満足するに値するものだった

らしく、ほくほくと帰って行った。
一方で機嫌よく話していた常川は、憑かれたかのように物思いに
ふけていた。

「俺はあの部屋が、5年前のハラスメント事件の鍵になっていると思っている」

新聞部の学生達が帰って三十分ほど経過した頃、常川は優奈以外いなくなった研究室で、ぼつりと言った。

怪談に登場する院生が失踪したのも、ハラスメント事件で土岐等が入院する直前のことだという。
常川はその学生も良く知っていた。

今回小田切に5年前の事件を公表せよと迫った犯人も、開かずの間に娘がいると、詐称した。
これは偶然なのか、あの部屋であることに意味があるのか。

「あの当時うちの研究室に所属していて、ハラスメントに関わっていない訳がない。加害者か被害者かは分からないけれど、そういう雰囲気だった。あいつはどっちにもなる可能性のあった奴だ。だからもし被害者だとしたら、いなくなった理由も……」

「嫌がらせから逃れる為に、失踪した可能性がある」と……」

「普通なら、そんな状態なら退学した方がいいだろう。借金をしているわけでもなし。あえてその道を選んだのだとしたら復讐に人生を賭けることもとも考えられないわけでもない。……いや最悪の場合、いやさすがにこれはあり得ないか」

常川が最後に漏らした言葉の意図は分からなかったが、もしその人物が復讐に回ったのだとしたら、説明が付く気がした。

「じゃあ、その人が失踪してどこかにいて、小田切先生を脅していたと言うんですか？ でも、流された噂では、土岐等さんと芹沢さんのことしか聞いていませんでしたよ？ もし復讐したいのなら、自分にしたことへの言及をまずは要求するんじゃないですか？」

「犯人は5年前の事件の真相を知り、その上でその内容を広めたがっている。この条件に合う人間の一人に過ぎないというだけだ。思った以上に闇の深い事件かもな」

小田切への攻撃は単なる序章にすぎないのかもしれない。
常川は空恐ろしい宣託をする。

「ま、なんにしろ、成功だったな」

急にくだけた口調で小田切は言う。

「？」

不思議そうな顔をして見せると、常川は馬鹿にした目つきで言う。

「まだ分からないのか？ この怪談噺を作ったのは俺なんだよ」

「はあ？」

驚きが怒りに変わる優奈。

それではさっきの取材に常川オリジナルの捏造話をしたということか。
瑣末な記事だが、それでも嘘は駄目だろう。
優奈が咎める視線を寄こすと、常川は慌てて否定する。

「嘘じゃない。本当にあそこの部屋に入ってから、そいつは消えたんだ。
それだけだと皆の記憶から忘れられるだけだ。だから怪談話に仕立てて
忘れられないようにしたんだよ」

「怪談として残しておけば、ずっと忘れないで伝わって行くだろ。
そうしたら誰かが真実を解明しようとするかもしれない。
そう思った。例え自分が解決できなくても」

常川は満足そうに、そう告白した。

小田切が失踪した分増えた仕事は、山瀬がカバーすることになり、山瀬が研究室に顔を出すのは一層減って行った。

「山瀬先生は、本当に良い先生ですよ。あの事件の事にも触れず、黙って小田切先生の尻拭いをしてあげるなんて。なかなか出来ることじゃないですよ」

常川は呆れたように言う。

「お前は本当に山瀬を気に入っているんだな。老け専か？」

「はあ？ 変なこと言わないでください。私は尊敬しているだけです。そのために何年もかかってこの大学に入学したんですから。それから指導教官を呼び捨てにしないで下さい」

「お前なあ。あまり理想を押しつけると、後で泣きを見るぞ」

「常川さんみたいに、理想も何もない人間の方が可哀そうですよ。尊敬する人もいないでしょ？」

「俺は俺を尊敬しているからな」

心底うざったそうに常川の相手をする優奈。当然研究室での会話なのだが、誰も会話に入ってこようとはしない。小田切失踪当初は、大いに動揺していた研究室だったが、小田切不在の研究計画を新たに練り直したのか、今では滞りなく全ての業務が進んでいる。

偶に誰かが、「今頃どうしているのだろうか？」と呟くくらいだ。そんな中、常川は独自に小田切の行方を探していた。

「別に小田切の為ではない。あくまで加奈さんの為だ」と嘯く。

小田切の失踪以来、加奈はすっかり自責の念に苛まれている。自分が冷たくしたせいだと落ち込み、ご飯も喉を通らない。幾度も着信があったのに、無視してでなかった。そのせいで小田切は将来を悲観して自殺しているんじゃないかと。義両親ともそのことで揉めていると、零していたと常川は言っていた。

居場所を知っていそうな人間の第一候補は、佐々木だった。あれだけ一緒に居て、佐々木は不正経理の責を問われないだけでなく、今や小田切の代役まで果たしている。怪文書の記述が正しいのだとすると、佐々木は5年前のハラスメント事件にも大部分で関わっているはず。小田切が自分の意思で失踪したにしろ、脅迫者に攫われたにしろ何かを知っていると考えるのが自然だ。優奈も常川の読みには賛同する。

だが何度聞いても佐々木は知らないと言うし、むしろ公表された

小田切と犯人の会話のせいで、迷惑を被っていると主張したらしい。

「脅していた奴の目的は果たしたんだ。これ以上小田切に危害を加えたところで、リスクしか生じない」

心当たりを全て探しても小田切が見つからず、半狂乱の加奈に、常川はそう言って慰めていた。縁もゆかりもない土地で、一から人生をやり直しているのなら、見つけようがない。探すだけ探したら、後は小田切が連絡する気になるのを待って、祈ることしか加奈はできなかった。

その数週間後、小田切は発見された。他県の山奥深く。登山姿のまま山道に倒れていた。

登山客に発見された遺体は、鑑定によって小田切のものとされた。死因は中毒死。山に自生している有毒の植物を煎じた茶が、水筒に入っていてそれを飲用したことによる中毒死だった。

遺書もないが、争った形跡もない。一連の職場での不祥事や、家庭問題でも悩んでいたとの証言から、自殺と断定された。

時は流れ、あの自殺した学生のように人々の記憶は曖昧となり、大学は次の候補者を探した。下で待機している候補者は山ほどいる。その中で結局選ばれたのは、山瀬研究室OBの佐々木が後釜に座った。既に学内の同じCOEの助教でもあり、山瀬の強い推薦から手続き上はさしたる障害もなく就任した。

佐々木は山瀬教授の下修士、博士と学位を進めてきた女性で、着任と同時に、ハラスメント相談員を兼職することとなった。心理士ではないが、大学内について詳しいと言うことで抜擢されたらしい。

アカデミック・ポストを狙っているポストドクはいっぱいいるので、佐々木は相当運が良い。後継者を迎え、時は何事もなかったかのように流れていく。

新緑の季節は深まり、すこしずつ季節は巡っていく。新たな季節が始まろうとしていた。

老人が柄杓と桶を、墓場が続く細道を歩く。
いつものように既に墓には花が生けてあり、焼け落ちた線香の残骸が
残っていた。墓の周囲の草も綺麗に抜かれている。
また来てくれたのだなど、老人は頬を緩めた。

その日の夜一。

明るすぎる太陽が眠りにつく頃を盛りとする、夜の社交場では、
今日も嬌声がそこかしこから聞こえる。
焔はオーナーだが、店が忙しかったり、昔の馴染みから指名されれば、
フロアに顔を出すこともある。

「ねえ、前のどうだった？ 好評だった？」

グラスで乾杯をした後に、女は急かすように問う。
当然答えは、一つしか認めないつもりだけれど。

「ええ。大好評でした。やはりサヤカさんに頼んで良かった」

目をじっと見つめて言うと、女は頬を染めて下を向く。

「そっか。良かった」

気合いを入れた服が、通り慣れた客でないことを示している。

「ちょっと電話が。失礼します」

「女の人？」

「まさか仕事の相手ですよ」

むくれるサヤカに苦笑しながら、焔は代わりにと新顔を紹介する。

「彼は元々営業畑にいたのを、僕がスカウトしたんです」

慣れない仕草で名刺を渡したのは、紛れもなく大学の調査委員会で
小田切を告発した男だ。今は焔に誘われ、夜の繁華街で第二の人生を
歩んでいる。
情けないだの散々罵られた顔は、繊細な顔として、女性客からの
人気も上々だ。

サヤカも直ぐに気に入ったらしく、すぐに隣に座らせた。
二人が話し始めるのを見届けると、焔は自室へ移動した。

「上手くいきましたね」

自室のソファに座って、ナンバーを確認するとかかって来た
電話は、天原からだった。
誰もいない自室だが、念のため声を潜める。
自室に営業スマイルは必要ない。

本来の仏頂面に戻る。

「お前の番はこれからだ」

最小限の一言で切ろうとすると、珍しく天原は食い下がる。

「あの人には会わせてくれないの？」

「必要が無い。必要以上の接触はトラブルの元だ」

「……そういうことにしておきましょう」

「油断するな」

「はいはい。そっちこそ盗聴器の回収は終わったんでしょうね？」

「当たり前だ」

押し殺したような笑い声が、なんだかむず痒くて、焔は今度こそ携帯電話を切った。

そして天原と初めて会った時のことを思い出す。

ただ天井だけ見ていた頃の面影は、今はない。

口には出さないが、焔は天原の強さには一目置いている。

(あれが笑うようになるとは)

感慨深いものを感じながら、ポケットに携帯を仕舞うと待ち人に会いに向かった。

今日もまだまだ夜は長い。

その日も後援会を回っていると、いつもと同じく十時までかかってしまった。選挙を控えたこの時期は、東京での業務の忙しい父親の名代として、矢越が代役を買って出ることは恒例となっていた。もちろん将来の来るべき立候補も視野に入れている為、自分の名前を売ることも忘れない。自分にとっても、父親にとっても重要な仕事だ。

勧められた酒のおかげで、良い具合にほろ酔い気分で事務所に帰ると、最後まで残っていたのは、矢越と同じく秘書の田勢だった。矢越よりも2歳ほど年若い田勢は、民間企業から移転して来た変わり種だ。その分仕事を覚えようと人一倍仕事をしている。

必然的に一緒に過ごすことが多くなった。仕事が遅くなった時には、矢越が田勢を駅まで送ってやっている。仕事熱心な田勢は、そんな時までも仕事の話だ。ほろ酔いとは言え、自身もワーカホリックな矢越はこの会話すらも楽しめる。神経質で仕事熱心だが、仕事以外では抜けているところもあり、一緒にいるのは楽しい。歳が近いせいかもしれない。

今も荷物を取りに来たついでに来ただけのつもりが、他愛もない話題で話し込んでしまう。携帯が鳴らなかったら、もう少し続けていただろう。着信を告げるメロディに、急いで相手を確認すると芽生だった。

半年後の結婚式の衣装合わせについての相談だ。

矢越にとっては瑣末なことに過ぎなかったが、女性にとってどれほどの意味があるのか分からないほど無知ではない。次の日曜日に、ウエディングドレスの衣装合わせに行くことを約束して、電話を切った。

「……婚約者さんから、ですか？」

「ああ。結婚式の衣装合わせに付き添ってさ。面倒だけれど」

そう言いながらも矢越は嬉しそうだった。ドレスなんて全部似合うに決まっている。それよりも結婚すると言う事実の方が重要だった。

「結婚、本当にするんですか？」

矢越の言葉を遮るように田勢が尋ねる。

「……うん？ ああ。当たり前だろ」

「澄真さんは、本当にその人のことを知っていますか？」

「矢越さん」と名字で呼ぶと、父親と混同して紛らわしいので、事務所では下の名前「澄真（とうま）」と呼ばれている。

「……何のことだ？」

「もう一度よく考えた方がいいかもしれません」

「お前が芽生の何を知っているんだ？」

思わず怒鳴りつけてしまった。職場で滅多に声を荒げる事などないのに。だが芽生は婚約者だ。婚約者を侮辱されて黙っている男などいるだろうか？

「……一般論ですよ」

だが田勢は少しも怯まない。

「僕ももうすぐ結婚するんです。式は挙げませんがね」

先程までの朗らかな雰囲気はどこへやら、田勢はそれだけ言い捨てると、「失礼します」とやけに他人行儀な科白を残して、さっさと帰ってしまった。

いきなり途切れた歓談の場に、矢越は気分を害したというよりも、狐に包まれた気分になる。田勢はあまり感情を表に出すタイプではないのだ。いやそれ以上に、結婚するという報告に驚いた。全く浮いた話がなかったのに。色々な意味で衝撃的で、ふわふわとした頭のまま、矢越は帰路についた。

帰宅してメールをチェックすると、芽生から2通メールを受信していた。衣装合わせが楽しみだということ。最近仕事で忙しくて会えないから、結婚して毎日会いたいということ。絵文字を使った文章に、添付ファイルで今日作ったという煮物の写真も送ってくれている。

(後悔なんてするはずがない)

矢越は改めてそう思った。

田勢も気まずかったのだろう。
翌日、田勢は自分と他のスタッフ一人で残業をすと言張り、半ば強引に帰るよう押し切られた。
納得しにくい理由だが、素直にその日は早めに帰ることにして、矢越は久しぶりに芽生の家に行くことにした。

芽生の家は事務所のある街の中心部から、歩いて三十分ほどのマンションで独り暮らしをしている。
芽生は今月から既にアカデミックのポストに着任し、引き続きCOEプロジェクトに参加しているのでそこそこ多忙だが、事前にスケジュールが決まっている。
不規則な矢越のスケジュールに彼女が合わせてくれたほうが、効率が良いので、今日の急な来訪にも芽生は嫌な顔をしなかった。

「初めて作るからあんまり自信がないけれど、どうぞ！」

謙虚なことを言いながらも、言葉の調子だけは威勢が良い。
「悪くないよ」と返す。大げさに喜んだ芽生は、そのまま最近あったことなどをとりとめなく話し続けた。
それに織り交ぜるように、さりげなく尋ねてみる。

「……芽生は、本当の俺のことを知っている？」

「うん！？ 何それ？」

出会って三年。お互い交友関係は広いので、それを辿って紹介されているうちに知り合った。初めはノリがあって一緒にいると楽しくて。何度か会ううちにどちらともなく二人だけで会う回数が増えていった。

何事にも手を抜かないその姿勢にも共感できた。
芽生は、大抵のことは要領よく何でも人並みにこなす。
だから料理も決してまずくなることはない。

「知っているよ。それとも何か秘密でもあるの？」

「そうじゃないけれど。……芽生はどうなんだ？」

「実は……」

いきなり深刻そうに俯く芽生。

「まさか……」

「なんてね。何もないよ。残念だけれど。毎日あったことを話しているじゃない」

やはり田勢は自分を妬んでいるだけだったんだ。安堵の余り芽生を抱きしめる。
鼻先をかすめる髪からは甘い香りがした。

ピピピピピ。

芽生の携帯電話が鳴った。芽生は送信相手を確認すると、隠すように携帯を無造作にハンドバックに突っ込んだ。

「ごめん。学部の子。さっき話したでしょ？ 私今学期から学生のアラサー相談員を担当しているの」

先ほどまでの雰囲気はどこへやら、芽生はさっさと外出の支度を始める。

「それでもこんな時間にまで携帯電話で、相談をもちかけるなんて非常識じゃないか？」

時刻は既に十一時を指そうとしていた。

「本当にごめんなさい。緊急なの。この埋め合わせはまた今度」

その後姿を見て、矢越は芽生の将来どんな教師になるのか見える気がした。

芽生のマンションで食事をしてから数日後。

いつもと同じ朝。
変わらない職場。
それが一変した発端は、田勢の挨拶からだった。

「おはようございます。先生が応接室でお待ちです」

いつも通りの澄ました声で、田勢が要件を告げる。
今でも矢越は忘れない。
ドアの向こうに覗いた世界は、不信と悪意が渦巻く世界への入口であったと。

入室して早々に、父親は開口一番切り出した言葉に、
矢越は驚いた。

「お前は芽生さんがどういう人間かちゃんと分かっているのか？」

意味が分からず戸惑っていると、父親はドアを開けて田勢を
部屋に呼んだ。数日前の帰りに田勢が言った言葉が蘇る。

「本当にその人のことを知っていますか」

芽生が何をしたと言うのか。
芽生は自身が職業を持っているので、事務所の仕事を手伝うことは
稀だ。それでも結婚したらきちんと支えてくれるだろうし、
そう信じている。それが不服とでもいうのか。
矢越の不安を余所に、田勢は予め用意をしてあったUSBメモリを
パソコンにセットする。

音声だけが再生された。
内容は二人の男による質疑応答で、二人の役割は固定していた。
答える役割の男の声で語られるのは、一人の女子院生に対する
ハラスメントの数々。
ハラスメントの加害者であることを認めた男は、他の加害者の一人
として芽生の名前を挙げた。

「こんなの唯の中傷ですよ。誰だか知らないけれど、この男が自分だけ
罪を被るのが嫌で、無理やり芽生を巻きこんだに違いない。こんな
酷いことをする訳がない。お父さんだって芽生に会ったことがあるの
だから分かるはずですよ。だから結婚を許してくれたんでしょう？」

「賢く立ち回れるし、外見も悪くない。いささか表に出過ぎる
嫌いはあったが、お前の選んだ相手だし無難な選択だと思ったんだが。
これは良くない。意味は分かるな？」

椅子のアームにおいた指を、人差し指だけ上下に動かしている。
苛々している父の癖だ。
相当不機嫌なことを、矢越は理解した。

「……本当だったとしたら、確かに問題です。でもそもそもこれはどこから手に入れたんですか？ 信頼できる情報なんですか？」

父が合図をすると、田勢が小さな白い封筒を応接机の前に置く。
父親の東京の議員会館に届いたと説明を受ける。
封筒を宛名だけで、差出人は書いていなかった。

「これだけではない。他にもある」

父の言葉を受けて、田勢が無言のままパソコンを操作すると、
個人用ブログの画面が出てきた。
今聞いたばかりの、5年前のアカハラを追求するのを目的とし、
その細かい経緯が掲載されている。
加害者として告発されている小田切、佐々木、芹沢の犯した
ハラスメント行為とその経緯を、時系列を追って書かれている。

「このブログにも、同様の音源があり、誰でもダウンロードできる
ようになっています。ただしネットの方は、個人名や大学名などは
音声処理されております」

名誉毀損で告発されることを恐れて、ぎりぎりの線で
告発しているのでしょうと、田勢が説明する。

「インターネットの情報だけでは、怪しいものですよ。偽の情報を
ネットで流す愉快犯だっています。これだけで決めつけるなんて、
お父さんらしくありませんよ！」

「そこまで言うなら、お前が嘘だと証明しなさい。それが出来るまでは
結婚は延期だ」

「選挙前にご迷惑をおかけして申し訳なく思います。ですが、
いくらお父さんでも僕の結婚にまで口を出されるのは……」

「選挙のことはこの際いい。本当だったとしても、反省している
ならそれで良い。過去ではなく、今がちゃんとしていれば何も
恥じることはない。だがもし真実かつ反省もしていないようなら、
私は……その人間を心から軽蔑する」

父親は真っ直ぐな性格故に、若い頃は世の中の汚れた部分を受け入れ
られず、随分と苦労した。年齢を重ね、ある程度の折り合いを付けられる
ようになって、根っこの部分は変わらない。
こんなに感情的になっているところを見るのは、久しぶりだ。

「真実かどうかは問題じゃない。こんな噂が流れること自体が
問題なんだ。結婚したいのなら自分で解決しろ」

幸せから一転、矢越は窮地に立たされることになった。
今日は国会議員の父親自ら後援会回りをやるので、付き添う必要が

ある。父親の監視の下、その音源について触れられないかびくびくしながら後援会回りをした。

いつも正々堂々と生きてきた矢越にとって、後ろめたい気持ちで他人に接するだけですっかり疲れ切ってしまった。

家に帰っても父親がいると思うと憂鬱で、事務所で伸びていると、田勢が帰って来た。

「今日も残業か？」

「ええ。やることはいくらでもありますから。それよりも家に帰ったらどうですか？ 久しぶりの親子水入らずでしょう」

「いいよ。あんな話聞かされた後じゃ、水入らずも何もない」

「そんなに気になるのなら婚約者さんに、直接尋ねればいいのか？」

「明日会う予定だから、その時に聞くよ」

「信じてはいらっしゃらない？」

「そうじゃない。ただの中傷だ。そう思っている。その後の処理だよ。自分のことならともかく、他人の事だ。どんな背景があるか、どんな考えをもっているのか。そこから始めないといけない。この忙しい時期に。タイミングも最悪だ」

珍しく愚痴を吐く矢越に、目を丸くする田勢。
その顔を見て、何事か思い出した矢越はバツが悪そうに謝る。

「……この間は悪かった。田勢はあの音源の事知っていたんだな。それで俺に忠告してくれていたんだ。知らなかったとはいえ怒鳴ったりして悪かったよ」

「いえ。お気になさらず」

機械のように、作業を開始する田勢。
こいつは本当に感情がない奴だな。
そういえばもうすぐ結婚すると言っていた。
そのことを尋ねると、少し恥ずかしそうに「そうです」と言った。

「相手は誰なんだ。俺の知っている人か？」

「秘密です」

「なんだよ。教えてよ」

友人同士でふざける調子で詰め寄ると、田勢は言った。

「また前と同じ失敗は繰り返したくないんですよ」

何かを決意したかのように田勢はそう言った。

待ち合わせの時間に芽生のマンションに行く。
元気に「は～い」と応答すると、すぐに扉を開けてくれる。
芽生の顔が覗くと共に、シチューの温かな匂いが鼻に届く。
いつもと全く変わらない快活な様子で、椅子を勧める。

てきぱきとテーブルをセッティングする手に迷いはなく、
どこにも疾しいところがあるとは思えなかった。

(やはりあの噂はデマじゃないのか?)

昨晚、自宅で確認したあの音源の内容を思い出す。
芽生と二人の男子学生が一人の女子学生に、嫌がらせをしていたこと。
中でも芽生は、彼女の持病を理由に強圧的な態度をしていたこと。
甲斐甲斐しくシチューをお椀によそっている芽生が、そんなことを
するとはとても思えない。普段から子どもが好きだと言ったり、
かわいらしいキャラクターが好きな芽生に、そんな一面があるなんて。

だがわずか数週間前に出来たばかりのブログの閲覧者は
急ピッチで伸びていて、何者かの意図を感じずにはいられない。
少なくとも芽生を公然と非難しようと憎む人間は、確実に存在する。

質問自体が芽生に失礼な気すらする。
さっさと質問を終わらせて、解放されたい。
芽生は笑い飛ばしてくれるはずだ。
それともそんな酷い中傷を受けたことに、泣いてしまうか。
矢越は芽生が否定した時に、どう対処するかだけを考えて。

食事の用意を手伝い、一緒に食卓を囲む。
相変わらず料理の腕は確かだった。
おいしいし、見た目も悪くない。
食事を終えて、食後のコーヒーを飲む。
とりとめのない話をしては、笑い声を上げる芽生との空間。

この雰囲気壊さないように、と矢越はあくまでさりげなく
尋ねる。

「昨日ネットで妙なページを見つけてね。君の知っている人の事が
出ていたんだ」

「ふうん」

芽生の反応を観察するが、特に異変はない。
普通に目の前のクッキーを摘まんでいる。
その様子にほっとしつつ、尚も矢越は押す。

「ちょっと一緒に見てくれないか？」

返事を待たずに、矢越は自然な動作でアイフォンを鞆から取り出し、

昨夜見たあのサイト画面を呼び出す。
またもや閲覧者数が飛躍的に伸びている。
芽生の方に画面を向けて、中身を確認させる。

芽生は真剣な面持ちで画面をスクロールするが、その表情からは何も読みとれない。熱心に見てはくれているが、感想は言わなかった。矢越も感想を聞くのが、芽生の気持ちを知ってしまうのが怖い。

芽生の気持ちを聞かないままに、矢越はあらかじめmp3に落としておいた音源を再生する。
念のため後日ブログから削除されないように、デスクトップに移しておいたのだ。
一緒に聞くのは心苦しかったが、生の反応を知りたかった。

芽生は自分の名前が出た時だけ、小さな声で「え」とも「あ」ともつかぬ半分ため息のような声を出していたが、取り乱すことはなかった。それが余計に緊迫感を生み出す。

「……これは本当の事か？」

「嘘のところと、本当のところがある」

矢越の質問に、極めて冷静に芽生は答えた。
大声で取り乱されたりはしなくて、ほっとした。
落ち着いて話し合うことが出来る。

「本当のところは、一人の学生、この芹沢君が女子学生をいじめていたこと。その時に仕事を押し付けたり、病気のことをからかっているのは見たことがあるわ。これだと私が言ったことになっているけれど」

「じゃあ嘘の部分は……？」

「私と小田切君の部分。私と小田切君は見ていただけなのに、一緒になって土岐等さんにひどいことをしたみたいに言われてる。5年も前の事件だから、証拠を出せと言われると困るけれど」

「じゃあどうして見ていた時に、止めなかったんだ？ そうしたらこの女子学生の病気も悪化して死ぬことはなかったんじゃないか？」

「それは、確かに悪いと思っているわ。……でも芹沢さんという人は本当に怖くて、私も小田切君もいつも怖がっていたの。もっと勇気を出せばとは今でも悔やんでいるわ」

(ほら、やっぱり！)

矢越はほら見ると、父親と田勢の顔を思い出しながら思った。

「やっぱり、芽生はひどい誤解をされていただけだったんだな。ごめん。こんなのを聞かせて。それにしても芽生は大人だな。」

こんなの突然聞かせられたら、俺だったら怒り心頭だよ」

「知っていたから」

「知っていたって？ 前にも誰かに教えてもらっていたのか？」

「うん。大学でも一部の人は今でも噂しているもの。この録音は小田切君が脅されて言わされたもので、信憑性がないものなのに。もう5年も前の話だから、本当の証拠も、嘘の証拠もないから言いたい放題になってきているみたい」

そう言って芽生は顔を曇らせた。

「それは酷いな……。小田切君とやらは、誰に脅されて言わされたんだ？」

「分からないって。電話がかかってきて脅されて、録音されたものだから。犯人とは面識がないって。……。それに犯人探しはいいの。こっちが騒ぐのが面白くてやっているのだから。それに一度ネットに流れた以上、全部回収するのは難しいわ」

胡乱な瞳で机の中央辺りを見ながら、努めて冷静に話す芽生の目には水滴が溜まっていく。

「そうか……。大変だったんだな。ごめん、気付いてあげられなくて。この一緒に嫌がらせをしたって言われている小田切君とやらと、力を合わせてなんとかできないのか？」

「つい最近亡くなったわ。自殺だった。三人の中で生きているのは、もう私一人。独りではどうしようもなく。しかも今私、学生アドバイザーも担当しているから、会議の時にはデマとは言え肩身が狭い思いをしているわ」

「俺、何か助けることできないかな？ こういう時に助け合ってこそ夫婦ってものだろう？」

そういうと芽生はようやく笑顔を見せて、嬉しそうに言った。

「ありがとう。でも気が早いよ」

少し照れて、矢越は頭をぼりぼりと書く。

「とりあえず親父には、芽生が無実だってことは言うておくよ。他にも何か考えついたら、やってみる！ だから芽生も選挙とか気にしないで、どんどん頼ってくれよな」

芽生は答える代わりに、コーヒーカップにコーヒーを入れると、それをグラス代わりのように前に掲げた。

「疑いの晴れた記念に、乾杯！」

いたずらっぽく言うと、矢越もそれに便乗する。

「仲が深まった記念に、乾杯！」

そういうと、二人は微笑みながらカップを互いの顔の前でぶつけた。

いつもはそのまま夜遅くまでいるが、その日の矢越はコーヒーを飲んで三十分もすると帰ると言い出した。芽生は「聞くこと聞いてもう用済みってわけ？」と憎まれ口を叩きながらも、笑って許してくれた。

事実明日にでも東京へ帰ってしまう父に、矢越はどうしても今日の成果を報告したかった。

家に帰ると、父親は東京へ帰り支度をしているところだった。間一髪間に合った。人払いをすると、矢越は父親に芽生への疑惑は濡れ衣だったことを誇らしげに報告した。

だが父親は、「弱いな」と答える。

「どういう意味ですか？」

「本人の口からやっていませんと聞いたからと言って、信じる人間なんてお前くらいだ。他の人間からも証言を取ってこい。できれば証拠が欲しい」

「しかし、5年も前の証拠をどうやって……」

大学は人もモノも入れ替わりが激しい。父親の予想外の言葉に、矢越は怯んでしまう。

「前にも言った通り、私は元々議員の世襲と言うのは好きじゃない。お前がどうしてもというから地盤を譲る候補の一人にはしているが、見込みがなければ直ぐに他の有能な人間に任す」

評価されるどころか、自分の能力を危ぶまれてしまった矢越は、項垂れながら父親の後ろ姿を見送った。父はコネ、金、地盤が何もない状態から、自力で国会議員まで登りつめた男だ。それを尊敬しているし、近づきたいと思っているが、その意思の強さと実行力を目の当たりにすると、やはり自分なんかの志は低いのではと度々卑下してしまう。

その晩矢越は、父に課された新たなる課題にどう立ち向かうかを考えつつ、眠りに落ちた。

矢越の車が発進した音を確認して、芽生は急いで服を外出用に着替える。もう一度窓から矢越の車が居ないことを確認すると、外出用のハンドバックを手に、夜の街へと消えた。

「また例の客です。オーナーそろそろ……」

その客について、従業員から報告を受けるのはこれが初めてではない。新人が連日指名をとれるのは喜ばしいことだが、この客に限ってはそうではない。ただ会話を楽しむだけではなく、何やら熱心に口説いており、新人は明らかに嫌がっている。

当初はまだ新人が業界に慣れていないだけと、あしらい方をアドバイスしようと先輩従業員が会話に耳を澄ませて、事態が発覚した。

犯罪の証拠をもみ消せと迫っているのだ。

周囲に配慮して核心的な言葉は使わないが、新人にも確認して分かった。分かって以降は、他の先輩従業員を付けようとするのだが、指名料を支払ってでもこの新人を指名する。それで今日という今日は断固たる態度を取らねばと、以前から相談していたオーナーの判断を仰いだという訳だ。

「そろそろ頃合いだな……」

「はっ？」

「終業後、彼をオーナー室に呼んでくれ」

その日も、芽生に不正経理の証拠を取り下げるように懇願され続け、いい加減疲れた晴人が、オーナー室に控えめなノックをした時には、時計は既に翌日になっていた。

「晴人です。失礼します」

「ああ、待っていたよ。とりあえず座って」

恐縮しながら座る晴人に、焔はウーロン茶を勧める。

「どうだい。少しは仕事に慣れたかな？ 前の仕事とは大分勝手が違うと思うけれど」

「はい。皆さん親切にして頂きますし。お客さんも良い方が多いので、仕事は楽しいです。本当に……拾って頂いて感謝しています」

この仕事を始めるまでは、晴人は自分に自信がなかった。がんばっているのに、認めてもらえない。正義感は融通の利かない詰まらない奴と蔑まれる要因となり、一生懸命が空回りした拳句の口下手ぶりは、要領が悪い奴と評された。それが今では、全て長所に置き換えてくれる。純朴で嘘が付けないから、安心して遊べると客や先輩が言ってくれるので、それは給料以上の価値を持った。

「それで、どう？ 佐々木芽生はまだしつこく証拠を渡せと詰め寄って来ているみたいだけれど」

「向こうも相当焦っているみたいです。大学内での調査も着々と進んでいるようなので、何とか証拠を揉み消したいのでしょう」

「もう少し引き出させてから……処分する。それまでは頼めるかな？」

焔が唇だけで笑みを浮かべて、頼む。
もちろん答えは決まっている。晴人が焔に否ということはありません。

「はい。もちろんです」

「仕上げはこちらです。君はただ僕の言う通りに動けばいい」

ともすると傲慢にも聞こえるその言葉も、恩人の唇を借りれば、頼もしい響きに変換される。晴人はオーナーの計画に寄与できることを、誇らしく思った。

気が付くと、朝になっていた。
一晩中考えるつもりだったが、あっさりと寝入ってしまったらしい。

悔やんでも仕方が無いので、朝になってクリアになった脳で、
矢越はまずは仕事に専念する。
仕事も疎かなようではますます能力を疑われる。
大きな失敗など今までしたことはないが、いつも以上に矢越は
仕事に集中した。

仕事を終え、程良く回転している頭のエンジンが温かいうちに、
矢越は5年前のアカハラ事件について考えた。

アカハラの事実確認としては、大学のハラスメント相談室が
最適だろう。だが相談の機密を守る場所なので、情報提供を求めるのは
不可能に近い。それに芽生本人に知られてしまう可能性もある。

一番いいのは、あの音源で答えていた張本人である小田切に、
真偽を問うことだが、彼はもう鬼籍に入っている。
こういった方面では素人の矢越は、早くも壁にぶち当たってしまった。
どうしたものかと悩んでいると、母親が自分と呼ぶ声がする。

「澄真さん、お手紙が届いていますよ」

母親が夜食と共に、持ってきてくれたのは、何か固いものが入った
白い封筒だった。

「なんだこれ……」

表面に書かれていたのは自分の名前だった。
中を開けるとCD-ROMが出てきた。
どこにでも撃っているシンプルなタイプだ。
そっとパソコンにセットすると、中から出てきたのは
芽生が誰かと話す会話だった。

会話の内容から、相手は亡くなった小田切らしい。

「今更バレたら困る」
「せっかく金持ちになれるのに」
「勝手に死んで、こっちこそ迷惑……」

責任転嫁。
他人を利用価値で押し量る。
散々自分勝手をした挙句の被害者意識。

数分聞いて、もう電源を乱暴に切った。
こんなに不快な音源は初めてだ。

死者を罵倒し、保身に終始し、自分を金づるとしか見ていない。
この言葉は、本当にあの可愛らしい芽生の唇から生まれたもの
なのか。

もっているCD-ROMにも複製すると、封筒に入れて、芽生のマンションの住所を書く。中には一枚だけメモ用紙に、「この会話は何だ？」とだけ入れ、翌朝一番に郵送した。

それからしばらく矢越は芽生にメールすら返事を寄越さなかった。芽生。あいつは一体何なんだ？ 田勢の言うとおりの芽生の本性をまるで分かっていなかった。

矢越は芽生の正体を調べることにした。まずは興信所に頼む。できれば自分の力で調べたいが仕事は今は正念場だ。ここでいい加減な仕事ぶりしたら、父の言うとおりの今後に関わる。まずは普段の生活を維持することが肝要だ。

まずは小田切と、死んだ芹沢について調べることにする。ネットで調べてみても、大した情報は得られない。生きた情報を得るにはプロを雇うしかない。外部には漏らしたくないので、そこは大いに葛藤したが、仕事があるので個人で調査するには限界がある。思い切って決断した。

芽生との関係を一週間後の調査結果待ちにした矢越は、この一週間を選挙に捧げることに努めた。

「申し訳ありませんが、個人情報につきお答えすることはできません」

判で押したような想定内の反応に、調査員はやはりと大人しく引き下がるしかなかった。

5年前のアカハラ事件を探る為に、ハラスメント相談室に来てはみたものの、全く埒が明かない。典型的なお役所仕事だ。もっとも個人情報保護に厳しくなってきた昨今、そんなにすんなりいくとは期待していない。

当初の計画通り、当時の関係者から事情を聞くしかないようだ。調査員は待ち合わせのメモを鞆から取り出し、まだ在学している人物に話を聞くことにする。対象者と現在同じ研究室に在籍しているのだから慎重に行かなければ。再度構内見取り図を確認すると、その人物が待つ食堂へとゆっくり歩いて行った。

調査員の動向を覗き見ていた女は、すぐさまメールを送信する。相手の名は、「協力者」。メールを受け取った男は、すぐに行動を開始した。

坂道をメインキャンパス方面に引き返していると、運動部の掛け声が聞こえてくる。若さが溢れる音が遠い昔の学生時代を思い出させ、珍しくノスタルジックな気分で調査員は脚を運ぶ。目当ての大学院棟まで来ると、掛け声も聞こえなくなり、調査員の脳は仕事モードに切り替えた。

待ち合わせの食堂に向かうと、ターゲットは待ち切れなかったのか既に食事を始めていた。呼んでいない筈の女子学生まで、ちゃっかり同じテーブルに座っている。

(まあ、聞き取りできる人数は多い方がいいが……)

「あ、きたきた、こっちこっち！」

男の方がかつ丼を食べながら手を振っている。

「お先に頂いています。すみません、私まで」

謙虚なことをいいながらも、女子学生の前の2つのトレイには、ここぞとばかり食べ物を乗せている。刺身。ステーキ丼。パフェ。肉じゃが。

(独りで全部食べるのか?)

背が低く、痩せた型なのに、たべっぷりは気持ちが良い程だ。男の方も、かつ丼の大盛りの横に、いくら丼とてんぷらを置いている。

「いえいえ、大勢の方がいろいろと……」

「そうぞ、せっかくの機会なんだから、がんがん食べろ。この人が全部払ってくれる」

一緒に食事でもしながらお話を伺いたいと言ったし、

話してくれる以上昼食代くらいは支払う気持ちはあった。
だが無関係の女子学生にまで払う気は、全くなかったのだが。

「本当にありがとうございます！今日は吐くまで食べます」

奢りだと信じ切っている目を、失望させる訳にはいかず、
仕方なく、調査員は全学支払う覚悟を決めた。

(これって経費で落ちるのだろうか……)

調査員は絶対に元をとる決意をした。

二時間後 -。
思ったよりも収穫があったことで、痛んだ懐分は元をとることが出来た。
目を付けた人選が良かったことが幸いした。
自画自賛しながら調査員が駐車所へ向かうと、
駐車場の脇から現れた男が一人、声をかけてきた。
街灯の影になってはっきりと顔が確認できないが、
まだ若い。学生のような。

「5年前の事件について調べていらっしゃるのでしょうか？ 協力して
差し上げますよ」

「あんたは、誰だ？」

「僕は5年前の事件の生き証人ですよ。教えてあげますよ。
あかりさんのことも、主犯たちの事もね」

「5年前のアカハラ事件は、例のブログの通りの経過を辿っていました。被害者は亡くなりましたが、直接の死因は持病なので、それほど大きな騒ぎになりませんでした。が、芹沢さんへの公的な処分が出たので、大学でその記録に当たることができました」

確認の為に書類を見せてもらおうと、やはり公的な記録には、芹沢以外の名前は出されていない。一方的に芹沢が土岐等に嫌がらせをしかけて、他の者たちはそれに気付いてはいたが、皆芹沢が怖くて言い出せなかったと理由を付けられている。芽生の主張と同じだ。教員達は気付かなかったことが悔やまれると、述べている。

「退学処分後、芹沢さんはフェリーから投身自殺を図って亡くなりました。遺書には、退学処分を受けて将来を悲観したことが自殺理由として書かれていたそうです」

家族にも調査を試みたが、息子が迷惑をかけたにも関わらず最期まで良くしてくれた山瀬研究室に感謝していた、と調査員は暗にこの家族が復讐を企むなど考えられないことを仄めかす。

「それに対してこれが……被害者遺族が大学当局側に提出した、アカハラの内容と、その経緯です。当時の被害者を知る人物から入手しました」

細かな記録が、ハラスメントの悲惨さを浮き彫りにする。そこには芽生や小田切が、芹沢以上にアカハラ行為を積極的に行っていたと記されている。芹沢が関与していたことには変わりはないが、芽生と小田切の印象がまるで違う。音源での会話とほぼ同じだ。

「それと小田切さんが脅されて例の録音を行われたと言われましたが、その時脅されていたのは、小田切さんだけではありません。芽生さんも脅されていました。こんなものが無記名で研究室に送られてきたそうです」

小田切の名前と芽生の名前。それに『アカハラサツジンシャ』と書かれている。『サツジンシャ』という言葉に重みがある。

「結論としてはどちらを信じるのかは、矢越さん次第です」

当然矢越は公式発表を信じたいが、細部まで記述された証拠にも信憑性がある。少なくとも後者が正しいと信じて、芽生を怨んでいる者が存在する。

「引き続き調査を続行しますか？」

「……お願いします。次は現在の芽生について」

いつまで、どんな結果が出るまで自分は調査を続けるつもりなのか。矢越は自分が婚約破棄の決定的な理由を探したいのか、芽生という人間をもっと知りたいだけなのか、自分でも分からなくなってきた。見極め時が分からないまま、ただまだ終わっていない気がして、調査の続行を命じる。

アカハラ。本音らしき下世話な会話。不正経理。匿名の郵便で知らされたことからして、悪意を感じる。綿密に計画された悪意に、芽生が捕らわれたただけだとしたら。止めを刺そうとしている矢越は、非情な断罪者に他ならない。芽生は、哀れな冤罪の贄。

外野を気にして、愛する者を切り捨てるのなら、ハラスメントを

する卑怯な人間たちと変わらない。
無記名で機を回って芽生に不利益な証拠を送って来る人間が、信用するに
足る根拠は何か。それこそ単なる嫌がらせではないのか？
常識的な脳は、婚約者を信じよと諭しているのに、
次から次へと現れる証拠は、芽生への疑惑を膨らませる。
矢越の考えはまとまらない。

更に一週間後。

つかの間の平和の日々に感謝しつつ、矢越は次の報告を待った。

調査員が報告する。
「芽生さんは、不正経理に関与していた可能性があります」

最近自殺体で発見された小田切が、大学内で不正経理疑惑で処分を
受けており、その際の再調査により芽生にも関与が疑われているらしい。
その後に調査員は、あくまで学内での調査段階ですが、と慎重に断りを
入れた。

「小田切さん死後、助手に着任したのが芽生さんです。今芽生さんは
当時の元業者の営業マンに、何とか証拠をもみ消してもらえないかと
口説いているようです」

そう言って、その元営業マンが小田切の讒言によって退職した経緯と、
小田切の不正経理問題についての資料を渡してくれた。隠蔽を試みている
以上、いくらかの真実を含んでいるのだろう。少なくとも不正経理への
関与は疑わしい。

調査はここで一旦停止することにする。
これまでの調査結果から二人のこれからについて、矢越はゆっくり考えて
みることにする。

芽生の方は、そんな余裕などあるものかとばかりに、連日パソコンにも
携帯にもメールが来る。
「誤解だ」「話を聞いてほしい」「自分も脅されていて怖い」と
繰り返すが、自分が金づる扱いされて、矢越にはとても出る気には
なれなかった。

「今まで黙っていたけれど、小田切君と一緒に脅されていたの。私怖い。
時間があつたら少しでいいから会って下さい」

これは本当だろうか？ 信じてもいいのだろうか？ 動かぬ証拠を
見つけられて隠滅を回っただけなのでは？ 何とか言いくるめて結婚に
持ち込もうとしているだけなのかもしれない。
こうして待っているだけだと疑心暗鬼はどんどん膨らむ。
一度気持ちを確かめるために、矢越は芽生に会うことにした。

九時にいつもの和食レストランで待ち合わせる。
芽生はいつも以上に着飾って現れた。
だがその表情は暗い。

食事をしながら芽生は涙を見せる。
ハンカチでそれを拭う様も計算なのではと思いながらも、
もし本当であるなら無慈悲なことをしたと罪悪感もする。
しゃくりあげながら芽生は近況報告をする。

特におかしなことは起こっていないこと。
それでも小田切の件が怖くて戸締りには気をつけていること。
会えなくて心細かったこと。いつもメールに書いてくることを
そのままなぞっているような内容だった。

件のCD-ROMについて尋ねると、まるで別人のように
感情的になった。

「確かに私の声だけど、編集して繋げてあると思う。あんな会話
した記憶がないもの。私は被害者なのよ。幸せをぶち壊そうと
狙われているの。相手が誰かも分からない。怖くてたまらないの」

前の音声データを聞いても冷静に対応した芽生とは思えない程、
弱々しい。矢越はそれでも聞くべきことは聞かねばと、あえて心を
鬼にして聞いてみる。

「じゃあ、どうして警察に相談しないんだ？」

「それは……余計なことをすると逆上させてしまいそうで……」

矢越には理解できなかった。
逆上した時のことを考えて、警察に行くべきだろう。
芽生はその言葉を覆うように、急に切れ出した。

「ずっと怖くて悩んでいるのに。それなのに私を慰めもしないで、
こんな大変な時に距離を置くの？ 自分が巻き込まれたくないから？
前言った夫婦になる為に助け合うって嘘だったの？」

強い調子で詰る。いつもの甘えるような猫なで声の面影はなく、
きんきんと頭に響くがなり声に身が竦む思いがする。
周囲の客に迷惑にならないか、矢越はひやひやした。
実際何人かが、野次馬根性丸出しで、こちらの様子を伺っている。

矢越が期待していた反応を見せなかったことに不満だったのか、
芽生はぐすぐすと、しゃくりあげた。
今までにない芽生の様子に、さすがに冷たすぎたかと反省する。
だが一方で。

(勘弁してくれよ……。どうせこれも演技なんだろう?)

そう思ってしまう。
あんなに矢越が幸せ唯中に居ると信じていた頃、芽生は自分を裏切るような発言をしていたのかもしれない。

「それじゃあ誰が芽生にこんなことをするんだ？ 芽生の言う通りだとすると、こんな悪戯相当悪質だぞ。こんなことされる心当たりはあるのか？」

「……ない。ないわ」

「じゃあ横恋慕している男でもいるのか？」

婚約者にストーカー。
それはそれで薄気味悪いが、今の状況から考えるとその方がずっと気が楽だった。

「何、ヤキモチ妬いていたの？」

急に機嫌が良くなり、涙が引っ込む。
思っていたよりも愛されていると勘違いしたようだ。
また泣かれると困るので、話題を変えつつ、近況を探る。

「本当に嫌がらせはしていないんだな？ それじゃあ小田切君とはどうして度々会話をしていたんだ？ 何か打ち合わせでもする必要があったんじゃないのか？」

音声を切り貼りしたものだとしても、全体で3時間はゆうにある内容だ。
そういえばつい最近まで芽生はCOEの仕事を理由に、帰宅が遅かった。
今だってCOEに入っているのに、帰りはずっと早い。
あの時間は小田切と会っていたというのか。

「COEの仕事で、遅くまで残っている時。昔からの知り合いだから話が弾むことだってあるでしょう？」

「それはまあそうだけど。その人とは何も関係はなかったんだな？ 死んだ人の事を疑いたくはないんだけど、一応確認のために」

「それはない。絶対にない」

笑いながら芽生は言った。
「だってあの人結婚していたのよ」と。

その日は結局、次の約束をさせられた。
疑問はまだ残ったままだったが、芽生のペースにはまらうまく聞き出せなかった。
議員になるには答弁の技術も必要だというのに。
父親から及第点をもらうには、まだまだ道のりは遠そうだ。
矢越は更なる精進を決意した。

事の始まりは、山瀬の実験補助を引き受けたことに端を発する。
一週間に一日だけ。
しかも尊敬する山瀬教授直々に、実験を任せてもらえる。
優奈がこれに飛びつかない訳がなかった。

今まで担当していた先輩が、好条件で就職することになり立った
白羽の矢。
周囲の学生達は既に様々な職についているので、入学したての
優奈にもチャンスが回って来た。その内容を聞くなり、優奈はすぐに
承諾した。

普段から山瀬への尊敬の情を隠さない優奈には、山瀬もご満悦のようで
優奈はその日をいつも楽しみにしていた。業務もそれほど難しいもの
ではなく、COEの仕事にも差し支えることはない。
仕事のある日は、山瀬が昼食を奢ってくれる慣行もあるようで、
一気に距離が縮まった気がして、優奈にとっては理想の職場環境だ。

仕事が始まって三回目くらいの頃だろうか。
山瀬と学生食堂でご飯を食べていると、佐々木がトレイを持って
混ざって来た。そして二人が中が良くて羨ましいと優奈を嬉しがらせた
上で、佐々木は提案した。

「先生、この子に私の授業の手伝いもお願いしていいかしら？」

COEの仕事もあるので一旦は断ったものの、佐々木は「労働時間は
それ程多くないからと強引に誘い、山瀬もそこまで言うのならどうか
などと言うので、成り行きで引き受けることになってしまった。

後で常川に聞くと、時間単位の給料は高いが、定期的に拘束される
ことと他の職種の方が割がいいことで誰もやりたがらないバイトだ
と言う。山瀬の前で良い恰好をするのではなかったと、早くも優奈は
後悔し始める。

業務内容は主に佐々木の授業の補助。授業にも出席して授業の進行を
手伝ったり、学生の相談を請け負ったりもする。
話を聞く限り、気抜けする程やることは少ない。
時間も少なく、COE仕事に影響することもなさそうだ。

(先生たちの信頼が買えたと思えば、悪くはないか……)

そう思いなおした。
自分の勉強にもなり一石二鳥のはずなのだが、すぐに苦痛になって来た。
原因は佐々木の態度の急変だ。

それはアルバイト初日から始まった。

あまり話したこともなかったこともあり、緊張しながら授業が行われる教室に行った。時計で確かめると、授業の始まる10分前。念のため持って来たのは筆記用具と、時計、プリントなどを取りまとめるホッチキス。実験をする授業ではないと聞いていたので、これだけ準備してあれば大丈夫と踏んでのことだ。

佐々木がそろそろ来たので、お辞儀をすると、昨日とは打って変わった渋い表情。何か悪いことをしたのかと不安に思っていると、「鍵は？」と言われた。

山瀬の前では、詳しいことは明日から説明するから何も準備しなくても良いと言われていた。大学では教室を使用した後に施錠する決まりになっているので、その時間ごとに教室を予約して鍵を取って来るのが決まり。言わなくてもやるべきだろうとやっておいた。事務局の側でも他に教室を使う人もいなかったし、間違いないと確認した上でのことだった。

「どうぞ」

そう答えると、あきれ果てたとでも言いたげな短い嘆息をすると、手元から鍵を出した。

「それじゃない。今日はいつもと違う教室でやるの。今日は私が持って来たからいいものの、次からは気を付けてよね」

「……」

佐々木が苛々しながら説明するには、教室が代ったのは前回の授業中に決まったことで、いちいちメーリングリストでは連絡していないとのことだった。それ位は言わなくても確認しておくと小言を加えた後で、吐き捨てるように、言う。

「それから、その鍵他の人が困るから、早く返しに行って」

確かにそうだと急いで鍵を事務に戻しに行きながらも、佐々木の前回とのあまりの態度の違いに戸惑いを禁じえなかった。その予感を裏切らないかのように、教室に戻っても佐々木の不機嫌は治らない。優奈に対してだけ。学生には笑顔を振りまいて授業をするのに、ぼそっと優奈に対してだけきつめの言葉を呟く。

「パソコンとスクリーンの用意は？」

もちろんこの指示も今まで言われていない。

「すみません、すぐやります」

言われて、慌てて準備しようとする、またもや馬鹿にしたように言う。

「それくらい言わなくても、普通分かるでしょ？」

小さな声で吐き捨てる。
学生に愛想が良い分、その落差が身にしみる。

何が気に障ったのだろうか - 優奈はその授業中これ以上怒られないようにすることだけに集中した。

「田中さん、バイトと言ってもお金もらっている訳だから、きちんと準備しないと駄目だよ」

あまり言葉を交わしたことのない先輩から、突然優奈は忠告された。
なんのことか分からず、単純にバイトへの心構えだと思い
「気を付けます」と答えたが相手の薄い反応に嫌な気配がした。

自分の反応が気に入らなかったのか、明らかに不愉快だと言いたげな表情が、嫌な予感をもたらす。
その日から研究室の様子が変わっていった。
挨拶はしてくれる。でも何かが違う。昨日までの関係性が決定的に違う。
それが何かは、分からないけれど。

僅かな雰囲気の違い。

些細な変化だからこそ、理由を聞くことができない。

「お前、大丈夫か？」

誰もいなくなった研究室で、常川が唐突に尋ねてくる。

「何がですか？いつもと変わりませんよ」

核心を疲れた気がして、つい苛立ってしまう。
口にしたら真実になりそうで、絶対にそれを漏らしたくはなかった。

(気のせいだ。なんでもない。今になって少しホームシックなだけだ)

「あまり無理するなよ。愚痴があるなら聞いてやらないでもない。
ただしお前のおごりで」

「何でもないです。しつこいですよ」

常川だけはいつもと変わらない。
でもそれも今のところ。明日になったら常川も変わってしまうかも
しれない。常川は他につるんでいる者もいないと安心していただけで、
一番の古株。謎のネットワークを学内に持っている。

常川すら疑わしく感じる今、山瀬と居る時だけは前と同じでいることが
出来た。佐々木のバイトを疎かにはしなかったけれど、山瀬と居る
時間が自然と多くなっていった。山瀬の傍で嫌なことを言う人はいない。
研究室で人目に触れぬ場所で、違和感に触れる方がずっと
嫌だった。

佐々木の授業がある日は本当に憂鬱だった。
初日の失敗は慣れてないゆえの失敗であり、自分にも原因があると考え、
丁寧にメモを取っては、同じ失敗をしないように、優奈は気を付けた。
佐々木が教員になってから初めての授業補助とは言え、配慮の足りない
自分が悪いと反省して、毎回万事に備えた。

だが万全に備えて授業の運営に関して、何も言うことがなくなると、それ以外のことで文句を付けるようになった。

丁寧に機材を扱えば、「やることが遅い」と怒られる。練習して手早く操作すれば、「いい加減に操作するな」と小言を言われる。授業の内容を記録するのも優奈の仕事なのだが、それも毎回言われたことを直しても、なんだかんだ言ってケチを付けられる。指示が正反対のこともしばしばで、何を信じて良いのか分からない。

それでいて山瀬や他の院生の前では、優奈と仲の良い振りをする。その一方で、陰で優奈への不満を誇張して言いふらしているらしくて、一方的に悪く思われている。優奈自身入学してまだ間が無いので、今までの信頼の貯蓄で矛先を逸らすことができない。

佐々木が何を意図しているのか全く分からなくて、優奈は佐々木にひたすら恐怖を感じていた。

佐々木が優奈に対して理不尽なまでに厳しく当たってくる。いろいろな理由を付けてくるが、一貫性がなく優奈に八つ当たりをして鬱憤を晴らすことが目的としか思えない。

社会に出たらそういうこともあるだろうと我慢していたが、ゼミ学生まで便乗してくるようになり、優奈の気は重くなるばかりだった。

佐々木は事あるごとに優奈を引き合いに出しては嘲笑したり、義務ではない労働を押しつけていたりしている。かわいらしい声音で、明るめのトーンで言っているので、それほど深刻な雰囲気にはならないが、本人的にはかなり堪える。その落ち込んでいる姿を見て、また「これくらいのことで落ち込むなんて」と追い打ちをかけてくる。見かねた一部の良心的な学部学生がやると申し出ても、これも仕事内容の一部だと言い張って、やらせる。

「いくら入学したばかりと言っても、こんな簡単な質問にも答えられないようだ。ゼミの運営に支障を来すんだけれど。さすが学部の入学試験では入れなかっただけあるわね」

授業終了後、学部生が帰って行ったのを見計らって、佐々木はいつものように決定的に底意地の悪いことは学部生に聞こえないように、細心の注意を払って優奈にだけ聞こえるように言う。アカハラに厳しくなってきた昨今、やり過ぎると第三者に証拠として言われてしまうことを理解しての行動だ。

「ちゃんと授業内容に関する質問には答えています。勉強不足は謝りますが、答えられないのは授業と関係の無い質問ばかりじゃないですか。学部生の前で馬鹿にするのは止めてください。それこそ授業の雰囲気が悪くなりますから」

この言葉が佐々木の気に触った。いつもなら黙って何も言い返せないのに。生意気だ。優奈も一度ははっきり言うべきことだと思っていたので、思い切って言っただけのもの、その後の佐々木の反応に戦々恐々とした。

「そんなに文句があるなら、バイト辞めれば？」

辞められるものならとつくに辞めている。そもそも佐々木自らが、優奈を任命したのではないか。一旦は気に入ったが、宛てが外れたと落胆させたのだろうか。優奈には、佐々木の考えていることがさっぱり理解できない。それに一旦手続きをしてしまった以上、契約終了の一学期間は辞められない。

「規約で辞められないんです。能力不足というのなら、事前に勉強すべき内容を教えてください。」

常よりも口数が多いのも腹がたった。

持っていたペンを、思い切り優奈に向かって投げつける。

「質問を予測して勉強するのもゼミの勉強の一つなの。あえて勉強させてあげているのに。そんなことも分からないの？ ありがたく思っ
て欲しいくらいなのに、恩を仇で返された気分だわ」

「毎日指示が違うのも戸惑います。統一してくれないと、理解できません」

「毎回あなたが違うミスを犯すからでしょ！ 特別に教えてあげて
いるのに。でも、まあこの調子じゃあ、給料分の能力があるとは
言えないわね。事務にいつてもまでのあなたの失態を知ってもらう。
もちろん今の生意気な会話も含めてね。時間が出来そうだし、休学
して留年したほうがいいんじゃない？」

「脅す気ですか？ お金はともかく能力不足でバイトをクビとなったら
私の将来にどれほどマイナスになるのか分かって言っているのですか？」

「クビになりたくなければ文句を言わずに、私の指示に従うのね」

ここまできて優奈の目が潤み始めた。周囲には人影はいないが、
廊下の窓の外に同じ研究科の教授が通るのが見える。まずいと判断した
佐々木はすぐにその場から離れた。

「本当に女って怖いな。ああいう二面性のある奴が、一番性質が悪い」

常川は階段の手すりにもたれかかり、下の階で涙目の優奈に向かって話しかけた。まさか常川がいるとは思ってもいなかったのだから、乱暴な仕草で涙をふく。

「お前の様子がおかしいんで、来てみたんだ」

恥ずかしいところを見られて気まずいような、心配してくれて嬉しいような。とにかく優奈は、常川の顔をまともに見られなかった。最近では会ってもあまり話していない。疑心暗鬼の優奈が、一方的に距離を取っていた。それなのに。話すとしゃくり上げそうで黙っていると、常川は了解したのか一人で話し始めた。

「研究室の皆も、お前には同情している。でもなあ、悲しいかな院生は将来を握られているから、表立って反抗するのは難しいんだ」

全院生に平等に迷惑をかけているのであれば、堂々と告発できる。だが一人だけ集中攻撃されている場合には、自分がリスクを背負ってまで味方になる奴はいないと。

「ま、俺には関係ないことだ。とことんお前の味方するから覚悟しろ」

そいうと常川は先程から手に持っていた小さな機械のボタンを押す。すると先程までの優奈と佐々木の会話が再生された。

「おっし、ちゃんと録れているな。これハラスメント相談室にもっていこうぜ。これで一発アウトだ」

常川は抜かりなくICレコーダーに録音していたのだ。金に飽かせて無駄に高性能なのが、幸いと言うか不幸というか。優奈は自分の問題であるにも関わらず、面倒なことになったと心配になる。

学部生と違って、院生はハラスメントが解決したから「はい終わり」では済まされない。専攻を変えない限り、ずっと人間関係は続いていく。社会人学生の常川にはその辺りの機微が分からないのだろうか。

「ちょ、常川さん？ そんな簡単に……。すごい騒ぎになりますよ。最近小田切先生が妙な亡くなり方をしたばかりなのに」

「そうだな。昔は所属学科で一旦審議してから、全学審議会で再審査していたから、もみ消せたけれど今はもう無理だからな。いきなり全学審議会へ持っていける。相当な騒ぎになるだろうな。自業自得だ」

どこか嬉しそうに常川は、レコーダを振り回した。
優奈はこれから起こるであろう騒ぎを予感して、めまいがした。

張り切ってハラスメント相談室へ向かう常川を何とか押しとどめて、優奈は考える時間をくれと常川に言った。まだ決めていないが、常川と違って優奈は学問の世界で生きていくかもしれない。変な恨みはかいたくなかった。

渋々矛を取めた常川に感謝しつつも、新たな問題にまたもや優奈は頭を悩ませる。だが気持ちとは関係なく、COEの仕事は待つてはくれない。無気力ながら実験を続ける優奈に、珍しく常川が積極的に手伝ってくれるのは素直にありがたい。おかげで夕方には途中経過報告書の作成が済んだので、優奈はそれを持って研究班の中核である情報処理学科に向かった。いつもなら嬉しい任務だが、今はこんな憔悴した顔を焔に見られたくない。

(さっさと行って、すぐに帰ろう)

本部になっている研究室をノックすると、焔が顔を出す。すぐに受け取り、中身を確認するから座って待っていて欲しいと椅子を勧める。

相変わらず静かな研究室だ。皆必要最小限の会話のみで、後はパソコンをカタカタと操作する音だけが響いている。

「大丈夫、OKです。お疲れさまでした」

にこりと笑うと白い歯がちらりと見える。昼間の佐々木との態度の違いに、感極まりそうになる。

「失礼します」

あからさまに変なタイミングで、研究室を後にする。あのままいたら、言わなくてもいいことを話してしまいそうだ。

(でも焔さんなら。別の研究室だし実害はないかも……)

一瞬思ったが、規模は大きいが同じCOEの一員であることに変わりはない。未だに佐々木はCOEに深く関わっている。念には念を。とりあえずトイレの個室に入って、気持ちが落ち着くのを待った。

あらかた気持ちが落ち着いたところで、トイレを後にする。すると誰もいないと思っていた場所に、焔が立っていた。トイレの個室から出てきたばかりの優奈の目は真っ赤で、泣いていたことがばればれだ。恥ずかしくて顔を逸らす。

院生にもなって、泣いているところを他人に見られるのは居心地が悪かった。挨拶もそこそこにその場を去ろうとする。

「何かあったの？ とりあえずこっちの休憩室で話そうか」

焔は共同休憩室に招き、いつものように紅茶を入れる。もう夕方遅い時間であるせいか、誰もいない。

「はい。何があったか知らないけれど、とりあえずこれを飲んで落ち着いて」

紅茶と一緒に、どこからか茶菓子も出した。この前優奈がおいしいと喜んだものだ。

(私の言葉、ちゃんと覚えていてくれたんだな……)

さりげない心遣いに感心する。それでも自分の胸の内を明かすのは怖かった。どこでどんな人間関係が繋がっているのか分からない。

「田中さんも、まだ新入生でいろいろ気疲れすることもあるんだろうね。そっちで疲れたらいつでもおいで」

そう言って焔は、クリープを入れたコーヒーをかき回す。

「あ、あの……」

思い切って言ってみよう。そう思ったが、言いかけて優奈は途中でやっぱり思いなおした。言ったところで愚痴を話すだけになる。他学部である焔にはいかんともできない問題なのだから。

「うん？」

せっかく聞く気モードになっている焔には悪いが、愚痴を聞かせて嫌な思いをさせるだけならと、優奈は言いなおす。

「……何でもな……」

「助手の佐々木芽生に、学部ゼミでぼろ糞に嫌がらせを受けています」

突然後ろから、核心をつく言葉が聞こえて、心臓が跳ね上がる。聞き覚えのある声にまさかと思って振り向くと、やはり常川がいた。

「なんだよ。まどろっこしい。がんがんぶちまけて、あいつを居づらくさせてやればいいんだよ。向こうだってそうしているんだから、お互い様だろ」

勝手に会話に参加すると、常川は優奈の隣に腰を下ろした。

焔にコーヒーを持ってくるよう催促する。
嫌な顔をせずに、素直にコーヒーを用意する焔を見ながら、優奈は
小声で常川は諫めた。

「どういうつもりですか？私が悪口を広めているって本人に伝わったら
どうするんですか！」

「本当のことだからいいだろ。これは鬪いなんだ。戦いの基本は情報戦。
あいつお前の事自分の都合のいいように、言ってるんだぜ。お前の側
からも真実を発信すべきだ」

普通のトーンで返事が返って来る。

(せめて小声で話して下さいよ……)

この人に気付かれたのは、間違いだったと優奈は頭を抱える。
焔にコーヒーをもらった常川は、それを飲むことでようやく口を
閉じた。だが焔にすっかり事情を知られてしまい、優奈はいたたまれない。

「それは聞き捨てなりませんね。佐々木先生と言えば、そちらの学部の
学生アドバイザーを担当しているはず。本来学生を守るべき人間が、
そういうことをしているというのは見過ごせません」

「そうだったんですか……」

優奈はまったく知らなかった。
そういう情報は、実際に自分に問題が起きなければ気にしない情報だ。
しかしそれが本当だとすると、自分の立場は絶望的なのではないか。
ますます優奈は落ち込んだ。

「全くどの面下げてやってるんだって話だ。自分の学部の学生が
相談に来たら、握りつぶすつもりかよ。まっ、でも今はいきなり
全学審議会持っていけるんだろ？」

「それが……内部規定にただし書きがあって、全学に持って行くには
複数の学部にまたがった嫌がらせでないと全学審議会にいきなりもって
いくことができないんです。ですから同一学科内のハラスメント事案は
旧態依然と言っていいでしょう。システムは全く変わっていません」

だから優奈が事例を全学審議会に持って行っても、学部のハラスメント
相談に差し戻されるのだと、焔が申し訳なさそうに説明した。

優奈は段々と絶望的な気持ちになる。
小田切に嫌がらせをしていた犯人の言ったことが本当だとしたら、
怨む気持ちが良く分かった。

「で、田中さんはどうしたいんですか？」

焔が優しく質問する。

「勝ち目がないなら、我慢します……」

「そうではなくて、佐々木先生に罰を与えたいのか。それとも田中さんへの態度を改めさせるだけでいいのか？」

「え……？」

(でも、それだと審議会に話が通ることが前提になるのでは？)

「両方！」

常川が元気よく、代わりに答えた。

「やられっぱなしは、つまらないですよね？」

いたずらっぽく、焰も笑う。

「でも、どうやって……？」

絶望的な説明をしたのは焰なのに。

「できますよ。しかるべき手を使えば。ただ田中さんと常川さんの協力が必要ですが」

焰は優奈に、常にICレコーダーを携帯して佐々木の言動を録音することを勧めた。常川は研究室内で、佐々木が他の院生と優奈に関して話したことを逐一メモする。できれば録音することを約束させる。

「おっしや、とことんやってやろうぜ」

「でも、勝ち目はあるんでしょうか……」

ここまでやって負けたら、それこそ退学することになるかもしれない。

「大丈夫ですよ。僕も学生アドバイザーですから」

そう言って、焰はまた笑った。

CD-ROMが送られてきて以来、矢越の態度が急変した
会える時間が圧倒的に少なくなった。
電話やメールへの返信率も格段に下がった。

あのCD-ROMの内容が原因だということは推測できる。
誤解だと毎日のように「説明」を並び立てるが、
矢越は全く信じてくれない。

あの会話は全部小田切や芽生の研究室内で話したことだ。
あんな個人的な会話がなぜ流出するのか。
誰が芽生を陥れようとしているのか。
小田切にあの音声を取らせた人間に違いない。

ここへ来て真剣に、芽生は犯人を特定しようとする。
小田切の考えでは、私怨を持った元業者と年前の事件の関係者が
手を組んでいると推理していた。
業者があ的事件に拘る理由がない。

小田切を告発した元業者が告発者として大学に来ていたのを
幸運にも尾行することが出来て、
何とか再就職先を突き止めることが出来た。

それ以来もみ消してもらおう為に毎日のように店に通うが、
全く要求を聞いてくれる気配はない。
芽生はただ金を落とすだけの、店側にとってのカモに成り下がっている。
5年前の事件についても、彼は殆ど知らないようだ。
それともあれは演技とでも言うのか。

不安を増幅するかのよう、自宅にまで異変が生じていた。
最初は電話。音声を機械で変えた、暗い男の声で一言

「人を一人殺しておいて、自分だけ幸せになれると思っているのか？
絶対にさせない。復讐してやる……」

急いで途中で切った。
どこか聞き覚えのある声。
冥土からの伝言のように、冷え切った声。

「誰なの？いい加減にきなさいよおおお！」

布団を頭から被り絶叫すると、隣の部屋からドンと壁を叩かれた。

家だけでなく、大学にも容赦なくその魔の手は伸びている。
芽生の助手就任以降も、大学の学生側の研究室に怪文書が
不定期に送られてくる。

表面には『山瀬研究室様』と宛名書きされ、中を開けると芽生の宛名
付きの封筒が更に入っている。直接芽生宛てではないので、学生も
その度に律儀にその封筒を渡す。その横に、芽生が5年前にしたアカハラ
の内容をかいつまんで記述してある。

学生はただ黙って封筒を渡し、中も見えていないと言い張っているが、見ている可能性の方が高いというのが本当だろう。

大きめの封筒に入っている、要求と脅迫内容だけの芽生宛ての小さな封筒。毎回精神的にプレッシャーを与えるためか、5年前のアカハラの内容を纏めたものも、芽生宛ての封筒とは別に入っていた。

封筒の中身は常に変わらない。
5年前のあの事件への関与を自ら明らかにして、謝罪せよという要求。さもなければ不正経理の更なる証拠を、提出すると脅すのも忘れない。

(遺族なの……?)

怪文書を持ってくるのはいつも同じ学生一田中優奈なので、他の学生までもが知っているのかは分からない。
もし知っているのなら、いつ誰が当時の事件を訴求しようと乗り出すのか分かったものではない。
不安で苛々が募り、学部のゼミでは自分でもわかる程の八つ当たりをしてしまう。

あの怪文書を持ってくるのが、優奈。
顔を見ると怪文書を連想させてしまう程に。
だからその学生を否定することで、なんとなく怪文書自体を否定できた気になってくる。
他にも理由はあるが、根本的な解決になる訳が無い事実は変わらない。

そして今日も矢越はそっけない。
無視はしない。
返信率は少ないが、必ず返事はくれる。
それでもあのCD-ROMについて尋ねられて以来、決定的に矢越は変わってしまった。

会えない時間は、疑いとあらぬ想像ばかりが膨らむ。

耐えきれなくて、芽生は他の人間に縋ることにした。
とても独りでは抱えきれない。

(あの人なら、自分の気持ちを分かってくれるはず。私を不安にさせた澄真が悪いだから)

芽生が携帯を取り出して、呼び出したのは「山瀬」の名前だった。

久しぶりに、芽生は山瀬と眠った。
矢越と付き合い始めてからも、その関係はずっと途切れることはなかった。
芽生の中では、全く別の関係性なので罪悪感もない。
それでも山瀬が芽生が婚約をしたのを機に、体裁を気にしてその
関係はあくまで師弟関係だけになった。
芽生の側も身辺調査などをされて、破談にでもなったらとこの時期に
付き合いを減らすのには同意した。

矢越の態度が冷えつつある今。
誰でも良いから頼りたい。
そう思うのは自然なはず。そう思っただけの誘いを、
ちゃんと山瀬は乗ってくれた。

(やはりこの人は私のことをわかってくれる)

今まで小田切と二人だけの秘密にしていた、謎の脅迫者についても
横たわって指を絡めたまま打ち明けた。

その直後、山瀬は跳ね起きて、真剣な顔で問いただした。

「どうして、今まで何も言わなかったんだ？」

「だって連絡を取ったら、先生まで狙われちゃうかもしれないでしょ？」

これは確かに理由のひとつだが、もう一つのほうが大きい。

5年前に決着をつけた筈のアカハラ問題が再燃し、その加害者
として自分と小田切だけが槍玉に挙げられている。
そんな状態で山瀬に話せば、二人とも切り捨てられる。

だから内々に処理して、全部終わってから報告して、反対に評価を
上げようと小田切と画策していたのだ。
そんな緊張感をおくびにも出さずに、さも当然のように芽生は言う。

「……そんなに私を信用していなかったのか？」

「そうじゃない。巻き込みたくなかっただけ」

「じゃあもう解決したことなんだな」

「それは……まだ。小田切君も亡くなっちゃったし。私怖くて」

「怖くて私に頼ることにしたのか。さっきの私を巻き込み
たくないというのは嘘か」

「だって女一人で、そんな良く分からない奴に脅されているのよ。
誰かに頼りたくもなるでしょ？」

「婚約者はどうした？」

「迷惑をかけたくないの」

プライドが邪魔して芽生はどうしても、関係が冷え切ってきたとは口に出せない。

「私には迷惑をかけて良いのか？」

そのまま起き上がろうとする山瀬。
失言に気付いた芽生は、慌てて山瀬の腕を取る。

「ごめんなさい。本当は変な音源が矢越さんのところに、送られて怪しまれているの。関係も冷えてきて、結婚も危ういの」

言っているうちに泣けてくる。
それを冷ややかに見つめると、山瀬は冷たい目で言った。

「私との仲ももう十分すぎるほど、冷え切っている。もう分かっているだろう？ 今日で終わりにしよう」

そう。気づいていないふりをしていたけれど、婚約が機で距離を置くというのは言い訳。
本当はかなり前から、二人の関係はぎこちなくなっていた。
これを機に戻せるんじゃないか。
そんな風に心のどこかで計算していた。

「私を切るの？」

「じゃあな」

いつの間にか服を着替えた山瀬は、振り向くことなく出て行った。
別れの挨拶は、肯定を意味することが、痛いほど芽生には分かった。

山瀬が締めたドアに枕を投げつける芽生。
ルルルル。
急に鳴り出したので、携帯電話を投げつけるのを諦める。
出てみると、またもや恨み言と、罪の告白の要求。

「いい加減にしてよ！」

今度こそ携帯電話を布団に投げつける。
だが落ち込んだところで、事態は変わらない。

(味方を一刻も早く確保しなければ。5年前の例の件に関わった人間で、連絡を取れるもの。小田切君は死に、山瀬先生には見捨てられた。……あとは朋谷君。同じCOEだけれど、他大学で講師をしているあの人は味方になってくれるかも)

夜遅いから早速PCメールで連絡を取ってみる。
朋谷も既に脅迫を受けているのかもしれない。
他にも脅迫を受けている人間がいることを知らないから、黙っているだけなのかも。
そう希望的観測を持つと、少しだけ芽生は希望が湧いてきた。
その晩は朋谷からの返事が待ち通しかった。

「数ヶ月前から私と小田切君は、正体不明の人物に5年前の事件を盾に、脅かされています。今更そんなことを話したところで意味がないので、小田切君と二人で対処していました。ですがご存じのように、その最中小田切君が亡くなりました。その内あなたのところにも脅迫が来るかもしれません。一緒に力を合わせて対決しませんか？ 良いお返事を待っています」

一方芽生から連絡をもらった朋谷は、心底うんざりとした顔をした。
5年前も周りがするからやむを得ず、土岐等あかりへの嫌がらせに加担していたが、楽しくてしたのではない。そもそもあんな女なんてどうだって良かったのだ。

あれは朋谷自身にも類が及ぶのではと考えての行動だった。
もともとは山瀬がしていたことを、腰巾着の佐々木が率先して真似をしていたことが発端だ。佐々木といることで山瀬の評価を得ようとしていた小田切も、地味に嫌がらせに加担していた。
自殺した芹沢はどちらかといつこの二人にけし掛けられて仕方なく、嫌がらせには加担していた。
回数的には佐々木と小田切のほうが遥かに凌いでいる。
どうやって事実を知ったのかは知らないが、遺族に恨まれるのも分らないでもない。

だが自分は違う、と朋谷は断言できる。
数も行いも段違いに少ないはずだ。
同類扱いしないで欲しい。
面倒事は御免だった。

「久しぶりの手紙ありがとうございます。私のところには今のところ脅迫などありません。5年前の事件が何のことかは分かりませんが、私よりも詳しい方とご相談することをお勧めします」

(これで当たり障りがない文章になっただろうか?)

これでこのメールが何らかの証拠となっても、自分は問い詰められることはないはずだ。厄介払いのつもりで、こう返信すると、朋谷は芽生のメールをゴミ箱に移動させた。

これで終わった - そのはずだった。

だが他に縫る人間がないのか、芽生は必死だった。
メールに電話攻勢。
果てはCOEの行事を餌に、何とか接触を持とうとする。

(どうしてこういう連中は、自分の尻拭いも出来ないのか?)

今現在も朋谷は、上司にあたる教授からアカハラのもみ消しの協力を頼まれている。
その教授が学生の修士論文の内容を盗用しようとした挙句、盗用疑惑を払拭する為に、修士論文の論題を変更しなければ学位を与えないことを仄めかして、大学当局に訴えられたのだ。完全に自業自得なのだが、その学生との仲立ちを頼まれている。

朋谷は正義感が強い方ではないが、自分の尻拭いを人にさせる奴らには常々怒りを感じていた。
とぼっちりで怨まれたのでは割に合わない。

(いっそはつきり断れる理由があればいいのに)

朋谷は今日幾度目か知れないため息を深くついた。

「教授室にいます」

久しぶりの山瀬からのメールを受け取った芽生は、喜び勇んで山瀬の研究室へ向かった。ノックして、慣れた手つきで扉を開けると、優奈がいた。山瀬と仲良くお菓子を分け合っている。

「あの、私にメールを……？」

「そんなの出してないが。勘違いじゃないか？」

そのやりとりを聞いていた優奈が確かに、嗤った気がした。芽生の頭にかあつと血が上る。

「失礼しました」と出て行ってからも、怒りは収まらない。あんな小娘に馬鹿にされた。普段の佐々木の行動に対する仕返しのつもりなのか。何か意趣返しをしなくては、済まなかった。

翌日学部の授業で、芽生の優奈に対する態度はいつもの3倍近く厳しいものだった。すっかり神経がすり減った様子 of 優奈が、おずおずと通勤簿を出す。

そこに印鑑を押してもらい事務に提出して初めて、給料がもらえる。手伝っているのは佐々木であっても、雇っているのは大学なのだ。雇用に関する手続きは全て事務を通して行われる。だが芽生は印鑑を出すのを拒否した。

「あなた昨日私にあれだけのことをしておいて、よくも平然と要求出来るものね。大した腹黒さだわ」

「何のことですか？心当たりがありません……。でもお気を悪くしたのなら謝ります」

そんな殊勝ぶった態度も腹が立った。恥をかかせてその上、人格まで否定するつもりか。

山瀬にも、今度という今度は修羅場を見せてやるのもいいかも知れない。芽生が結婚するからヤキモチを焼いているのだ。確かに矢越のことは好きだが、山瀬はまた別。これはどうしようもない。これからも関係が続けることだって構わないのに。

「良い子ぶって、私に見せつけたいんでしょう？ いいわ そっちがその気なら、私も印鑑を絶対に押さない。事務にはあなたの仕事能力が最低だからと言っておくわ」

「そんな……」

ヒートアップしていると、「ちょっといいかな？」とノックの音と同時に、山瀬の声がした。教員棟は部屋が隣り合っているので、ちょっとした用事ならメールでやり取りせずに、直接交渉する。

「授業で学部生と上手くいなくて、落ち込んでいるみたいなんです。それでその相談を聞いていたんです」

勝手にドアを開けてはいつてきた山瀬に、佐々木は取り繕う。山瀬は素直に信じたようだ。優奈が手にしている書類を見て、山瀬は自分も優奈に給料を払う

為には印鑑が居ることを思い出した。

「後から私も印鑑を押すから、相談が終わったら来てくれるかい？
印鑑を用意しておくよ。あまり思いつめないようにね」

言い置くと、帰って行った。

その言葉が優奈を擁護しているように感じて、反射的に芽生は優奈の頬をひっぱたいた。

「色目を使ったのね」

「……何のことですか？」

叩かれた頬を抑えながら、涙目で優奈は何とか冷静に努めた。

「白々しい！ 妙な脅迫状を送っているのも、本当はあんたなんですよ？」

「違います！……どうして私がそんなことを」

佐々木が激怒するスイッチを教えてしまったことを自覚した優奈は、これ以上いても印鑑がもらえないと悟り、一旦退出することにした。「出直します」と優奈が帰ろうとする。

「このまま山瀬先生のところに、行くの？」

「はい。先生に声をかけて頂きましたから」

頬は痛むが、釣られて気分を高揚させては駄目だとあくまで冷静に優奈は答える。
すると不機嫌そのものの表情で、芽生は言い捨てる。

「余計なことは言わないでよ。仕事の能力がましになったら、印鑑だってなんだって押してやるんだから。頭を冷やして反省しなさい」

山瀬に密告されると警戒したのだろう。
言い訳がましく、釘を刺す。

「……失礼します」

優奈は一言だけ挨拶を残し、この最悪な会見を終わらせた。

午前十時、学生相談審議会定例会議が始まった。
一月に一度のこの会議では、全学審議会で上げられたハラスメント相談と各学部の審議会で上げられた問題で、全学審議会で取り上げるべきと判断された問題を話し合う。

実際には各学部ごとに独自の慣行があったりして、各学部から全学部へ問題を上げることはほとんどない。
全学審議会で取り上げるような学部をまたいだハラスメントなどめつたに起こる訳もなく、事実上体制作りの見直しなど抽象的な議論でお茶を濁すことが多い。

審議委員は教授職から、その窓口となる学生アドバイザーは各学科の教員もしくは大学院生から選抜される。全学審議会直属の学生アドバイザーだけ、心理学の教員のみと限定されている。

相談したい学生は、まずは学生アドバイザーに相談することになる。その際に教員のアドバイザーに相談するのか、院生のアドバイザーに相談するのかは自分で決めることができる。アドバイザーには平等に権利があるので、アドバイザーが審議すべきと判断した事案のみを証拠と共に審議会に委託するというシステムだ。

アドバイザーの任命は各学科に一任され、その訓練は全学審議会が定期的に外部の講師を招いて一斉に実施している。これも受ける、受けないはアドバイザーの意思に任されている。
学科の自治を重んじた結果のシステムと言えるが、それゆえに機能にも差が大きい。

型通りの事案報告が求められると、一際明朗な声で「はい」と挙手する者がいた。

「情報処理学科の学生アドバイザーの焰と申します。今日は特殊な事案であるが故に、全学審議会にかけるときであると考えられる事案を提示します」

優奈と常川は会議室の外側のソファで、自分の出番を待っていた。
焰が説明する声が、ときおりこちらまで聞こえてくる。
呼ばれるまで待てと言われたので、緊張して優奈は落ち着かない。
これで認められなければ、佐々木にどんなことをされるのか。
一方常川は朝食を食べ忘れたと、固形の栄養食をぼりぼりかじっていた。

ガタン。

会議室の扉が開く。
焰が顔を出すと、手招きをする。

(来た……！)

緊張して手に持ったUSBメモリを落としてしまう。
常川がさっと拾って、優奈の掌に押し付ける。

「落ち着け。お前がしくじっても俺が説明するから大丈夫だ」

口の端についた食べカスが何とも頼りないが、優奈は首を縦に振って頷くと、常川と共に会議室に向かった。

会議室には教授陣が揃っていて、威圧感がある。萎縮しながらも、焔が質問することに答えるだけで良かったので思ったよりも楽に説明が出来た。第三者の意見として常川の証言と、集めた証拠が功を奏した。常川は自分だけの証言では弱いと、学部生の証言も録音していた。それに普段佐々木が研究室で先輩たちに、優奈の悪口を言っている内容も記録し、それが一度や二度ではなく反復して執拗にされている証拠も突き付けた。

同時に優奈の勤務態度についての学部生や他の第三者の評価も提示することで、佐々木の評価が誤っていることも証明する。

「この田中優奈さんの事例は、加害者が学生アドバイザーという地位を持っていることから、学部内でもみ消される可能性が恐れが高い。よって、全学審議会にかけられるべきであることを提案します。賛成の方は挙手をお願いします」

焔の言葉に、審議委員たちがどう反応するのか。優奈は怖くて目を瞑る。

ぼんと常川に背を叩かれ、目を開ける。すると優奈の学科の教授以外、全員手を上げていた。

その教授は最後まで公正に自分の学部で審議すると粘ったが、多数決により、全学審議会にかけられることになった。

「そしてもう一つ。皆様に提案します。ハラスメントの隠蔽に協力した者にも、処分を下すという規定を設けることです」

焔は今回のように、学生アドバイザーなど審議と関わる者たちがハラスメント加害者と昵懇だった場合について考えを巡らせた上で、考えついた提案だと説明した。これにはさすがに審議委員全員が、動揺する。

「賛同できないという皆さまには、是非理由をお聞かせ願いたい」

強気の焔に、優奈の方がハラハラしてしまう。常川は面白そうに、にやにや笑いながら、ちゃっかりこの様子を録音している。議長は周囲の様子を察して、投票に持ち込もうと提案する。直接は反対しにくい案であることを考慮してのことだ。

「私はこれに賛同します」

焔の隣に座っている教授が、さっと立つと大きく賛成と書いた紙を見せ、それを折りたたむと投票箱に投じた。他の教授陣も中身は見せないまでも、投票用紙に記入して

入れて行く。

「多数決で可決となりました。今後の審議会で詳しい規定は詰めて
行きたいと思います」

その時、焔が最初に賛成票を投じてくれた教授と顔を見合わせて
笑った顔は、優奈が今まで見た中で最上の笑顔だった。

結婚式をしないと言う、田勢の一存で式は行わず、ハガキでのお知らせとなった。それでもスタッフをどうしても祝いたいという父親立っての望みで、矢越邸で内輪のパーティーが行われることになった。まだ新婦を見たことがない矢越もとても楽しみにしている。すると田勢が意外なことを提案する。

「是非、婚約者さんも連れて来て下さい」

あれ程矢越の婚約者、芽生との結婚を否定していたくせにどういった心境の変化だと、矢越は訝しんだ。ここ最近の芽生とのすれ違いも全て、目の当たりにしているというのに。

選挙前の殺人的忙しさと、いつも以上に寡黙さに磨きがかかった田勢にそれ以上聞くことも出来ず。結局芽生に連絡をとり、共にパーティーに出席することにした。芽生は田勢のことなど全く覚えてはいなかったが、矢越から連絡してくれたことに喜んでくれた。矢越は少し胸が痛んだ。

（本当に5年前の事件が、芽生に無関係だったとしたら……。
自分のやってきたことは、非情に過ぎるものだったのではないか？）

芽生は花嫁よりも目立たない格好で、なおかつ華やかな招待客としてはパーフェクトなドレス姿でやってきた。緩く巻いた髪も愛らしい。矢越の父親は既に芽生の事情を知っていることはおくびにも出さずに、婚約者の父親として普通に挨拶をしていた。こころの腹芸は、やはり未だに矢越にはできない。どうしても不信感がそこかしこで出てしまう。つい先日までの会話などなかったかのように、芽生は話しかけてくる。それをぎこちなく交わしているうちに、田勢夫妻が登場する。

「天原さん！」

拍手に囲まれて、登場した新婦を見て矢越も芽生も驚いた。つい半年前まで事務所で働いていた女性スタッフだったからだ。父と母は知っていたのか、全く動揺していない。二人は、客に一人ずつ挨拶しながらこちらに近づいてくる。

矢越は感無量になって、両手で二人と握手した。

「急にいなくなったから心配したけれど、無事だったんだね。
良かった。良かった」

恥ずかしそうに握手をすると、花嫁は「ありがとうございます」と控えめに言った。

最後に芽生の前へ来る。芽生の「おめでとう」の言葉に、新婦は答える。

「ありがとうございます。おかげ様で生死の境を彷徨いました」

そう言って、花嫁は芽生を睨みつける。
芽生はその意味するところが分かったのか、顔面蒼白になった。

「御来場の皆さまに、私どもの馴れ初めについてご紹介申し上げます」

いつも生真面目な田勢が自分でマイクをとり、少し照れながら話し出す。

「彼女は約一年前に、矢越先生の事務所にスタッフとして勤務し、そこで私たちは出会いました。その頃まだ二十歳そこそこののに、気が利いて、どこか芯のある彼女に惹かれました」

そこまで言うと、隣の新婦にマイクを渡す。

「矢越先生の事務所に入る前に、私はある事情を抱えていたのです。それは……夫のドメスティック・バイオレンスでした」

矢越もそれは知っていた。彼女は後援者の縁者で、見るに見かねた親族が父親に相談したのだ。矢越代議士はすぐにスタッフとして、事務所に来ないかと誘った。離婚するにはまず自立が必要で、その為には職がいると考えてのことだ。当人のプライバシーを考慮して、スタッフでもこの事情を知っていたのは、矢越くらいだった。

「遠縁を頼ってこの土地に来ました。親族が矢越先生に相談したところ先生の御好意で、私はスタッフとして雇って頂けることになりました。本当に感謝しております」

ここで新婦は代議士に向かってお辞儀をする。代議士はそれに向かって嬉しそうに頷く。

「ようやく仕事にも街にも慣れてきた頃でした。家に突然夫が訪ねて参りました……」

新婦の回想が始まる。

その日の朝、出勤しようとして化粧をしていた彼女は、インターホンの音に反応して、ドアスコープで確かめもせずにドアを開けてしまった。この半年間、平和を享受していたせいで、感覚が麻痺したことを悔やむ。ドアを開けると、見覚えのある男が剣呑な目つきで待ち構えていた。口元だけが弧を描いているのが、アンバランスだ。

「おい、俺から逃げ遂せるとでも思ったか？ 職場もとっくに割れているんだ！」

言いながら部屋に入ってこようとする男に、彼女は足の竦みが止まらなかった。

「やめて」

髪を掴まれた。この感触。暴力の前戯。
身を強張らせる。
今までされてきたことが蘇る。

素早くドアを閉めようとする、隙間に靴の先が押し込まれ、
素早く男が半身を滑り込ませる。男が侵入に半ば成功したことを見て取ると、
女は後ずさった。思い出したかのように悲鳴を上げようとする口元
めがけて、拳で思い切り殴りつけられ、壁に吹き飛ばされる。
口の中が鉄のさびた味がする。端から血も流れてきた。
夫はカーテンを素早く閉め切る。男が察する前に逃げ出そうと
彼女は一気に駆け出した。
だが夫もさるもの。すぐに気が付き玄関脇の台所に追い詰められてしまう。

「お願い。落ち着いて」

「落ち着けるか。お前は俺を裏切って逃げ出したんだ。俺があんなに
お前の為に、金をかけてやったのに。何が不満なんだ。家からも絶縁されて
行き場もないお前を拾ってやったのは、俺だろう？二十歳過ぎたばかりの
小娘が、今まで贅沢な生活できたのは誰のおかげだ？」

「私は自由な生活が欲しいの。ちゃんと自分を対等に見てくれる人が欲しい」

朝食を作る為に使った包丁を手にとると、夫は胸の前にかざす。

「言い訳だ。本当は男がいるんだろ。浮気を正当化するな」

「違う！」

「だったら俺と一緒に死んでくれ」

「嫌！絶対嫌よ。死ぬなら勝手に死ねばいいでしょ？ 私はもうあなたの
犠牲になるのはまっぴらだわ」

「わあああ」

絶叫と共に、男が抱きつくように腹に包丁を刺した。
絶叫を残して女は倒れた。
ドアから尋常ではない様子に心配した、近隣の住民がドアを叩いている。
女の絶叫に、扉を開けた住民を見て取ると、男はそのまま自分の腹を刺した。

彼女は一命を取り留めたものの、重傷を負った。
体の傷以上に、夫がどこまでも追いかけてくるという被害妄想に悩まされた。
夫も自分を刺す時には、さすがに躊躇いがあったのか、軽傷で済んだ男は
医療刑務所に入れられた。

その後いつか必ず出てくる男の陰に怯えながら、新婦は隠れるようにして
生きてきた。

「そんな事情を全て知った上で、結婚しようと言ってくれたのが
横に居る田勢さんです」

ここで大きな拍手が起きる。
小さな子どもを連れた若奥さんなど、涙を流している。

拍手が止むのを待って、新婦は回想を続ける。

結局、新婦は矢越代議士の紹介で知り合った弁護士を雇い、
なんとか離婚へ向けての裁判に向かった。
医療刑務所で思うところがあったのか、夫はこれ以上は危害を
加えようとはせず、裁判もスムーズに進んだ。

裁判所であったときに、女は元夫に尋ねた。
どうやって新婦の居場所を知ったのかと。

「女が教えてくれたんだよ。どこの誰かは知らない。お前の事
嫌っているみたいだった。せいぜい足元をすくわれないように
気をつけるんだな」

新婦は巻き込まないようにと、世話になっている親族以外には
友人にも自分の居場所を伝えていなかった。
事務所にも数人女性がいるが、いくらなんでも
嫌がらせの為に、自分の雇い主にまで損害を与えようとする人間が
いるとは思えない。

「答えは一人しかいませんでした」

そういうと真っ直ぐ指を指す。

「佐々木芽生さん。あなたです」

「私は縁戚のいるこの町に来るときに、くれぐれも誰にも知られないように釘を刺されました。こちらで知り合った方たちは、夫の住所と電話番号を知る由もありません。縁戚はといえば、夫をととても怖がっていたので、私の居所を教えるわけがありません。当時私は縁戚の家に住んでいたのですから、自分たちも危険な思いをするのに、私の居所を教えるわけがないんです」

そこで思い出したのが、佐々木だと言う。

その頃矢越代議士の好意で、澄真は定期的に新婦の遠戚宅に来たり、遅くなったときには事務所から送ってやったりしていた。当時まだ婚約はしていないものの、矢越と佐々木は付き合っていたので、偶々それを何回か目撃をした佐々木が誤解をしたらしい。

新婦だけにそんな配慮をしていることが分かると、スタッフ間にも良くない噂が出てしまう。そう思った矢越は、佐々木にだけ本当のことを言ってもよいかと新婦に尋ねた。新婦は自分とも夫とも何の接点もない佐々木なら、大丈夫と判断して快くOKした。

だが独占欲なのか、佐々木は直接二人で話したいとまで言い出す。矢越も相当困ったようだが、やきもちもかわいと思える時期だったようで、頼み込まれてしぶしぶ新婦は佐々木と二人きりで話をした。といっても当然のように話題は矢越のことくらいしかなく、本当に矢越とはなんでもない新婦は言われたことにただ答えていた。尋問のような会見もネタが尽きそうになると、佐々木は携帯電話を貸して欲しいと言った。

「会って見たら、ちゃんとした良い人だって分かったって電話したいの。私携帯電話を矢越さんに預けたままだったの忘れちゃって」

知らない人に携帯電話を貸すのは、いささか気分が悪かったが世話になっている矢越家のためと、貸した。二人での会話を聞かれるのは恥ずかしいからと、携帯電話ブースに移動したのまでは確認している。

あまりじろじろ見るのはいかにも信用していないようで、新婦は傍にある雑誌を見て過ごした。その後携帯で連絡をもらったという矢越が来て二人を送ってくれた。

「私はそのときに、佐々木さんが夫に、私のことを告げたのだと確信しています。夫に電話番号を告げられる女性は、あなた意外にありえないんです」

矢越もそのときのことは覚えている。以外に独占欲が強いんだなと思ったことと、暴力の被害者である新婦についていくら恋人でも話してよいのか葛藤したことは未だ記憶に新しい。

「違います。私そんなことしていません！」

パーティー参加者の視線がいつせいに、芽生に集まる。

「……記憶違いということはないですか？」

無言の圧力に、佐々木はおずおずと自分の意見を申し出る。

「証拠があるんですよ」

そういうと、今まで口を出さなかった田勢が用意しておいたパソコンで、音源を再生する。

「……奥さんは××県の矢越議員の地方事務所で働いています」

短い文章かつ抑え目の声音だが、明らかに芽生の声だった。

「……元旦那さんは、新婦から電話がかかって来たらすぐに居場所を特定できるように、会話を録音していたんですよ。後から再生して背景から聞こえる音から、居場所を推測する為にね」

田勢は元夫と交渉して、あの音源を取り上げたのか。だとすると心苦しい作業だっただろうなど、矢越は胸が痛んだ。

「これ、あなたの声ですよ」

新婦が確信を持った声で、冷やかに言った。

「違う。違います」

懸命に芽生が無実を主張するも、参加者はしらけた目で芽生を眺めるだけだ。否定する声そのものが、真実だと告げている。

田勢は数枚の紙を纏めたものを持って、矢越代議士に渡した。

「澄真さんが代議士になるのであれば、佐々木芽生さんと結婚することに、スタッフ一同反対します。これは皆の署名です。我々はその女性を代議士夫人として守り立てることはできません」

悔し涙でぼやけた視界の中、敵意を放つ視線の直中で、芽生は独りだけ一際険しい目でこちらを睨む男の姿が見えた。

「芽生！」

挨拶もしないで黙って会場を飛び出した芽生を追いかける。追いついたはいいが、矢越は後に続く言葉が見つからない。

「送っていくよ」

本題には触れぬまま、とりあえず車に乗せる。泣き続ける芽生に聞きたいことは山ほどあったが、どれを取り出すべきか今の場にふさわしいのか分からなかった。あそこまで仕掛けてきたということは、かなり計画的だということだ。誤解だとしても、証明するのに相当の時間がかかるだろう。

「あれは嘘だよな？」

「嘘に……嘘に決まっているでしょっ」

(このままでは済まさない)

確かに自分のやったこととはいえ、もう少し場をわきまえるべきだ。声には出さないが、悔しくて芽生は泣き続けていた。

(一年前あの女は確かに、孤立無援で何もない唯若いだけの女だったのに)

そう踏んでいたからこそ、脅威になる前に芽生は排除したのだ。今までこの観察眼は確かなもので、踏み台にしても良い人間を間違えたことなどなかった。初めての失敗。それもこんなに惨めたらしい形で。

(認めない。絶対に認めるわけにはいかない)

気の利いた言葉をかけられないまま、矢越は芽生を見送った。せめて傍にと申し出る矢越を、芽生は断った。

「信用できない。今日のことだって、あなたも知っていたんじゃないの？ 私に恥をかかす為に。だから……もう帰って」

せっかく仲が深まるチャンスだと思ったのに。とんだ番狂わせだった。

(大丈夫。一晩寝て、気力が回復すればまたなんとでもなる)

だが芽生は知らなかった。更なる追い打ちが待っていることを。

同じころ矢越も、後味の悪い思いで自宅へ戻った。正直誰にも会いたくない心境だったが、帰宅しないわけにもいかない。

先程までの険悪な雰囲気もどこ吹く風と、皆楽しそうに二次会を始めているのを見ると、矢越こそ誰も信じられない気持になる。もう参加する気も起きなくて、自室に戻ろうとすると、田勢が目ざとく

見つけて寄って来る。

先程の音声データを保存してあるメモリだと言って、掌に押しつけてくる。

「証拠になりますよ……婚約破棄にもいろいろ証拠はご入用でしょう」

矢越は一瞬殴ろうと手を上げたが、結局振り下ろした。
なんであれ、今日は田勢のめでたい門出だ。
ここで殴ったら、事態は一層悪化する。

「私も、あなたの婚約者が事務所に来ては偽善的な言葉を口にするたび
そういう思いを堪えてました」

そう言ってグラスの酒を一気に飲み干す田勢。
良く見れば、珍しく頬が赤くなっている。
酔っているのだなど、矢越は思った。

「そうだったのか……ひどく惨めな気分だな」

「一杯もらおう」とスタッフからグラスを受け取ると、
田勢と同じく一気に呷り、そのまま矢越は自分の部屋に直行した。
とにかく今晚は何も考えたくなかった。

あの定例会議に出席して初めてのバイトの日。

優奈は緊張しながら行くと、佐々木は人を殺せそうな眼光で睨んできたが、それ以上何も仕掛けてはこなかった。

学部生たちは経緯を知らされていないので、あれやこれやと噂し合っていた。

常川が証拠集めがてら、何か言ってくれたのか今まで佐々木に追従していた学生達も、気持ち悪いくらいに優奈に気を使う。

研究室の先輩も、そして一番懸念していた山瀬までもが自分を気遣ってくれる。

あれ程苦しんだのが嘘のようだった。

「正直、研究室の皆さんには裏切り者扱いされると思っていました。佐々木先生は誰とでも上手くやっていたから」

その日常川と焰と誘って、少し気が早い御礼を兼ねての飲み会をした。少ないバイト代でやりくりしているのも、近所の安居酒屋だが、二人は喜んでくれた。

「良くも悪くも、あいつらは「普通」だからな。デメリットのある流れには乗らないさ。山瀬にしても、いくら愛弟子でも、一緒に罪を被りたいとは思わないだろう。自分が関与してもいないことに明らかにクロの人間を庇って、処罰されちゃ敵わない」

ビールをグイッと飲み干すと、常川は一気に捲し立てた。

「あんたの共犯処罰規定が効いたな」

常川が珍しく焰を労う。

「本来ならずっと前に出来ていなければならない、規定です」

酒を飲んでも全く顔色を変えない焰が、さらっと返す。そのグラスにビールを注ぎながら、優奈は尋ねる。

「でも、あの規定を投票した時は、何だかおかしい雰囲気でしたよね。どうして皆躊躇ってたんですか？」

「どこまでも拡張していくと強権的になるからな。常に監視されているみたいになるだろう。それに冤罪も増える可能性がある。まあ、アカハラ隠蔽を無くすためには必要不可欠だけど、いずれにしても教員にとっちゃあ、もろ刃の剣ともなるわけさ」

「反対にこの規定を理由に、したくもないアカハラ隠蔽を断ることもできます。強圧的にしない為には、これからどう規定を育てていくかにかかっていると思います」

「にしても、良く言えたよな。お前、学生だから立場弱いんじゃないのか？ あの後疎まれたりしてないのか？」

「特には。僕の指導教官はそういったことには、先進的考えを持っていきますからね。ほら、初めに賛成票を投じてくれた先生です。先生はご自身の考えをしっかりと持ちの人ですから。たとえ僕が先生と正反対の意見を言ったところで、それを理由に嫌がらせをするなんて、思いつきもしないですよ」

「焰さんのところの先生も、山瀬先生みたいに素敵なんですね」

「……」

「そりゃ焰も黙るだろ。お前恋する乙女か。気色悪過ぎだぞ」

常川を無視して、優奈は続ける。

「私は他大学に通ってましたから、皆が皆素晴らしい先生とは思っていません。でも今回はひどすぎてかなりショックです。だって教員が学生に嫌がらせするなんて。5年前の事件だって本当のことかもしれない」

「田中！」

相変わらず常川は、この件を外部に漏らすことを嫌う。加害者とされる小田切や佐々木に、この件について一対一で意見することには積極的なのに、外に広がることを嫌がり、研究室ではあまりこの件について触れようとはしない。

「5年前の事件……ですか？」

「5年前にも、佐々木先生と他の人たちが、病気の女子学生にアカハラした事件です。女子学生は最後には亡くなってしまったのに、その事件で処分を受けたのは、一人の院生だけだったんです。今回みたいなことがあると、あの先生ならやりかねないって思えますよ。本当に」

小田切を脅していた脅迫者が作成したブログは、山瀬研究室内でも既に知られるようになった。山瀬からは内容は事実無根だから気にしないようにと御達しが出ているので表面化することはないが、元々都市伝説のように知られていた事件。佐々木の今回のアカハラ事件で、そのブログのおかげで噂が陰で再燃している。

「飲み過ぎだぞ。その辺にしておけ」

常川が優奈のグラスを取り上げる。

「その話なら、学生アドバイザーの中でも話題に出たことがあります。学内で議題にするには時効を迎えた事件だったので、追求する人はいませんでした。佐々木先生が学生アドバイザーに就任したのは、その時の罪滅ぼしではないかと、囁く人はいます」

今回の件で例のブログの存在も発覚し、学校側も現在対応に苦慮していると言った。

「そこまでもう広まっているのか……。それで、ブログの作成者は特定されたのか？」

「それはまだです。昔の事件ですし、人物名や大学名もイニシアルになって

います。見る人が見れば一発で分かりますが、無関係の人には分かりにくい
ものですからね。名誉毀損に当たるのかギリギリのラインです。それに
大事にすれば、沈静化していた噂が再燃してしまう恐れもあります。
大学当局も今のところは様子見と決めたようです」

事情通の焔が、流れるように説明する。
優奈はそんなところも、また頼もしく思えて、酒で紅潮した頬を
ますます赤らめた。

「できれば、特定しないでやって欲しい……。俺も誰か探しては
いるんだ。そいつを責めたいんじゃない。会ってどうしても
言いたいことがあるんだ」

またもや手酌で自分のグラスに酒を注ごうとする優奈から、酒瓶を
隔離すると常川は、顔をグラスの方へ俯けて言う。
語尾の歯切れが悪く、珍しく頼りない。

「間の悪い常川さんは、大学を休学していたから思うところが
あるんでしょうね」

酔って歯に絹を着せない優奈は、常川の様子を気かけず、
ぼっさりと言う。困った顔をしながらも、核心をついた部分も
あるのか、常川が呟くように言う。

「全員顔見知りではあるがな。俺が休んでいた間に起こった
ことは詳しくは知らない。その被害者の女子学生はもともと
体が弱かったのは記憶にあるよ。佐々木もその頃から他人を
見下すような奴だったな。顔がいいから辛口とか言われて
持て囃されていた。今思えば、誰かがそこでストップをかける
べきだった。まあ今回のことは良い薬だ」

しばらく今回の成果を報告し合った後、なんとなくCOE関連の
話しに移行した。

「僕、そろそろ約束があるので失礼します」

焔が帰ると言うので、常川も俺もと帰ることになり、結局3人で
帰ることになった。常川はさっさと帰り、焔が送ってくれることにな
った。開けてくれた車はどこか大人の匂いがして、初めて焔の
私的な部分を解放してくれたようで、嬉しさに顔に熱が集まる。

「焔さんの、約束はいいんですか？」

「ええ。まだ間に合います」

「どんな用事が聞いてもいいですか？」

「……接客業です。随分元気になったようですね？」

「はい。本当に焔さんのおかげです。あの、これ良かったら」

そう言って渡したのは、銀色の指輪に紐を通したネックレスだった。

「これ、母の形見なんです。若いころに好きな人にもらったもので、
いつも大事にしていたものです。私、今貧乏で何も御礼できる
ものがないから、せめて」

「気持ちだけ受けておきます」

「それじゃあ、私の気持ちが済みません。それに……その別の意味も入っていますし」

「？　そこまで言ってくれるなら、頂きましょう。大事にしますよ」

送ってくれた跡には、ふわっと大人っぽい香水の匂いがして気分が浮き立った。

数日後、立て看板に優奈の事案が書かれるようになる。
常川の仕業らしい。

「結構パンクな感じだろ。これで審議も早まるぜ」

常川の予言通り、審議の結果は翌週出た。

週の初めの月曜日の朝。
目が覚めてみると、昨夜の悪夢は現実のことではない
ように思えた。
朝食を作り、メイクを済ませ、大学へ行く。
いつもと変わらない日々。
芽生は少しずつ気分を回復させていった。

出勤早々にメールをチェックする。
これはいつもの日課だ。
すると学部の授業以来殆ど話したこともない
教授からメールが来ていた。

「佐々木芽生様。先週の全学審議会であなたの名前が
ハラスメント加害者として上げられました。本来は
学科内で処理される問題ですが、あなたの場合は
学生アドバイザーの職にあることから、全学審議会
で調査されることになりました。内密に調査される
べきことですが、今後の身の振り方を考える時間も
必要かと思い連絡させてもらいました。これは進退の
決し方を考える時間を教えるつもりであって、ハラス
メント行為を助長する意思はありません」

(何これ?)

早速身に覚えがないことと、学内審議会に変えて欲しいと
訴えても無理だと言う答えが返って来るだけだった。

その教授は自分は反対したが、他の人の賛成のせいで
この案件が全学審議会に回ったことをくどい程説明した。
何とか他の委員に人脈を使って手を回すことは出来ないかと
聞いても、今回に限っては無理だとクビを振った。

「全学審議会で協力した人間も処罰されることが決まりました。
ですから私もあなたに心当たりがあるのなら、協力する訳には
いきません。冤罪であるなら、気を楽しんで判断を待って下さい。
審議会の判断は慎重です。私にはこの忠告メールが精一杯です」

このメール以降、全く返事がなくなった。

全学の審議委員は多種多様の学部から構成され、山瀬の力も
及ばない。それならアドバイザーの職を辞したらどうか。
全学審議会から、各学部の担当に戻らないのか？
学生アドバイザー用の規約を確かめると、やはり覆すのは
難しいようだ。

この5年間で学内システムは少しずつ変わっていた。
ハラスメント相談所で挙げられた事案が、各学部に戻されて
処理されていたのが、初めから各学部で処理されるようになった。
全学審議会は言ってみれば控訴審のような位置づけである。

余程の事案でない限り、いきなり全学審議会にかけられることはない。少なくとも芽生が知っている事案で、いきなり全学審議会にかけられることなどなかった。

ここ数年は学生お客様主義の傾向が強く、特に学部生が相手の場合はできるだけ穏便に済ませようと、被害者が納得できるだけの調査をするようになった。学部生の声をアセスメントして、大学運営に活かそうとする試みも活発化している。お客様をおごりには出来ない。そこらへんの流れを考慮して、芽生は常に動いてきたはずだ。

(じゃあ誰が私を……?)

教授は、芽生に被害者の名前を教えてはくれなかった。院生は将来を掴まれているので、そもそも相談所に訴える事自体少ないのが現状だ。ならば学部生なのかと考えるが、訴えそうな学生はついで思い浮かばない。

芽生は見えない敵に囲まれているような、居心地の悪さを急に実感する。そこへ来て急に昨夜の出来事が思い出される。あの新婦のように、絶対に逆らえないと思いこんでいた人間が、自分を執念深く怨んでいるとしたら。これからの自分の一挙手一同すら、恐ろしい。これをしたら誰がどんな反応をするのか。相手がどう捉えるのか。

言葉づかい、行動、全て他人の怨みをかわぬように気を付ける。侮っていた相手ほど、牙を隠した恐ろしい相手に見えて恐ろしかった。

同じメール欄に、最近では珍しく矢越から昨夜の非礼について謝罪するメールが届いていた。

「内容はともあれ、大勢の前で君を辱めるような方法は、適切ではなかった。誤解だと信じている。だから気持ちが落ち着いたら今後について話し合おう。結婚は個人の問題だ。たとえスタッフでも親でも結婚について、口を挟まれる謂われはない。皆が悪く言うからと言って俺は君をそんな人間だとは思わない。自分で確かめたい」

何をどう説明すればいいというのか。昨夜のあの招待客の白眼視。何を言っても無駄なぐらいの、完璧な証拠。あの時、新婦は通話記録を一束持ってきて、喫茶店にいつて電話を貸したその日時もしっかり記録してあった。言い逃れはできない。

あの土岐等あかりも、こうだったのか。白眼視。何をいっても取りつく島の無いこの状況。無力感。

「皆に悪く言われるってことは、あなたに非がある証拠でしょ」

当時はそう思っていた。
悪く言われるだけの理由があるなら、本人に非があると。
「悪く言われていること自体が、理由になんてならない」
矢越はそう言ってくれた。
どうしてその時に気付かなかったのか。
気づいていたら、良く分からない変質者に付きまとわれることも
なかったのか。

(矢越だけでも味方につけなければ)

今からでも遅くはない。
芽生は矢越に面目が立つような言い訳を探し、学内の人間には
最高の態度を示す。
できることをするしかなかった。

一週間もしないうちに、芽生は自分を訴えた相手が誰だか分かった。
皮肉なことに、それは学生運動が立て懸ける立て看板からだ。
自分の名前がでかでかど書かれ、授業手伝いの院生に嫌がらせを
したことがペンキで書かれている。その看板は、全学審議会が
早く裁判を行うようにと促すものだった。

運動をしている学生には顔は知られていない筈だが、顔を隠す
ように自分の研究室へ戻る。信じられない気持で一杯だった。

田中優奈が自分を怨んでいる。
そして周囲がそれを支援している。
とてつもない恐怖だった。

今まで侮っていた相手が、いつのまにか自分を追い詰める程の
力を持っていた。
今までは自分が嫌った人間は、周りも賛同して嫌ってくれたのに。

(何とかしないと)

まだ審議されていない今なら、優奈の口から審議を取り戻すことが
できるはずだ。佐々木はすぐに学生の研究室へ行き、優奈を
見つけると二人で話さないかと言う。このおどおどした学生なら、
口で丸めこむ自信はある。

「他の人もいる場所でないと、お話しできません」

二人が話しているのに気付いた学生達が、一斉にこちらの様子を
伺う。その目が何かを咎めているようで、芽生は何か言い訳を
しないと、用意して来た言い訳を述べる。

忠告しただけなのに、悪口と言われて悲しい。
学生と仲良くなれるように構ってあげただけなのに、
嫌がらせと勘違いされた。
そんなつもりじゃなかったのに、悪者扱いされた。
そんなに嫌がっているなら、早めに言ってくれば良いのに。

皆事情を常川から聞いて知っているのに、反応しようがない。

何より自分達がずっと、リアルタイムで佐々木がやってきたことを見てきたのだから。今更なにをと呆れていた。

「お前がどう思っていたかなんて、関係ない。やられた方がどう思ったかが重要なんだ」

言葉を更に並べたてようとする芽生に、常川が宣告する。そのまま顔を真っ赤にして芽生は自分の研究室へ走って行ったが、誰一人後を追う者はいなかった。

その日から3日後。
全学審議会から事情聴取を受ける。
その場にいたのは全員他学科の見知らぬ教授陣らしき人たちだった。こういった手続きには慣れているのか人の良さそうな顔で、いきなり核心を突こうとはせず、こちらの意見を十分に聞くと言うスタンスだった。

その日に備えて学生アドバイザーをしていた頃に読んだ教本を参考に、檻樓をなさぬようにと、細心の注意を払って自分の行動の説明をする。

「お疲れさまでした。来週には審議会で結審されると思います」

翌週、芽生への処分が決定した。

佐々木の二カ月の停職処分と学生アドバイザーを懲戒解雇。
学生アドバイザーに関しては、事前に結果を知っていたので依願退職し、実質上は二カ月の停職処分となった。

常川が審議会の結果を伝えに、研究室の扉にぶつかるように入ってきて来た。

「やったな。佐々木の処分、停職2カ月だ！」

今までに受けた心労に対する罰が与えられて、ほっとした半面、優奈は今後のことを考えると憂鬱でもある。狭い学会という世界でこれから佐々木とどう折り合って生きていけばいいのか。この気まずい気持ちが一生涯続くのだろうか。

「また変な心配しているみたいだけれど、悪いのがあいつだから処分されたんだからな。お前は堂々としていけば良い。それより俺に何を奢るかの方を悩め」

大々的に祝うのも躊躇われるのが、常川は言い出したら聞かない。仕方なくなるべく人目に触れない形で、祝勝会を検討していると佐々木本人が現れた。

これは見物だと思ったのか、院生たちの視線がさりげなく、佐々木と常川に寄せられる。いつもは常川の事など丸無視の佐々木が、真っ直ぐに常川と優奈の居る方向に近づく。謝罪するのか。逆切れして罵倒するのか。息を飲んで皆が見守る中、芽生は常川を詰り始めた。

「常川君が、晴人と組んで私と小田切君を嵌めたの？」

「晴人って誰だ？」

「トボケないで！良く考えたら常川君なら簡単よね。研究棟内の動きを知れるし、ITスキルもあるからウイルスだって作れる。小田切君の奥さんとも仲が良かったみたいだし」

「またかよ。小田切と同じパターンじゃないか」

小さく常川がため息を吐く。優奈はデジャブを見ているようだ。もっとも小田切バージョンを見ていない、その他の学生達にはそこそこ興味をそそるらしく、皆固唾を飲んで見守っている。

「全部お前らの自業自得じゃないか……。自殺までそうとは言わないが、それ以外の事は、人のせいにする前に、少し自分の頭で考えてから発言した方がいいぞ」

「まるで私が芹沢君を殺したかのように婚約者に言うなんて、ひどすぎる。名誉毀損もいいところだわ！」

行っている意味すら分からず黙っている常川に見切りをつけると、
そこまで来て芽生は今度は優奈に歩み寄った。

「どうせあんたが裏で糸を引いているんでしょ？ 山瀬先生のことも
私から奪っておいて」

「……！」又殴られる。とっさにそう思った優奈は目を瞑った。
芽生は激情に走る前に周囲の視線に気づくと、上げかけた手を下して
捨て台詞を吐いた。

「こうなったら山瀬先生の事も暴露してやるわ。私一人だけこんな目に
遭うなんて冗談じゃない」

「嘘を言って、先生を困らせるなんて最低ですよ。止めてください！」

先程まで目を瞑って震えていた優奈が、両手を広げて前を塞ぐ。
またもや怒りが込み上げてくる。
山瀬を汚れないもののように崇拜しているような態度が、鼻につく。

「やっぱりそういう事だったのね。言っておくけれど、先生の事を
清濁全て含めて分かっているのは私だけだから。良く覚えておくことね」

勢いついて立ちほだかったものの、対面して睨まれると、
優奈は今更ながら怖くなってきた。

「おいおい、お前の相手は俺だろ。言いたいことがあるなら、俺に言えよ」

これは面白くなってきたと、他のメンバーがちらちらと芽生を見る。
他の研究室の人間も、騒ぎを聞きつけて集まって来た。
さすがにこれだけの野次馬には勝てないと踏んだのか、芽生は憤懣
やるかたない表情で、大きな音を立てて研究室から出て行った。

残された空気は、期待はずれによる失望感。
大事にならずに済んでほっとして座り込む優奈。
常川だけはいつも通りけろりとしていた。

自分の椅子に座りこんだ優奈の頭を、常川がぐりぐりと撫でる。

「よくがんばったな」

まだ目に生気がないままだ。
余程緊張していたのかと、常川が声をかける。

「あの、佐々木先生の最後の言葉って……。まさか……」

「ああ、そういう意味なんだろうな」

「……」

それを聞いて以降、優奈は急に無口になった。
無口でも常川の提案を無碍にすることはできない。
優奈は心ここにあらずの状態、焔も招いて祝勝会を
開いた。資金の都合で、当然前と同じ居酒屋だ。

「……あの、どうしたんですか、田中さん？」

ほとんど口を聞かない優奈を見て、焔が気にかける。
いつもなら嬉しいシチュエーションだが、今日は素直に
喜べない。

「ああ、失恋だよ失恋。馬鹿馬鹿しい。それよりもこいつが
ぼけっとしている隙にガンガン頼んで、こいつに払わせよう」

「失恋じゃなくて、精神的ショックです！そんな不潔な……」

「俺としては長年の疑問が解けてスッキリしたな。あいつがどうして
態度がでかいのか。だから言っただろ。夢見すぎるなって」

「普通先生と生徒が……なんて思わないですよ！しかも山瀬先生
ですよ。ショックです。ショック過ぎて、今日は寝られないかも
知れません」

「そうか。ちょうど徹夜のゲーム大会といくか。焔、お前も強制参加な」

「いや、僕はバイトが……」

「焔さんは、おかしいと思いませんか？ あんなことを皆の前で
言うのは名誉毀損の猥褻罪です！」

「絡むなよ。面倒くさいな」

その場ですうすうと優奈は眠り始めた。

「随分と先生を慕っているようですね」

「ああ、こいつがあちら側の人間なら、純粹に過ぎるな」

「？」

「これ運んでおくから、先にバイトに行って来い。遅れて減給にでも
なったら事だからな」

その言葉に甘えて、焔は二人を置いて、店に向かった。

『バイト』に向かう前に、焔は一件のバーに寄って行った。
相手は先に来て既に飲み始めている。まだ待ち合わせの時間では

ないが、女は既に数品も注文していた。自分もワインを頼むと、焔は女の隣に腰を下ろした。

「あなたには薄情に思えるでしょうね」

「理解は出来ない。しかし批判するほど傲慢ではないつもりだ」

正直な男に、天原は笑う。

「良く笑うようになった」

「変わったから。何もかも。この世界も捨てたものではないと分かったら、好きな物が増えていった」

「……」

「あなたのおかげ。ありがとう」

「自分で掴んだ幸せだ。胸を張れ。他人の助けなんて、所詮当てにならないものだ」

「そうかな。私は今回たくさんの人に助けてもらったし、感謝している。
……大事な物は1つに絞る必要なんて、ないのよ」

「おまえには 関係のないことだ」

久しぶりの朗報のはずだった。

突然降りかかった、アカハラによる停職処分。
未だに心を癒り続ける不正経理疑惑。
そんな中、矢越の方から会って話し合いたいと持ちかけてきた。
最近メールすらあまり返事のなかった矢越なので、
一抹の不安もない訳ではないが、芽生にはこれを好機に変えるしか
残された道はなかった。

「君たちを脅していた人物を調査依頼するつもりだ。僕もその人物から
君たちの事を直接聞きたい。結婚はそれから考えたい」

矢越が持ちかけた提案は、思いもよらないものだった。
アカハラ以外の芽生の所業を既に調査報告書で知っている、
矢越のぎりぎりの譲歩だった。

(もし脅している人間が、本当に逆恨みで罠に嵌めたことだったら、
自分は取り返しのつかない失敗をしてしまう)

そう判断しての賭けだった。

これがラストチャンス。

芽生も自分の信用回復の最期の望みを託すしかない。
誰が自分達を脅していたのか分かれば、結婚は何とかなるかもしれない。
芽生もすぐに賛同した。

芽生は候補になりそうな人物像を推理する。元業者の男は共犯として
リストアップしておく。
5年前のアカハラ事件に執着のある人物。

一番に考えられるのが、アカハラ被害者の土岐等の関係者。

実際に学内で山瀬と非公式の話し合いまでした。
結果は土岐等の家族には納得の出来るものではなかった為、
怒りを露わにされて困ったと山瀬が言っていた。
未だに恨んでいることは十分に考えられる。

二番目にアカハラの責を一身に負った芹沢の関係者。
芹沢は全ての責任を負ったとはいえ、事実アカハラを行っていた加害者だ。
家族はそれに負い目を感じていることは、葬式で確認済みだが、
それ以降に何か事情があつて心境が変化したというのなら、
話は違ってくる。

一週間後、調査結果が出る。
芹沢家では、母親は専業主婦で時間的に余裕はあるものの、脅迫をする
どころか、研究室に感謝をしていること。父親は退職後は、念願の喫茶店
経営を始め、毎日忙しくて家にはいない。喫茶店の従業員数や休業日を見る限り、
とても小田切や自分を脅している時間的余裕はないとのことだった。

(やはり土岐等家の人間の仕業か……)

土岐等家の調査結果を見る。
土岐等家の祖父母は、年金暮らし。祖父は趣味の郷土史の編纂を、
祖母はもともと農家なので、そのまま農業を続けては、農作物を
売買している。

趣味とはいえ、本まで出している。ここ数年は途切れることなく執筆活動に邁進しており、定期的に郷土史をカルチャーセンターで教えている。母親は以前から勤めていた中規模の会社に勤めており、現在は役職にまで付いていると言う。

「両家ともあなたを脅迫するような時間的余裕などありません」

「……そんなはずは」

焦燥と放心の交錯する表情を見て、矢越はもう無理だと悟った。ついにここまでの間、芽生の口から謝罪は一切聞かれなかった。

「結局誰も出て来なかったな」

できれば第三者と話してみたかった矢越だが、本人も心当たりがないようであれば仕方が無い。結論を出すのは次回に回すことにした。

「矢越さん、ちょっと」

生気を無くした芽生がよろよろと家に帰って行く後ろに、
続こうとすると、調査員に呼びとめられた。

「怨みを持つ可能性がある人物は見つけました」

依頼された両家ではなかったの、芽生には告げなかったらしい。
それに芽生には犯罪交じりのところがあるから、教えて厄介なことに
巻き込まれては迷惑だと言う気持ちも働いたんだと思う。

「 」

耳元に口を寄せて、そっと教えてくれた名前に、聞き覚えはなかった。
調査員によると、親族で「偶々」同じ和琴大学関係者は、一人だけだという。
その人物についてのプロフィールをそっと手渡す。

「もしかしたら……ひよっとするかもしれません」

慌てて追加料金を払おうとすると、調査員は断った。

「サービスで良いですよ。矢越さんもこれからいろいろ大変でしょうから」

既に矢越の決意を知っているかのようにスマートに断ると、身を翻して
どこかに行ってしまった。

矢越は罪悪感に苛まれていた。

芽生がしてきたことには、全く同情の余地はない。
自分に対する侮辱への怒りもあった。

それでも興信所の調査結果と芽生からのメールから、
第三者の悪意を感じずにはいられなかった。
今の時点では、芽生とは別れるつもりだし、復縁するつもりもない。
ただ一度はそい遂げようと思った人が、転落していくのを黙って
見物するほど、心を鬼にはできなかった。

全部ではないかもしれないが、これまでの経緯から、芽生が
一方ならぬ怨みをかけているのは理解できる。
それが逆恨みではなく、合理的だと言うことも。
おそらくもう芽生本人の力では、もうその怨嗟を解きほぐすことは
できない。

だが第三者の矢越なら。
その人物も耳を傾けてくれるかもしれない。
第三者が知っていることで、行動がエスカレートすることを
抑止することが出来るかもしれない。

芽生と一緒にいろいろな人物を疑って調べているよりは
余程身になるはずだ。

矢越は希望的観測の下に、その人物に会いに行った。

「初めまして。改めて自己紹介申し上げます。私は矢越事務所で政策秘書をやっております、矢越澄真と申します」

そう言って、名刺を取り出すと、机の上に置いた。場所は大学からほど近い、少し高級なレストラン。個室があるので、商談などにも利用される。

「よく来て顶けました - 野坂さん」

相手の女は飲み物も口をつけず、ただ黙って矢越を見やる。怒りがほとぼしる緊張感が、彼女の雰囲気清廉な物に見せる。

「あなたは既に私のことを調べ上げたようですから、やむをえず来ただけです。来たくて来た訳ではありません」

「これはまた手厳しいですね」

矢越は愛想笑いをして場を和ませようとしたが、野坂には通用しないようだった。一気に本題に入ることにする。

「失礼ですが、野坂さんには甥御さんがいらっしゃいましたよね？5年前に投身自殺された、和哉さん」

「最近の議員事務所はプライバシーの侵害を平気でするんですね。不愉快です」

「まあまあ、今日は事務所の意向で来た訳ではないのですよ。その甥御さんが亡くなられたことに、野坂さんは何か疑問がおりなんじゃないですか？」

「何が言いたいんです？」

「和哉さんが亡くなる直前まで所属していたのは、大学の山瀬研究室。そこで和哉さんは、院生をされていた。当時のメンバーには、佐々木芽生、小田切、朋谷、……それと土岐等あかり」

わずかだが、野坂が息を飲むのが分かった。

「土岐等あかりさんは、その研究室でひどいハラスメント行為を受けていて、その加害者は和哉さんだと審議された。それが原因で和哉さんは大学を退学処分となり、それを苦にして自殺をした。でも実際は和哉さん以外の院生も、それに加担していた。それを和哉さん一人に押しつけて、自分達はのうのうと普通の研究者生活を続けている。……そうですよね？」

「……」

「もしこれが本当なら、許せない気持ちも良く分かります」

ここで矢越は席をたって、深々と頭を下げた。

「何のつもりですか？」

「申し訳ありません。佐々木芽生は、私の婚約者です。今は

もう婚約解消寸前の状態ですが、この度の事心から申し訳なく思います。本当に申し訳ありませんでした」

「あなたに謝ってもらっても……」

「もしあなたが実際に芽生が憎くて行動を起こしていたとしても、仕方のないことです。それほどのことを芽生はしました。告発したりする身の上ではないと承知しています。私どもが責任を持って謝罪と償いをさせますので、もし芽生に対して更なる制裁を考えていらっしゃるのならご勘弁願えないでしょうか？ お願いします」

再び頭を下げる矢越。
躊躇いつつも、野坂は静かに答えた。

「あなたのお気持は分かりました。……ですが本当に私は、芽生さんや小田切さんを脅したりなどしていません」

「そうですよね……」

明らかに無念そうな顔をして見せる矢越。
野坂は、それが意図的なのか、純粹に出たものか判じかねた。

「お忙しいところ、お呼び立てして申し訳ありませんでした。まあ、せっかくいらしたのですから、ご飯だけでも召しあがって頂けませんか？」

そう言うと、矢越は寂しそうに笑った。
さすがに情が届いたのか、野坂は口を開いた。

「もうそこまでお調べになったのなら、隠しても仕方がない。私は確かにあの子が亡くなってから、ずっと怒りを堪えて来ました」

当時学生相談室で、土岐等あかりを担当していた野坂は、当然誰が本当の加害者なのかを把握していた。その中に甥がいたと言う。和哉は姉の息子なので、義兄の名字を名乗っている。だから野坂と血縁であることを知っている人間は、ほとんどいなかった。院生とハラスメント相談所というのも、通常はそれほど接点がない。

「もちろん倫理規定がありますから、誰がどんな相談に来ているかは甥であっても口外はしていません。今もお話しできません。ですが叔母としてはやはり気になるので、世間話の一環として時折和哉に尋ねていました」

相談員の立場と、かわいい甥の進路に、野坂はひどく迷ったのだろう。その職務故に知ってしまうことは、時にひどく残酷でもある。

「あなたのご指摘通り、和哉の他にもハラスメント加害者がいるはずだとずっと憤っていました。今はもっと怒りが強くなっています。この怒りは単なる義憤ではありません」

ここで野坂は息をすった。

「和哉は、殺されたのかもしれないんです」

(おかしい。絶対におかしい)

一度にこれだけの事が、起こるのは明らかに不自然だ。
明確な意思をもって、背後で誰かが手を糸を引いている。

小田切に攻撃が集中していた時は、不正経理の疑惑を逸らすことに集中していて、いるかも知れない共犯者のことは二の次だった。
小田切もその考えに賛成だったが、先手を打たれてしまった後では、先に相手を特定しておくべきであったと悔やまれる。

不正取引。
5年前の事件。
小田切との会話。
アカハラ。

全てが露見した今では、変えようもない過去であり、事実だ。
初めから場当たりの対処ではなく、相手を特定した上で対処しておけば良かったのだ。

これほどまでに執拗に5年前の事件に拘る人物。
それも関係者の家族ではない。
他の関係者まで思いを巡らせたときに、芽生は一人思い至った。

(まさか。でも……考えられないことではない。だとしたら、
このままでいれば、破滅しか考えられない)

思い立った芽生は、早速朋谷に電話した。

「あの学部生が犯人よ……。それ以外考えられない。私に逆恨みして、
こんな罫まで仕掛けて。警察に脅迫罪で訴えてやるわ」

「学部生……。誰だそれ？」

「忘れたの？土岐等さんを慕っていた田淵研究室の学生よ。孤立無援
だった土岐等さんに、山瀬先生に立てついて一人だけ味方をして
退学処分になった学生がいたでしょう？院生じゃないし、うちの
研究室の学生じゃないから、候補から外していたけれど。血縁でも
ないのに、そこまでして忠義立てるなんて馬鹿らしいと思っていたけれど、
最後まで抵抗したところから、今までどうして気付かなかったのか
不思議なくらいだわ」

言われて朋谷は思い出した。
まだ幼い顔をした学生を皆で取り囲んで、証拠を潰そうとした光景を。

これも恥ずかしい過去だ。
あんな詰まらないマネをして、朋谷には何のメリットもない。

(こいつらは本当に学習しない……)

せっかく現時点でターゲットと見なされていないのに、
佐々木と行動を共にすることで、自らターゲットに立候補するのは
割に合わない。朋谷はいい加減巻き込まれるのはうんざりだった。

「心当たりがあるのなら、自分で興信所を使うなりして探してくれ。
山瀬先生なら、またいつも通り君の力になってくれるだろう。
俺もこっちでいろいろ忙しいんだ。悪いけれど、力にはなれない。

大変だと思うが、自力でなんとかがんばってくれ。それじゃあ」
一方的に話して、相手の反応を待たずに朋谷は電話を切った。

(学生が実力行使で復讐か……)

アカハラの被害者は、大学が解決に尽力してくれない場合、
適当な理由を付けて大学から追放されざるを得ない状況に置かれる。
更に対抗するには裁判くらいしかなかった。

(時代は変わったな)

朋谷は今現在揉み消そうとしているアカハラの被害学生が、
そんな気概を持っていないことを願った。

最期の話し合いは、いつも利用するレストランだった。
芽生は来るべきものが来たと覚悟はしていたが、それでも何とか縫えば修復できるかもしれない。
アカハラで停職処分までくらい、不正経理の件ももみ消し中だが成果は芳しくない。せめて私生活くらいはと望んでも罰は当たらないだろう。芽生は一縷の望みに全てを託した。

慰めてもらおうと頼ったその手は、無慈悲にも芽生を突き放した。
待ち合わせの場所に一足先についていた澄真は、芽生が来るや早々に別れを切り出した。
既に双方の親にも連絡はついているという。

「私の立場が悪くなったからって、簡単に捨てるの？ 卑怯者！
それでも婚約者なの？ 苦楽を共に出来ると考えたから、私と結婚しようと思ったんじゃないの？」

一方的に捲くし立てる芽生を、澄真は未知の生物でも見ているかのように、興味深げに一瞥するだけだった。

「私はあなたとなら、どんな苦勞にでも耐えられると思ってプロポーズを受けたのよ。あなたは違ったのね。
余所に好きな人が出来たから、簡単に婚約者を捨てるのが出来るってわけね」

芽生自身それが理由でないことは分かっていた。
それでも自分の非を認めたくはない。
自分の過ちで婚約が取り消された哀れな女に、成り下がることは、プライドが許さない。

「……」

矢越からは全く反応がない。
無表情な顔からは何も読み取ることができない。
ここ最近の苛立ちを発散するかのように感情をぶつけてくる芽生を、ただじっと澄真は見ている。
人形が突然口を聞いたかのごとく、呆気にとられていると言い換えたほうがいいのかも知れない。
実際婚約者にすら素の芽生をさらけ出したのは、今回が初めてだった。
ヒステリックに逆切れするのは、ここ最近はあったが、それでも程度をわきまえていた。
だが今日は本気で、腰を据えて自己正当化に終始している。

「何とか言いなさいよ！ 私はこのままで済ませるつもりはないんだから。どうしてもと言うのなら、慰謝料を請求するわ」

そこまで言うと、澄真は一枚の写真を手渡した。
ひたたくるように見ると、そこには一夜限りの出来事の山瀬とのツーショット写真だった。誰にも知られなかったはずなのに。
最悪のタイミングだった。

「……これで十分だろ。慰謝料はこっちが貰いたいくらいだ」

「……」

「じゃあ」とそのまま鞆を持って立ち去ろうとする澄真。
芽生は必死で引き止める。
しっかりしなくては。ここが正念場だ。
停職処分を受けている今、私生活まで駄目にするのは絶対に避けたい。

「待って。これは誤解なの。ちょっと先生が酔っ払っちゃって、それで……」

右腕のスーツの裾を引く。捨て身の作戦が効いたのか澄真が立ち止まる。

「本当に……誤解なの。ちゃんと後から証明してみせるから。だから……お願い。あなたとこのまま駄目になりたくないの」

「君は、芹沢君を殺したのか？」

「え……。そんな訳ないじゃない。私たちは芹沢君を怖がっていたのよ」

「嘘を吐くな！お前たちが土岐等さんに嫌がらせをしているのを録音した
ものがある。お前が嫌がらせをするよう、芹沢君に命令している
じゃないか！ハラスメントがばれて罪を被るのが嫌だから生贄を作った
という訳か」

「そんなものをどこから……」

「『違う』とは言わないんだな」

「……違う。もちろん違う。聞いてそれは……」

「もういい！情けない人だ。ここまで来て一度も謝罪をしない。
どうして一言自分が悪かったと言えないんだ。お前はいつも
言い訳ばかりだ」

芽生は初めて矢越に「お前」と呼ばれた。

終わったことは仕方が無いが、それに反省も謝罪もしない姿が
おぞましいと矢越はテーブルの端の方を見ながら言った。
もう視線すら芽生と合わせてくれない。

「……君が、お前が発作で無抵抗の土岐等さんに罵倒した
言葉を知った。驚いたよ。お前は『最低』の価値すらない」

「……」

「婚約者でなかったら、言葉を交わすことすら吐き気がするくらいだ。
……二度と僕の前に現れないでくれ」

強く身体を振り払うと、そのままレジに五千円札を置くとそのまま
去っていった。成り行きを見守っていた店員は澄真の後を追うか、
芽生に渡すのか迷っていたようだったが、さっさと澄真はタクシーに
乗って行ってしまったので、仕方なく芽生に渡しに来た。

「お連れ様のお釣りなのですが、お渡ししてもよろしいでしょうか？」

「ええ……」

渡されたのは4000円。これが手切れ金のようなものなのか。
馬鹿にするなど芽生は机に叩きつけた。

最終的にはいつもチャンスくれた矢越からの、決定的な別れの言葉は、ひどく芽生を打ちのめした。

後に残るのは、審議会で下された停職処分。
不正経理疑惑の払拭。
矢越との婚約破棄。

頭が痛い、地道に一つずつ潰して行くしかない。
足を引きずるようにして、芽生は帰路に就いた。
集合ポストの前まで来る。
疲労感が尋常ではなく、家までの道のりが今日は随分と遠く感じた。

「なによ、これ……」

ポストの中には大量の紙が入っていて、「金返せ」や「泥棒」と書かれている。意味が分からなくて、間違えて他のポストを開けたのかと思った。
だが確認しても自分のポストだ。
このマンションのポストはダイヤル式なので、間違えればそもそも開かない。

管理会社に相談しようと、急いで携帯を取り出そうとする。
そこへ他の住人が下りてきた。
こんな恥ずかしいピラを見られるのは、事実無根であってもプライドが許さない。
急ぎ鞆に押し込み、部屋に持ち帰って対処を考えることにする。

占いなど全く信じないけれど、不運が集中する時期が存在するのなら
今がそうなのだろうと自嘲気味に芽生は思った。
しばらく御茶を飲みながら、なんとなくテレビを見ていると、電話が鳴った。

ピピピピ。

「この程度で許されるとは、思っていないでしょうね？」

受話器を取って流れたのは、機械的な女の声。

すぐに芽生は電話を切って、ベッドに放り投げた。
『この程度』が何を刺しているのかは不明だが、
今日一日に起きた不運の内容を、相手は知っている。

(相手は直ぐ近くに居るのか?)

嘉納が犯人だとしたら、意外と直ぐ側に居るのかもしれない。
すぐに興信所に電話をして、嫌がらせの相談として、疑わしい人物として
嘉納の名前を挙げた。一方的に電話や手紙で嫌がらせを受けていると
説明すると、すぐに依頼を引き受けてくれると返事をしてくれた。

(これでひとまずは安心だ)

停職処分中は、再就職も視野に入れて今できることに集中する。
これ以上の転落を防ぐために視力を尽くすことにする。

結果は一週間で来た。

「調査はしましたが、現在の居場所や職業などを知ることは無理でした」

「失敗したって言うの？」

広告に書いてあったことと違う捜査に、早速怒りだす芽生。
相手の調査員も逆切れ状態だ。

「失敗ではありません。相手の方の事情により、通常なら可能な調査が出来ないのです」

「『相手の事情』って何よ？特別なコネでもあるってわけ？」

「それは言えません。ですがお客さまもこの件からは手を引くことをお勧めします。それともう一つ」

先程から機嫌が悪いのか、この調査員は初めの電話と同一人物とは思えない程、感じが悪い。

「この方を調べて、どうなさるおつもりですか？ 犯罪行為の隠蔽でしたら、余所へご依頼ください。多分どこも引き受けないとは思いますが。わが社は犯罪行為には一切手を貸すことはできません」

言うだけ言うと、調査員はお茶を出そうとしている受付嬢に向かって、「お客様はもうお帰りなので、お茶はいらない」と指示する。
帰れと言っているのだ。

恥ずかしさと怒りで悶死しそうだが、静かなオフィスで暴れる訳にも行かず、悔しさを抱えながら帰る。
調査料金は返してもらえたが、芽生は納得できない。

(調べ上げることができない立場の人間ってどういうこと?)

芽生の計画はまたもや暗礁に乗り上げてしまった。

得体の知れない相手。

対決するには、やはりあの元営業マンから責めた方がいいようだ。
不正経理を指摘した事実から、あの嘉納が脅迫者なら共犯関係にあるはず。

「晴人君をお願い」

「今日はもうご指名が入ってしまして……」

「……」

これで3回目だ。
毎回同じ女が独占している。

(新人はいろいろな客と交流させるのが普通じゃないの?)

自分も毎回独占していたのを棚に置いて、芽生は腹が立つ。
いろいろ理由を並べ立てて、毎回他の従業員を進められる。
晴人でないと意味が無いので断るが、これでは全然捕まらない。
メールをしてもあからさまな営業メールだけで、不正経理に関しては何も触れない。

(埒が明かない……)

かと言って、同伴やアフターも同じ女が毎回指名している。
こればかりは興信所に頼むことができる案件ではない。
自力で解決するしかない。

店に行っては諦めて帰るのを繰り返して、一週間ほど経過した頃。

メールが来た。

晴人からだ。
最近店からも警戒され、店に行くことを控えていたが、
相手も商売。営業電話をかけてきたという訳か。
少し懐かしい気持ちで受信したメールを見してみる。

『そちらの気持ちは分かりました。私としても怨みがあったのは
小田切先生だけなので、前回そちらが提示して頂いた条件で、
証拠を破棄しても構いません。店だといろいろ差しさわりがあるので、
下の場所でお待ちしております』

指定された場所は、高台からの展望が有名な自然区域。知名度にも関わらず、
観光シーズン以外はひっそりとしている。人気が無く、もし好事家が出た
としても地域住民がわざわざ来ることは少ない。確かに待ち合わせて秘密の
話をするにはいいかもしれない。相手が車でもあれば、そこから他の場所に
移動するのも簡単だ。

(やっと解決の糸口が見えた!)

喜び急ぐ芽生。
しかしその後、彼女がこの部屋に戻って来ることはなかった。

「また？何かしたの？あの子？ これで三人目よ。妙な事件にでも巻き込まれたのかしら。迷惑ねえ」

大家のおかみは口ではそういいながらも、好奇心で目を輝かせていた。

「三人目と言いますと……」

「一人目は婚約者だとか言っていたわね。普通のスーツを着た、いかにもサラリーマンっていう人だったわ。度々来るから本当に心配しているんだと思うけれど。未成年でもないし、妙な張り紙がポストから零れ落ちている時もあったしねえ。悪いけれど借金関係で、自分から失踪した気がするわ。こっちも今後家賃を滞納されるかもしれないなんて困っているって言ったら、その分立て替えてくれてね。いつ帰ってきてもいいようにって、部屋はそのままにしてその分前払いしてもらっているのよ」

余程話し相手に餓えていたのか、かなりの個人情報ペラペラと話してくれた。もちろんこちらからの情報提供を見返りに要求しているのは、想像に難くない。

「僕らは同じ大学の学生なんですよ」

「ええ、あなた学生さんなの？ いやに老けて……いや大人びているのねえ」

「はは、いいですよ。よくおっさんみたいだって言われますし。自分でも加齢臭が最近するんですよ」

「あら、まだそんな年齢じゃないでしょ！」

のりのよさに気に行ったのか、まだまだ情報提供をしてくれそうだ。優奈たちには捜査権限などない、ただの一般人だ。聞き込みにも限界がある。

「張り紙って言っていましたが、借金でもしていたんですか？」

「そんなようなこと書かれた張り紙がポストに入っていたわよ。直接部屋とかに貼ったら、今はそういうのって違法なんでしょう？ でもやっぱり返さないといろいろ取り立てが厳しいのねえ」

「張り紙を入れていたのは、どんな人でしたか？ やっぱりその筋の外見でしたか？」

「さあ？私は少なくとも見ていないわね。ほら、うちのマンションって、玄関はオートロックでしょ？だから基本外部の人間は入れないんだけど。ポストはそのまま手前があるからねえ。監視カメラも玄関にしかないし。」

私も管理会社に運営は任せているから、あまり内情は知らないのだけれど、住人が一人くらいは見ているかもしれないけれど。住人同士の交流って最近ほとんどないからねえ」

「……まあ、オートロックでも前の人についていけば、入れないこともないですしね」

「まだ事件になっていないし、警備会社にも相談はしていなんだけれど。ほら、本当に金融関係から逃げているんだったら、藪蛇になってもかわいそうだしねえ」

「はあ、まあ……」

「それで、もう一人って？」

「ええ。もう一人も若い男の人……だと思っただけけれど」

「確かじゃないんですか？」

「ええ。金髪でサングラスしていたから、なんとなく若いって思ったんだけれど。もしかしたら年配の人がしているって可能性もあるわねえ」

「その人も女の行方を聞いたんですか？」

「ええ。ここに住んでいないかって聞くから、ほら私こう見えて口堅いでしょう？だからプライバシーなんて言えませんって言ったのよ。そうしたら、自分は佐々木さんの友人で、最近佐々木さんと連絡が取れないって言うから。いろいろ教えてあげたって訳」

「それでその男は、最近ここに来るんですか？」

「ええ。偶にふらっとね」

しばらくそのマンションを貼ることにした。自称口の堅い大家には、更なる口の堅さの精進に勤めるよう促した。そして二週間が過ぎた頃だろうか。

もうほとんど諦めかけていた時、男が現れた。

大家がそれ以降店舗の従業員にも気を付けるよう通達を出したおかげで、男が来るのは夜九時すぎくらいということが分かっていたので、そのくらいに張り込みをしていた。

「あれは……」

常川は目を瞠りそう呟く。それ以上何も言わなかったが、動揺しているのは確かだった。

「やっぱり未だに実家にも連絡がない」

例の学内新聞の記事が予想外に好評だったのか、野次馬たちが例の部屋を見に来るようになった。鍵はあの日以降取り替えられたので、中には入れないのが、なんとか理由を付けてはあの部屋で百物語をしたり、肝試しをしたりと、なんやかんやで楽しんでいる。

警備人としては頭の痛いことだ。小田切の娘の件もあるし、不特定多数が使う状況にはしたくないのだが、勉強会など銘打たれた会合を断る訳にも行かない。最近ではその学生が異常をきたすきっかけとなった殺人現場へも足を延ばす猛者もいるらしい。さぞかし土地所有者も迷惑していることだろう。

そんな変わり者たちが最近、後日談を知りたがる。姿を消した院生はどうなったのか？小田切が自殺したと聞いて、怪談話がより深みを増したらしい。怪談話を流布した身の上としては、落ちを付ける責任があると、常川が数年ぶりに実家に電話したところ、家族はやはりまだ戻っていないと答えたと言う。

「確かにあれは塔堂だった……」

あの晩、マンションで会った男は塔堂だったと、今になって常川は言う。

今回常川がもう一度、真剣に塔堂の行方を探したのは、怪談話の落とし所を付ける為ではなかったらしい。確かに塔堂は行方をくらましているだけなのだから、いつ姿を現してもおかしくない。むしろ姿を発見できたことは喜ばしいことだ。

「あの男の人が塔堂さんだったとして、戻ってこないのは、どんな理由があるんでしょう？単純に研究生活が嫌になったと言うことでしょうか？そうだとすると、もっと上手い方法があるはず」

当時はアカハラが横行していたと言うし、そのターゲットにいるのが嫌になって身を隠したと、考えられないこともない。だが人には生活がある。一時的ならともかく、5年間も実家にすら連絡しないというのは考えられない。

「退学すればいいだろ？失踪すると、住民票から保険証まで面倒なことになる」

前も似たような会話をしたような気がする。

「退学したことを気付かれなくなかったとか……。学生達の間で嫌がらせが合ったんですよね？だったら先生や事務方は退学したことを知っていたけれど、その学生さんの気持ちを慮って秘密にしているということはありませんか？家族もそうだとしたら、本当の事は分からないじゃないですか？もうとっくに帰って来ていて、ちゃんと就職もしているのかもしれない」

「本当にそうだったら、わざわざ他の学生のところに電話してまで、行方を尋ねたり搜索願を出すか？黙っていなくなるだけで十分だろ？」

大学院ではいつのまにか除籍している学生というのは、案外たくさんいる。条件の良い就職ができそうだというおめでたい者もあれば、悩んだ末行方がしれなくなるという、先を知るのが怖いものもある。

基本的にそれほど絆が強くないのだ。

常川も長い大学院生活で、幾人もそういった学生を見てきた。完全に失踪してしまうことは少なく、大概学生なりにまっとうな理由があるが、いちいち説明しないだけである。周囲もあえて問い質すことはない。

「あいつが復讐の為に、姿を隠したのだとしたら？」

復讐の為に潜伏して、機を伺っていると言うことか？

「でしたら普通に学生をやるべきでしょう？それこそ復讐する機会がなくなってしまう……。学内の様子だって、外部からでは分からないでしょう」

「いや、資金集めや人脈作りに集中するなら、ありかもしれない。協力者の中に潜ませておけばいいのだから」

「それじゃあ……」

「あくまで可能性だ」

「任せておけ。俺が何とかしてやる」

確かに朋谷は言った。
学生はそれを信じた。
朋谷ができるかぎりの対処をすることを。
秘密を漏らさぬことを。
朋谷の人格を。

その結果一学生は窮地に追い込まれることになった。
学生に落ち度があるとすれば、朋谷を信頼に足る人物と
信じたことだけ。
しかし朋谷に罪の意識はなく、むしろ上手に世渡りできない学生に、
苛立ちさえ覚えていた。

遡ること約一週間前。

「どうして論文を横取りされて、修士論文のテーマを変更しなければ
ならないんですか？締め切りまであと2カ月しかないんですよ。
本当に教授と話し合いをしてくれたんですか？」

学生は指導教官に修士論文のドラフトを提出した。
もちろん内容を指導してもらう為に提出したのに、
なぜか指導教官はそれを自分の論文として学術雑誌に
投稿することに決めてしまった。
もちろんこのままでは盗作であることが丸分かりになってしまう。
そこで指導教官は、学生に修士論文のテーマを変更するよう
圧力をかけてきた。
言うことを聞かなければ、論文を取り下げると、学位を盾に
脅しをかけてきた。

当然修士学生 - 有徳は納得ができない。
締め切りはあと二月。
新しく他のテーマで書き始めるには時間がなさすぎる。

「したよ。その結果が今回のことを招いたんだ」

学生相談所のないこの大学で、有徳は初め事務に相談をした。
それをどこからか聞き付けた教員が、この朋谷だったのだ。
突然相談を聞くとメールが来た時には、有徳も怪しんだ。
そもそも聞き付けた出所はどこなのか。
その時点で怪しいが、他に頼むべき人もいないので、有徳は
朋谷を信じてしまった。

その結果、未だに現状を受け入れられない学生は、取り急ぎ違う
テーマで書けという指導に応じておらず、このままではあとわずか
2か月で書きあげなければ、修士論文を受理しないと圧力を掛けられる
はめになっていた。常識的に考えて、2か月ではとても間に合わない。

「黙って留年しろと言うんですか？ 留年をしたら奨学金も打ち切られるん
です。そんな余裕ありません。アカデミック・ハラメントであると
あなたが学内行政に訴えれば、処罰されるのは教授のはずです」

「そういうのが迷惑なんだ。分かってないのは君だ。ここは学校で教授はいわば社長なの。君は会社に入って自分の成果だからって、社長にもそう主張するつもりか？社会ってものが分かってないな」

「今度こうなったのは、あんたが告げ口したからか？ おかしいだろ？あんたに相談してから俺の立場は一層不利になったんだ。あんたが漏らしたとしか考えられない」

「妄想で適当な事言わないでくれ。どこにそんな証拠がある？大体その論文だって君が書いたって証拠はないだろ？」

証拠のCDRは教授に既に渡してしまった。
だが学内行政宛てに事務に提出だけでもしてみるか。

「前渡したあのCDRは？ あれ返せよ」

「さあ、そんなのもらった記憶はない」

「はあ？ ふざけているのか？ アレがどれだけ大事なものか知って言っているのか？早く返せよ」

朋谷のふざけた態度に業を煮やして、学生は朋谷に詰め寄った。
だがこれがいけなかった。朋谷はこの瞬間を待っていたのだ。

教授が入ってきた。横に副査の教授も連れている念の入れようだ。

「朋谷君に、何をしているんだ？」

「これは……」

「狂言をいうだけでなく、教師に乱暴をすることは。これはもう嚴重な処分が必要でしょうな」

副査が今日中に追従するように言う。
学生は罨にはまったことを瞬時に悟った。

(今回も嫌な仕事だった。はあっ)

自分にアカハラのもみ消しを依頼してきた宗教授は、普段は傍若無人のくせに悪だくみの頭だけは回る。外から見ると、その悪だくみで使うの頭の良さすら、知的に感じるらしい。不公正なことだ。まあ協力している朋谷には、言えた義理ではないが。

(あの学生、俺の事きつと憎んでいるだろうな……)

人情として、元凶だが直接のコンタクトをしない人間よりも、直接交渉して悪い結果を出してきた媒介の方が憎らしく感じる。イメージがしにくいからだ。それを理解した上での宗の行動は、本当にあくどい。

つくづく自分は教員運がないと、朋谷は感じた。他の教員はこういった要請を受けたことすらないだろう。宗はそれを良く知っているから、そういう教員に頼むことはない。直接の部下かつ、自己保身が第一の朋谷だからこそ立てた白羽の矢だ。ありがたくないことだ。

先程の学生は、ゼミでは孤立しがちだが、実際の友人関係など分かったものではない。そういうのもちゃんとリサーチの上での、宗の行動だと信じたいところだ。

あの学生はもう留年したから、また来年も同じことが起こるかもしれない。今度こそ訴訟になるかも。そう思うと明日のCOE会議の発表資料にすら、集中して読み込むことが出来ない。

「本当、早く死んでくれないかな」

宗を頭に思い描いて、物騒な独りごとを漏らした。

ルルルルル。

携帯電話が鳴る。

「はい」

不機嫌な気持ちそのままに出ると、相手は名乗らずにこういった。

「佐々木の居場所はどこだ……」

朋谷はとっさに携帯を投げ捨てた。

(あいつがどうして……?)

相手が通話を切ったのをおそるおそる確認してから、
ようやく朋谷は携帯を切る。
発信番号は、公衆電話からだった。

翌日、朋谷はCOE会議の為に朝早く、母校の和琴大学へと向かった。

指導教官だった山瀬の人脈で、他大学に籍を置いているにも関わらず、COE教員として参加している。

山瀬研究室OBとしての付き合いのようなものだ。

必然的に山瀬研究室OB達と定期的に会うことになる。

先日から5年前の事件を引き合いに、執拗に連絡をとってくる佐々木のことを考えると、億劫になる。

最近佐々木からの攻勢が止んだとはいえ、

直接コンタクトを仕掛けてくる可能性もある。

あの事件の事は正直忘れたいのには、はた迷惑なことだ。

関係者の一人だった小田切が、不審な死を遂げたのも薄気味悪い。

佐々木に至っては、政治家一家の跡取りと結婚する為に、過去の悪行のもみ消しを図ろうと躍起になっているのだろう。

いずれにしろ自分一人でやるべきだ。

都合のいい時だけ頼み込んでくるなど、友人でもなんでもない。

テストの時だけ近づいて来る学部時代の知り合いのようで、

その下卑た根性が、気持ち悪い。

今日ははっきりと言った方がいいだろうなど、朋谷は決意した。

今日のCOE会議で中心となるのは、もちろん各自の研究発表だが、その日は内部規定や海外の協力校との日程スケジュールも確認する予定だ。少々退屈そうなプログラムではある。

その席で耳を疑うような規定が発表された。

『共犯処罰規定』

「わが校の全学審議会で決められた共犯処罰規定により、アカデミック・ハラスメントをした者はもちろん、その実行及び隠蔽に加担した者は処分されます。このCOE内プロジェクトにおいても、当然これは適用されます。具体的な処分内容について、今日は暫定的な処分内容について議論したいと思います……」

説明しているのは、年若い男。

まるで自分は正義の体現者とばかりに、堂々と説明する姿は朋谷にとっては厭味ったらしいものに他ならなかった。

(気に入らないな)

加担したくてする訳ではない者もいる。

世の中はきれいごとだけではないのだ。

佐々木などはさぞかしこの規則に反対しているだろうと探すが、

今日はその姿を見せていなかった。

小田切の件が頭をよぎり、いなければいけないで気になる。

長ったらしい会議が終わった後、顔見知りから佐々木について聞こうと探す。

「あの、佐々木先生はどこに？」

規定についての議論が終わり、発表の段になってから
会議場に入って来た顔見知りの後輩に声をかける。
今年入学したばかりの田中は、朋谷から見ると子どもにしか
見えない。

「佐々木先生、ですか？……」

何故か答えにくそうな田中。
何をそんなに困っているのか分からず、諦めて他の人に尋ねようとする。

「佐々木は、失踪中だ」

「常川さんっ」

研究室にもまともに来ないこの男が、COEに来ているなんて
想像もしていなかった。
いやそれ以上に、今までの必死の形相で連絡を取ろうと
していた佐々木の失踪。
悪い予感がする。

「失踪？何か原因らしいものはあるのか？」

「アカハラで処分されたから、不貞腐れているんだろ。
怪文書が届いていたから、単に姿を消しているだけかもな」

その言葉に朋谷はどきりと目を泳がせる。
朋谷はまさに今現在アカハラの共犯者だ。

それに以前佐々木は自分と小田切が、5年前の事件を盾に
脅されていると言っていた。
先日の悪戯電話もそうだとするのなら、佐々木は妙な
ことに巻き込まれているのかもしれない。

「お前ら、何か隠しているだろ？」

常川は、朋谷の気持ちなど気にせず、ずけずけと聞いて来る。
聴講者用の椅子に腰を下ろし、頬をついてあけすけに聞いて来る。

「佐々木さんが失踪したことも知らなかったのに、
何を隠すと言うんだ？」

「5年前の事件」

「知らない。お前もあの顛末は全部知っているだろう？」

「皆が知っている事実と、真実が違うんじゃないか？」

「俺は土岐等さんとも、芹沢ともそれほど親しくなかったから、
良くは知らないよ」

常川はもちろん当時の人間関係に関して、ある程度把握しているので、
見るからに疑わしい視線を寄こして見せる。

「アカハラ関係での揉め事は、尾を引くからな。適切な処分がなされても文句が出るご時世だ。理不尽な終わり方だったら、禍根が残るのも考えられる。お前も気を付けろよ」

「余計な御世話だ。佐々木さんが姿を消したって言っても、実家に帰っているだけだろう。処分されたのが本当なら、遊んでいる訳にもいかないだろう」

不気味な予感に震える心を奮い立たせる為に、あえて希望的観測を述べる朋谷。

「大家さんによると、マンションはそのまま、突然姿を消したらしい。中は綺麗に片付いていて、財布や保険証の類も無くなっていることから、自分からいなくなったと今のところ考えられている。マンションの管理会社へ実家から問い合わせがあったくらいだから、実家にも帰っていないはずだ」

ますます気味悪くなる展開に、朋谷は鳥肌が立つ。小田切と佐々木の身の上で起きた異変について聞いて、朋谷も件のブログをチェックした。確実に裏で何かが動いている。ひたひたと忍びよる不気味な気配に、しばしの沈黙が訪れる。

「……塔堂。あいつ生きていたんだな。お前そのこと知っていたか？」

声を抑えて常川が囁く。声が届くなり、朋谷は大袈裟な程に反応した。

「そんな訳がない！」

急に朋谷が大声を出して立ち上がったので、優奈は息を飲んだ。

「……あいつは姿を消しただけなんだ。姿を現したのなら喜ばしいことじゃないか？」

「これだけ長く見つからないから、死んだと思っただけだ」

「何か知っているんじゃないか？」

「何も知らないといっているだろう！」

これ以上詮索しても、朋谷の怒りを増すだけだ。常谷はそう判断したのか、それ以上追及はしなかった。会話が途切れ、遠くから聞こえる学生達の話声が耳に届く。廊下で一人、この会話に耳を澄ませる者は、自分の存在が悟られないよう、柱の陰に身を隠した。

「佐々木さんは殺されているかもしれない」

ぼつりと放った朋谷の一言は、不吉極まりない。それでも小田切の結末を知っている一同にとっては、ありえない話と、一笑に伏して終わることのできないだけの

リアリティを持っていた。

「小田切が自殺したからか？ あいつは自分で……」

「佐々木さんにもしものことがあったら、
すぐに警察に通報してくれ。俺と山瀬先生にもすぐに連絡しろ」

「言われなくてもそうするだろ。お前まだ何か隠しているな。
5年前に何があった？」

常川は小田切と佐々木宛てに届いた、怪文書のことを朋谷に話した。
朋谷は自分の名前が書かれていなかった事に安堵しつつも、
怪現象の影に隠れたその手紙の存在が気味悪く思えた。

「お前に言えた義理か。お前だって土岐等さんを見殺しにした一人
じゃないか」

「……」

ぐっと常川は言葉に詰まる。
教室の傍で、隠れて会話を聞いていた人物の目が見開かれる。

「山瀬先生はそのこと知っているのか？」

「さあ？ 佐々木は山瀬に見捨てられたからな。それまでは
何とか裏から手を回そうとしていたみたいだが。ボスが
そういうんなら仕方ないよな。お前も見限られないように、
気を付けろよ」

「山瀬先生さえいいと言え、すぐにでも警察に行け」

「何だそれ」

「山瀬先生が全てを教えてくれるはずだ。俺が話したことは内緒に
してくれ。じゃあな」

もうこれ以上話すことはない、その場を去ろうとした朋谷に
常川は更に詰め寄る。

「何だよ。勝手な奴だな。本当のことを話す気になったら、
教えてくれ。お前の身もヤバいのかもしれないぞ」

ぶうぶう文句をたれる常川。
だが朋谷の深刻な様子に、優奈は不安を隠しきれない

隠れていた焔が、頃合いだろうと姿を現した。

「お話し中、すみませんが、これを朋谷先生に」

そういうと先程までのあの忌々しい共犯罰則規定についての説明だった。

「朋谷先生、わが校の新規則について説明したものを用意しました。
先生は他大学で勤務されているので、ご存じないこともあると思います。

COEに関しては、先生も拘束される内容ですのでよく読んでください」

先程のこざかしい正義つらした男が、パンフレットを渡す。
街中で配られるチラシを見る目つきで、それを受け取った。

「まるで取り締まりだな。いつからここは監視体制になった？」

「当たり前のことを御存じない方が、偶にいらっしゃるんですよ」

「君はその忠実なる手先と言う訳か」

「規律を守るためには、憎まれ役も必要です」

(ますます面白くない)

朋谷はイライラを隠すことなく、適当に鞆にチラシを詰め込むと
今度こそ帰ってった。

「そのままでもいいのですか？」

居酒屋で管を巻いた後、閉店になり仕方なく一人で帰る帰り道。
ふと朋谷に似た体形の中年を見かけて、腹が立ち小石を蹴る。

「くそ、あのクズ！」

石に当たっても気は晴れず、近くの公園のベンチに座る。
大学に持参している水筒を出すと、ぐいっと飲んだ。
たくさん飲んだが本気で酔えない。
風鈴の音が聞こえて夏の訪れを感じる。

もう何度目になるか。
要領がわるいのだろうな。
今もこんなありえない不幸に押しつぶされそうだ。

最低限の事だけをこなして、何もやる気が出ない。

「動くのなら、早い方がいい。あなたは一週間も無駄にってしまった」

近づいてきた黒衣の男が言った。
先程から居ることは知っていたが、まさか自分に用事があると思っていなかった学生は慌てた。

「あんた俺の事知っているのか？」

「はい。あなたの論文が盗用されそうなこともね」

あっさりと言うと、男は「ここいいですか」と断りを入れて、
学生の隣に座る。どこか酒の匂いがする。
この男もどこかで飲んできたのかもかもしれない。

「大学の皆は誰も信じてくれないけれどな。俺が盗用したことになって
いるよ。学生の言うことよりも、先生の言うことを聞くのが普通だから
仕方ない」

「……それで、あなたは盗用したんですか？」

「していない！するわけがないだろう！大体俺、先生の研究を盗もう
だなんて考えたこともなかったよ」

「……じゃあ、やることは一つですね」

それからたっぷり二時間程、学生は男と話した。
周囲の景色は少しだけ色を取り戻した。

翌日から学生はとにかく書き続けた。
CDRがない今、資料を片手に再現する。同じ内容にならぬよう
多く補足をつけては、毎日とにかく書き進める。
大学で書き進めているが、機にさとい先輩たちからは、
あからさまな手のひら返しを受けているが、それを
気にする余裕もない。

卒業論文の受け取りを盾に、理不尽な研究結果を
横どりされたのが一週間前。
修士論文の締め切りは二か月後。
論文に要した時間は一年半。
横どりされた論文を、教授が投稿する学術雑誌の締め切りは一か月後。
既に提出されていたら、もう間に合わない。

今は一瞬でも時が惜しい。

無駄な努力であっても、許せない物は許せない。
友人たちは教授との話し合いを付ければいいと言っていたが、前みたいに
どうせ騙されるだけだ。盗作に甘んじようが、どうだろうが、
卒業論文で不利益な扱いを受けることは目に見えている。
やるだけやって実績づくりをするのが先だ。

その様子を院生たちから聞かされるたびに、朋谷は落ち着かない。
腐るのでもなく、憤るのでもなく、前向きに努力する。
その真っ直ぐさと、まともに向き合えない。

反省はしていない。
仕方なくやったことだ。
それでも学生が眩しくて、自己嫌悪が募る。

先日もらったあのプリントも頭を過る。
朋谷のCOEに参加しているが、この大学では唯一人。
『共犯処罰規定』。
この言葉が頭から離れない。

通常はCOEのメンツとも顔を合わせる機会自体少ない。
それでも何とも胸がざわつく。
この流れが遠く、この大学まできたのなら、自分は処罰されるのだろうか。
当の宗教授は、気にすることもなく、着々と学生の論文を盗用する準備を
始めているが、本当にこのままでいいのか。
正義感だけではない。
自己防衛本能が、警告を鳴らしているのに、耳を傾けるべきか。
朋谷は深く悩む。

「こちら山階新聞の記者の山根と申します。そちらの大学の宗教授の論文に盗作疑惑が持ち上がっているんですけど、コメントを頂けましたらと」

朝一番に大学広報部にかかって来た電話は、まさに嵐をおこした。すぐに本人への聞き取りが行われることになり、大学は事実確認へと動いた。つい最近学生の起こした詐欺事件で、世間に悪いイメージがついてしまった最中のこと。この手のダメージは最小限にしたい。

すぐに調査が始まり、本人のところにも一時間後には連絡がいった。朝一番の電話はひどく心臓に悪く、宗は青ざめた。早期に手を打たなければ。独りごちると、すぐにどこかにメールを打ち始めた。

「本当ですか？」

事務ではもう受理したという。

「はい。行き違いがあったようで、改めて確認したところ前回の内容で修士論文の執筆を進めるようにと連絡がありました。これまでの経緯は責任をもってこれから調査します。お手をかけて申し訳ありませんでした」

今までの冷たい対応とは真反対のその電話を、有徳は信じられない気持ちで受けた。

「おっしやああ」と誰に言うわけでもなく、一人暮らしのマンションの一室で雄叫びをあげていた。念のため実家に帰らずここでふんばった甲斐がある。

辛かった。
あの公園で会った男のアドバイスを聞いておいて良かった。
心底そう思った。

何があった？ いや何でもいい。理由なんてどうだっていい。
あのままの内容でいいというのであれば、有徳はすぐにでも論文を提出できる。
希望があれば、締切などどうということはない。

翌日 -。

「どうして私が事情を聞かれなければならないんですか？」

朋谷は大学事業部に呼ばれていた。
理由を聞かされずに呼び出された為、不安はあったがそれは想像以上のものだった。

「あなたが学生の修士論文を故意に学術雑誌編集部に渡し、学生に盗作の疑惑をかけて、学生を退学に追いやりようとしたという報告が来ているんです」

「虚偽の報告？ その学生は教授の書いた論文を自分の書いたものだと……」

宗のアカハラを協力したのは事実だが、率先して進めた事実はない。追求された時のストーリーも既に、宗との間に出来ていた。まるで事実のように、その物語を聞かせる。証拠となるCDRもこちらが握っている。あちらがバックアップを取っていたとしても、同じ内容が2つあれば条件は五分五分のはず。朋谷は臆することなく話す。こういうことは院生時代にもあった。堂々としていればたいいの事は受け入れられる。

「教授と意見が食い違えますね」

事務の人間によると、宗はあなたに担当を割り当てていた論文をもらって共同研究として引用しようとしたところ、不審な点があり確認したと。

「そうしたら学生の修士論文を朋谷さん、あなたが盗用して自分の業績にしようとしたとか。彼の退学騒動もことの露見を恐れて、仕組んだと、先生は言っています。これについてはどう思いますか？」

切られた。

朋谷が教授から見放され、むしろ身代わりにさせられたことを理解する。同じような末路の奴を確かに、朋谷は知っていた。だがこのまま濡れ衣を着せられるわけにはいかない。

「宗教授です。教授が其の学生の論文を盗用しようとして、私にそうするよう仕向けたのです」

「何か証拠はあるんですか？」

証拠……はない。証拠が残らないように口頭でお願いされただけだし、詳しい内容も全て密室での会話だ。用心深い宗に指示されて素直にそれに従った。

やった。やっていない。これでは水掛け論だ。宗もそこまで分かっている、あくまで朋谷が自主的に犯罪行為を行っているように仕向けたのだ。

「……証拠はないようですね。判断は上層部が出しますので、それまでは謹慎処分となりました。……マスコミが動いています。ご自身の行動にはくれぐれもご注意下さい」

当然朋谷は宗に、抗議に行った。
いくらなんでも自分の咎を全て人のせいにするなど
やっていいことと悪いことがあるはずだ。
倫理的にどうこうだけでなく、「盗用」というのは性的犯罪
と同じくらいの致命傷になることを知らない訳ではないだろう。

これ以上の面倒事はごめんだと、朋谷は抗議に向かう。
ややこしいことは避けてきたが、さすがにこれはないだろう。
マスコミに晒されれば半永久的に傷が付くこともありうる。

直接宗の研究室を尋ねると、宗は罰の悪そうな顔をして
席を勧めた。

「私に怒っているのだろうか？」

「当然です。私一人に責任を押しつけるつもりですか？
先生の論文盗用疑惑は既に調査が始まっています。今までの件も
全て露見します。潔く認めたらどうですか？」

「それはできない。あと数年で退職なのに、ここで退職金を逃しては
家族に面目が立たない。それに今まで私は盗用などしていない。今回
が凌げれば問題はない」

朋谷が講師として採用されて、数年。
その間にも確かに宗は学生から成果を奪ってきて、朋谷はその度に
協力して来た。半ば慣習と言って良い。発表されていない論文なら
いくらでも言い訳が出来る。学生が論文を先に作成したと言う証拠だって
余程騒がなければ闇に葬られてしまう。事実今までそうやってきた。

「俺はどうなるんですか？ こんな不名誉なことで処分されたら、今後に
響くんですよ」

「悪かった。だが私は強要はしていない。君個人の自由意思で乗った
話だ」

そう。確かに宗は何かを盾に、協力を迫った訳ではない。
それでも主犯のこの男に、何の罰も与えられないなんて。
朋谷は誓約書を出した。

「今回は罪を被ります。その代わり対価を下さい」

「そんな後に残ることは御免こうむるよ。そんな証拠を残すのは
君にとっても不利なんじゃないか？」

「……じゃあ今まで先生のしてきたことをマスコミに話します。事務にも
話します。こうなったら一蓮托生です。俺だけ処分されるなんて冗談
じゃない」

宗は険しい顔で朋谷を睨み、威嚇するが、朋谷も引くことは出来ない。
人生がかかっているのだ。
数分の思案の後、宗は渋々その誓約書にサインをした。

誓約書をもらおうと、朋谷は急ぎ大学事業部へ急いだ。
こういうことは時間が命だ。
先程事情聴取をした係員を呼び出し、大至急話したいことがあると
申し出た。彼はこのスキャンダルの担当に任命されたようで、
忙しそうだったがすぐに話を聞こうと、部屋を用意してくれた。

朋谷は先程の誓約書を取り出し、見せたうえで今まで宗と協力して
宗の学生からの盗用に協力して来たことを話した。
抜かりなく、まるで宗に学内上下関係によって強要されたかの
ようなニュアンスを漂わせることを忘れない。

「……分かりました。この資料も参考にさせていただきます」

（これで形成逆転だ！）

朋谷はやっと人心地ついて、朝食を食べる気力を取り戻した。

裁定は翌日出された。

「件の教授は脅されていただけであり、盗用していたのは朋谷講師である。彼は教授が編纂している本の該当部分の為に、学生の修士論文を盗用し、それを教授に看破された。それが誤解されて伝わったものである。その後も教授に圧力をかけて、誓約書を強要までした。よって強要罪と論文盗用の件で、停職3カ月する」

(どういうことだ……。どうして、どうして俺だけが罪を被る?)

直接言っても埒が明かない。

宗と事務方の双方に、抗議のメールをする。

マスコミには既に報道されているらしく、名前は表に出ないものの学校の公式発表にはそのまま掲載されてしまった。

事務からはすぐにメールが来た。

しかし内容は処分を執行する為の手続きと、公式発表の内容が淡々と書かれていただけ。

宗に至っては、無視を貫いている。

大方昨日約束した、なんとかもみ消そうと努力するという約束も、全くやっていないのだろう。代わりに自己保身をしたことは直ぐに分かった。その結果がこの判決だ。

処分が下った後、家で作業するのに必要なものを取りに行っても同僚たちの態度は酷くよそよそしいものだった。

温厚な人柄の多い同僚たちは、いつもの態度に少し余所余所しさが感じられるだけで、その話題を持ち出す者もなかったが、義憤に駆られている教員も数人いて面と向かって説教をくらったりもした。当然大学側からの叱責もある。

それを遠くから申し訳なさそうな、自分だけ助かって良かったと安堵しているのか良く分からない、曖昧な笑いを浮かべた宗が見ている。それがひどく不快で - しばらく自宅で作業をすることに決める。

朋谷は自分の研究室に逃げ込むと、2か月分の事務仕事に集中した。

もうしばらくは学校に寄りつきたくもなかった。

全部終わるころには夕方になっていた。

事務が終わる直前に、何とか出すことが出来た。

帰ろうとすると、事務に「ちょっと待って下さい」と言われ、数分して男がやってきた。

見覚えのある男だ。

(あの時の正義面した奴!)

「COEの焔と申します。今回の件はうちのCOE内でも事案にあげて行こうかと思えます。今日はその件で事情を尋ねに参りました」

「何?俺は無実……ではないが、主犯ではない! あの規定だとCOE内部の問題だけを事案にするんだろ?これはうちの大学内部だけの問題だ」

「ですが今回は既にCOE内部の問題にまで発展しているのです」

そこで件の学生、有徳が現れた。

「どうして君がここにいる？」

いや自分の学科だからいてもおかしくはないのだが。
タイミングが良すぎる。

「先生、俺COEに入ったんっすよ。二週間ほど前からね。だから
俺があんたを訴えた」

焔は事務方の人間ではないし、そもそも他大学の院生にすぎない。
でも一連の流れはどうみても不自然だった。
共犯処罰協定に、COE内規則の設置。
自分は嵌められたのか。
朋谷は目の前の人間たちが、グルとしか思えない。

「……正体を見せろ」

泣きっ面に蜂の報告に、俯きながら朋谷は呻くように言う。

「正体を見せろおお」

大音声で焔の胸ぐらをつかもうとする。

「もうやめて下さい」

女性の事務員が異変を察して、悲鳴を上げる。
年配の男性事務員が出て来て、その手を掴みおごそかに言った。

「先生、学生に暴行するのは見過ごせません。ご自分の将来を真剣に
考えてはいかがでしょう」

朋谷は圧倒的に分が悪いことを自覚して、首を掴んでいた手を下ろす。
焔は乱れた服を正すと、「ご覚悟ください」と切れ長の目で朋谷だけに
聞こえる声で言った。

やはりこの男は、食えない。
直感はずしかったと、朋谷は再認識した。

「切る」と一旦判断されると、大学内の動きは速い。
自宅で大人しく仕事をしている朋谷の下にも、なんだかんだと遠回しに、辞職を勧めてくる。学校の評判を落とす教員は不要だということか。

(こうなったら意地でも居座ってやる……。どの道再就職は難しいんだ)

朋谷は次の為、使える時間を全て論文執筆に宛てている。
学校に行かないので実験は出来ないが、概論的なものであれば何とかいけるはずだ。海外への雑誌であれば、日本の学界での議論の流れを知らせる物でも良い。

それには予定していたCOE内での発表も含まれる。
学生にも話し合いを持ちかけた。
二人で組めば、もしかしたら宗の供述を翻すことができるかもしれない。
あの学生だって、元凶が宗であることはどうに知っているはず。
証拠にならぬよう、メールでも留守電でもなく、直接電話をかける。

「もしもし？」

一度目は名乗った途端、「お話することはありません」とだけ言って切られてしまった。それ以降はずっと留守電だ。
迷惑行為にならないよう、電話は辞めてメールと一緒に事情を話して欲しいことを書いた。

山瀬にもとりなしを頼んだが、COE内の人権規定には現在のところ残念ながら関われないと言われた。以前話していた共犯処分規定がここでも生きている。

時間の概念も忘れ、とにかく執筆に没頭する。
何日目の頃だろうか。

メールが届いた。
COE本部から、アカハラ事件のことで処罰規定が適用されると。
既に処分がなされているので、それに対する罰則規定だけ。

「2年間の発表、論文掲載、カンファレンスの参加の禁止処分とする」

COEの期限は2年。
実質もうCOEには、朋谷は関われないことになった。
研究発表拠点と決めていた朋谷の研究計画は大幅に変更を余儀なくされる。

電話が鳴った。
事務か。マスコミか。
いずれにしろ煩わしい。

だが心配している家族だったら？

念のため待ってみる。
留守電に設定してあるので、迷っている間に切り替わる。
だが相手は何も言わない。

良く聞くと、小さくしゃくり上げるような声が聞こえる。
母親が泣いているのか？
心配をかけたくなって、電話に出る。
途端に「声」は異界の女の声となった。

「やっぱりいたんだ。ふふふふふ……はははははは」

(何だこれ……。気持ち悪い)

ハンドフリーでの通話にしたので、驚いて尻もちをついても
相手の声は聞こえる。
様々な音源をつなぎ合わせた不自然なイントネーション。
共通しているのは「女の子」の声ということだけ。

「ねえ、佐々木芽生はどこにいったの？ 逃がしたの？ それとも
……あなたが、殺しちゃったあ？」

一呼吸置いた後の声が、急に大きくなったので、ひいと朋谷は
小さく叫んだ。

「し、知らない。知らない。本当に知らないんだ」

今度こそ、朋谷は電話を切った。

この日を境に、怪文書が自宅あてに届くようになった。

大学にもメールボックスはあるのに、あえて自宅に郵送されてくる
あたり、大学内部の事情に通じている者の仕業としか思えない。

内容は5年前のアカハラ事件への関与を認めることと、自殺した芹沢に
他殺疑惑があるが、それを覆すだけの証拠はあるのか確認するものだった。
既にアカハラで処分を受けている朋谷に、脅されるような内容はない。
当然一方的な要求は無視していた。

だがある日郵送されてきた封筒に入っていたものを見て、
朋谷は顔面蒼白になる。
これが露見したら、アカハラ処分どころではない。
朋谷はその日以来、家からちょっとした外出でさえも
細心の注意を払うようになった。

朋谷の事案は成立してすぐの適用、かつ他大学の人間にも適用するという前例を作ったことから、大きな注目を浴びることになった。もちろん賛成だけではなく、管理的になると反対の声も上がっている。学内自治の問題とも絡む。発案者の焰はその波に、必然的に立ち向かうこととなった。

その日、優奈が月例の研究報告へ焰の研究室へ行くと、中から別のメンバーが出て来て口の人差し指を宛てて、静かにしろと合図をした。「月例報告です」とそっと書類を手渡すと、自分では分からないので申し訳ないが出直してくれないかとドアを閉められた。珍しいこともあるものだと、書類を鞆に戻す。ドアの向こうからは、興奮して話している男性の声がした。切れ切れに聞こえる声は、焰のものだ。

(これは居づらいな。締め切りはまだだし、後から行くか)

ところどころ聞こえる内容からして、ハラスメント規定の厳格化について男は怒っているらしい。

やむをえず、研究室に戻る。少し前にやって来た常川が、朋谷から佐々木の行方がもしかしたらCOEの本部に連絡が行っているかもしれないから聞いておいてくれと言われたと面倒くさそうに言う。朋谷自身は「いろいろ問題」がある為、聞けないのだと言う。

「聞けと言うなら聞いてきますよ」と返すと、常川はやっぱり一緒に行きたいと、後を付いてきた。ちょうど小腹が空いたから、あそこの研究室のクッキーが食べたいそうだ。一時間ほど時間を潰してから、訪ねると焰が少し疲れた様子で出てきた。

「さっき来てくれたのに、無駄足をさせてしまってすみません」

声の張りはいつもと変わらない。さっと書類を受け取り目を通すと、「大丈夫です」といつもの型通りの言葉を言って、踵を返そうとする。

「あの、さっき何かあったんですか？　すごい声がしていたから。頼りにならないかもしれないですけど、私の時に聞いてくれたから良かったら。話を聞かせてくれませんか？」

ずうずうしいことを申し出てしまったかと、優奈は少し緊張したが焰は秘密にするでもなくさらっと教えてくれた。

「例の規約のことですよ。あれが適用されると、いろいろまずい人たちがなんやかんや会議以外の場で、言ってくるんです。審議会に入っていない人たちは、自分の知り合いの伝手を頼るか、自分自身で実力行使するかの二択しかありませんからね。必死になるのも領けます」

「納得している場合じゃないですよ。私よりもひどいことをされているんじゃないですか？」

「初めから承知の上ですよ。何かを変えるには抵抗がある。当たり前のことですよ」

「でも私の事件がきっかけですよね……」

「田中さんのせいではありません。いずれ議論すべき話だとは思っていたんです。良い機会をもらって、礼を言わねばならないくらいですよ」

いつものごとく紅茶をそっと入れると、例のお菓子と一緒に出してくれる。

「ああいう人がまだいるんですね」

佐々木を想像して、優奈は陰鬱な気分になる。

「さっきの先生はハラスメント加害者じゃないですよ。学内の自治についての持論を言っただけ。少しヒートアップしていたけれど。他の人ももっともらしいことを言って、要するに自分のしたことを隠したい人もいます。結構面白いですよ」

黙ってクッキーを既に5つは腹に納めた常川が、流れをぶったぎって要件をいきなり切り出す。

「そんで思い出した。佐々木が今どこにいるか、COEの事務局で分かるかな？私物を置いたまま連絡が取れないし、マンションにも帰って来ないから、参っているんだよ。佐々木の友人の、朋谷って奴、あいつも探していて、皆知らないんだよな」

「まさか、自殺……」

優奈は、向こうに非があるとはいえ、自責の念に駆られる。

「あいつが自殺する性格かよ。どっかに行方くらましているだけだろ。でもなんかひっかかるんだよな。あいつ外面良くするのに命懸けているから、研究室もマンションもそのまんまっていうのが、解せないんだよな」

「う～ん、僕たちの研究グループは、佐々木先生とは違いますからね。どちらかと言えば、山瀬先生のグループの方の方がご存じなのでは？もし正式に住所を変えられたのであれば、COE本部にも住所変更の連絡が必要ですし、事務方も連絡を取ろうとする筈ですよ。この番号ですから、電話してみてください」

そういうと、研究室に戻って電話番号のはいった書類をファイルから取り出すと、前に置いた。常川は早速電話してみる。

時刻は午後四時三十分。

結構ぎりぎりだ。

その間に、優奈は焰に話しかける。

「そういえば、婚約者さんも一度来たことがありましたね。山瀬先生も毎日のように心配されています……」

優奈はいかにも自信にあふれたスーツ姿の男性を思い出している。佐々木の婚約者なんて、どれだけ怖い人なんだろうと想像していたが、会って見たその人は、礼儀正しく穏やかな人だった。

「そうですか。はやく見つかるといいですね……本当に」

「本当に」と言った時の焔の目が意味深で、優奈は一瞬びくつとする。
得体の知れない不安が湧きあがる。

「知らないってよ。全くヒントとかなしかよ」

常川の言葉で我に帰った。

芽生の遺体が見つかった。

絶景で有名な寺院のふもとに位置する崖の下だった。
行楽シーズンに備えて、崖の傍には転落防止の柵が張り巡らされており、
万が一落下した時の為に、救命用の網も用意されているのだが、
有名ポイントを外しての落下だった。

紅葉を見る観光客も落ち着いてきた頃だったので、目撃者はなく、
場所も観光ポイントからは外れていたのも、事故死として処理された。
大学にも一応警察が調べに来たのだが、一連の不祥事に関与していると
分かってからは、自殺であろうと、事故死であろうと同じであろうと
判断したのであろう。

観光客への注意を踏まえて、新聞にごく小さく掲載されたこのニュースに、
朋谷は震え上がった。
転落死として処理されたことが信じられない。

たった半年の間に、一つの研究室から死人が2人も出ている。
そして皆二人とも脅迫を受けていた。
それにはどうやら5年前の事件が関わっているらしい。
これほど怪しい条件が揃っているのに、周囲をスキャンダルで固められて
自殺をしてもおかしくはないという舞台を用意されている。

誰かが絶対に裏で暗躍している。
思い浮かんだ人物は -。

(ありえない。そうならない為に、俺たちは -)

教え子が二人も命を落としても、山瀬は動かなかった。
脅迫について知らないのだろうか。
まだ脅迫が届いていないのかもしれない。
朋谷よりは山瀬に対しての怨みの方がはるかに深いはずだ。
それは自信を持って言えるが。
誰をどんな順序で仕留めるのかは、それこそ脅迫者の自由。
自分の身は自分で守るしかない。

朋谷は行動を開始した。
やられる前にやらなくては。
朋谷は警察に出頭して、全てを告白することを決意した。
もう大学でのハラスメント行為も甘んじて引き受けた後だ。
今すら何を怖がる必要がある。

朋谷は脅迫に屈しない決意をした。

5年前の事件。

元はと言えば山瀬が自己保身のためにやったこと。
小田切も佐々木も自分達の罪が露見するのを恐れていたみたいだが、
自分の命にかかわるのならそんなこと微細な問題だ。
手をこまねている場合ではない。

否そうではない。

本当の闇は他にある。
常川など部外者は、さっさと罪を認めよと他人事だからこそ
訳知り顔にふるまえる。
真実をしつたら、それこそそんな涼しい顔はしてられないくせに。

妙に聡い連中が警察を呼び、それが一時露見しそうになった。
あの時にいっそ全てが白日の下に晒されていれば、今の状態は
招かなかったのかもしれない。
重い過去と引き換えに手に入れたのは、今も尚業を引き受ける
因果な家業。実に馬鹿らしい対価だ。

(もう自由になりたい)

山瀬にメールを送信する。
またもや無視されるのかもしれない。
願うような気持ちで。
それでも山瀬自身分かっているはずだ。
ずっと無視を続けていればやり過ぎせる相手ではないということに。

その時メールの着信を知らせる音がした。
意外な相手からだった。

「よお。まさかお前が招いてくれるとはな。他に人も連れて
来たけれど、まあ構わないだろ。おじゃましまあす！」

常川が連れてきたのは、大人しそうな年上の女性だった。
和琴大学でハラスメント相談所の職員をしていると自己紹介をする。

誰かが自分を狙っている以上、外に出るのは危険だった。
話の内容を聞かれるのもまずい。
そうなると必然的に、芹沢は常川たちを招くしかなかった。
奴らも、佐々木と小田切と順番に死んだことと、5年前の事件とに
関連には、前々から気付いていたらしい。

佐々木の婚約者との繋がりを知り合ったと言う女性は、
野坂と名乗った。

「とりあえず酒でも出してくれ。あ、そいつは酒癖悪いから
水な」

そういうと常川はどかっとソファに腰を下ろした。
当の野坂はというと、慣れているのか少しも気にする仕草もなく、

ソファの端っこに座った。

「この写真を見て下さい」

朋谷はその写真を見るなり、様子が変わった。
弾き飛ばされる写真。
とっさに優奈が拾った写真には、古ぼけた手鏡が映っていた。

「お前、芹沢が死んだ時、その場に居たな？」

「何言っているんだ。あいつはフェリーから飛び降りてで自殺したんだぞ。その時もう大学を退学していた。
どうして俺が……」

「それじゃあどうしてそんなに怯える？ これは小田切が初めて受け取った手紙に同封されていたものだ。自殺件場に置かれていたものなんだ。知っていること言うことは、その自殺に関与していることを意味するんだぞ」

写真の手鏡は、芹沢の祖母の形見で、普段は机の引き出しに大事に閉まわれていたと言う。死亡後は芹沢を可愛がっていた叔母が、つい最近まで保管していたと言う。今では仏壇の前に供えられているが、

「自殺後にこの手鏡を知っている可能性は3つしかない。
1つは、芹沢が活着ている間に、見せてもらった。
2つ目は、自殺した時点のことを知っていた。
3つ目は、つい最近芹沢家にお参りに行った場合。
お前の場合は、2つ目しか可能性はありえない」

静かに座っていた女が、野坂がここで口を開いた。

「和哉は、その鏡をそれは大事にしていましたから、生前に見せることはありえません。つい最近にお参りに来た友人が来たらしいですけど、その方はあなたとは全く異なる外見だったとのことですし。それ以外で、仏前であの手鏡を見た方はいないはずです」

「……」

反論できないのか、朋谷は押し黙った。
同時に手鏡の事を詳しく知る野坂は、何者なのかといぶかしむ。

「お前たちが都合の悪い事実を被せて、和哉を殺したってことも考えられるんだよ」

「違う。それは絶対に違う！」

「小田切と佐々木が脅されていたのは、俺と田中もずっとその経緯を見ていたから事実だ。相手が持ち出すのは5年前のアカハラ事件に

関係していたことを、認めさせることだった。お前には本当に何も脅されていないのか？ もしそうなら同じ内容か？」

「そうだ。でも俺は今ちょうどそのことを警察に、告白しようと思ったところだ。アカハラは警察の管轄外だが、身辺の保護をしてもらう必要がある」

「脅迫がここまで来たんだな」

「ああ。俺はこのままやられたくはない。アカハラだってやりたくてやったんじゃない。ここまで来て山瀬先生も知らんぷりを決め込んでいる。だから言われた通りの事をやって、一人だけでも助かりたい」

「なんて脅されているんですか？」

「アカハラの事実を認めて、関係者を特定すること。芹沢を殺したなら、自首すること。そうでないなら自殺事件をもう一度、殺人の観点で再捜査をお願いできる程度の証拠を提示すること」

一度確定された以上、簡単にそれを覆すことはできない。噂程度では駄目なのだ。確固とした証拠。もしくは自供が必要だ。

「本当に俺たちは、芹沢を殺していない」

「土岐等あかりさんの件は？ 誰の指示によって行われたんですか？」

「あれは確かに俺達が追い詰めた。でも初めにやりだしたのは山瀬先生だ。段々、ゼミの中でもそういう立場でいいんだっていう雰囲気が出来て来て、孤立しない為には、それに多少は関与しないとやっていけなかった。自分の将来を投げ打ってまで、身を呈して助けるなんて普通は無理だ。そんな人間はいないんだよ。お前だって分かっているだろう？」

「山瀬先生がそんなことする訳がありません！」

今まで静かにしていた優奈が、叫ぶ。今まで佐々木や小田切に送られてきた怪文書にも、山瀬の責任を問う文面はなかった。優奈は到底納得できないという態度だったが、他の二人はそんなことは了承事項だと、優奈の反論を無視して話を続ける。

「佐々木と小田切が口封じで殺されたとしたら、お前は本当に大丈夫だと言えるか？」

「もちろんだ」

野坂も畳みかけるように、問いかける。

「真実がどうではなくて、その犯人にあなたがどう思われているのかが大事なんですよ」

「まさか山瀬先生が口封じで殺して回っているとでも言いたいのですか？」

「その可能性はありますが、同じくらいの確率で、あなたが犯人である可能性もあります」

野坂の視線が鋭くなる。手元の携帯をぐっと握る。

「違うなら違おうと、その理由をお聞かせ下さい」

「……警察で話します。身の安全を確保されないと話せないんです」

「それと、もう一つだけ質問に答えて。当時在学していた学生さんで、もう一人ハラスメント行為を受けた学生がいたはずですよ。その方に対するハラスメント行為も明らかにすべきだよ」

怒りで顔を紅潮させながら、野坂は言った。
ハラスメントを取り締まる側の、人間なのでアカハラ事件の話題自体許せないのだろう。

「少なくとも俺は知らない。常川、お前は知っているか？」

「いや。だが塔堂に対するアカハラはあったかもしれないと疑っている。どうなんだ？そこら辺はお前の方が詳しいだろう？」

塔堂のお調子者の性格は、加害者にも被害者にもなりうる両極端の可能性もある。被害者側なら、失踪して復讐の機会を狙っている可能性がある。加害者なら、もっと大きな罪を犯して隠れているかもしれないと、常川は推理する。

「例えば、芹沢を自殺に見せかけて殺したとか……」

野坂は息を飲む。

「違います。その人は被害者です」

やけに力説する野坂。

「それはない」負けじと朋谷も断言する。

「探しても見つからない。見つかる訳が無い」

やけに確信をもって朋谷は言った。

「お前、奴の居場所を知っているのか？」

「……もうよせ。変に嗅ぎまわると後悔することになるぞ」

「私はその方が、生きていることを知っています」

この会話は、野坂の持参した盗聴器を通じて、「協力者」に伝えられる。野坂は自分が「協力者」に貢献できて、誇らしく思う。

「厄介なことをしてくれた……」

だが野坂の正義感は、「協力者」の正体を晒す危険な物に他ならない。盗聴器からの音源を確認しながら、舌打ちする「協力者」の存在など想像すらしていない、野坂は得意げに重要情報を聞いた「敵」の反応を楽しむ。

「もし生きていたら、それは……。いやそれより、あんたは

「誰なんだ？ただの大学の職員だからって、来た訳ではないだろう？」

野坂が、芹沢の叔母だと打ち明けると、朋谷は驚きを隠せなかった。

「本当に犯人を探しているんですか？ あなたは別に狙われていないでしょう？」

「犯人を探しているのではありません。私は真実を知りたいだけ」

「どうせ警察で話すことだ。良いだろう。……塔堂なら死んだ」

「どうしてお前が知っている？ 遺体が見つかっていないんだぞ」

「殺されたんだ」

「……」

野坂は訝しそうな目で、朋谷を見る。
視線を感じた朋谷は、野坂の視線を避けるように顔を逸らした。

「誰に？」

「それは警察で言う」

もしもの時の為に、自分の知っていることを伝える目的は果たした。
もうこの珍客たちは用済みだとばかり、朋谷はあからさまに帰宅を促した。家主に急かされては仕方がない。三人は気まづい雰囲気のまま帰路に着いた。

野坂は自分の軽自動車で、常谷は優奈を助手席に乗せて来た、
三人で駐車上へ向かう時、野坂はぼつりと言った。

「あの人は嘘を言っています。私は塔堂さんが活着ていることを知っています」

「ど、どうして知っているんですか？」

優奈は驚いて尋ねる。
優奈だって、山瀬がアカハラに関与しているとは思いたくないが、
反論するだけの証拠は今ここにはない。

「誘われたんです。一緒に復讐をしないかと」

場合によっては脅迫罪に加担したことにもなりかねない内容を
あっさりと言明する。

「ですから少なくともその人は活着ています。
……ひどくアカハラ加害者の方たちを怨んでいることは確かです」

野坂もその復讐に手を貸した以上、不安で告白できなかつたと伝えた。
朋谷もその一人である以上、口にできなかつたと言う。

「信用できません。警察に何を言うつもりか分かりませんが、嘘についているのかも。あのハラメント加害者として、名前が出ていたのが2人だけというのも、おかしくないですか？ どうしてあの男は入っていないのです？」

野坂が言うには、朋谷は犯人と一緒に仲間を粛清していったが、
最後に仲間割れを起こして、自棄になっているだけだと推理した。

「でも、それだと自分のやったことまで警察でばれてしまいますよ」

「警察に殺人罪で捕まるよりはいいのでしょう」

野坂は自分の推理に絶対的な自信をもっているようだった。

あの晩のことは忘れもしない。

深夜2時に鳴り響く携帯の音。

要領が良く泣き言等一度も言ったことのない姉の、泣きじゃくる声。
第一報は、甥が投身自殺を図った可能性があるというものだった。

場所はフェリーで、甲板の上に遺書と靴、そして大事にしていた鏡が落ちていたという。

遺留品の中に和哉のものとおぼしき学生証が出てきたことや、自宅に帰って来ていないことから断定されたと言う。

最近では以前ほど頻繁には会っていないと言っても、自分の息子のように可愛がっていた甥だ。

相当のショックだった。

更にショックを与えたのは、和哉がアカデミック・ハラスメントを後輩にされていて、その後輩は、それを責められて退学処分をされていたということだ。学生証の返還も要求されていたらしい。

だが大学側は知らなかったのだ。野坂が和哉の叔母であることを。一連のアカデミック・ハラスメントの実情を把握していることを。

もちろん和哉がハラスメントに関わっていたのは事実だ。

だがなぜ和哉だけが死ななくてはならない？

他の加害者は、一番の加害者の人間はのうのうと生きていると言うのに。

新しく室長となった山瀬に会うたびに、憎しみを抑えるのに精いっぱいだ。

和哉が亡くなったのは、アカハラ被害者とされる女性の家族が学校側と対談してから数週間後のこと。それまでには証拠は改ざんはしなかったものの、都合の悪いものは全て廃棄させられた。野坂は甥が関わっていることもあって、率先してその作業をした。数週間後に後悔するなどとは知らず。それでも表立っては立てつけなかった。このご時世心理士として職に就くのは至難の業だ。経験がいくらあっても、職を賭してまで山瀬に立つていくことはできなかった。姉夫婦も和哉自身が原因となったことなら、文句を言える立場ではないと腹をくくったようだ。

長いものには巻かれろ。理不尽でも頭を下げて事が終わるなら、事を大仰にするべきではない。

学部生ならまだしも、大学院生は将来を教員陣に握られている。

いくらその罪を訴えても、一時的なカタルシスが得られるだけ。

訴えられるような人間はそもそも倫理規定など守る気すらない。

勝手な言い分をでっちあげて、その学生を学界から追い出すだけだ。

全てその学生に罪を押しつけて。大学側も面倒事を起こす学生の追放には協力的だ。だから処世術として野坂は、保身を勧めてきた。

学生の気持ちに寄り添う努力はした。でも上手くやれない人間が悪いと

心の片隅で思っていた。実際あくまでそれに応じない者は皆大学を去る

しかなかった。それは間違いではなかったと今でも思う。処世術は社会に出て重要なこと。

それでも山瀬の顔を見るたびに、己の無力さに腹が立つ。

本当は怒鳴りつけてやりたいほどなのに。

でも一番許せないのは、こんなに許せないのに愛想笑いをして

その場をやり過ぎして保身を図っている野坂自身。
フラストレーションは汚泥となりその域を拡大して、
野坂は身動きが取れなかった。

客が持ち込んだ緊張感のある話題に、心底疲弊した朋谷は、彼らの帰宅により漸く人心地がついた。ソファに座った姿勢から、そのまま横向けに倒れ込み、目を閉じる。最近寝つきが悪いせいか、数分横になっただけで、もう意識が遠のいていく。ベッドに戻るのも億劫で、朋谷はしばしの仮眠を取ることにした。

「苦しい。息が。薬を」

そこは5年前の研究室。死んだはずの土岐等が、自分の席で胸を押さえ苦しんでいる。発作を起こしたようだ。それを朋谷は少し離れた場所から見ている。土岐等の周囲には、少し若い佐々木と小田切がいる。奴らは指をさして何がおかしいのか、土岐等の苦しむ様を嗤っている。

(ああ確かに昔、こんなことがあった)

これは夢だとすぐに朋谷は分かった。先程、あんな話をしていたから、その影響が夢に出たのだろう。こいつらはこの悪行のせいで、将来命をもって償うことになる。愚かなことだ。

朋谷は土岐等に、かばんのどこに薬が入っているのかを聞きだし、素直に薬を渡す。それが気に入らないのか、二人は今の内に研究データを盗ってしまえとけしかける。

本当の朋谷は、多分言われた通りに嫌がらせに加担していた。細かくは覚えていないが、当時の自分に「断る」という選択肢はなかった。でも未来を知っている今、こんな危険な選択はできない。それにこんな奴らに利用されるの馬鹿らしいことに、気付いたのだ。どうせいざとなったら自分を売るのがいい。どうして忠義立てる必要がある？

「嫌だ。断る。お前たちがどうなろうと知ったことじゃないが、こっちまで巻き込まないでくれ」

毅然と言い放つ朋谷に、二人は目を丸くする。もともと理不尽な要求なのだ。正論をかざされると、一気に萎んでしまう。

くるりとドアに踵を返すと、肩に手を乗せる者がいる。

「自分だけ逃れられると思うなよ」

こいつの顔は……。

ピンポーン。ピンポーン。
玄関ブザーが一定間隔で鳴るで、目が覚める。
時計を見ると三十分ほど針が進んでいた。

ピンポーン。

またもブザーが鳴った。
もう夜も遅い。一体誰だと、眠気が冷めぬままに、玄関の
インターホンに出る。

「すみません、忘れ物をしてしまって。ちょっと宜しいですか？」

モニターに映しだされたのは、野坂だった。
必要な言葉は交わしたし、もう相まみえることもないだろう相手。
忘れ物をしたならば、確かに返す機会はない。

「何か分かれば持って行きますけれど？」

「薬です。ちいさなケースに入った。ソファのところにあります。
すみませんが、お水ももってきて頂けますか。薬さえ飲めば直ぐ良くなるんですけれど……」

言われてみれば、どことなく体調の悪そうな声だ。
朋谷が持って行った方が楽だろう。
ついでに薬を飲む為に水を持って行った方が良いだろう。

「分かりました。じゃ、そこで待っていて」

数分後降りてきた朋谷は、オートロックの扉を開けると、
野坂の姿は見られなかった。
呼びだしておいて、どういうことだ？
眠い目を擦りながら、周囲を見回すと、野坂は駐車場にある
軽自動車の中で眠っている。

(先程は具合が悪そうだったが、まさか)

急いで野坂の眠っている運転席側の窓を叩くが、起きない。

携帯電話番号も知らないので、電話で起こすわけにもいかない。
良く見ると助手席側だけロックがしていないので、そこを開けて
起こすことにした。朋谷は助手席に乗り込み、持って来たペット
ボトルの水を分けようとする。

「大丈夫ですか、野坂さん？お薬。持って来ましたよ」

膝だけ乗り出しても、まだ起きない。
朋谷は、より運転席に近い場所の方へ座り直す。
薬とペットボトル左手に持ち直して、右手で野坂の肩を揺する。

「野坂さん！大丈夫ですか？」

カチ。

いきなり全部ドア・ロックされた。

何が何だか分からない朋谷が狼狽していると、急に起きた野坂が車を急発進させる。慌てて朋谷が尋ねる。

「ちょっとどこ行くんですか？」

「まだ分からないのか？」

後部座席からの声と、首にスタンガンを押しつけられたのは同時だった。

「これが最後のドライブだ。楽しみだだな」

目が覚めた時には、全てが終わっていた。
誰もいない車内。
先程までいたはずの朋谷も、後ろの男も。
そっと後部座席を確認するが、誰もいない。

トランクに潜んでいる男が頭を掠めたが、
それを確かめる勇氣は、野坂にはなかった。

最後に思い出せる光景は一。
横で震えている朋谷。
左腕で羽交い締めする後ろの男が握るスタンガン。

そして一指定された場所に辿り着いた途端に、
電気の弾ける音と共に、訪れた強い衝撃をくらった。
同時に訪れた暗転。

正直何が起きているのか、知るのが怖い。
怖々周囲を見回すが、やはり先程と変わらぬ郊外の
墓地だった。
冷静に考えれば、運転席に野坂が眠りこけているのだから、
移動していないのは当たり前だ。

急いで110番をしようと携帯を探すが、どこにもない。
抜かりなく取られてしまったようだ。
祈るようにカーライトを使って、車のキーを探すと幸い
エンジンに刺さっていた。
再度車のロックを確かめて、野坂はゆっくりと車を動かす。

フロントライトが照らし出したのは、
意識が無くなる前と同じ場所一車は墓地を見下ろす
小高い丘の上に駐車してあった。
自然と墓地を見下ろす格好になる。

朋谷を探すが、深夜に差し掛かっている時間帯のこと。
周囲に街灯なんて気の利いた物はなく、様子はほとんど分からない。
薄くつけたヘッドライトだけが、ぼんやりと前を照らす。
丘と斜面の下にある国道とをつなぐのは、一本の舗装していない小道のみ。
両側にガードレールもない小道だから急いでいても、慎重に前進する。
ここで車が側溝にでも落ちたら、何の意味もない。

車の斜め前ら辺にある林で、何か影が動いた気配がした。

ライトが届かなくて、良くは見えない。
道幅は車二台がやっと通れるもの。まだ右に幅はある。
車を少しだけ右側に傾けると、ライトはそれを照らした。
宙に浮くヒトの体だった。
着衣から直ぐに朋谷と分かった。
首はダランと垂れ下がり、目に光はない。

野坂は次の瞬間、絶叫しながらアクセルを思い切り踏み込んだ。
とにかく前だけを見て運転した。

やっと人家の灯りが見えるところまで来ても、鼓動は治まらず、独りでいることがとにかく恐ろしくて、ひたすら灯りを目指す。

レストランの立ち並ぶ国道沿いまで来て、野坂は漸く少し落ち着いた。大きめのファミリー・レストランに車を止め、公衆電話の場所を聞く。そのレストランには電話が設置されていたので、通報した。恐怖と興奮で落ち着かない気持ちを押し殺して、第一発見者としての証言や、調書を取るのに付き合っていると、すっかり明け方になってしまった。

翌朝 - やつとのことで解放された野坂は、朋谷が亡くなったことを再認識した野坂は怖れと焦燥で、とても自宅に帰る気にはなれなかった。そこで費用はかかるが、ビジネス・ホテルに宿を取り、部屋に着くなり待ちきれないというようにベッドに飛び込み、横になる。

でも一番恐ろしかったのは、男が知った顔だということだった。

ホテルの薄いベッドマットに横たわっても、興奮しているのか目が覚めてなかなか眠れない。

寝返りを打っていると、警察署で調書を取っていた時ことを思い出した。

警察と共に再度現場に戻った野坂は、朋谷が縄を木にかけて、首を吊っているのを確認した。大木にかけた丈夫なロープで首を括り、足元には台代わりの古い木箱が転がっている。

今日会ったばかりの人間が、夜には遺体で発見される。野坂は衝撃がまた遺体の状態はもちろん、朋谷が限りなく他殺なのではと直感したからだ。

「協力者」がターゲットにした人間が、次々に不幸に見舞われ、命を落として行く。野坂も何のおとがめもなくのうのと生きているターゲットたちを忸怩たる思いで見てたのだから、その転落に胸がすく思いがしていた。しかし良心が咎めて自ら死を選んだのではなく、殺されたのだとしたら。話は違ってくる。

小田切は山で毒草を煎じた茶を誤飲したことによる自殺。
佐々木は崖からの転落死。
そして朋谷は首吊り自殺。

野坂は、知らずにとんでもない罪を背負わされているのではないか。協力自体、罪深いものではないか。自分の行動を省みて、恐ろしくなり、顔面が蒼白になる。警官は怯える野坂を、遺体を発見したショックだと解釈し、気遣いながら、調書を書いてくれた。

小田切と佐々木は、それぞれ自殺をしてもおかしくないような理由を持っていた。だからこそ野坂もその結末に納得をした。それでは朋谷はどうか？
確かに朋谷はハラスメント加害者として、処分されている。だがそれを理由に自殺するだろうか。

「遺体を発見した経緯を教えてくださいか？」

当然の質問だった。

野坂が目覚めた時に居たのは、郊外にある古い墓地の駐車場。郊外とはいえ、交通の便が悪く、人家からも距離がある。街から墓地に通じる車道は狭く、その先は山に繋がり、林業関係者くらいしか利用しない。その為街灯も道沿いに二本あるだけで、夜に警察と実況見聞に付き添った時には、墓地全体が暗闇に閉ざされていた。普通なら地元の人間でも、あんな時間に近づくことなどあり得ない。不審に思われても仕方がない。

しかし後部座席の男の顔を思い出すと……。

中々口火を切らない野坂を、警察官がゆっくりでいいからと励ます。
出されたお茶を飲んで少し落ち着いた野坂は、机の木目を数えるように
下向きのまま口を開いた。

「実は……」

その朝、常川と優奈は携帯メールをもらった。
差出人は野坂。

一つ目は、朋谷が亡くなったと言うショッキングなもの。
もう一つは、一連の事件の犯人が分かったので会いたいという
内容だった。

重要なニュースが二つも含まれていて、興奮さめやらない優奈を
常川は学生食堂に連れて行った。山瀬のCOEプロジェクトに関わっている
者 - つまりは研究室のほぼ全員は面識がある人間が自殺したという
ショッキングなニュースは、軽々しく研究室内では話せない。

「おかしいですよね……。朋谷さん、昨夜は確かに誰かに怯えて
いましたけれど、自殺するような雰囲気ではなかったと思うんです。
むしろ生きることを諦めたくないって強い意思すら感じたのに」

朋谷は、自分や小田切たちを脅している人物に心当たりがあるようだった。
頑として口を割らなかつたが、すぐにでも警察に保護を頼むと言っていた
矢先のことだ。

「私昨日の事を警察に……」

他殺の疑いがあれば、警察に情報提供すべきだ。
今までの小田切や佐々木の死も、タイミング的におかしい。
それも3人目となれば、おかしいと感じるのが普通だろう。

「駄目だ」

「どうして！ あんなに怯えていたじゃないですか！ 何かあったんですよ」

朋谷が怯えていた事情を知る者は、朋谷の職場にはいないはずだ。
同級生で秘密を共有していた仲間たちも既に亡くなっている。
なにより以前から解せなかつたのだ。
常川はいつも脅迫の件に関しては、なかつたことにしようと努める。
常川はなぜ言わない？
たまに見せる正義感の強さと矛盾して、今日こそは問い詰めてやろうと
優奈は語彙を強めた。

「……一連の事件が自殺ではなく、犯人があその事件の関係者だとしたら、
俺はとっ捕まって処罰されるなんて思えない。奴なりの正義で
動いているんだ。それが社会通念では間違っていたとしても。最初に
非道なことをして罰も受けない奴らを制裁した気持ちはわかる」

「でも、皆がそんなことをしていたら、世の中滅茶苦茶になりますよ。
もし人殺しで報いを受けさせていたのだとしたら。脅迫だって立派な

犯罪なんですよ」

「分かっている。でも俺は逃げた人間だから、そいつに意見する権利はない。そいつは真っ直ぐに戦っている。自分を誤魔化していない。だから掴まって欲しくはない。その前に一緒に協力して、改悛させる別の方法を考えたい。俺だって加害者の一人だからな。知っていて逃げ出した。それは一生代えられない事実だ」

優奈はとても賛同できなかったが、一旦保留にする。野坂が犯人を知っているのなら、それを聞いてから行動しても遅くはない。待ち合わせの三時まで、あらゆるシチュエーションを考えてやきもきした。

場所は、恐ろしくて家に居られないという野坂が現在滞在しているビジネスホテルを指定して来た。その場所と部屋番号を教えてもらい、常川と二人で向かう。ホテルは正面に大きな川の見える五階建ての幅の狭い構造だった。

「野坂さん？」

時間通りなのに、ノックをしても野坂は出てこない。部屋番号はあっているのに。念のためにドアノブを回すと呆気なく開いた。

「おかしいな。あれほど怯えているような文面だったのに、開けっ放しなんて」

中の様子を伺いながら、中の動静を探る。優奈がきゅと常川の袖を引く。

「様子がおかしいですよ……。警察に通報した方がいいかも……」

常川は構わず、さっさと中を検める。優奈は中で野坂が倒れているのではないかと、その犯人が傍で隠れているのではないかと、戦々恐々としながら、こわごわトイレとお風呂を確かめる。当然のように誰もいない。

中は12畳ほどのベッドルームとテーブルが兼用の部屋と、トイレとバスルームだけの簡素な部屋。隠れるようなスペースはない。玄関からは短い廊下があって、その横にトイレとバスルームがある。その奥がベッドルームになるが、玄関からは、机しか見えない。角に当たる部分にベッドとテレビが置いてある。常川がどんどん奥へ入りこむのと対照的に、優奈はまだ靴も脱がず玄関に立ちつくしていた。

キィ。

突然後ろのドアが開き、人が入って来た。

「焰さん？」

入って来たのは焰だった。

「あのどうしてここに？」

確かに一連の事件を少しばかりは聞きかじってはいいだろうが、今回の話は人が死んでいる。それも限りなく他殺と思える方法で。此の事件はあくまで山瀬研究室内部で起きていること。それを外部に漏らしても

いいものなのか。

「置き手紙があるぞ」

奥から常川の呑気な声がする。

『警察の方から朋谷さんのことでお話しを聞きたいと言われましたので、申し訳ありませんがお茶でも飲んで、ここでお待ち下さい』

テーブルの上には、確かに小さな盆の上に湯のみが3つと、この地方の名産のお茶のティーパックが添えられていた。ドアが開けばなしというのは不用心だが、貴重品も置いていないようだし、警察に呼ばれたのならしかたないだろうと、皆茶を飲み待つことにする。

「ああ。焰も少しは事情知っているもんな。そんなに深い因縁があるのなら初めから教えてくれればいいのに。水臭いな」

「……」

今日の焰は大人しいと言うよりも、死んだように話をしない。疲れているようにも見えないが、なんだか動作の一つ一つが億劫に感じる。優奈の嫉妬がますますあり得ない方に由来で行く。季節は既に秋だが、駅から歩いて来ると少し汗をかくというものだ。すぐに二人も用意されたお茶を飲んだ。

数十分後、すっかり眠くなった二人はそのまま倒れ込んだ。ベッドの空いたスペースを分け合うように、常川と優奈は二人ともほぼ同時に倒れた。少しだけ意識が無くなるのがおそかった優奈は、二人が倒れたのを確認するとゆらりと立ちあがるのをみた。

そのまま優奈は意識を失った。

優奈が起きた時、そこは病院のベッドだった。
簡素な鉄パイプのベッド。
少し殺風景な見覚えのない小部屋。

「良かったですね。怪我がなくて」

看護師が親しげに話しかけてくる。

「……どういうことですか？」

体を動かすとなんだか固定されているようで、動かしにくい。

「まだ動いては駄目ですよ。重症ではないですが、火傷を
しているんですから」

「他にも人がいたと思うのですが、その人たちは大丈夫ですか？」

「ええ。お二人とも大丈夫ですよ。お一人はあなたよりも重症ですが、
命に別条はありません。もう一方も奇跡的に軽微な怪我で済みました」

優奈は、昏睡する前の焔の顔を思い出した。なにかを強烈に
恨むような鋭い顔。

「私たちはどうして病院に運ばれることになったんですか？ ホテルの
部屋で人を待っていただけなんですよ。それがどうして - 」

看護師を問い詰めるが、上から口外しないように言われているのか、
「詳しいことは分からないので説明は他の者がします」の一点張りだった。
それでも少しは何か知っているだろうと粘ると、二人ずれの男が入って来た。
病室は共同部屋だったから、他の患者の家族かと思ったが、真っ直ぐに
優奈のベッドに向かってくる。

「睡眠薬を飲まされた上、部屋に火を付けられたんですよ」

見知らぬ訪問者は、さらっと物騒な言葉を挨拶代わりにやって来た。
看護師はやっと解放されたと、すぐに別の業務に向かった。

「……どなたですか？」

男たちは警察の名刺を渡した。
病室で話す内容ではないのか、場所を変えて話そうと提案して来た。

「あなたと常川君、それに焔君は野坂さんにビジネスホテルに呼び出され、
待っているうちに眠くなった。それで合っていますか？」

「でもその後の事は全く覚えていません。私が知りたいくらいです。
気が付くと病院で、何がなんだか分からない気分です……」

「……あなた方は、睡眠薬を飲まされて昏睡させられていたようです。
体内から睡眠薬が検出されています」

優奈はあのお茶を思い出した。

「その後で、火をつけられましたが、幸い早くに気付いた人がいまして、消火活動が進み、助かりました」

そこで、と刑事は一旦話を止めた。

「あなたが部屋で待っていた人物の名前を、教えて頂けませんか？」

この答えは重要な意味を持つのではないかと危惧しながらも、素直に優奈は野坂の名前を出した。

他に野坂との関係を聞かれた。

一連の脅迫に関わる騒動を話すべきかと迷ったけれど、とりあえず自分の大学のハラスメント相談所のスタッフであるとして簡潔に答えた。

更に突っ込まれたら、小田切や佐々木の話をしるを得ない。常川がなぜか隠したがるこの話題を勝手に話しても良いものか。緊張しながら、適切な受け答えをシミレーションする。

しかし幸運にも案じていた割には、すぐに納得してた刑事は「分かりました」とあっさりと帰って行った。

翌日、野坂がホテルに放火したと自供し、逮捕された。

野坂が自首した -。

(野坂さんは初めから、私と常川さんを殺そうとしてあのホテルに呼んだということ?)

短い期間だったけれど、その間の野坂の性格を鑑みて、それはありえないと常川に相談しにいった。あのホテルで焼きだされた患者は皆ここで入院していると聞いていたので、看護師に尋ねるとすぐに教えてくれた。常川自身も優奈の安否を気にしていたようで、どのみち看護師は居場所を伝えるつもりだったようだ。看護師によると、常川は男性患者の個室に収容されていた。

「なんだ死んでなかったのか？」

相変わらずの常川に、優奈はほっとしたような、懐かしいような不思議な感情になり、「はあ？」と強めに答えておいた。常川の身体は包帯がいたるところに巻かれており、見た目は結構痛々しい。

先程新聞で見たことを告げると、常川も怪しんだ。

「ありえないよな。どうして自分で放火した奴が、自分で消防に助けを呼ぶんだよ」

悪態をつくように、常川は言った

「そうなんですか？」

警察はそんなことを、優奈に一言も行っていない。

「自分で調べたんだよ」

常川は嘔いた。

「じゃあ誰かを庇ってるんでしょうか？」

脳裏にあの焔の顔が思い浮かぶ。

「警察もそれを睨んでいるけれど、本人の証拠と内容が全部一致してしまってるから、認めざるを得ないという方針だそう。今までの脅迫事件も全部自分がやったことだと認めたらしいし」

「そんな！確かに野坂さんは芹沢さんのことで、大学側に恨みはありますよ。でも殺して全部がチャラになるようなことでもないんじゃないですか？むしろ謝罪して欲しいというスタンスだったはずですよ」

「それも全部証拠を握っているんだよ。そんなに一度にいろんなことを、研究室と普段関わりの無い野坂さん一人で出来るとは思えないんだよな」

どこか遠くを見ながら常川は言った。
割り切れないものを感じているのは、優奈だけではないようだ。

「昨日言っていた真犯人って、野坂さん自身の事だったんですかね？」

「現時点ではそうとしか推測できないな」

納得できないながらも、現状を客観的に考慮した上で意見を言う。
優奈はあの時感じた違和感について、意見を求めたかった。

「やはり誰かを庇っているのではないのでしょうか？
……焰さんとか」

意識が薄れる中映った、焰の形相がずっと忘れられない。

「なんで焰が出て来るんだ？」

「焰さん、私たちと野坂さんを待っていたんですよね。でも
今回の火事でほとんど怪我もないし、全然顔を出さない。
そもそも野坂さんとの関係だって、不明瞭だし」

「焰とは学生アドバイザーの講習会で、野坂さんが講師をやっていた
ときからの、知り合いだと言っていたよ」

常川が自分よりも情報をもっているのを癪に思いながらも、
不審に思う。

「それだけの関係の人が、なぜ昨日呼ばれたんでしょうか？」

「今までの罪を告白しようとしたのかな。学校側にもいつか
ばれる日が来るからな。あいつは学生アドバイザーだし、最近は
中心的に活動している。そっち関係に顔が利くからかもな。
……もしくは男と女の関係かもな」

「違いますよ。駄目です！」

「駄目ってお前。そんなの本人たちの勝手だろ」

いずれにしろ納得はできない。
常川の意見もおかしくはないのだが、もっと深い関係が
二人の間に横たわっているとしか考えられない。
あれこれ考えるが、全て常川に却下されていった。
常川だって野坂の事を、深く理解している訳ではないのだが。
あれこれ言い合っていると、以前病室に来た刑事がやって来た。

「こんにちわ。仲が宜しいですね」

年配の方の刑事が、穏やかに話しかけてくる。
野坂のことを聞くなら今かもしれない。
満足できる答えを引き出すには、こちらも求められる質の
答えを用意しなければと、気を引き締める。
仕事なのだから、意図があるから病室を訪ねたに決まっている。

「野坂さんのことですか？」

「はい。放火についての動機がどうしても曖昧でして。
甥御さんの事件で大学側に怨みを持っていたのは
確かですが、5年経過した今になってどうしてか。
ちょっと分からないのです。あなた方との関係もね」

「俺たちは5年前のアカハラ事件の起きた、山瀬研究室の
人間だからな。当時の生き証人かつ公正な物の見方をできる学生は
俺だけだし」

そういうと牢刑事はぐいっと前に身を乗り出して、ベッドに座る常川
の顔をじっと見つめた。

「あなた5年前の事件当時、いました？」

じろじろ顔を観察されるが、負けるものかと常川は睨み返す。

「休学していたが、籍はあった」

十分観察したのか、刑事は顔を離して豪快に笑う。

「失礼、失礼。私も先輩と二人であの時の事件の捜査を担当して
いましてね。ほら、あのとき学生が腹を蹴られたとか、階段から
着き落とされたとか訴えていました事件」

「ああ……」

常川は思い出したことを肯定する返事をする。

「土岐等さんを蹴ったり、階段から突き落とした人がいたんですか？
酷い！酷すぎます！病人に暴力をふるうなんて。まさかその事件が
うちの研究室で起こったんですか？」

むしろ刑事の方が驚く。

「この方、田中さんでしたか。5年前の事件の事はあまりご存じ
ないようですねえ」

佐々木や小田切が5年前に行ったと言われている行動に関しては、例のホームページで確認している。だが実際に物理的暴力を振るったと言うのは見かけなかった。言葉による誹謗中傷、研究成果の奪取、仕事の押しつけ。これらを佐々木と小田切、朋谷も加担していたこと、そして自殺した芹沢が行っていたのは知っている。刑事が何か言いかけたのを、常川が目で制した。察した刑事はさりげなく次の質問へと移る。

「どうも情報が偏っているようですね。ですが大変参考になりました。それで田中さん、常川さん。お二人は野坂さんとどういう関係なのですか？」

今度こそ隠す訳にはいかないだろう。何も後ろめたいことはないのだが、助けを求めるように常川の方を見る。

「佐々木がこいつにアカハラした時に、知り合ったんだ。それまでは全く接点はなかった」

嘘ではない。野坂はハラスメント相談室で働いているので、この説明に無理はない。若い刑事はまた出てきた「アカハラ」の言葉を不審に思う。

「アカハラってそんなに頻発するものなのでしょうか？」

5年前にもひどいアカハラ事件が起こったのであれば、自浄作用が働いてしかるべきと考えるのが普通だ。老刑事も同じ感想を持ったようだが、話が逸れるので、軌道修正をする。

「常川さんは、5年前のアカハラ事件、どんな立ち位置だったのですか？」

一瞬優奈を気にしてから、常川は珍しく言い淀む。

「……俺も加害者の一人だ。5年前のアカハラ事件はいきなり始まった訳ではない。土岐等が入学して半年ほどで始まったんだ。だから休学する前、当然俺は知っていた。土岐等がどんな嫌がらせを受けているのか。ずっと黙殺していた……。だから傍観者という意味で、紛れもなく俺は加害者なんだ」

修士課程入学当時の常川は、学問の道を志していた。アカハラにはすぐに気付いたが、下手に介入して将来が潰されるのを恐れて、見てみない振りをしていたのだと打ち明けた。

「アカハラを止められない自分の無力さを痛感した俺は、死に物狂いで努力して、起業した。あんなところ一秒でも居たくないその一心だった。それでも失敗した時の保険代わりに、籍だけ置いていた。ひどく中途半端な存在だった」

今では経済力と最高学年である事実が、客観的な物の見方をある程度容認される立場になったので、客観的な見方を野坂に提供できたはずだと、常川は締めくくった。そのときの関係者を全て知っているし、大学側に阿る必要もないからだ。

ほぼ自分語りの内容だったが、刑事たちは真剣にメモを取る。

「そうなるどころ半年の間に、小田切さん、佐々木さん、朋谷さんが皆自殺しているのが気になりますね。特に朋谷さんの自殺現場の場合彼女が第一発見者だ」

「それなんですけれど、どうして野坂さんが第一発見者になったんですか？ 朋坂さんと野坂さんはほとんど面識がないんですよ」

「野坂さんの供述によれば……」と前提を付けた上で。
野坂はあの晩、5年前のことをひどく反省していると言って、朋谷に呼び出された。そして現場となった墓地に行くよう指示され、反省の証として首を吊ったのだと。

老刑事は手帳を確認しながら説明する。

「でも、目の前で自殺しようとする人が居たら、普通止めるのではないですか？」

「墓地についてからしばらく野坂さんは眠っていたそうです。朋谷さんから水をもらったと言っていましたから、その中に睡眠薬が入っていたのかもしれませんが。自殺の邪魔をされないように」

ありえない状況に、常川と優奈は絶句する。

「警察としても、頭から信用している訳ではありません。しかし現場検証によると、野坂さんが朋谷さんを首吊り自殺に見せかけて殺すことは不可能です。あの暗闇の中、女性一人で実行するのは無理だとのこと。協力者がいたという有力な情報もありません」

「野坂さんは何と言っているんですか？」

「何も。放火についての動機も、『自分がやった』としか話さないのです。ほとんど黙秘を貫いていますが、理由は芹沢さんだけが責任を取ったことに対する腹いせだと見ていいでしょう。後は先程の3人への嫌がらせも全て自分がやったことだと自供しています。その一方で、3人の自殺への関与については、何も話さない。どこかちぐはぐな印象を受けるんですよ」

嫌がらせと言っても、被害者から告発もない。
小田切の件に関しては、狂言誘拐を利用した強要罪が成立すると
言えないこともないが、小田切自身がそう判断しなかったのか
訴えられることもなかった。
だが自殺に関与しているとなれば、殺人罪だ。
事情は大きく異なる。

「野坂さんの説得によって、3人とも良心の呵責に耐えかねて自殺した。
……そうは思えませんがね。3人とも、何というか……様々な不正を
続けていた訳でしょう？。反省しているとは、ねえ？」

アカハラのターゲットになった優奈もそれは疑問だ。
少なくとも佐々木は全く反省していなかった。

「一人、足りませんよね？それがどうも引っ掛かるんですよ。
本丸を倒さずして、自首というのがね。不自然ですよねえ」

「本丸？ まだ誰かいるんですか？」

またもや常川が目配せをする。
老刑事と常川の間には確かに通じるものがあるみたいだった。

「それでは今日は田中さんはこれくらいで結構です。
怪我をしているのに、ご協力ありがとうございました」

半ば強制的に追い出されてしまった優奈は、ひどく不愉快だ。
これでは何も知らない子ども扱いだ。

「現場にはあなたたちしかいなかったのですか？」

刑事によると、宿泊客の中に死傷者はいないとのことだったが、
常川たちのように外部からきた客間では確認が出来ていない。

「あなたたちを部屋の外に運んだ人間がいるんです。宿泊客たちも
確認しています。そうでなければ出火元にいたあなたたちが、
軽傷で済むはずがない」

焔のことだ。

だが常川は言いだそうとはしない。
話してもよいものかどうかを考えているようだ。
焔の思い詰めたような顔を思い出すと、とても言い出す
気持ちにはなれなかった。

「若い男性だったと証言があります。心当たりはありますか？」

「知りません」

即座に常川が否定する。
優奈は真実をいうべきかと苦しみながらも、一方だけが知っている
妙な疑いをもたれると、常川の意見に控えめに肯定した。

「その男性が火を付けたと思っているんですか？」

「いやいや。放火して殺そうとするのであれば、わざわざ助ける必要はないです。助けた後も名前も告げずに、姿を消してしまったと言うし。面倒事に関わりたくないが、見て見ぬふりもできなかったと言うだけでしょう。私はただ、助け出すときに、不審人物を見たのではないか聞いたかっただけですよ」

さらっと交わしたが、そこに何か意図があるのは明らかだ。人の良さそうな顔をして、案外食えない性格なのかもしれない。優奈は気を引き締めた。

「アカハラの犠牲者は、もう一人いたんだ」

それが学部生の名だと常川は、アイスを頬張りながら言った。優奈も持参したアイスを口にしながら、補助椅子に座って常川の次に出てくる言葉を待てる。

昨日自分だけ5年前の事を知らなかったことが幾つかあることに拗ねた優奈は、今日は午前からずっと常川の部屋に居座っている。六人部屋に入院している優奈と比べて、金を持っているだけあって常川の個室はゆったりできるというのも理由の一つだ。

「今の事件には関係ないことだ」と突っぱねていた常川だが、昨日の刑事との話で思い出したことがあると言って、出た言葉だ。

孤立無援の土岐等の只一人の味方がいた。5年前アカハラを追求して、退学処分になった学生。彼はまだ当時学部生だったが、土岐等がアカハラにあったと最後まで学校側に訴え、自分自身も大学を追われることになった学生。

「物理的なハラスメントを受けたのは、その学生だ」

「その人も小田切先生たちを怨んでいるんでしょうね」

「……不思議には思っていた。土岐等の弔い合戦というのなら、一番に名乗りを上げるはずのそいつがいない。俺も当時休学していたから、伝聞でしかないんだが。教えてくれた学生が言っていたよ。土岐等の味方がいてほっとしたと」

常川も同感だった。孤立無援でアカハラの挙句、亡くなってしまったなんて後味が悪すぎる。その時は罪悪感が少しだけ薄まった気がした。当時の常川たちには、研究室の中枢部を敵に回して、自分の将来にリスクを背負ってまで、土岐等を助ける正義感はなかった。その時彼は確かに、常川たちにとっても、救世主だったのだ。

「野坂さんが庇っているのは、その人なんですか？」

「だが野坂は当時ハラスメント相談室で、土岐等の事件をもみ消した側の人間だぞ。言ってみればそいつの敵だ」

今回自分のハラスメントの解決に尽力してくれた審議会に感謝している優奈は、ハラスメント相談室が一番のハラスメント被害者の味方と考えていた。そこが率先して火消しに回るなんて考えられない。ごく普通の判断だと思う優奈の考えは、常川に打ち消される。

「それは建前だ。大学だと教育委員会が指導する訳でもない。ひどい刑事事件でも起きない限り外に漏れることもなければ、介入もできない。自浄に期待するしかないのは昔も今も同じだ。当時は今以上に表に出なければなかったことになると、とにかく隠蔽されていた」

膿を出して適切に処分することで、学校の質を上げようとする方針はこの大学ではつい最近のことだと、常川は言う。

アカハラ自体が認識されてまだ間が無いことも指摘する。

「当時は表立ってその件に触れられない分、裏で情報が錯綜して、いろいろなデマや噂が飛んでいた。妙な噂が増えると、その分真実から遠ざかる。もやもやとしたまま忘れ去られていったんだ」

曰く、土岐等が芹沢を一方的に好きになった上での三角関係だった。
曰く、退学後、学部生は自殺した。芹沢はそのたたりで自殺した。
曰く、行方不明になった塔堂が実は主犯である。
曰く、むしろ塔堂は真実を知って恐ろしくなり逃亡した。
曰く、土岐等あかりは殺された。

「なんだか滅茶苦茶ですね。死者に口なしって、好き勝手なことばかり」

「ではもう一人の裁かれるべき人って誰ですか？ 塔堂さんのことですか？」

「本当に野坂さんが全てしたことなら、この件はこれで終了だ。お前が気にすることじゃない」

「でも、野坂さんがその人を庇って、代わりに自首したかもしれない。事件は終わっていません！」

「……お前、焰を庇っているって推理していなかったか？」

「ええ。二人でも構わないじゃないですか！ とにかく野坂さんが単独で犯行をしたなんて思えません」

優奈は拗ねた口調で付け加える。

「それに常川さんは、焰さんのことを警察に言いませんでした。話すとまずいと判断したからではないのですか？5年前の事もいろいろ知っているみたいだし。常川さんだって怪しいと言えば怪しいんですからね」

「余計な事は言わなっただけだ。連絡が取れ次第、話合うつもりだ。それまでは口を噤んでいる。で、お前は焰とは連絡取れたのか？」

「いえ。ずっと圏外です……」

「……治ったら二人を調べる必要があるな」

「ええ。常川さんも含めて」

冗談っぽく言ったつもりだったが、意外と優奈は本気だった。いきなり自分をCOEに入れたことだって、未だに応えを聞いていない。5年前の加害者に対しては憎しみを持っている一方で、事件を表沙汰にすることを厭う。

人が一人亡くなったインパクトは呪いのように、無責任な関係者たちに等しく不幸を与えて行く。

これが人の手によらないのであれば、この世には超自然的な力があるのだろう。だが優奈にはそんなことは信じられない。

(そんな訳がない。絶対に黒幕が居る)

探して見せると決意した。

「全部被る気なの、あの人？」

「らしいな」

「いいの、それで？そういうの一番嫌いだったはずでしょ？」

「……本人の意思だ。尊重すべきだろう」

「でも……！何とも思わないの？」

「所詮はあれも加害者だ。利用しただけのこと」

「本気でそう言っているの？見損なった。私だけでも助けに行くから。……早く目を覚ましてよね」

(騒々しい女だ)

一方的に切られた電話をポケットにしまい、煙草に火を付ける。まだ怪我が痛むので、焔はここのところ自宅で静養している。店には顔を出しているが、研究は家でも出来るので、次のCOE会議までは休むことにしてある。

自分の選択は間違っていない筈だ。あの時のことを思い出しながら、焔は断言する。

あの時、睡眠薬で常川と優奈が倒れて行く中。呼びだし方など不審な点を感じていた焔は、用心してお茶を飲まなかった。

三十分しないうちに、その判断が正しいことが分かった。

騙されたと分かり、怒りが湧いた。所詮あちら側の人間だったということか。

焔たち3人を昏睡させることで得られる物を考えると、口封じしかない。焔はトイレに移動し、次に起こることを待った。

しばらくしてドアが開く音がする。そっと足音を忍ばせて入って来た人物が、ごそごそと何事かしている。水の音と、きな臭い臭い。

(灯油をまいたのか！)

その人物がドアを閉める音がしたのを確認すると、焔はすぐに寝室へ向かい常川と優奈を運び出す。火の回りは早く、火災警報装置はなぜか作動しない。とても消防やフロントに電話している時間はない。二人を救助しながらも、焔は大声で火事だと叫び続けた。気付いた宿泊客に一縷の望みをかけるしかない。

煙に巻かれながら、なんとか二人をドアの外に運び出した時、他の宿泊客たちは既にホテル側に誘導されて逃げ始めていた。逃げる彼らと逆方向に、こちらに向かってくる人がいる。

野坂だ。

焔が「協力者」であることを知らない野坂は、ぎょっとして立ちすくむ焔を無視して、今来た部屋へ入って行く。中が火の海であることを悟ると、その場にへたりこんだ。

館内の誘導をしているスタッフが、焔と野坂に気付いて早く外に出るよう促す。仕方なく共に外へ向かう野坂。二人分担いでいる焔には、優奈を引き受けましょうと担いでくれた。憔悴しつつも、野坂は今昏睡しているのが、優奈と常川だと知って、涙を流して喜んだ。

すぐに二人を安全なところへ運び出す。ホテルには、あの部屋で何か異変が起きているかもしれないから見て来て欲しいと言う匿名の電話があったとスタッフが言った。おかげで早めに火事に気付き、客たちの避難誘導がすみやかにおこなわれ、被害はほとんどなかった。

面倒なことになりそうだ。焔は野次馬に紛れて、姿を消した。

車に乗ってから、すぐに野坂にメールをする。こういう時、メールだけのやりとりはまどろっこしい。返事はなかなか返ってこなかった。やはりホテルで消防などに捕まっているのだろうか。

「どういうつもりだ？」

野坂はあっさり電話に出た。

「あなたこそ私を騙していたのでしょうか？あなたは塔堂なんかじゃない」

「……」

「責めているんじゃないの。これを機会に私もそろそろ罪を償うわ。5年前のことも含めて。あなたも私が恨めしいでしょう？」

「自首するのか？」

「私は放火犯ですもの。それにハラスメントの加害者でもある。償いをするわ。あなたもそれを望んでいるはず」

「十分償ったと僕は認識している。今まで十分協力してくれた。それに今日の火事は……」

言葉を被せるように、野坂は言う。

「私がやりました」

「なぜ？」

「全てを無に帰すため。でも敵わなかった。だから潔く自首する。やっと決心がついたの。これが今まで目を背けていた自分への罰。……もう決めたことなの。野暮なことはやめてよね」

それが野坂との最後の交信となった。

常川と優奈が退院して初日。

野坂が逮捕されたことは、朋谷の自殺と関連付けられて研究室でも話題になっていた。例のブログに挙げられているらしき人物たちが、次々と亡くなっているらしいことは、既に学内でも噂になっている。

ブログを作成した人物に殺されたのではないか。5年前のハラスメント関係者が、今になって復讐を開始したのではないか。1つの研究室で行われたことでもあり、山瀬研究室には野次馬が押し寄せて、困惑している。

それともここ最近の厳しい審議会のここ最近の審議会の厳しい裁断が切っ掛けで何か道を踏み外したのではないかと、学科内では憶測を呼んでいる。

当然アカハラへの厳しい措置を提案した焔にも、風当たりが強くなっているようだ。肝心の焔は学校には出てきてないらしい。

後悔して自分も自殺しているんじゃないか。恥ずかしくて、大学に顔を出せないんじゃないか。

好き勝手な噂で、優奈は腹をたてる。

「関係ないですよ。当人たちは、学生を自殺を思うほど痛めつけてきたんですから。自分が少し痛い目を見たからと言って、自殺したところで何の同情もしません。どうして焔さんが怒らなければならないのですか？」

「まあまあ、そんなに怒るな。でもこいつらが皆自殺するって確かにおかしな話だよな？噂になったのが遅い位だ。そんな奴らじゃない」

野坂の供述通りだと、野坂はただ手紙を送りつけて罪悪感を上付ただけで、殺してはいないと主張している。

「……もし誰かが殺したのなら、やっぱり5年前の事件の被害者の関係者ということになりますよね。私なら殺してしまうよりも、ずっと生きて反省し続けて欲しいですけど」

「土岐等か、芹沢の家族か。会ったことあるけれど、とてもそんな感じではなかったけれどなあ。土岐等の家族は、怒っていたけれど、あくまで法律で裁くことに拘っていたし、芹沢の家族も息子が加害者だって信じ込まされていたから」

「真実を知ったらまた変わって来るんじゃないですか？ それにもう一人のハラスメント被害者は……？ そうだ常川さん、

その被害者の学生さんに会ったことはあるんですか？」

この頃になると、常川がこの事件に関して独自の主張を持っていることに気づいていた。芹沢家や土岐等家にも顔を出しているし、この被害者にも何らかのアクションを起こしたと考えてもおかしくない。

自殺説など様々な憶測が流れているその学生。遺族が学内での話し合いで主張を退けられて以来、彼は姿を消した。あれほど大学当局側を怨んでいた彼の、沈黙。これが自殺説を裏付けたのだろう。

「ない」

「でも常川さん、この事件にはすごく反応するのに。もしかしてこの人も、行方不明か自殺したんですか？」

「そうじゃない。怖かったんだ。そいつの行く末を知ってしまうのが。今とんでもなく悲惨な暮らしをしているとして、どうやって償えばいい？」

「……もし人生が狂ってしまったとしたら、きっと小田切先生たちが何事もなく暮らしていたことが絶対許せないでしょうね。野坂さんからしたら、相談員として不正に加担したわけなんですから、罪悪感で協力したり、庇ったとは考えられませんか？」

「一理あるな。昔に怨みがあることが、弱みに繋がることもある」

「その学生さんを探しませんか？向きあう勇気があるのなら」

「仕方ない。非常事態だ」

そう言うと常川は携帯メールを押し始めた。

「嘉納君だ」

それが学部生の名字だと老人は、大分小鳥に食われた木越しに遠い山を見ながら応えた。ここに至るまでの道のりは長かった。

手始めに常川のメールによる、元院生たちへの調査を開始し、優奈は各研究室の名簿を調べた。

院生と学部生の距離は思ったよりも大きい。何か特別な係をしていない限り、接触を持つこと自体ない。常川は後輩にも調査対象を広げた。途中で退学した学生は、名簿からひっそり削除されてしまうので名簿からは足跡を辿れない。大学内の事件は、多くの場合名前が公表されることはないので、新聞からも辿ることはできない。

各教員に尋ねようとも、教師受けのすこぶる悪い常川が聞いても調査は捗らない。優奈も新生生なので、先生に質問する程の人脈が無い。調査は難局を極めた。

「もう野坂さんに、直接聞いてみようぜ」

「庇っているのは誰ですか、って聞いて素直に教えてくれると思いますか？」

「そうじゃない。そいつもハラスメント相談室に行った可能性がある。だから記録があるんじゃないか？ 刑事さんでもいいけれど」

「自首したんだから、拘置所にいるんですよ。どうやって連絡をとるんですか？ どのみち刑事さんと連絡とらなければいけないなら、刑事さんに聞いたらどうですか？」

「そいつとは、警察を介入させる前に会いたいんだ。それは困る」

我がままだと困りつつ考えて、優奈は言った。

「土岐等さんのご家族はご存じじゃないでしょうか？」

退学処分を覚悟してまで、独りで土岐等の味方をした学部生だ。土岐等が入院している間に、一度も見舞いに来ていないとは考えられない。

常川は難しい顔をする。

「まだ命日は先なんだがな」

渋っていた割には、すんなりと住所録を出してきた。

土岐等あかりの祖父、浩輔と面会できたのは、それから3日後の事だった。車で2時間ほどかけて到着した土岐等家は、政令指定都市から1時間ほど

離れた田園地帯で、土岐等家自体大きな田圃を持っていた。
田圃の中にぽつんと建つ日本家屋の平屋建て。
都市部で生活して来た優奈には、新鮮で思わず見惚れてしまう。

「命日にはまだ早いのに、よく来てくれたね」

「はい。言い辛いのですが、今日はお願いがありまして……」

普段とは違う常川の丁寧語を聞いて、優奈が思わず目を見張る。
最大限の礼を尽くした言葉で、もう一人の被害者についての情報を
教えてくれないかと尋ねる。

「何か大学であったのかい？」

常川は5年前のアカハラ事件の関係者が3人も、不慮の死を遂げたことを
話す。いずれも自殺して処理され、遺族の意向もあり、新聞には掲載
されていない。祖父は大いに驚いた後、悲しげな顔をする。

「野坂さんだけでなく、他に誰か背後にいます。そう君は思うのかい？」

「確かではありません。でも万が一そうであるなら、今度こそ……」

「君にまでそう力まれては、ミイラ取りがミイラになってしまう。
しかし、そうか。まさかそこまで……」

開け放した引き戸から、秋の風が吹いて来る。
近所で草を焼く匂いが、どこか懐かしい。

「それであかりさんの味方をしていた学部生の方の、今どこに
いるのか御存じであれば、教えて頂けないでしょうか？」

「……あの子にはもうこんなことに関わって欲しくない。
そう思って今まで黙っていた。これからもそうであって欲しい」

「では、知っているんですか？」

初めて優奈が会話をした。

「すまんが、今の居場所は知らない。あれから私たちの前からも
姿を消してしまった。死ぬ前には会いたいと願っているんだが」

「じゃあ、せめて名前だけでも」

もうよせと常川が言う。

「失礼しました。すみません。悲しいことを思い出させてしまって。
帰る前に、仏壇に手を合わせても宜しいでしょうか？」

「ああ、もちろん。ありがとう」

別室にある仏壇は先祖代々を祭っているらしく、大きな檜塗りの
大型のものだった。
仏前には綺麗な仏花が供えられている。

「きれいなお花ですね」

「ああ。月命日には必ず墓に供えてある。たぶんあの子なんだろう。私が勝手にそう思っているだけだが。それでも嬉しくてな。まだあかりの事を思い出してくれる人がいることが。……常川君。あんたも毎年来てくれる。ありがとうな」

「いえ、加害者の俺にお参りさせて頂けるだけで感謝しています」

優奈も仏前に座り手を合わせる。
線香の立ち上る香りにどこか見覚えの感じた。

「一つ聞きたい。もし野坂さんに協力していた人が、あの子だったら君たちはどうするつもりだ？」

「分かりません。ただ謝って、一緒に考えたい。そう思っています」

「それは贖罪の為か？」

「いえ、自分の為です。ただそうしたいだけです」

「そうか……」

それきり二人は黙ってしまい、そのまま土岐等家の車庫に置いてある車まで送ってくれることとなった。

その時にふいに歩みを止めた浩輔は、空を仰いで言った。

「嘉納君だ」

「土岐等さん……！」

「嘉納君を宜しく頼む。田淵とかいう先生のところに所属していたはずだ。そしてどうか伝えて欲しい。私たち家族は今でも嘉納君を、家族のように思っているから、いつでも帰って来て欲しいと」

そう言うと浩輔は頭を下げた。

「約束します」

常川も負けじと頭を下げて、二人はこの美しい田園地帯を後にした。

田淵研究室へ問い合わせると、住所録と集合写真を渡す代わりに、もう金輪際アカハラ関係では関わってくれるなど念を押された。共犯罰則規定が余程怖いのだろう。

二人で行って見ると、その住所地に立っていたのは新築の和風建築だった。御殿のようにすら見える。

表札は「嘉納」と出ているので、間違いはないとインターホンを押してみる。中から出てきた女性に、探し人の名前を告げると「あんた誰？」と疑わしい顔で言い放つ。

とっさに答えられないでいると、さっさと戸を閉めようとするので、脅迫されているかもしれないと訴えた。あれ以降の世界と断絶して、それで自分達に危害を加えることだけを糧に生きてきたのかもしれない。十分成り立つ仮定だ。

「あの子はここにはいませんよ。今どこに居るのかも分かりません。死んでるのかも生きてるのかも」

「あなたが母親じゃないんですか？」

「まさか。あれの母親はとっくに死にましたよ。殺されてね」

女は、さも迷惑だとばかりに「もういいでしょ」と言い捨て、音を立ててドアを閉めてしまった。

そのまま学校の中央図書館に行って、過去の新聞のバックナンバーを漁る。

「ありました！」

二十三日午後十一時ごろ。……丁目の自宅リビングで、この家に住む嘉納薫さん(四二才)が、血を流して倒れているのを帰宅した長男が発見し、119番通報した。薫さんは搬送先の病院で出血多量による死亡が確認された。

刃物のようなもので全身を数十か所を刺され倒れていた事から、殺人事件と断定し、捜査本部を設置。司法解剖をして、詳しい死因などを調べている。捜査本部によると、部屋に荒らされた様子はなく、凶器も見つかっていない。薫さんは長期間入院しており、当日は無断で帰宅したところで、事件に巻き込まれた可能性がある。

「この長男の人が、その学部生なんですか？」

「……これ続報あるのか？犯人は捕まったのか？」

その後数時間費やしたが、結局続報は見つからなかった。

犯人だとしたら同じ場所に住んでいる訳はなく、犯人ではないなら一層住み続けるのは気持ち悪いだろう。先程の様子も合わせて元の住所には、この学生は住んでいないと考えるのが普通だろう。あまり上手くいっているようには見えない、あの女性にもう一度聞くべきだろうか。結果が既に推察されて、見通しは暗い。

既に外は暗く、物悲しい音楽が館内を流れる。

「続きは明日にするか。今日はもうこれ以上何もない」

ゲー。

ここまで来て、夕御飯を食べていないことに気付いた。
時刻は夜十時。
空腹なのも当たり前だ。

「豪快な音だな」

「十時の時報ですよ」

その日は、近所の定食屋で食べることにした。

こうして食事をしていると、ここ最近の日常から遊離した出来事が本当にあったことか疑わしい。確かに関わった人たちは皆姿を消しているが、それも日を過ぎればすぐ慣れる。自分がある日突然いなくなったとしても、こんなものなのかなと焼き鮭を食べながら、少しだけ優奈は無常感を感じる。

一方常川は情緒の欠片もなく、かつ丼の大盛りに食らいついている。そこへ例のアニメの主題歌が流れる。周囲の学生やサラリーマンが一斉にこちらを見る。優奈は恥ずかしくて、他人のふりをする。常川は平然と「お、メールだ」などと言いながら、携帯をいじる。

「これは……」

画面を見て絶句している常川。

「何なんですか？」

「いや、お前は見なくていい」

そう言いながら携帯を操作して、何かに気付いた。

「あ、でもお前にも送られているのか。いいか、今日のメールの添付ファイルは全部消せ」

「は？」

「もうお前は巻き込まない。悪かったな、今まで」

急に常川がそんなことを言うものだから、優奈は気が削がれてしまった。

「どうしたんですか？今までの所業を反省したのなら、いいですよ。許してあげます」

いつものふざけた調子で返しても、常川の顔は真剣なままだ。

「俺はお前が、あちら側の人間だと思っていた。違うと分かった以上は、監視する必要もない。それだけだ」

「あっち側って……」

COEに引き入れたのも、アカハラ事件のことを話したのも、全部優奈の行動を見張る為だったと言う。

「俺は、相手の怨みの深さを、絶望を力に変える力を分かっていなかった。二人も亡くなった今、お前は俺に付きあう必要はない」

「そんな、ここまで来て！気持ち悪くて寝られません！」

「お前、寝られないどころか、永眠するかもしれないんだぞ」

「大丈夫です！たぶん……」

「途中から気弱になるなよ。……まあ、巻き込んだのは俺だしな。その代わり危なくなりそうになったら、すぐに戦線離脱だ。分かったな？」

「はい」

常川の警戒していた意味は、家に帰ってから判明した。
田淵研究室から送られてきた、嘉納の写真。

ようやく手に入れた集合写真に写っていたのは、大人しくて、
気難しそうな少年だった。周囲の明るい笑顔が、彼の纏う気の異質さを
際立たせている。

その身を覆う薄暗さが何に起因するものかは分からない。
何かが決定的に違うことだけは伝わって来る。
仕上げの整えられた、同じ器を知っている気がする。
優奈はその器の形を、描こうと懸命に記憶の海を探す。

「焰さん……？」

今の焰とは正反対の人物像。
朋谷の言うとおりでしたら、復讐の為に焰は生まれ変わった
とでもいうのか。
外見も人格も変えて。
その執念は一体ー。

「焰さんがあの学部生、だったんですね」

現在の温厚で有能な大学院生像と、
あの暗い目をした少年が同一人物だとは思えなかった。

焰には、確かに得体の知れないところがある。
人を詮索することもないが、自分の事は話さない。
服装も妙に高価な物を身につけ、研究室内とはまた違った交友関係を
保っているようだ。一方で研究室内に中途入学にも関わらず、
研究室内に大きな勢力をもっている。同年代と比較すると、
妙に大人びた口調もどことなく得体の知れない人生経験をもって
いることを仄めかす。

(そういえば私、焰さんのこと何も知らない……)

何より優奈の件がきっかけとはいえ、ハラスメント業務に対する
執念のようなものを感じる。熱心と言うよりは、執着。
それも5年前のアカハラがきっかけとすれば、納得のいく説明になる。

今日は常川と待ち合わせて、昨日と同じく嘉納が昔住んでいた
家に向かっている。周囲に聞きこみなんて探偵みたいで、
緊張するし、罪悪感がある。あの写真を見る限り、それはおそらく
焰が消したい過去。それを暴くことが本当に良いことなのか。

「嘉納」の表札の家を、再び訪ねる。
昼間の明るさで見ると、本当に大きな家だと分かる。
この辺りの地主でもしているのか。
出てきたのは昨日と同じ女性だった。
優奈と常川を見るなり、苦虫を潰したような顔を見せた。

「あの子のことは、本当に知らないんですよ。自分の母親が死んでから連絡もしないで、勝手にどっか余所に行ってしまったからね」

「それって、お母さんが殺された事件のことですか……？」

更に険しい顔になると、彼女は何も言わずにドアを閉めた。

「アンタタッチャブルな話題だったみたいだな」

頭上で腕を組み、常川はどこか他人事で言った。
仕方なく車に戻ろうとすると、100mくらい向こうから手招きするおばあさんがいる。
先程の家からの視線を気にしつつ、傍に行くと、何を調べているのか。場合によっては協力すると持ちかけてきた。分かりやすい情報屋だ。

焰と分かった以上、迷惑はできるだけかけたくない。
おそらく焰はこの近辺に今の居場所を知られたくはないだろう。
困ったと思っていると、常川が爽やかに嘘を吐く。

「僕たち嘉納君の友人なんですけれど、あの家に行っても知らない人がいるだけで、困っていたんですよ。昔の友人なんですけれど、何か事件に巻き込まれたことをつい最近知ったものですから」

「ああ、あれね。5年前の事件！宥君は本当に可哀そうな子だったわ。小さい頃からお母さんが厳しく当たっていてねえ。近所でも評判になっていたの」

おばあさんは嘉納の祖母より、少し若い位の年代で、嘉納一家のことを良く知っていると言った。新しく移り住んでいるのは、一族の者だが、母親が存命の時には寄り付きもしなかった親族だと怒りをあらわにしていた。嘉納はその一族に家を奪われた形になったらしい。

「では事件以来、姿は見ていないんですね？」

「そうなの。当時、県内で不審死が相次いだでしょう？だから薫ちゃんの事件もその内の1件じゃないかって。でもねえちよっとタイミングがねえ。薫ちゃんは以前から慢性疾患を患っていたんだけど、自宅療養が許可された矢先に死んでしまうなんてねえ。それも嘉納が退学になった頃に合わせてみたいに。タイミングが良すぎると思わない？
ちょうど自分が家を出たいと思ったときに、ずっと目の上のたんこぶだった母親が死ぬなんて」

ご婦人の怒りは、今現在嘉納家を陣取っている一族だけではなく、嘉納自身にも向けられているようだ。
後味の悪い形で、聞き取りを終了する。
ご婦人は有益な情報を得られなかったばかりか、自分だけが貴重な情報を漏らしただけの結果となったことに酷く不満の様子だった。

「警察の方の言うとおりでと思います。退学したばかりの心細い時期に、

「お母さんを殺す動機がありません」

「その直後に嘉納は姿を消している。積年の恨みをここぞとばかりに晴らした可能性もあるわけだ。それだけじゃない。もしかしたら、こいつは連続殺人事件を起こして、これを埋もれさせようとしていたと言う可能性もある」

「まさか。一件の事件を隠すために、無関係の人間を殺すと言うのですか？
いくらなんでもそれは無茶ですよ」

「無茶で大胆だからこそできるんだよ。あの男は何もない状態から、自分で金と地位をたった5年で作り上げたんだ。思い切った手段が必要だったはずだ。なにしろ5年前の時点で、あの男には、人脈も資金も、学歴もなかったんだから」

「どうやって手に入れたのでしょうか？」

「さあな。いつも言っているバイトが関係あるかもな。接客業だって言っていたから。とにかく奴は対人関係スキルを身に付けた。誰に聞いても嘉納は陰気で人を寄せ付けない性格だったらしいからな。今では研究室で一番の社交家だ」

「人ってそんなに変わるんでしょうか？ とても同じ人物に見えませんよ。人間不信だった人物が、その不幸の真ただ中で変わる勇気など」

「決意をすれば人は変われる。奴は決めたんだ。別人になると。そして強くなる為に、邪魔な人間を殺した」

「そこまでして、どうして土岐等さんに忠誠を尽くさねばならないのです？ 婚約していたわけでもない。ただ恩義を感じていただけで」

「大事な人間も百人いれば、その分気持ちも薄まる。だが奴には一人しかいなかった。それだけだ。だからその人物のために平気で人を手にかけられるんだ。お前にとっての家族、恋人、友人全部を集めた分の気持ちを、たった一人に向けていたんだろう」

幼少期から家にも学校にも居場所がない。
そんな中で独りだけ、自分を見出してくれた人がいれば、その人は神にも等しい存在だと。
絶望故に、例えようもなく深い情が生まれる。
考えられることではある。

「二十年近く生きてきて、一人しか大事な人がいなかった
ということですか？」

「寂しい人生だな」

「でも、それだけ大事な人を失うことへの、怒りは分かった
ような気がします」

それに寂しいとは違う。
優奈は思った。
それほどまでの想いを抱く人がいるのは、この上なく幸せなこと
ではないかと。
脳裏に一人の女性が、思い浮かぶ。

彼女も幸せだったのだろうか。
もはや知り得ない答えに、少しだけ優奈は想いを馳せた。

監視気味なおばあさんのおかげで、思いがけない嘉納の幼少期を知ることが出来た。母親の殺人事件が、嘉納を容疑者まがいの視線を受けようになり、家まで乗っ取られた。大学だけでなく、家庭、いや近隣までも安住の地が無い絶望。その中で、どうやって今の状態まで。

「嘉納だけで調べていると情報が少ない。あの連続殺人事件という枠で調べれば、何か分かるかもしれない」

「また図書館で作業ですか？」

昨日を思い出して、うんざりする。
昨日と同じ時間まで調べたと言うのに、結局続報やその後の嘉納に繋がる記事は何も見つからない。ネットの情報すら全くない。
ただこの地域での殺人に関係があるのかもという情報だけ。
リークする者などない。

「直接僕に聞いたらどうですか？」

「うわああ」

二人の調べているスペースにいつの間にか、焰が居る。
いつもと変わらない澄まして落ち着いた態度。
その態度の裏には、あんな無残な過去があるのか。
尊敬に似た想いを持つ。

「今日は僕の店に招待しますよ」

「今日は随分可愛い子を連れているのね」

店に入ると、すぐに傍のテーブルで若い店員を侍らせた女性から冷やかされる。かわいらしいが、全体的にこどもっぽい。というかゴスロリファッションだ。しかも年齢は不詳。十代と言われればそんなもんかと思うし、三十代と言われればそうかもとも思う。何かがアンバランスな雰囲気、危うい魅力になっている。特にその舌足らずな声は、彼女の存在をミステリアスにする。

「今日はすみません」

恭しく女性に謝罪している焔を押しつけて、常川が叫ぶ。

「あの声優の金澤サヤカさん、ですよ？」

「あら、私のこと知っているの？嬉しいわ」

特に気分を害した様子もなく、女性は笑った。常川は携帯を取り出していつものあの着信音を鳴らしてみせる。

「この曲の大ファンなんです。辛い時にはこれを聞くと元気になって。それで、サインもらっていいですか？あ、紙が無い。じゃあ、この服にマジックで！」

常川の携帯の着メロは、この女性が歌っていた歌だったのかと納得する。が、あのアニメはかなり古いアニメのはず。この女性の年齢は……聞かない方がいいのか。あまりのテンションの上がりっぷりに、優奈が恥ずかしくなる。こういうファンが多いのか、女性の常川をあしらう態度は手慣れていて、大人の余裕を感じた。そもそも他の客たちも、裕福そうな女性ばかり。男性の常川と、貧乏学生の優奈は思い切り浮いていた。

中のアダルトな内装。店員たちの服装。客の層。

「あの、ここって……」

「ホストクラブです」

連れて行かれた席には、酒の代わりに、紅茶を運ばせた。

「お前、酒癖悪いからな。良い判断だ」

常川はくさしながら、紅茶をグビット飲んだ。

「それにしても、見事に女がないな」

「ホストクラブですから」

「お客様には素敵な方が一杯いらっしやいますよ。でも今日はお客様なので、ゆっくり楽しんでください」

こうしている間にも、他の客から指名が次々に入る。

「少し待って下さい」

そういつて挨拶をしてくる。挨拶も様になっている
その間は、若い従業員が相手をしてくれる。

「すみません。オーナーはお客様に人気があるので」

「そうですね。恰好いいですもの。あの、特定の人とかいるんですか？」

こっそり店員に聞く。普段なら絶対に聞けないが、こういうお店だ。
それくらい聞いても良いだろう。

「オーナーはそう言う人はいないし、つくりもしないそうです。
そういうお堅いところがまた人気の秘訣なんですよ。俺も尊敬してるんすよ」

焰とは大分感じの違う男のたわごとだ。

「なんだなんだ、男にも人気なのか？」

「そりゃそっすよ。俺なんか一目ぼれっすよ」

「そりゃすごいな。どうして惚れた？」

「その頃俺馬鹿やっていて、置き引きして逃げたのはいいんすけれど、
捕まりそうになってそこで、原付のシートの中に鍵ごと入れて、
ロックしたんすよ。その場で開けられないから捕まらないかと思って。
もちろん相手は怒ってすぐに鍵屋を呼ぶから待っているとか言いだして。
その隙に逃げようと思ったんですけれど、その時にオーナーに会ったんす。
オーナーはすぐに鍵を開けて、持ち主に返していました。
かなり怒っていたけど、説得して、起訴は免れた。そんでれみて
好意ったんす「馬鹿やってないで、自分で稼げ。やるきがあるなら
雇ってやるって」

「なんだかお前みたいだな」

常川が揶揄する。

「何、優奈さんもオーナー好きなんすか？」

「え？ち、違いますよ。いえ、嫌いと言う訳ではなくて、
好きだけれど、深い意味ではないというか」

「ち、面倒くさい。どうでもいいよ」

「カッコいい人ですよ。オーナーは他にもいろいろ能力や
技術があるんすよ。そういうところもミステリアスで
カッコいいですよ。毎日通っていたら、少しずつ教えて
くれるかも知れないっすよ」

おかげで男は、今では店でもムードメーカー的役割だ。
天真爛漫な性格は、男女関係なく盛り上げることが出来る。
なるほど焰の目利きは確からしい。

挨拶が終わりこちらへ向かってくる焰。
それを目ざとく見つけると、「おまちかねのオーナーですよ」と
爽やかに席を立った。

「おまたせしました。それではご質問を伺いましょう」

「あの、焔さんが、5年前のハラスメントの被害者だったんですか？」

「そうですよ」

あっさりと思ひれもせずに、答える。
動揺することもなく、紅茶のお代わりを注いでくれる。

「でも名前は嘉納さんではないですよ？」

「いろいろ方法があるんですよ」

「それで、その……退学処分後の」

「なるほど。それで当時の住所辺りで探偵ごっこをしていたわけですか」

全部知られていた。
あくまで紳士的に対応する焔は、全てを既に掌握しているようで、恐ろしくなる。

「母親が殺された件でしょう。あの当時は容疑者にされかかりましたからね。近所での評判は芳しくないでしょうね。もうお聞きになったでしょうけれど、僕は幼いころから母にも祖父母にも冷遇されていきましたからね。大学も退学処分されて、行き詰まった若者が家族に鬱憤を晴らすと言うのは、分かりやすい筋書きですからね」

さらさらと流れるように説明するその内容が、哀しくて、二人は何も言えない。

焔はその反応にも大して気にも留めず、紅茶を飲みながら、
当時を思い出す。

山瀬への襲撃を諦めた日。
後始末として自分の名義から、家を書き換えたことを知った
母親が帰って来ていた。玄関から灯りが見えて、げんなりとする。
末期と言えどある程度体の事由のある母親は、その衰えと共に
権力が親族に渡っていても、まだ過去の栄光にすがろうとしていた。

それを許せない親族は嘉納に家と母親の治療費だけを体裁の為に渡し、
体裁の為にだけ金を渡していた。病の進行と自身の私の強さも相まって、
それを受け入れられない母親は、何かにつけ自分の不遇は、
全て嘉納の不甲斐なさに原因を見つけようとするのだ。
いくらアルバイトを増やしても、修繕費と学費、母親の手慰みに
全てが費やされて行く。

またあの生活に戻るのか。嘉納は心底疲れ果てていた。
だが帰ったその広間は。
鮮血で染められていた。

嘉納は夢を見る。幾度も幾度も。肩の荷が下りた安ど感。見知らぬ殺意。
今しがたまで自分が山瀬に同じことをしようとしていたのに、恐ろしくなって

家を後にした。

誰なんだ。

まさか。

思い当たる顔が幾つも浮かんでは消える。
それから後、警察を呼んで実況見分してもらった。
当然のように、普段から冷遇を受けている自分に容疑の目が
向けられる。

もうどうでも良かった。

ここはなんて腐った世界 - 。

常川と優奈はしばらく言葉が出ない。
焔は気を悪くしたようではないが、何か物想いをふけている。
そう。焔がそこまで堕ちたことの、そもそもの始まりは
アカハラ事件に収束するのだ。
あの事件は様々な悲劇の裏になり表になり、常に繋がっている
メビウスの輪。それを断つことはできないのか。

「幸いアリバイを証明してくれる人がいましてね。潔白は証明されたものの、住む家と財産を失ったので、それなりに大変でした」

過酷な昔話をさらっと語る。

「全部あのアカハラに端を発するんだよな」

「……そういうことになりますね」

カップを見ながら、こともなげに焔は返す。
焔は意を決したかのように、喉から絞り出すように言った。

「嘉納さ、焔さんは、今まで復讐を考えたことはないのですか？」

「もしそうだと、そうだと打ち明けると思いませんか？」

「……仮定の話ですが、もし復讐を考えたことがあるのなら、
どうして5年もかけてまで、土岐等さんの為にするのですか？
自分の人生を復讐に捧げる程なんて、忠誠を誓った主君みたいですよ」

「俺は土岐等の忠実なる味方と聞いている。他の奴らも味方なんて
誰もいないと高を括っていたから、そんな存在が居ることを知って
驚いていたよ。あんな状態だったから、誰も土岐等のプライベートなんて
知ろうともしなかったからな」

「ひどい……」

「そうだな。本当に許されないことだ」

嘉納だったころの焔は、ほとんど自分の事を語らない人間で、結局誰も
二人の本当の関係性なんて分からなかった。

それは間違いなく嘉納の成育歴に由来する。
嘉納の母親はいつか結婚するつもりで嘉納を生んだが、
結局それが実現することはなかった。
母親は嘉納がいるせいで、結婚に踏み切れないと思い込み、虐待を
繰り返していた。祖父母も娘が捨てられた証拠としか、嘉納を
見ていなかったの、嘉納は優しいおじいさん・おばあさん像を
見た事がない。学校でも親族の子らが中心となって、陰で
嫌がらせばかりをされていた。
母の薫が、裕福な家の一人娘だった為、政略結婚の話もあったが、
それも母親が蹴っていた。
他の親族たちもこぞって財産目当てにやって来た。
母親が病に倒れてからは、借金だけを押しつけて、金は全て
掠め取られてしまったこと。

「あの人に会うまでは、人生は苦行でしかなかった。人が信頼し合うことが夢物語だけの世界だと思っていた。少なくとも私の周りではそうだった。家にも学校にも居たくなくて、図書館で勉強していた時に現れたのが、彼女だった。彼女は僕に勉強を教えてくれ、奨学金の相談にも乗ってくれた。人との交流が苦手な話題だってほとんどない僕の話も、黙って聞いてくれた。信用できなくて、好意を素直に受取れなくても許してくれた。僕にいいことがあると、一緒に喜んでくれた。その人に会って初めて生きていて良かったと感じた」

一言でこの関係性を説明することは出来ない。
恩人。尊敬。友人。先輩。
陳腐な言葉で片付けられるほど簡単なものではない。

常川と優奈はしばらく言葉が出ない。
焔は気を悪くしたようではないが、何か物想いをふけている。
そう。焔がそこまで墮ちたことの、そもそもの始まりは
アカハラ事件に収束するのだ。
あの事件は様々な悲劇の裏になり表になり、常に繋がっている
メビウスの輪。それを断つことはできないのか。

「幸いアリバイを証明してくれる人がいましてね。潔白は証明されたものの、住む家と財産を失ったので、それなりに大変でした」

過酷な昔話をさらっと語る。

「全部あのアカハラに端を発するんだよな」

「……そういうことになりますね」

カップを見ながら、こともなげに焔は返す。

「随分苦労したんだな」

「人並み程度には」

当時大学二年生だった焔は、既定の単位を取得していたので
他大学への編入が可能だった。
学資がないので、通信教育の大学で学士号を取得してから、
大学院で和琴大学に舞い戻ったのだと、大して感慨もなく
説明する。
その冷静さに優奈は感服し、常川はなぜか下を向いて
黙り込んだ。

もう他に聞くことはないかと焔が促すと、
常川は意を決したかのように、喉から絞り出すように言った。

「俺が、土岐等を殺したんだ」

常川はそうやって顔を覆った。
焔の顔はこちらからは見えない。
常川はその顔を見て、心底怯えているところからして、
すさまじい顔をしているのだろう。

「理由を言え」

いつもとは違う言葉使い。

「あの日、俺は土岐等に呼び出されたんだ - 」

常川はその時、休学していた。
その分研究室とつながりが少ないとも言える。
偶に来て、土岐等への風当たりの強さを諫めることなどなかった。

それでも土岐等には、研究室の内情を知った上で、協力をして欲しい
人がいた。山瀬との話し合いの後、土岐等は常川と地下二階で会う
約束をした。

「劇薬についてとだけ言った。あとは詳しく話すからと」

俺はその頃既に、塔堂から劇薬が不自然に減っていることを知っていた。
塔堂から聞いていたから。そして塔堂は姿を消した。

「皆が奴の失踪に気付く前から、俺は知っていた。少なくともあいつが
自分から姿を消した訳ではないことを」

だから劇薬に関することで、何かヤバいことにクビを突っ込んだのだなど、
ピンと来たよ。だからちゃんと行くつもりだった。
それでも仕事でどうしても抜けられない用事ができて、ちゃんと携帯に
連絡した。返事はそれでもなくて、あいつ怒っているのかと急いで行ったら、
救急車で運ばれた後だった。

「すまない。俺が時間通りに行っていれば。ごめん。この通りだ」

土下座して謝る常川。
それを見下ろす目がどんなものか、優奈は知りたくないと思った。

傍に会ったゴミ箱を思い切り蹴飛ばすと、

「気が変わらないうちに、目の前から消えろ」

と言い捨て、それきり後ろを向いてしまった。

許されないと分かった上で、常川は土下座をして謝った。
罵倒も非難も甘んじて受ける覚悟だった。
それぐらいのことをした。

その時の常川には、初めからなかったことにする厚かましきも、
黙って罪を抱える覚悟もなかった。
悪かったから謝る。
思いつく償いの方法はそれだけしかなかった。

「……いつか。いつか仕返しをしに来る者がいるかもしれない。
その時には、そいつに、そいつの人生を返してやってくれ」

その人は許すとも、許さないとも言わなかった。
言えなかったのだ。
常川がその復讐者にあるべきものを返すまでは。
還らない魂を償うには、ただ役目を果たすしかないと言った常川は覚悟を決めた。

「それで常川さんは」

「加害者を反省させず、罰することもできず、ただ犯罪者として
処罰されれば、そいつは一生加害者も世の中も憎むだけだ」

「復讐に協力するつもりだったのですか？」

「協力はしないが、犯罪者になることを防ぎたかった。
正当な方法で加害者に思い知らせてやりたかった。
俺は出来た人間ではないからな。迷うことの方が
多かった」

この件が起こる前から、常川は人脈を活かして、当時の状況について
聞き込みをしていた。

当時修士課程にも数人学生がいた。

5年前の状況を聞く為に、奔走していると、一人が言った。
員が進学せず、民間企業や官公庁に就職している。

「あの時の雰囲気はかなり、異常でした。土岐等さんには本当に
悪いことをしたと思っています。先輩なので、僕らも面と向かって
失礼なことをしたりはしませんでした。細かなところで失礼を
働いた覚えはあります」

強要されたわけではないが、土岐等あかりを庇い立てできない
雰囲気であったことは認めた。

「研究室へは必要最小限しか行かないようにしていました。
自分が何かされたわけではありません。先生が主導でやっていたこと
ですから、注意なんてできる状態ではありませんでした。
他方で土岐等さんを庇わなかった事にも、
罪悪感があってとにかく関わらないようにするのが精一杯でした」

もう一人のOBも言う。

「雰囲気が最悪だったのは確かだった。常に土岐等さんの悪口を言って
結束を固めているような雰囲気で。だから土岐等さんがいなくなると

困った訳です。だからか 何かに付けて呼び出しては、いたぶっている。ある意味皆、土岐等さんに依存していたんです。そうでないと均衡が壊れてしまう。そんな脆さがあった」

土岐等が恒常的にアカハラに遭っていたこと、加害者は複数いたこと、山瀬が主導していたことの証言はとれた。しかしこれは結局無意味だった。被害者として告発する人間がもういないのだから。遺族も大学側の態度にすっかり諦めて、諍いを望んではいない。そうこうしているうちに、訴訟可能な期間が過ぎてしまった。

「俺も逃げた一人だ。土岐等が壊れて行くのを見ていられなかった。弱かったんだ。慰めることも、止めることもできなかった。土岐等でなりたっているその均衡を壊すことで、自分が代わりの生贄になるのが怖かったんだ」

休学と言っても、その頃ビジネスに集中する為に節約のため、休学届を出していただだけの常川。完全にノータッチだったわけではなく、少なくとも今よりも向上心のあった常川は、定期的に大学にいつかは必要な業務をこなしていたようだ。

「俺はその時まで修士学生だったから、面と向かって批判することができなかった。異様だったよ、あの雰囲気は。学部ゼミではあんな雰囲気ではなかったのに。目の前で明らかに無実の人が壊れて行く。無力感に耐えられなかった」

常川は当時は大人しくて、他人事には我関せずの性格の学生だった。塔堂の所在を突き止める為に実家に電話した時にも、母親が随分変わったのねと電話越しに分かるくらいだ。相当の変化を遂げたのだろう。それがアカハラだとしたら、皮肉なことだ。

「土岐等は、俺に救いを求めていたんだ。俺だけじゃない。修士の学生皆に求めていた」

その時既に土岐等は学生相談所に提訴していて、その関係で証人が必要だったこともある。それでも誰も名乗りでなかった。

「俺は見捨てたんだ。ビジネスは忙しかったけれど、自分が創業者なんだから時間の融通は工夫次第ではなんとかなったはずだ。学費もビジネスも後付けだ。俺は単にあそこから逃げたかった」

そのことをずっと悔いているし、おそらく一生許されることではない。常川は自覚している。だからこそ初めから一貫して土岐等の味方に立っていた、人間を応援したいし、許しを請いたい。この罪悪感を埋める為ならばなんでもする。そう誓ったのだ。

「でも焔さんはもう」

これまでの推理が正しければ、取り返しのつかない罪をいくつも犯している。どう助けることができるのか。どうすれば彼の気が済むのか。

「まだ出来ることはあるはずだ。俺はもう静観し、やり過ぎして後悔することだけは、絶対に嫌だ」

常川の顔はいつもと同じに戻った。

「僕は研究者生命を賭けて、この告発をします。学会から追放される覚悟は既にできております」

焔は演壇で堂々と宣言をした。

今日は山瀬が中心的役割を果たす学会。
特に今日の学会は一月後の学会長選を前にした、
貴重な場である。全ての発表の後には、会長候補者たちが
会長選にあたっての抱負を話すのが恒例となっており、
今日はいつも以上に重鎮が多い。その分発表者の緊張も
高まっているようだ。

他学部である焔は、懇意にしている教授二人の推薦をもらい、
学会の趣旨に沿った題目の学会発表をする予定であった。
直前まで常川と優奈も知らなかったのも、学会会場で会って
驚いた。焔は学科が異なるし、参加するにしても公聴するだけ
だろうと思っていたら、講演者の発表者の名前にさりげなく
混ざっていたので、そのチャレンジ精神には感服した。

初めて聞く焔の発表に期待して、第一声がこんな不穏な始まり。
これから焔が紡ぐ言葉に戦慄すると同時に、何が起きるのかと
期待する。周囲もこの風変わりな始まりに、驚きを隠せない。

焔は続ける。

自分は他の職に就くので、もう研究者の立場は不要だ。
これはあくまで焔自身の意思であり、指導教官には何の責任もない
ことを念を押すように強調した。

「会長選投票直前のこの学会。私の発表を聞いてから、是非
ご自分の投票を考えて頂きたい」

この前置きはこのような学会発表の場ではあり得ない口上で、聴衆は
顔を見合わせる。学会内部での選挙は、狭いコミュニティなので、
投票と言ってもほぼ決定事項。投票はパフォーマンスのようなものだ。
今回の学長選も立候補者は山瀬ともう一人の二人だけだが、ほぼ山瀬と
決まっている。

ざわめく聴衆。

皆あれは誰だと顔を見合わせるが、発表者は事前の審査を経て認可
された内容のはず。今になって拒否することは許されない。
嵐の訪れを予感しながらも、聴衆には大人しく聞くことを選択した。

焔の報告は各研究グループの結果発表ではなく、個人の発表
ではあるが、その内容の目新しさからか参加者は多い。
焔の題目を事前に知らなかったのか、出席者の一人が前列から、
出口へ向かおうとする。

「……山瀬先生、どうしました？ 聞いていかれないのですか？」

報告者が、参加者の行動を直接咎めることは、ありえない。
他の聴衆までもがざわめきだす。

「他に用事がある」

「聞いて下さい。この報告は他人事ではない。あなたは是非聞いていくべきだ」

「時間がないんだ」

「あなたの次の予定は学会長選の挨拶だけのことは確認済みです。言い訳は見苦しい。聞きなさい」

一学生が教授に話す言葉供思えず、一気に会場の緊張が高まる。外国からの聴衆だけが、傍に居る通訳に事情を聞いている。

「続けます。この事例は、教授が一女子学生に対して行ったハラスメント事例です。内容をリストアップしました」

パワーポイントを使った詳細な事例に、聴衆からため息が出る。内容の悲惨さに「ひどい」「何これ、犯罪じゃない？」などと口々に呟く声がある。証拠を隠滅する周到さ、圧力でねじ伏せる傲慢なやり方は、聴衆に負のイメージを植え付けるのに成功したようだ。もちろん証拠の音声や写真、診断書も抜かりなく紹介する。

「今日はこの場にいる主犯者の名前を、皆さまに公表します。これだけのことをしても大学構内で当時は無罪になったのです。皆さまもう一度思い出してください。今庫の発表で我々はアカデミック・ハラスメントに関しては、断固たる態度をとるべきことを確認しました。そこで私は、このハラスメント加害者の無期限追放、詳細な調査報告とその公表、その協力者に対する処罰を徹底することを提案します」

この場に加害者が居ると明言され、会場内に動揺が走る。今までの流れから優奈は、まさかと悪い予感がした。予感と言うより、予測。おそらくこの予測は合っているが、認めたくない。横に居る常川は、「面白いことになってきたな」と目を輝かせながらペットボトルの茶を飲む。

「そこで今回は、このハラスメントの加害者であり、現在当学会の学会長選に立候補している山瀬教授について、その資質を問う為過去に犯した罪を公表しました。その善悪の是非を皆様に委ねたい」

堪らず学界当局側から、待ったがかかる。

「ここは、学会であって、裁判の場ではありません。そういうことは会議の時に……」

「それではあなたたちは、内々に物事を進めてしまうでしょう。いくら体系を整備しても、絵に書いた餅では無意味なのです」

この学会にはハラスメント加害者に対する制裁措置がないので、時勢に合わせて議論が始められたばかりだ。つまり現時点では何の措置もないことになる。

聴衆は当日参加費を払えば、基本的に制限はないので、他大学からも学生や教師人が来ており、今日の学会の態度如何によっては大きな波紋となるのは間違いなかった。もちろんその余波は、焔自身にも訪れることは間違いない。それでも焔は全く恐れていない。事務を制して、自分のペースに持って行く。

「ここに私は、5年前の女子学生殺人未遂の真犯人、山瀬教授の罪状についての大学における公開審問を願い出ます。後日警察にも告発します。殺人未遂ですから、5年ではまだ時効にはなりませんよね」

会場が和琴大学キャンパス内なので、スタッフから参加者までこの大学の人間が多い。今この瞬間の山瀬の行動を、反応に目を光らせる。

「学内では一度判決の出た事案に、再審理は認められないはずだ」

反論はでなかったが、やはり口で言い負かすつもりか。そんな反応など焔の想定内だとばかりに、すらすらと焔は反論する。

「ええ。その悪しき習慣もいずれは廃れるでしょうが。犯罪が関わっていますからね。再審理は世論の力を使ってでも実現させます。そして何より、あなたには学会からの永久追放を申請します」

ここで焔は、山瀬に向かって指を指す。これに釣られて聴衆は皆山瀬の方を向く。その視線に居たたまれず、山瀬はせめてもと更なる反駁を行う。

「余所者のお前に、そんな権限はない。これは名誉毀損だ。こっちこそ訴えてやる」

ここで焔は両腕をバンとデスクに置いて、身を乗り出すようにして言った。

「権限ならあります。僕はその時の被害者の一人である、当時の学部生 嘉納宥宗です」

みるみる山瀬の顔が青ざめていった。

思わぬ展開に絶句していた山瀬だが、すぐに気を取り戻した。

「あれは院生が犯人だと調べて分かったはず。本人もそう言っていただろう。それを苦に自殺したのは可哀そうだが、自業自得だ」

「確かにその学生も嫌がらせに加担しました。ですが主犯格が無罪放免など、許されることではないでしょう」

「こんな屈辱は初めてだ。絶対にこのままでは済まさない。その時はお前の指導教官も道ずれにするからな」

ヒートアップする論戦に、ここで待ったがかかった。

「いい加減にきなさい！」

後ろから威厳のある声が聞こえる。声と共に背筋をしっかりと伸ばした初老の紳士が、演台の方へ歩いて来る。年の頃は山瀬よりも一回り以上上だろう。年齢に遭わずしっかりとした物言いは、まさに紳士然としている。痩せた体躯はぴんと張った背中が、彼を大きく見せている。

「お義父さん……」

山瀬が信じられない物を見る目で、呟く。

「私の教育が間違っていたようだ。焔君、君に送ってもらった研究書を読んで、省みた。もう遅いかもしれないが、私も教員時代にやってきたことを、今になって反省している。多くの学生の前途を奪ってきた。言われるまでは気がつかなかったことを、大きく反省しているよ。それを当たり前のように見てきた山瀬君だから、自分の誤りを気付けないのだろう。これは私の責任でもある。申し訳なかった」

老紳士はそこで焔に向かって、深々と頭を下げた。義理の父の登場に、山瀬は何とも居心地が悪そうにしている。

優奈は、山瀬との会話を思い出す。山瀬の奥さんは、恩師の娘さんで、嫁実家には頭が上がらないと言っていたことを。ということは、あの老紳士は、この学会の重鎮ということになる。専攻分野なので彼の名前は、この学会に名を連ねる者なら誰でも知っている。確かこの学会の創設者の一人のはず。会場内の空気は一気に引き締まる。

老紳士は十分すぎるほどに、頭を垂れると、向き直って山瀬の方を向く。

「山瀬君、これはいい機会なんだ。私くらいの年齢になる前に気付いたことはラッキーだ。君ならまだやり直せる。間違いだと判断したら、直せばいい。まだ現役の君にしか出来ないことだ」

「私は本当に何も……」

「見苦しいぞ。君は、この状態でまさかとは思うが、まだ学会長選に出馬しようなどと思っている訳ではないだろうね。私が訳を話して、それは無効にしておいた。君はしっかり自分のした事の大きさを受け止めなければならない」

助けを求めるように周囲を見るが、大重鎮の登場に逆らってまで山瀬に味方しようとする者はなく、山瀬は腹を括るしかなかった。

「分かりました。学会の判断にお任せします……」

義父であり、学会の重鎮である老紳士の言葉には逆らえず、山瀬は一礼すると、今度こそ会場を後にした。

「山瀬先生……！」

打ちひしがれ、会議場を後にした山瀬を追ってきたのは、優奈ひとりだった。

「ああ、田中君か」

心ここにあらずといった夢見るような目つきで、山瀬は優奈を振り返る。そこに自信にあふれた、昨日までの山瀬の姿はない。

「先生」

「いいよ。もういいんだ。君もあの男の話信じるところ？」

「信じ……たくなかったです」

焔の証拠は完璧で、少なくとも5年前のアカデミック・ハラスメント事件を山瀬が主導していたこと。学生に責任を押しつけて、自分の処分を免れたこと。あかりへの殺人未遂と証拠隠滅。焔、いや嘉納への暴行傷害。全て優奈にとって、現実のものとは思えないものばかり。

あかりの持病の薬を奪って、更に携帯電話を盗んでまで証拠を隠滅しようとした件については、衝撃的だった。相手が誰であろうと許せるものではない。

目撃者が自分だけだったので、焔は証拠を集めるのに骨が折れたようだ。初めからアカハラを疑っていた焔は、あかりの携帯電話の記録を盗難に遭う前にしっかりと自分の携帯に移動させていた。倒れている間に消された記録があるかもしれないので、データの復旧も試みた。

あかりの入院先の看護師や、見て見ぬふりをした学生たちの証言を得るのにも時間が必要だったと言っていた。特に大学関係者の隠蔽体質は強固で、ありとあらゆる手を使って証言を出させた。

事件から5年。
焔はおそらく今日のこの瞬間だけの為に生きてきた。

接客業で覚えた人との付き合い方も。
努力して手に入れた盗聴器や、鍵開けの技術も。
余所の大学を卒業して、再び和琴大学大学院に入学する為
学び続けたことも。

全部が今日の。今日だけの為。
他を全て捨て去り、人生を捧げる程の情熱を全て復讐に使ってきたのだ。
焔をそこまで追い詰めただけの理由を創り出したのは、
他ならぬ山瀬たちだ。
怨嗟を育てた者たちには、それだけの責任がある。

それでも。
優奈は山瀬を信じたかった。
許される訳はないけれど、山瀬なりに理由があると。

誰かを庇っているのではないですか？
脅されて止むを得ずしたことではないですか？

止むに止まれぬ、高尚な理由が。
それを堂々と反論してほしかった。

無言で丘を下る小道を急ぐ、山瀬。
その背中が、はっきりと優奈を。人を拒絶している。
それでも。
今日は小さく見える背中を支えたくて、優奈は追いかける。

「理由が。何か大きな理由があるんじゃないですか？」

「君の想像しているような、きれいな理屈ではないが。
少し昔話に付き合ってもらえるか？」

さすがの山瀬も、慰めが欲しかったのか、意外と素直に
口を開いた。示されて、小道の脇のベンチに座る。
今日は土曜日なので、道行く人もほとんどいない。

雲が2，3個流れて行く静かな空を眺めながら、山瀬は
苦い思い出が結晶となる物語を始めた。

「先生、今度の飲み会なんですけど、趣向を変えてロシアレストランにしようかと思うんです。予算は1500円くらいだから、そんなに高くないし。それで初めてなので、下見に行こうと思うんです。一緒に付いてきてくれますよね？」

二十年前、まだ助教授だった頃の山瀬は、社交的で若く独身ということもあって、当時は女子学生の間でも人気があった。几帳面な性格もあって身ぎれいな装いに、自信に満ちた講義は学内外からの評価も高かった。それに加え、元指導教官からも内外に後継者としてのお墨付きを半ば公認で与えられていた為、その権勢は学内で比類ないものであった。

自信は傲慢さを、堂々たる態度に、軽薄な心根を親しみやすいと好意的に転換してもらえた。いずれも若者にはよくある症状であるし、妬む人々が口を極めて、ものともしない程の基盤もあった。

まさにわが世の春。
後は結婚のみが関心事項といったところ。
当然玉の輿を目指す女子学生たちは血眼になってその座を競いあった。それを高見の見物している山瀬を、疎ましく思う男子学生も多数いたが、それすらも女子学生からしたら只の僻みと見なされるだけだった。

とりわけ今山瀬を誘った女子学生、正射結衣は積極的だった。意思の強さを体現したように眉毛を濃い目に描いた大ぶりの瞳と、筋の通った整った小ぶりの鼻は、顔立ちを派手に魅せる。対照的に服装は清楚なお嬢さんというように、ワンピースを基調としている。

友人同士で話す時には、高く柔らかな声を楽しげに張り上げて、常に人生を謳歌しているかのようだった。
良くも悪くも今時のお嬢さんで、我慢するくらいなら、自己主張を通そうとするが、その愛嬌ゆえに誰からも悪くは言われない。
そんな学生だった。

他の女子学生もなんだかんだと理由を付けては繋がりを持とうとしていたので、彼女だけが特別な訳ではない。その中には大人しいなりにアタックしてくる事務員もいれば、派手な交友関係をバックに繋がりを持とうとしようとする業者の女性もいた。

山瀬自身この状況を楽しんでおり、気分しだいで適当に付き合う。ただ結衣の積極的な態度には、いささか辟易していた。余程自信があるのか、無理に機会を作っては、隠すどころかそれをアピールする。少し距離を取った方が良い。そう考えていた矢先の誘いだった。

「そのレストランなら、帰路にある。自分で見てくるよ」

「私も見てみたいんです。幹事なんだから、どんなところか把握しておく

必要があります」

それではどうしていつもの飲み屋から変えたのだと思うのだが、その辺の事情は後付けなのだろう。飲み屋を開拓したいというのが、結衣の表向きの理由だ。

「でもなあ。女子学生と二人きりというのは誤解されると良くない」

「いいですよ。誤解されても。というか誤解でなくすればいいんじゃないですか？」

「……困ったことを言うな、君は」

女子学生に慕われて、満更でもなかったが、一線を超える勇気はなかった。遊びくらいなら良いが、当時の山瀬には交際に発展しそうな女性がいた。恩師の次女の芙美だ。度々自宅を訪問する内に、自然とそうになっていた。

交際し始めたのはごく最近で、明確にお互いに意思表示をしてなかったのも、正直山瀬自身交際していると明言して良いのか、良く分からなかった。

だが結婚を拒む理由もなかったし、むしろメリットしかない女性。漠然とこのまま結婚するのだろうとっていた。余計な誤解は受けたくない。

だが結局結衣に押されて、行くことになってしまった。自分が断られるなんて夢にも思っていない若い女は、とても積極的だ。それにゼミの学生の中心的人物となっている女を無碍に扱うことは、ゼミ運営の在り方にも関わる。止むを得ず仕事の一環と割り切る。

「つまらなそうですね」

「……そんなことはないよ」

こちら辺は芙美の職場と近い。余計な詮索をされても面倒だと思ったのだ。視線が定まらない。結衣は目聡く山瀬の態度を評する。

「何をそんなに気にしているんですか？」

「気にしてないよ。ただ明日は早いから今日は早めに帰るよ。さっさと食べて帰ろう」

「……先生、私、先生の事……」

「ああ注文が来た。おいしそうだな」

あえてその間を壊す。これ以上聞いてはいけない。かといってはつきりと断ってしまえば、面倒なことになる。とにかくもめごとは嫌だ。せつかく手に入れたこの輝かしい未来を

詰まらないスキャンダルごときで、潰されてたまるか。

とにかく相手に話をする隙を与えぬよう、山瀬はとにかく話し続けた。

「じゃあ、気を付けて帰るんだよ」

「送って行ってくれないんですか？」

時刻は九時。遅いと言えば遅いが。それでも結衣は甘えていると感じた。
先程の話を蒸し返されても困る。
これ以上付きまとわれても困る。
早めに諦めさせるのが良いのかもしれない。
お互いに。

翌日、登校した結衣を待ちうけていたのは、山瀬が結婚を前提に
交際している女がいるという噂話だった。
残念がる女子学生もいたが、そこまで真剣だったものは皆無だった
ようで、ぶつくさ恨み事を言いながらも、現状を受け入れていた。

結衣以外は -。

「先生、本当なんですか？結婚する相手がいるなんて」

恒例のゼミ終了後の飲み会で、酔狂な会話の切れ間に、打って変わって重苦しい雰囲気、結衣が恨み事を告げる。

「ああ。気恥しくて、皆には言っていなかったが。いずれは結婚するつもりだ」

男子学生が狙っていた女子学生にこれで、アタックできると安堵したのか、冷やかし半分の声を浴びせる。だが結衣の表情だけが場違いに真剣そのものだ。

「……そんなこと今まで言わなかったじゃないですか？」

普段と違い、心細げに呟く結衣。

「誰も私のプライベートを知りたいと言う物好きがいるとは思わなくてね」

あくまでも受け流す山瀬。

昨夜の一件を良い機会と、正式に芙美と付き合いたいと言ったのは、昨夜の事。曖昧な関係に一応の蹴りを付けた。結婚したいというのは本心だが、婚約の手順は未だ踏んでいない。

今までの女性との付き合いは短期間で終了する傾向にあった。その中でも芙美は例外的に長続きしている。芙美はあまり自分から求めない。意思がないのではなく、人を自分の理想像という型に嵌めようと強要しようとはしない。常識的でおっとりしているようで、外出の際には下調べをしっかりとし、曖昧な注文を的確に処理してくれる。それでいて押しつけがましくない。気遣いの出来る人だ。

外見は今まで付き合ってきた女性たちと比べると、いささか地味だが贅沢ではないところも好ましく思う。その父親と言い、自分には最高の縁談だろう。結婚のタイミングと言うのは、案外こういうものなのだなどと自分で納得していた。

酔いのまわった顔をまだ冷たい夜風が、酒精を運ぶ。浮き立つその香りが山瀬の前途を祝福してくれている。珍しく山瀬は二次会まで、顔を出しほろ酔い気分を楽しんだ。

その頃、帰路では酔いつぶれた結衣が、同級生の女子学生に介抱されていた。いつもは介抱する側の結衣がめっちゃくちゃな飲み方をするのは珍しい。

「大丈夫？私結衣ちゃんがこんな酔い方するのは初めて見た……。どうしたの？何かあった？」

いつもは門限だの何だと煩い結衣が、今日に限ってはそんなことも意に返さないようだった。そして突然しゃくりあげる。突然の泣き上戸に女子学生は、戸惑いを隠せない。

「実はね……」

結衣は重々しく口を開いた。

一週間後。

「身に覚えのないことです。正射君に話を聞いてみてください」

山瀬は教授会で、身の潔白を訴えるはめになった。
降ってわいたセクハラ疑惑。当時はハラスメント委員会なんて
気の利いたものは設置されていなかった。故に全ての「問題」は
教授会が審議し、沙汰を下していた。

「君、入って」

言われて結衣が入って来た。
その顔は何を考えているのかさっぱり読みとれない無表情だ。

「私はこの山瀬先生に、幾度も関係を強要されました」

山瀬は絶句した。

「どうしてそんな嘘を……」

今まで事あるごとに自分にまわりついてきた結衣の言葉とは思えなかった。
教え子の信じられない反逆に戦慄く山瀬をそのままに、
尋問する役割を急遽振られた教授は、こういった場に慣れているのか
事務的に事を進める。

「それは本当ですか？」

「はい」

「誰か証人か、証拠となるものはありますか？」

「ありません。私の証言を信用して頂く外はありません」

芙美の父親である恩師は、外国へ招聘教授として招かれて居り不在。
その為、山瀬の立場は圧倒的に不利だった。
普段の行いが真面目な結衣の告白に、ほとんどの学生は結衣について。
ゼミは重苦しい緊張感に包まれた修羅の場と化した。
学生達からの敵意が痛いほど伝わる。

教師同士は災難だったなど言うが、女性教員陣の自分を見る目は明らかに
変わった。前途洋洋たる未来はかくも無残に消え去った。いま辞職となれば
他の職業への転職は難しい。

そこでも助けとなったのは芙美だった。
父親不在の中、彼女は山瀬の精神的支えとなり、無実の証拠を探そうと、
仕事の合間を縫って独自に奔走してくれた。

山瀬の側の人間であることを伏せて、特に女子学生からの話を聞くことに集中した。

結局限りなく黒だが証拠不十分という、痛み分けの結果に終わった。

処分はないが、学内での立場は微妙になり、今まであからさまな嫉妬を向けていた輩が声高に山瀬を批判するようになった。大勢からの圧力を脅威に感ずることなど、今までなかった山瀬にこれは効いた。

学生時代にはどちらかと言うと、クラスのお調子者たちを先導する役割であった自分が、まさかこんな目に遭うとは。山瀬は立場の変化を受け入れることができなくて、これだけ助けてくれた芙美にも何度も八つ当たりをした。それでも芙美が離れることはなかった。上手く距離を図り、自分に尽くしてくれた。この時の感情は今でも忘れない。

当時は、何より学生が怖かった。

今まで友人のように接して来た学生達の手のひら返し。当然結衣に説明を求めた。学内では接近制限を受けていたので、電話で尋ねる。

「先生だけ幸せになるなんて許さない」

結衣は一言こう言った。

意味が分からなかった。実際に気のある素振りをしたり、深い関係だったのならまだしも、一方的にアプローチを受けていただけだ。それも面倒だから軽く受け流していた。少しくらい遊んでも良いかと思っただけで、保身を考えて控えてきたのだ。こんな言われかたをされる道理はない。これではただの子どもの我儘だ。

「僕が君に何をしたって言うんだ。君の嘘のおかげでとんでもない目に遭っているんだぞ」

「反省しました？」

「は？」

会話にならない。結衣は山瀬が悪いと一方的に思いこんでいる。それも悪意ではなく、本気で。気を取り直して、諭すことにする。

「今ならまだ許してやるから、本当のことを言ってくれ」

「まだご自分の立場を分かっていないようですね。先生は加害者。私は被害者。命令できるのは私です」

「何が目的なんだ。結婚を取りやめればいいのか？」

「はい。そして私と結婚すると宣言してください」

滅茶苦茶だ。

こんな経緯があった人間と普通に結婚できると本気で考えているのか。
たとえ芙美と別れても、結衣と結婚する気にはなれない。

「それ以外に先生に勝ち目はないですよ」

結衣は痴話喧嘩の範囲であると主張すれば、話はこれ以上大きくはならない。結衣が当てつけに騒いだけだと言える。だからそうしろと強要しているのだ。こんなむちゃな要求をしてくる時点で、人間としての基本的な信頼関係が破壊されているということが結衣には分からないのだろうか。

こんな馬鹿げた提案を受け入れられるわけがない。
山瀬は、結衣がいつどこで、ハラスメントにあったと証言しているのかを尋ね、それを一つ一つ冤罪であることを証明することで、この難局を乗り切った。芙美の地道な調査が、功を奏したことは言うまでもない。

冤罪は晴れた。
当然のごとく問題人物扱いされるようになったのは、結衣の方だ。
だがもう卒業間近の彼女にとってはそれほど問題ではなかった。
学生同士の結びつきは学部時代の友人同士の結びつきは、脆いものだ。

この一件を機に絆が深まった芙美とはそのまま結婚し、山瀬は娘にも恵まれた。

だが誤解したままの人もおり、何かのついでに思い出したように陰口を叩かれるのは辛いものがあった。問題が出た時には大々的に伝わる一方で、解決したものにはそれほど興味を持たれない。

しかもこれで終わりではなかった。
結婚したからと言って、結衣が諦めたわけではなかったのだ。

結婚後は、ターゲットを芙美に絞り、勤務先に誹謗中傷を繰り返して、辞めさせた。それがきっかけで芙美は心を病み、外出できなくなってしまった。復讐すべきは結衣だが、関連の無い会社に就職した結衣を力で黙らせることは不可能で、何事もなかったように社内で結婚相手を見つけると、さっさと寿退職してしまった。

それ以降は嫌がらせはない。
精神的に安定したのだろう。

だが山瀬は忘れない。忘れられなかった。
山瀬にしたこと。
芙美にしたこと。
ずっと腹の奥で燻っていた。
放置したさやかな火が、わずかな燃料の投下で
とてつもなく燃え広がるのを、自分でも知らずにいたのだ。

優奈は黙って、山瀬の昔話を聞いていた。

物語と違い、密かに慕う想い人に見出されるどころか互いに憎しみをぶつけあう割り切れない結末。山瀬も辛い道のりを思い出したのか、少し言い淀む。

「土岐等君は、その子に良く似ていたんだ」

初めは他人の空似だと思った。性格も全然違う。ただ顔が似ているだけだと。そう自分に言い聞かせて、不平等にならないように心を配った。でもある日、知ってしまった。彼女の母親の旧姓が、あの子と同じだと言うことを。

突如山瀬には目の前の女子学生が、化け物に思えた。あの子のように、また山瀬を冤罪に落とす気ではないか。山瀬の家族を、ぼろぼろにする腹積もりなのではないか。言葉や態度には出さなくとも、疑心暗鬼になった。

そんな時に佐々木から聞いた。土岐等が、山瀬をセクハラで訴えようとしていると。

以前のように濡れ衣を着せられるのは、ごめんだった。断固たる態度に出よう。そう決意した。

「ただ自分と家族を守りたかった。嫌がらせを率先してやろうとは思ってはいなかった」

だんだんと坊主憎けりや袈裟まで憎いと、感情がエスカレートしていった。ただそれだけの理由。つまらないが、問題を育てるには十分な種は、不幸にしてすくすくと育っていった。

周囲も誰も止めない。むしろ山瀬の行為に付いてきてくれる。やはり土岐等は、誰にとっても問題がある人間だったのだ。他の人間もやるから罪悪感も薄まる。土岐等が泣きそうな顔をすると、まるであの女子学生を懲らしめたような気分がして、すかつとした。

山瀬が切々とその頃の自分の心情を吐露する。当時の想念を取り戻したのか、つらつらと並べ立てるその理由は並々ならぬ憎悪に満ちている。

「『そんなつもりじゃなかった』というのは言い訳にはなりません。あなたも学生相談室の室長をしていたのなら、ご存じでしょう？」

人通りの少ない裏庭のベンチに、いつの間にか校舎の影に焰がいた。

「そんな馬鹿げた理由で、人を死に追いやって、被害者面ですか。大した根性だ」

世間話でもするかのように、当然のごとく真っ直ぐに二人の前に歩いてくる。

「お前は。よくも私の人生を滅茶苦茶にしてくれたな」

優奈は山瀬と焔のいつもと違う物言いに、度肝を抜かれている。一方で、焔は全く気にせず、笑みすら浮かべている。これが此の男の本性だと既に知っているのも、驚くに値しない。

「とんでもない。あなたの破滅は始まったばかりですよ」

よっと横の一人掛けのベンチに座る。

「それよりもそんなくだらない理由で、あかりさんを殺したんですか？嫌がらせが昂じて殺してしまった。そうではないですよ？
真実は大体掴んでいますが、あなたの口からお聞かせ願いたい」

ちらと後ろを見ると、常川が待機している。

「……殺してはいない。彼女は持病で亡くなった」

携帯電話と薬が盗難されたことを、既に学会で証明した焔に、こんな言い訳が通じるはずもない。すぐに反論する。

「まず、あなたの研究室で毒物が盗まれたのが発端ですね。本来は警察に届けるべきなのに、あなたは監督責任を恐れて届けず、内部で調査していた。その内にそれを持っている人物をつき留めた。それは……」

「すまなかった」

突然、山瀬が土下座した。
優奈は啞然とする。
あの気位の高い、尊敬すべき師が躊躇もなく土下座をしている。
ひどくショックを受けた。

「それだけは……。家族の命がかかっているんだ」

「僕の知ったことではありません。保身のためにあかりさんの命を犠牲にしたあなたに拒否権など認めない。早く真実を言って下さい」

常川がこちらに歩み寄る。
焔の手には、ICレコーダーが握られている。

「言えない」

「拒否権はないと言ったでしょう。往生際の悪い男だ。それなら僕が言いましょう。あなたは芹沢和哉が当時この近辺で起こっていた連続殺人犯であったことを知っていましたね？」

最後の質問の直前に、ICレコーダーのスイッチを入れる焰。
今からの会話は全て、証拠に使うつもりだ。
レコーダーに怯えているのか、質問が鋭すぎるのか、
山瀬の顔は蒼白になり、何も答えない。
常川と優奈は、只々絶句する。

「芹沢にアカハラの責を全て押しつける見返りに、あなた方は彼が自殺したと見せかけることに協力した。違いますか？」

「……」

「芹沢が自殺とされた根拠は、フェリー航海中に行方不明になった為です。遺書と靴、祖母の形見の手鏡が甲板で発見され、自殺とみて捜索が開始されましたが、結局は見つからなかった。この場合、特別に海難事故として死亡届が特別に受理されます。状況から判断して生存率が極めて少ない時には死亡届が出せるのです。フェリーの航路上の渦が大きくて、遺体が通常あがらないことを知っていたあなた方は、これを悪用した」

必死で焰の話の流れに付いてきた優奈が、ここで疑問が浮かんだ。
遺体が見つからなければ、自殺ではなく行方不明者になるのではないか。

「待って下さい。行方不明者の場合は何年か経過しないと、裁判所に死亡届を出すことができないんじゃないですか？」

「これは特殊事例なんです。だからこそあなた方は利用した。なぜか？早急に死んだことにする必要があるので。七年も待ってられなかった。」

常川がそこで思いついた。

「殺人犯の候補から外れる為か！」

焰は黙って頷いて見せる。

「当時乗船した客の中には、開かずの間で姿を消したはずの塔堂の名前が記載されていたそうです。これはどういうことですか？」

先程から無言を貫いている山瀬に、今度は名指しで焰は問う。

「知らない。そんなこと私が知る筈がないだろう」

「行方不明の学生と、自殺志願者の学生が二人仲良く同じフェリーに偶然居合わせたというのですか？」

「フェリーの会社の人も、二人に関連があるとは思っていないようでした。遺書や靴が発見されたのは、下船時のことなので、その後に海上巡視船に連絡を取ったとの話でした。もちろん下船した客にもいろいろ聞いて回ったようですが、誰も知り合いと名乗り出る者はいなかったと言って

「……」

「乗船リストを一般人の君が閲覧できる訳がない。嘘をつくな」

山瀬が逆襲するが、すぐに焔が一枚の紙を出す。
携帯電話の着信履歴。そこにフェリー会社の名前が載っていた。

「塔堂が失踪した後も、携帯電話の契約は続けていたんです。その明細から居場所が特定できる可能性がありますからね。そこでこの電話番号が最後の着信になった。そこで分かったそうです。当時ご両親は、離れて暮らしていた息子の交友関係までにご存じないようでしたので、息子が自殺した訳ではないことを知って不謹慎だが、少しほっとしたと言っていました」

「となると、二つ可能性が考えられるな。一つは、塔堂が芹沢を連れ出してフェリーで逃亡を図ったが、芹沢が自殺した。二つ目は塔堂が芹沢を連れ出して遺書をかかせ海に突き飛ばし殺害した」

「三つ目は芹沢が塔堂を連れ出して、海に落とし、自分の遺書を書き、自殺を偽装した……」

焔はフェリーの航路に、大きな渦があることを指摘する。当然海洋巡視船による調査は行われるが、それでもその海域では遺体が見つからないことが多い。

「四つ目は、全くの他人が塔堂の名前を騙って乗船した。これも証拠があるんですよ」

メールをコピーしたもの。そこにはフェリーからの購入レシートで、名前は塔堂となっている。

「これは小田切のメールボックスを復旧させて、取り出したものです。おかしいですよね？ どうして彼が塔堂のフェリーチケットを購入しているのか」

「それが目的でパソコンの修理を引き受けたのか」

常川が感心する。

「もしかして、お前あのウイルス騒動自体、お前が仕組んだんじゃ……」

意味真ににやりと笑うと、焔は答えなかった。
それが答えだと優奈は確信した。
ホスト達の噂を思い出す。

「オーナーは得体が知れない知識が一杯あるんすよ」と。

「密葬には参列したが、棺桶の中までは見られないようになっていたな。余程状態が悪いのかと、遠慮していたんだが。あれは遺体自体がなかったんだな」

常川は当時を思い出して納得する。

葬儀の時に死因を溺死と説明されたので、あまり顔を人に見せたい状態ではないと思っていた。参列者も好き好んでみたがる者はいないし、遺族の嘆きも一方ならず、場の空気を悪くしてまで詮索する者もいなかった。

「自殺を偽装したということですか……。でも、それは芹沢さんが自分でやったことかもしれないじゃないですか？山瀬先生たちは知らなかったんじゃないですか？」

縫るように優奈は、山瀬を見る。
是か否か分からない目の泳ぎ方をする山瀬。

「証拠があるんです。小田切先生のパソコンから、その日のフェリーのチケットを塔堂の名前で購入した証拠のメールが出て来ました。あなたはこの期に及んでも、自分の手を汚さない。卑怯な人だ」

焔が証拠らしきA4サイズの紙を見せるが、山瀬は観念しているのかじっくり見ようとしなかった。代わりに手に取った常川が言う。

「そこまでして知らない訳が無いよな。小田切が塔堂に為りすまして、フェリーに同道したのか」

軽く頷いて肯定を示すと、焔はチケットの赤丸の付いている箇所を見せるように、付きだす。

「芹沢は徒歩で。小田切は塔堂の名を騙って、塔堂の車を運転してカーフェリーに乗りました。二人は示し合わせて自殺を演出して、カーフェリー用の通路から下船し、チェックの際には係員に見つからないように隠れていたのでしょう」

チケットには確かに、塔堂の名前と電話番号、車検についての記載が残されていた。後は推して知るべしと、常川が続きを引き受ける。

「歩行者の下船口には現れないから、チケットを確認した時に人数が足りなくてスタッフに搜索される。そこで演出された自殺現場を見て、海上巡視船に搜索を依頼するって寸法か！」

それを焔が更に補強する。

「探しても渦が強い海域だったら、巻き込まれたと断定されやすいですからね。もちろんそれを期待した上での所業でしょう」

「でも塔堂さんは、その時点で既に行方不明なんですよ。どうして

小田切先生が塔堂さんの車検証を持っているんですか？もしかして」

山瀬の方にくるりと優奈は向き直る。

「もしかして、先生たちは塔堂さんも行方不明扱いにただけで、
本当は居場所を知っていたんですか？」

澄んだ目で見つめられて、山瀬は思わず顔を背けて視線を逸らす。

「あなたの口から話すべきだ。意味は分かりますよね？」

意味が分かりすぎるのか、一層顔色を無くして、山瀬は震え始める。
壊れたように下を向き「許してくれ」と幾度も繰り返す。
せめて時間でもやろうと考えたのか、焰はそこは飛ばして、
話を続ける。

「この時に嫌な役を果たした小田切への見返りが、助手の地位です。
ゆくゆくは教授職も視野に入れてのことでしょうね。そうでないと
説明がつかないのです。同じくらいの業績で、どちらかと言えば
他の三人よりも、「良い子」な分突出したところのなかった小田切が、
抜擢される理由など。それにそこまでの秘密を共有するなら、
手元に置いておかなければいつ手を噛まれるのか、分かりませんかね」

ここで一旦切って、焰は山瀬の顔を見た。
山瀬はまだ根本的な疑問に答えるだけの勇気が形成されていないようだ。

「だからこそ小田切は絶対に、今回のことを知られたくなかったのか。
芹沢が死んだように仕向ける決定的なことをしたのは、自分なのだから
その後の芹沢の行動によっては犯罪の方棒を担いだことになる。
それに能力もないのにポストをもらった自分が、その事件を上手く
処理できていないことがバレたら、山瀬に失望されて、ポストも剥奪
されてしまう。だからこそ弟子である佐々木と一緒に内々に解決
しようとした」

焰の説明でおおまかのことを理解した常川が、後を引き受ける。

「それを見越して山瀬と朋谷との間を分断したんだな。自分が狙いでは
ないと知れば、あえてこの連中が死地に飛び込む訳がない！」

見事にその作戦は当たった訳で、協力してことに当たられては、全ての
作戦も駄目だったのかもしれない。
5年間「敵」を観察し尽くしてきたことだけはあつた。

一旦動き出したら、どちらかが力尽きるまで止まらないのが復讐。
失敗は許されない。それだけの覚悟の上での作戦に、不正の砂上で
足元を塗り固めただけの加害者たちが、敵う訳が無いのだ。

それでも直ぐに負けを認めるのが悔しいのか、山瀬はなおも抵抗する。

焰の表情は変わらない。
日常を淡々とこなすかのように、整った容貌は皺ひとつも変化は
なかった。ただ歩を進める。

貴重な青春時代の5年間を犠牲にして復讐に全てを捧げた男。
ここまで来ても山瀬に改悛の気持はなかった。
問題が表面化したのは、やり方がまずかっただけ。
問題を複雑化させた、土岐等と焔には純粹に憎しみしかない。

「上手く周りに合わせる事が出来ない方も悪いだらう。
病気がちなのに、無理して研究室に入られても迷惑だ。
こちらはもっと大きな問題を抱えているのに、問題を
複雑にしたのも、元はと言えば……」

子どもが悪事が露見して開き直ったような態度。
人前で断罪された経験のない山瀬は、学会以降止める間もなく
批判された鬱憤をここぞとばかりぶつける。
だが焔は、そんな不快な文言を最後まで言わせない。

「当たり前な事をせずに、詰まらない隠蔽に終始しているからだ。
逆切れせずに、真摯に反省すべきだ」

言い訳も切れてきたのか、突如山瀬は殴りかかって来た。
あっさりとかわす焔。
5年前に階段から突き落とされたひ弱な体躯は、見違えるほどに
鍛え上げられ、反対に焔はその手を交わすと、素早い動作で
喉元を掴み、ベンチに押し付けた。

あの時、山瀬は進退きわまっていた。正直土岐等あかりになど、構っている余裕はなかった。それぐらい簡単に片を付けられる。土岐等は体が弱い。思いきった行動などできまい。

生意気にも権利を振りかざしハラスメントと訴えてくるが、学生達も証人になってやる訳が無い。恐れるに足りない存在だ。思いもかけず、粘るものだから、面倒なだけで。微細な問題に過ぎなかったのだ。

それよりも頭を悩ませる大きな問題があった。保管庫からの、劇薬の盗難 - 。一度ではなく定期的に。少量ずつ盗まれている。本来は発覚次第、すぐに保健所に届けなければならない。同じところに頻発していた連続殺人事件と、関連付けられれば面倒だ。山瀬は監督責任を問われるのではないかと、気が気ではなかった。

それなのに。
土岐等があんなことを言いだすものだから。

「先生が公にしないとと言うのであれば、劇薬の件は大学本部に告発します。……私に対するハラスメントも外部へ訴えます。覚悟してください」

いつになく強気で断言されて、山瀬は土岐等を前にして初めて狼狽する。土岐等に対する自分の接し方が不適切であると、山瀬が自省したことはこの時点まで一度としてなかった。確かに気に喰わないのが先立つことは認める。だが、これくらいのことをしている教員はいくらでも見てきた。訴えるなどいちいち大げさだ。面倒くさい。今まで籍を置いてやったのに。第一誰も山瀬に対して意見をしなかったではないか。なぜ山瀬だけ反撃を食らわねばならない。

気に入らないのにいつまでたっても大学に居続ける、放逐することはできないのに、いつまでも目の前から消えない。そもそも他教室から教員の都合で移動してくるのでなければ、入門すら許さなかった。目障りだが、思い切った行動をとるつもりはなかったのだ。自滅していくのをただ待っていた。それなのに - 。

劇薬の事さえなければ。
ハラスメントなど口封じをしまえば良い。
どうせ証拠などない。

土岐等に思い切った行動をとらざるを得なくなったのは、ひとえに彼女が劇薬がなくなったことに気付いたことにある。

普段は厳重に管理されている劇物保管庫。特別な実験でない限り、普段は使うこともない。その為薬品の点検は、使用する度にするのが慣例となっていた。
それで大事には至らなかったし、問題は一切なかった。

手続きは一括して、年度初めに管理責任者である山瀬が研究員全体に許可とカードキーを渡し、使用した後に使用量と、氏名、用途等を記入することになり、それに基づき月に一度確認することになっていた。

内新面白くはないが、その劇薬の使用無くしては、土岐等の実験は全く進まなくなることが明確であり、それまで拒絶しては実験そのものを拒否することになる。

数名だが他の研究室からの使用者も存在するので、土岐等をあまり邪険に扱って、面倒なことになってもつまらない。それこそアカハラのレッテルを張られてしまうので、さすがにそこまではできない。山瀬は渋々許可を出していた。

そこであかりは見つけてしまった。

劇物が一定量ずつ減少していること。そしてそれは少量ずつだが、全て合わせれば何十人をも殺せるだけの量であることを。

いつもは自分が山瀬の気に障っていることを感じてか、近づこうともしない土岐等だが、こればかりは報告せずにはいられないのかメールでその件を訴えてきた。他の学生にも訴えたのかもしれない。

だが山瀬の普段の行動の賜物か、学生達が劇物のことを気にかけているようすは一切ない。いつも通り土岐等に対しては無視を繰り返している。とても訴えられる状態ではないだろう。そのまま捨て置けばよいものの、山瀬に訴えてきた。それどころか他の教員にも訴えるかもしれない。

仕方なく、後日呼び出すことにした。実際にその薬品は少しずつ無くなっていた。確実に一定量ずつ。規定により、基本的に劇物保管庫の鍵は、山瀬研究室が管理している。保管庫を使用したいものは、研究室にある使用許可証に記入し、山瀬と事務の承認を経て、初めて使用することが出来る。

土岐等の話では、毎日のように劇薬を使用する実験をし、使用者の劇物使用量をチェックしてもおかしなところはなく、外部の第三者が使用許可証もなしに、無断で劇薬を使用している可能性が高いと指摘した。

「これは盗難です。すぐに警察に届け出をするべきです」

誰にも口外しないことを約束させようと言ったにもかかわらず、土岐等は劇薬の盗難だけでなく、今までのハラスメントの事実も含めて届け出ると明言した。

薬品の紛失が、何らかの事件に発展するかもしれないのだから、届けるべきだと言って譲らなかった。確かに一定期間内に届け出るのは義務だ。

だがその時山瀬には、それが出来ないだけの理由があった。数年後に行われる学会長選。それに向けて、わずかでも不利益になることは排除しなければならない。その布石として、ハラスメント室長にも立候補した。学会長には実績だけではなく、人格も求められる。面倒事などアカハラなんておっつての他だ。

山瀬は、こんな些事で挫折するわけには、

だから山瀬は -。

遡ること、5年と少し前。

県全域に渡って、殺人事件が散見するようになった。
被害者の年齢。性別。職業。発見場所。
全て統一性がなく、それぞれ別件で捜査されていた。
それをこの頃から警察は、関連性があることも視野に入れ、
同一犯の通り魔的犯行の可能性を示唆して治安強化に勤めていた。

同一犯だと仮定した場合、なにしろ犯人には「拘り」がない。
怨恨、動機、嗜好が見当たらない。
ただ殺したいから殺した。
ある意味純粹過ぎる程の理由で、犯行を重ねている。

象徴的なのが一年前に起こった、別荘での一家心中事件。
当初は心中と考えられたが、心中の動機がない。
不審者が侵入した形跡はないものの、付近では連続殺人が頻発している。
違和感を感じた警察の調べで、遺体から毒物が発見されたことが、
報道された。人体には殆ど骨になる程の激しく燃え、そこにも第三者
による介入が示唆された。

土岐等が山瀬に毒物のことに気付いた時点でも、警察は一件の
殺人事件を追っていた。
いつものごとく、被害者に怨恨の線は見られない。

この事件を受け、あかりは真っ先に山瀬に劇薬の盗難として届けるべき
だと促した。
学内、いや研究室内に犯人がいる可能性もあると。

山瀬は躊躇した。

あの実験室に入るにはカードキーが必要だ。
それを持っているのは山瀬の研究室だけ。
万が一その劇物が保管庫から持ち出されたものであるなら、とんでもない
責任問題となる。
新聞には未だその毒物の入手ルートが特定されていない。
大学街でも入手できないことはないものだが、時期と場所を考えると
関連付けるのが普通だ。

「うちの研究室に殺人鬼がいるのかもしれない。それでも
放っておくんですか？もしかしたら捜査に大きな進展が見込めるかも
しれないのに」

「それを判断するのは私だ」

そう告げると、土岐等は心底あきれ果てた顔をして言った。

「明日までに警察に行かないというのであれば、私はハラスメント案件と
共に、このことも告発します。これはさすがに無視することはできない
でしょう。マスコミにも伝えます。今までと同じだと思ったら大間違いです」

今までにないあかりの強気にたじろぐ。

(小生意気な)

そのまま踵を返すあかり。
これまでになく焦燥感。
防衛本能のまま、山瀬は行動した。
芹沢に電話を。

「私はこの時点で、芹沢君が殺人犯だということを知っていた」

実は劇薬が少しずつ減少している異変に、土岐等よりも前に気付いた者がいたのだと、山瀬は呻くように言った。

「塔堂君だ」

常川が広めた噂話はあながち嘘ではなく、塔堂が殺人現場に肝試しに行ったことが発端だったという。

「その時のことは俺の方が良く知っている。塔堂と俺は、研究室の外では意外と仲が良かったんだ」

肝試しに行くに行った時も、その実況をネットに上げた方が面白かろうと提案したのも常川だった。その肝試し実況は中々好評だったが、結局何も起こらなかったことで文句を言われ、お調子者の塔堂は、他の殺人現場まで足を延ばしてしまった。

「そして途中で更新が途切れた」

その類のネット実況では、面白がられる展開に、「あいつやるなあ」と常川はその演出に素直に感心していた。何人かのネット閲覧者は本気で塔堂を案じて、ネット内で待機している。半日経っても戻ってこないの、さすがに電話して見ると、

「俺、とんでもないものを見てしまったかもしれない」

何を見たのか聞いても、間違いかもしれないから、今は言えない。証拠が必要だとしか言わない。

それから連絡の取れない時期が続き、最後のメールを最後に完全に消息が途絶えた。

「確認した。劇薬保管庫で話をつける」

そのメールを最後に、塔堂は姿を消した。ずっとその日に起こった真実を知りたかったと、常川は唇を噛みしめる。

その続きを山瀬は知っていた。

「塔堂君も、土岐等さんのように私に劇薬が少しずつ減少しているようだと報告してくれた。その時も私はしばらくは伏せておくようにと指示した」

焔のあからさまな侮蔑の視線に、山瀬は言い繕う。

「勘違いかもしれないし、良く調査してからでも、遅くはないと判断したんだ。塔堂君も、調べるのに協力してくれると約束してくれた」

これが悲劇の切っ掛けになった。

「連絡を受けて劇薬保管庫に行った時には、塔堂君は冷たくなっていた。横には芹沢君が、平気な顔をして立っていた……」

思い出だけで戦慄するのか、山瀬は震えている。

その日は遅くまで実験のある日で、研究棟に残っていたのは佐々木と小田切、芹沢、塔堂、朋谷だけだった。備品を取りに行った芹沢。トイレ休憩のはずの塔堂。実験は佳境を迎えており、山瀬達3人は手を休めなかった。その時に山瀬の携帯にメールが受信された。

「芹沢の仕業。今確認」

メールを受け取った山瀬がすぐに、塔堂の意図していることを察すると、実験に関わっていた全員で見に行く。しかし着いた時にはもう。芹沢が獲物を屠った後だった。ぐったりとした塔堂の横で、冷酷な笑みさえ浮かべている芹沢は、その華奢な顔つきが月明かりに照らされて、場違いに美しかった。

「それで皆さん、どうします？」

芹沢は今話題の連続殺人の犯人であることを、得意げに自ら告白した。どのみち現行犯で塔堂を殺したのだ。言い逃れはできまい。犯行を見られ言い逃れできなくて怯えるなどということはなく、芹沢は取引を持ちかけた。

自分の要求を飲めば、今ここから生きて返してやると。

彼の地位はこの時を境に一変した。その場を切り抜けても、芹沢は自分の存在自体が皆の枷となることをよく理解していた。

「芹沢君の要求は唯一つ。自殺を偽装して、死んだ人間になりすますことだった」

土岐等も気づいたことで、山瀬に降ってわいたアイデアが、ハラメント事案の責任を被ってもらうことで、代わりに自殺を偽装する両者が納得する筋書きだった。

5年前から全く連絡は取っておらず、今どこで何をしているのかすら分からないという。

「それが、それがお前たちが余計な過去を穿り出したせいで、警察が嗅ぎつけたと感じて、証人を殺して回っているんだ。余計なことをしてくれた。寝た子を起こしてしまったんだ」

「全部お前の自己保身が招いたことだ。同情の余地はない」

冷たく言い放つと、焔はまだ地べたに座り込んでいる山瀬の顎を持ちあげて、警告する。

「散々その地位を利用して嫌がらせを繰り返した揚句に、
芹沢の件が露見しそうだからと、無実のあかりさんを死に
追いやった」

激昂する訳でもなく、冷静な言葉の端々に本気の怒りを
滲ませる。

「すまない。申し訳ない。本当に悪かったと思っている」

軽蔑と怒りを宿した焔の目に恐怖を感じて、山瀬は再び土下座する。
もう人目を気にしている余裕はなかった。

「今更謝罪だけで済むと思うな。お前のその場限りの謝罪に
何の効力も信憑性もない」

ぐいっと山瀬の襟元を持つ手に力を込める。

「足りないな」

「どうすれば許してくれる？ どう償えば満足する？ 私に死ねとでも
言うのか？」

焔は土下座する山瀬の頭を思い切り、足で踏みつける。

「お前のようなクズが、死のうが何の感情も湧かない。
たとえようもなく不幸になれ。惨めったらしく生地獄を
のたうちまわれ。それが僕の、お前の被害者の生きる糧となる」

もう十分だと軽く山瀬の頭を蹴飛ばすと、表情を変えることもなく、
歩を進める。数歩進んだ先で一度立ち止まり、念を押しように言った。

「……死んだくらいで、許されると思うな」

頭上から響く声に、おずおずと顔を上げた山瀬は、焔の底冷えするような
双眸に肝を冷やして、顔を情けなく歪める。

「これからだ」

泣きそうな顔で哀願するその顔は、焔に充実感しかもたらさない。
勝ち誇った顔で焔は告げる。

「これからお前の本当の地獄が始まる」

これから何が起こってしまうのか。
これ以上山瀬を追い詰めるようなら、そろそろ助けに動かないと。
戦々恐々と見ていた優奈だが、焔はもう気が済んだのか、

振り向くこともなくその場を去った。

常川も優奈に帰ろうと促す。
優奈は山瀬が心配で迷ったが、山瀬自身もこれ以上惨めな姿を、
教え子の前で晒したくないだろうと常川に諭されて、
その場を後にする決心がついた。

山瀬はしばらくその場に座り込んでいたが、周囲から人影が
なくなると、漸くよろよろと帰路についた。

圧倒的な憎悪を直接ぶつけられ、山瀬は消耗しきっていた。
自分の不幸を本気で願う人間の存在。
数年かけても萎えないその怨嗟に、恐怖を感じる。
厳しく断罪された経験のない山瀬にとっては、衝撃だった。

だが本当の地獄は、まさにこれからだった。

連日の大学からの呼び出し。
ネット経由で、今までのアカハラの内容が晒されているらしく、
公表している研究室の電話番号には、内外から批判の電話が
鳴り響いた。
厳しくなったアカハラに対する処罰規定により、
退職を前にして懲戒免職の危機にあるのも屈辱的だ。
警察からも事情聴取を要請される。
今まで金魚のフンのように付いてきた者たちは、
態度を一転させ、口を極めて人格攻撃をしてくる。

それでも山瀬は謝罪をするつもりはなかった。
謝罪をしてしまえば、認めたことになる。
すなわち負けを認めることだ。
絶対に受け入れる訳にはいかなかった。

膠着状態が続いた末に、山瀬は殺人容疑で立件される
可能性が出て来た。大学側は当然のように自首を奨めるが、
山瀬はこれも当然のように拒否した。

(ついに、殺人犯扱いか……)

動揺冷めやらぬまま、車を運転するハンドルを切る。
自宅駐車場になんとか車を停める段になって、
ようやく山瀬は落ち着きを取り戻してきた。

目を閉じ、深呼吸をする。
週末なのだから、その間に調子を取り戻し、策を練れば
まだ戦うことは出来る筈だ。
山瀬の力はそれほど脆弱なものではない。

プラスのイメージ・トレーニングをすると少しだけ自信が
戻って来る。車を降り、駐車場の鍵を閉める。
いつもの動作が家庭での安心感を与えてくれる。
山瀬が自宅の玄関の戸に手をかけると、「先生」と後ろから
控えめな声がした。

田中優奈だ。

実験補助のバイトを、楽しそうにしてくれる女子学生。

佐々木のように、見返りを要求しない。
妻のように、必要なことをさっとなすだけではない。
田中の純粹すぎる程の尊敬の念は、まぶし過ぎるくらいで、
それに応えなくてはと、倫理の圧力すら生み出す。
先程の過去の告白を最後まで聞いたのであるなら、山瀬に
さぞかし幻滅したのだろうと、顔を真っ直ぐに見ることが
できない。

今、一番会いたくない人物。

そんな山瀬の心境を知ってか知らずか、
いつも以上に田中は遠慮がちだ。

田中は何とか山瀬と話し合っ、自首を勧めたいと
いう一心で迷惑を承知でやってきたと、なぜか
頭を下げながら言い訳した。
間違えたら謝ってやり直せば良いと。
まぶし過ぎる言葉で、一生懸命かき口説く。

そういうのは逆効果だ。
山瀬は反省も後悔もしていない。
ただ面倒な相手に捕まってしまった己の運の悪さを、嘆くだけだ。
格下と舐めていた人間からの思わぬ逆襲に驚いただけ。

響くはずもない正論を吐く田中の声は、興奮して大きく
なっていく。内容からしてこれはまずいと判断した山瀬は、
仕方なく家に上げることにした。

今日は娘も早めに帰ってきて、妻も家に居る。
今までのことをどう説明していいのか、
頭が痛いことばかりが続く厄日だ。

田中に聞こえないように、山瀬はため息を吐いた。

「ただいま。お客さんを連れてきたよ」

家族に心配をかけぬよう、平静を装って声をかける。
応答はない。
既に大学での不始末を知って、出て行ってしまったのか。
芙美の性格として、それはありえないが、山瀬はつい気弱になってしまう。

自分から来たくせに緊張している、優奈をリビングに座らせると、お茶の用意をしに行く。

「！！」

そこで、山瀬は変わり果てた姿の芙美を発見した。
いつものエプロンをつけたまま、仰向けに横たわっている。
目は見開かれ、下半身は血に染まっていた。

何か叫んだ気がする。
が、山瀬は覚えていなかった。
警察、いやとにかく優奈に異変を知らせようと、リビングに戻る。
優奈はソファに崩れ落ちている。

(……！！)

またもや出そうな叫び声を必死で押しとどめたのは、この下手人が傍にいと感じたから。
大声を出して興奮させてはいけない。
とっさに防衛本能が働く。

確かなのは、山瀬が今危険の真ただ中にあること。
家の据え置き電話を使うこと自体、時間が惜しい。
とにかく外に出る必要がある。
異変を知らせる為に玄関へ向かう。

「久しぶりですね。先生」

そこには手に四角い機械のようなものを持った、男がいた。

「塔堂君、いや芹沢君……」

「先生が悪いんですよ。約束を破るから」

5年前の約束。
あの時、山瀬と大学院生たちと、芹沢との約束。
研究室側は、芹沢が一連の連続殺人の犯人であることを漏らさないこと。
芹沢はアカデミック・ハラスメントの責を全て引き受け、芹沢が盗んだ劇薬を返すこと。
芹沢の自殺を演出することで、全ては丸く収まり、後は口を閉じていればいいだけ。それを乱したのは焔だ。

「悪かった。でもあれは僕らがしたことじゃない。仕組まれたんだ」

「言い訳はどうでもいい。結果が全てなんです。おかげで俺は全国的に指名手配されてしまった。仕事がやりにくくて仕方ないんです。意味、分かりますよね？」

あの事件以来一度も会っていない芹沢が、塔堂の顔に整形しているのには驚いた。別人になり済まないと生きていけない事情があるのだろう。戸籍上死人となっている芹沢がどんな仕事をしているのかは、分からない。ただ芹沢の日常が犯され、とてつもない怒りを持っていることは分かる。昔の恩師と言うことで丁寧語を遣ってはいるが、言葉の端々にみられる強さで、怒りが伝わって来る。

「それで報復の為に、妻を殺したのか？」

「殺したのは先生です。俺じゃない。警告はしたはずですよ？」

「どうすればいい？ 今日大学でアカハラ事件の事、君の犯罪を隠していたことを訴追された。警察もそのうちここに来るだろう。私にできることはもうないんだ」

山瀬は時間を引き延ばす。
警察がそのうちやってくる。それまで話しを引き延ばせば。

「こいつを車へ運んで下さい。騒いだり、つまらない真似をすると娘さんが可哀そうなことになりますよ」

こういうセリフは慣れているのか、投げやりのような恫喝するような言葉には貫禄がある。こちらの意図を見通したような物言い。
山瀬は従うしかなかった。

「娘は？ 娘は大丈夫なんだろうな？」

「無駄口を叩くと、大丈夫ではなくなりますよ」

言われた通りに、山瀬は優奈を運んだ。
午後九時。まだ夜には早い時間だが、住宅街は既に静まりつつある。山瀬は、芹沢の指示通り駐車場にある自分の車に、優奈を運ぶ。こうしているところを隣人が見つけて、異変に気付いてくれればと期待したが、人目に付くことはなかった。

隣人は小さな子どもがいる息子夫婦と同居しているせいか、音が漏れないように最大の努力をしている。その為その数々の工夫が、こちらの音をも遮断している。裏側にすむ住民は高齢者夫婦で、体は元気だが補聴器が手放せず、早くに休む。目で見て、異変を察知してもらえない。ゆっくり動作をしたはずだが、すんなりと終わってしまいそうだ。

優奈の身体を後部座席に横たえたと同時に、芹沢がするりと反対側のドアから後部座席に滑り込み、ドアを閉める。
山瀬に小声で、前に乗れと指示した。
言われた通りに前に乗ってドアを閉めてから、尋ねる。

「娘はどうした？」

「ある場所で監禁させてもらってます。言うことをちゃんと聞いてくれたら、解放してあげますよ。早く車を出してください」

芹沢の指示通りに車を運転しながら、山瀬は説得を続ける。皮肉なことだが警察が自分を追っている以上、助けは遅かれ早かれ来る筈だ。

「随分と悟ったようなことを言いますが、先生も俺と同じ。人殺しですよ。人の将来を何人も殺してきたじゃないですか。小田切たちが死んだのだって、元はと言えば先生のせいだ。同類なんですよ。俺達」

芹沢の今いる世界は、罪の重さで評価される。シリアルキラーではなく、人脈がある。だから心配には及ばないと嘯く。思いつく限りの説得は全く心に届かない。優奈は意識があるのかないのか、長いドライブの間中、ずっと目を閉じていた。

「約束を先に破ったのはそっちだろう」

ナイフを手にやってくる男。
おそらく芹沢と名乗っていた男。

5年前の写真で見た華奢な青年の面影はなく、修羅場をかいくぐった野生の血を感じるほどの暗い目つき。
なによりその体つきまで変化していた。

「約束は反故にされた。だから罰を与えに来た。俺は土岐等とは違う。馬鹿にされるのが一番腹が立つんだよ。俺だけ地獄に墮ちてたまるか」

デスクワークばかりの超えた山瀬に勝てる見込みなどゼロに等しく、もはや逃げることもわずれ、必死で命乞いをする。

「そんな理由で芙美、私の妻まで、殺したのかっ。」

山瀬だって妻を奪われたのだ、怒り心頭に達している。

「今度の件は、私たちが故意に情報を流した訳ではない。
あの時のアカハラ事件の関係者が起こしたことだ。
私たちは関係ない。被害者なんだ」

「関係ねえな」

思い切り、斧の刃先を山瀬の前に叩きこむ。
一撃で男は静かになる。
そんな山瀬を芹沢は楽しそうに見つめている。
優奈からは陰になって口元しか見えないが、雰囲気だけは伝わって来る。

優奈には今はさして関心がないのか、目覚めた時には別室で眠らされていた。床で寝たので体が痛むが、それよりも山瀬の安否が気遣われた。

男は残酷な宣言をした。

「もう終わったか？」

「現世への名残惜し身だよ」

いまにも爆笑するような笑顔を見せると、男は手にしたナイフを一気に山瀬の首をめがけた振り下ろした。

優奈が出て行って、三時間が経過した。
事前に約束したように、三時間が経過しても優奈からの連絡がないので、焔は様子を見に行くことにした。

大学側にその旨を告げると、了承した。
この場合ももし一時間して連絡がなければ、すぐに通報する構えだ。

大学側としても、刑事事件に教員が絡むなどあってはならない事態。できれば穏便に自首させたかったので、この提案にすぐに乗ってくれた。

焔が自分の車に乗り込むと、常川もなぜか当然のように共に乗り込む。
ちらと焔は横目で牽制するが、常川はいつもと同じく全く気にしない。仕方なく一緒に山瀬邸に行くことにした。

山瀬邸 -。

着いた先にあったのは、主婦らしき女性の遺体。
そして二階では - 高校生の娘が息絶えていた。
山瀬と優奈はいない。

すぐに大学に電話して、通報してもらった。

山瀬自身の微罪がどうこうよりも、山瀬自身の保護を優先する。今までの経緯から芹沢が山瀬の家族を狙った可能性が高い。

緊急配備がかけられ、山瀬が見つかったのは一夜明けて翌朝のことだった。

見つかったのは、山瀬宅から車で二時間ほどの山中の崖下。
死因は崖からの転落死。
ついで崖の傍の山小屋から、男の死体が発見される。
念入りに調べられ、男が芹沢だと断定された。

唯一人の生存者である優奈は山小屋の側を通る国道沿いを歩いているところを、保護された。わずか一日足らずの逃避行であったが、ひどく衰弱していたので、病院に入院することになった。

「この男の人が、私たちを山小屋に連れて来ました。5年前の事件が表沙汰になったことへの逆恨みだと言っていました。……はい。もう一人仲間がいました。二人で落ち合って私たちに危害を加えようとしたのですが、仲間と言い争いになり反対に殺されました。……はい。もちろん、怖かったです、そちらに集中しているその隙を見て、先生と二人で逃げようとした。でも追って来たので、先生が私を庇って崖から落ちて -。私のせいです。私の -」

男が5年前に死んだとされていた人物であったこと。
アカデミック・ハラメントが背景にあることなどが、
話題を呼び、マスコミが熱心な報道合戦を繰り広げる。

優奈の証言ももちろん匿名で取り上げられていた。
その雑誌の一つを捲っては、常川は横に居る焔に独りごとの
ように、呟く。

「終わったな」

「はい」

何かを達したという顔も見せず、淡々と焔は言う。
これで仇を打ち倒したと爽快な顔など見せない。

「復讐して本当に良かったと思っているのか？後悔して
いるんじゃないのか？」

「良いとか悪いではなく、やらねばならないことだったんです。
それ以上でもそれ以下でもない」

「ほら、よく怨みなんて忘れて自分が幸せになるのが最高の
復讐だなんて言うだろ？ お前もここに来てそう思えてきたのか
と行ってさ」

「僕の幸せは、奴らを潰すことでしたから。間違いなく、今の僕は
幸せです。無力なあの頃よりも、遥かに。確実に幸せです。
後悔も、悔恨も、許しもしない」

言葉は強いけれど、初めて焔が自分の言葉を話した。
上っ面ではなく、黒い芯を隠そうともしない焔は、ぞっとする程
尖っていて、それでいて哀しい。

「次にやること見つけたら、絶対に俺にも教えてくれよ。一人で
考えるよりも、絶対に面白くなるから」

焔はいつもの嘯いた笑顔を完全に無くし、不思議そうな顔で
常川を見る。でも常川は決めてしまった。

「俺はしつこいからな。お前がどんなことをしても、絶対に突き離して
やらない。覚悟しろよ」

常川の宣告に、焔は珍しく困ったような顔をする。
思案の末に、焔はやっと言葉を絞り出す。

「仕方ないですね」

少しだけ焔は微笑んだ。

爽やかな朝風の中を、鼻歌交じりに優奈は歩いている。
大学近くにはまだ緑がたくさん残っているので、朝に散歩するには
うってつけだ。

「田中さんがやったのでしょうか？」

いつのまにか後ろにいた焰が尋ねた。

「……」

歩みを止めたものの、前を向いたまま、優奈は何も語らない。

「どうして？」

確信していたのか、焰は答えを待たずして尋ねる。

「大事な人だから」

そう言って優奈は、振り向いた。
好物を尋ねられて応えるかのように、その目に曇りはない。
あたかもそうすることが必然のように。

近くの境界から讚美歌が聞こえる清浄な空気の中、それは行われた。
その時山瀬と優奈は、どこか人里離れた建物の地下に監禁されていた。
どこからか讚美歌をうたう声がしたのをよく覚えている。人は以外にも
近くにいるのかもしれないとうっすら思った。

殺意が生まれたのは、芽生のことを聞いてから。

「許せなかった。一途であることを尊敬していたのに。それを一番汚い
やり方でぶち壊した」

優奈は思い出す。

父親が不在がちなのをいいことに、男を連れ込んでいる母。
それでもいつも心にあるのは一人だけ。その男の話を寝物語に
聴かせてくれた。
物語のその男は、いつも自信に充ち溢れ、余裕があって、
何より一途だった。
だからこそ母は振られてしまったのだろうけれど、それでも
母は彼の話を辞めることはない。むしろ誇らしく繰り返す。

その男は、きっと父親の若い頃だと信じていた。
今の父は、他の母の男友達と同じ。
皆その場凌ぎの日和見主義者。
芯がない。

でも物語の男には、確固とした信念がある。
信念を守ることが、男を磨き、それが自信となっている。

母が、唯一心から愛した人間。
こんなに母が愛している男が、きっと優奈の父親の本当の姿
なんだとずっと思っていた。
そういうと、母はいつだってめったに見せない笑顔で、
「そうだ」と答えてくれる。だから信じた。

でも成長して知ったのは、残酷な真実。

「お母さんはね、理想の王子様に捨てられて、ずっと
待ち続けている哀れな村娘なんだよ。王子様は
とっくに幸せにお姫様と暮らしているのにね」

それでも優奈の思いは変わらなかった。
哀れだなんて思わない。
そこまで思われるような良い男なのだと思った。

それが芽生の存在で一度に、ひっくり返った。
妻子がありながら浮気をし、学生に嫌がらせをした上げく
殺してしまうなどと。
王子様を。
山瀬を目標に生きていた自分の人生を否定された気がした。

だから - 。
これ以上の汚濁を恐れた。

警察の手に渡ってしまったら。

あの殺人犯の手によって死ねば被害者として、その過去が
暴かれてしまう。
生きて戻れば、孤独と厳しい世間の目に晒されて生き地獄の
檻に捕らわれる。

それならいっそのこと自然死。事故死にすれば。
それ以上詮索されることはない。
ましてや過去のゴシップなど。

だから手を - 離した。

これ以上の汚れを纏わぬように。
美しいままで。

未だ聞こえる讃美歌が、優奈の不浄なる行為を洗い流して行った。

焔には分かっってしまうと、予感はしていた。
優奈は全く動じない。

「私もこちら側に来てしまいました」

無邪気に微笑む優奈の、その顔に嘘はない。
だから - 焔も仮面を脱ぎ、偽りのない素顔を露わにする。

「……全力で憎め。僕はそれだけのことをした」

「言われなくとも。あなたは、私の目標を、人生を奪ったんです」

優奈の笑みは消え、いつもの控えめな物言いではなく、淡々と決意を
表明する。瞳は真剣そのものだ。
今までで一番明朗とした、物言い。
これが本来の優奈の姿なのだろう。
憎しみが自分の力を最大限に引き出す活力となる。
どんな理屈よりも、それを救いとするのは必ずしも悪ではない。

そのまま真っ直ぐに歩いて来る優奈。
眼前50cmの距離まで近づくと、見上げる。
次の動作を予測して、焔は目を閉じる。

だが、優奈が動くことはなかった。

「何もしやしませんよ」

言われて目を開けると、以前に焔が上げたネックレスを
掲げている。
導かれるまま焔は右手を差し出す。
優奈は両手ではさみこむようにネックレスを掌の上に置くと、
自分の手で蓋をした。

「これはもう、私には必要のないものです」

そのままぐるりと後ろを向くと、言った。
焔は優奈の表情を読むことが出来ない。

「私は決して自首することはないし、あなたのしてきたことを
訴えることもしない。代わりに、あなたは一度も罰を受ける
ことなく、自分の罪に苛まれ続ける。未来永劫。死ぬまで。
それが私の復讐です」

「思い知らせてやりたいとは思わないのか」

「あなたが自分のしたことにどう決着を付けるのか。私は残りの人生
全てをかけて、見届けさせてもらう。あなたは聡い人だから、それが
一番堪えるでしょう」

「もとより告発する資格などない。……長い闘いになるな」

「覚悟の上です」

「生殺しとも言える」

「あなた次第でしょう」

時は二人の出会いから既に一巡している。
それを示すかのように、薄く色づいた山桜が風にそよいだ。

これからまた、澱となった情念は新しく形を変え、続いていく。
来るべき浄化の日の為に。